史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 23

― 北館部分の調査（2）―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1326 集

２０１７

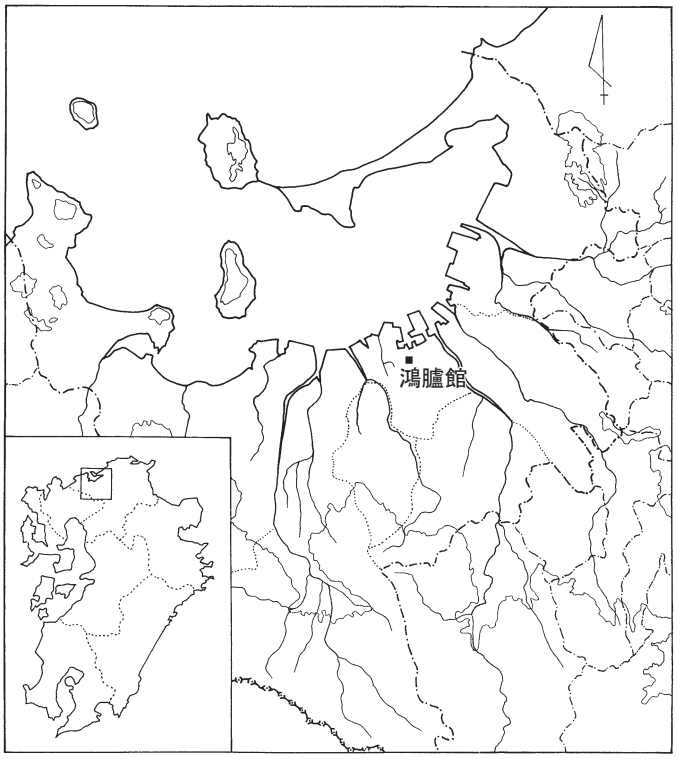
福岡市教育委員会

史跡 鴻臚館跡

鴻臚館跡 23

― 北館部分の調査（2）―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1326 集



２０１７

福岡市教育委員会

序

7 世紀後半に那の津を見下ろす小高い丘を切り開いて造られた筑紫館、のちの鴻臚館は我が国古代の外交施設として、中国・朝鮮半島から来日する使節にとっての玄関口、あるいは遣唐使・遣新羅使等の出国と帰国の拠点としての役割を担っていました。遣唐使の派遣停止など、外交使節の往来が途絶える 9 世紀には、これに替わって「唐物（からもの）」を初めとする唐文化を日本へもたらす中国や朝鮮の商人らの交易の場へと役割が変わっていきました。約 400 年間にわたって日本の古代外交を支えた鴻臚館は、その後土の中に埋もれてやがて福岡城の一部となり、近代には陸軍兵営、戦後には舞鶴公園へとかわり、鴻臚館の遺跡は壊滅したかに見えましたが、昭和 63 年から続く発掘調査によって遺構や遺物が残っていることが分かりました。27 年に及ぶ発掘調査により、鴻臚館には南北二つの施設があったことや東向きに建っていたこと、丘陵を巧みに取り込んだ立体的な構造であったことなどが明らかになり、平成 16 年には史跡福岡城跡三の丸の一角が鴻臚館跡として二重に指定されました。

鴻臚館跡は日本の古代外交史を考える上で重要な史跡であるとともに、市民にとって貴重な歴史遺産でもあります。鴻臚館を現代によみがえらせ、福岡城跡とともに歴史公園として整備公開していくことが、今求められていますが、 整備を行う上で鴻臚館跡の発掘記録をまとめた調査報告書を作成することが不可欠であるため、福岡市ではこの作業を進めているところです。本書は「北館」についての報告書であり、主に平和台野球場跡地内北半で行った調査についてまとめたものです。

調査に際し「鴻臚館跡整備検討委員会」をはじめ文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係機関にご協力を頂き、調査や整理を円滑に進めることができましたことを厚くお礼申し上げます。調査に関わられた全ての方々に対し深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用され、鴻臚館跡の保存と活用に対する理解を深める一助となることを願います。

平成 29 年 3 月 27 日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が行った、国指定史跡 鴻臚館跡の発掘調査報告書である。
2．鴻臚館跡の発掘調査報告書は、平成２（1990）年度から継続して刊行しており、本書が 23 冊めであるが、『鴻臚館跡Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 315 集）、及び『鴻臚館跡 18 ～ 22』（同第 1022・1175・1213・1248・1300 集）を除き概要報告書である。従って、本書は７冊めの本報告書となる。
3．本報告書の刊行については、調査が長期にわたり相当の分量があるため分割刊行しており、遺構の性格により区分した「谷部分」、「南館（仮称）部分」、「北館部分」の順に刊行している。（鴻臚館跡調査では、谷の北側施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南側施設を「南館」と仮称している。）
4．上記のうち、本書は「北館部分」の第２分冊であり、北館の建物以外の遺構についてまとめたものである。
5．鴻臚館跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
6．本書に使用した遺構実測図の作成は、各年度の調査担当者、及び技能員・整理補助員が行った。
7．本書に使用した遺物実測図の作成は、大庭康時・池崎譲二・吉岡涼子・熊埜御堂和香子・篠田千恵子・冨永静子・安田美哉・吉田弘美・吉野満美子・吉本久美子が行った。
8．本書に使用した写真は各年度の調査担当者が撮影した。
9．本書に使用した図の製図は大庭・池崎・吉岡・熊埜御堂・吉野が行った。
10．本書に用いた座標系は、平面直角座標系第Ⅱ座標系（日本測地系）である。図に使用した方位は全て座標北（Ｙ軸）を示し、この地域では真北より 0° 19′ 西偏し、磁北より 6° 02′ 東偏する。
11．本書の執筆は、池崎譲二、大庭康時、吉武　学、菅波正人が行い、文末に文責を記した。
12．文中の軒瓦の型式は、「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館 2000 による。
13．図中の瓦分類番号は「鴻臚館跡 21」福岡市教育委員会 2014 の敲打痕分類に拠る。
14．本書の編集は各担当者の協議の上、菅波が行った。
15．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、そこで管理する。

遺跡調査番号	0008・0109・0218・0617・0706・0821・0906・1013・1116・1205・1314		
遺　跡　略　号	KRE（鴻臚館跡）、FUE（福岡城跡）		
所　　在　　地	中央区城内１－１	分布地図番号	60 － 0192
調査対象面積	48,027㎡（国史跡指定面積）	調　査　面　積	計 13,654㎡（詳細は Tab.3 参照）
調　査　期　間	（Tab.3 参照）		

目　次

第一章　はじめに …… 1
　1．調査の経緯と経過 …… 1
　2．調査体制 …… 2
　3．報告書の作成 …… 3
　4．南館の概要 …… 4
第二章　調査の記録 …… 7
　1．調査の概要 …… 7
　　（1）北館に関わる調査概要 …… 7
　　（2）第 18 次調査（0008） …… 9
　　（3）第 19 次調査（0109） …… 13
　　（4）第 20 次調査（0218） …… 33
　　（5）第 23 次調査（0502） …… 91
　　（6）第 24 次調査（0617） …… 93
　　（7）第 25・26 次調査（0706・0821） …… 112
　　（8）第 27・28 次調査（0906・1013） …… 113
　　（9）第 31 次調査（1314） …… 117
　2．小結 …… 140

挿　図　目　次

Fig.1　鴻臚館跡発掘調査計画図（平成 28 年 3 月現在） …… 1
Fig.2　鴻臚館跡建物遺構概略図（1/1,000） …… 5
Fig.3　鴻臚館跡第Ⅳ期、Ⅴ期調査地点位置図（1/1,500） …… 7
Fig.4　鴻臚館跡北館遺構配置図（1/1,000） …… 8
Fig.5　第 18 次調査　古代遺構配置図（1/300） …… 9
Fig.6　土坑 SK1110・1118・1120・1121・1123・1128 実測図（1/40） …… 10
Fig.7　SK1110・1118・1120・1128・SD1122 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 11
Fig.8　第 19 次調査　古代・中世遺構配置図（1/300） …… 13
Fig.9　土坑 SK1246・1262・1269・1270・1271 実測図（1/40） …… 14
Fig.10　SK1231・1246 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 15
Fig.11　土坑 SK1255 実測図（1/30） …… 16
Fig.12　SK1255 出土遺物実測図 1 （1/3） …… 17
Fig.13　SK1255 出土遺物実測図 2 （1/4） …… 18
Fig.14　SK1258 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 20
Fig.15　SK1259 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 21
Fig.16　SK1262 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 22
Fig.17　土坑 SK1264・1273・1276 実測図（1/30） …… 23
Fig.18　SK1264 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 24
Fig.19　土坑 SK1265・1267 実測図（1/40） …… 25
Fig.20　土坑 SK1265 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 25
Fig.21　SK1267・1269 出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4） …… 26
Fig.22　土坑 SK1274・1277 実測図（1/40） …… 27
Fig.23　SK1270 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 28
Fig.24　SK1271 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 29
Fig.25　SK1273 出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 30

Fig.26　SK1274 出土遺物実測図（1/3、1/4）…… 31
Fig.27　SK1276・1277 出土遺物実測図（1/3、1/4）…… 32
Fig.28　第 20 次調査　古代遺構配置図（1/300）…… 33
Fig.29　第 19 次調査区内 SK14510・SK14511 位置図（1/300）…… 34
Fig.30　土坑 SK14187 実測図（1/30）…… 35
Fig.31　SK14187 出土遺物実測図（1/3）…… 35
Fig.32　土坑 SK14188 実測図（1/30）…… 36
Fig.33　SK14188 出土遺物実測図 1（1/3）…… 36
Fig.34　SK14188 出土遺物実測図 2（1/5）…… 37
Fig.35　SK14188 出土遺物実測図 3（1/5）…… 38
Fig.36　SK14188 出土遺物実測図 4（1/5）…… 39
Fig.37　土坑 SK14271 実測図（1/30）…… 40
Fig.38　SK14271 出土遺物実測図 1（1/3）…… 41
Fig.39　SK14271 出土遺物実測図 2（1/3、58・59-1/2）…… 42
Fig.40　SK14271 出土遺物実測図 3（1/5）…… 43
Fig.41　土坑 SK14273 実測図（1/30）…… 44
Fig.42　SK14273 出土遺物実測図 1（1/3）…… 45
Fig.43　SK14273 出土遺物実測図 2（1/5）…… 46
Fig.44　SK14273 出土遺物実測図 3（1/5）…… 47
Fig.45　土坑 SK14274 実測図（1/30）…… 48
Fig.46　SK14274 出土遺物実測図（1/3）…… 50
Fig.47　SK14308 出土遺物実測図 1（1/3）…… 51
Fig.48　SK14308 出土遺物実測図 2（1/3、110・111-1/2）…… 52
Fig.49　土坑 SK14277 実測図（1/30）…… 53
Fig.50　SK14277 出土遺物実測図 1（1/3）…… 54
Fig.51　SK14277 出土遺物実測図 2（1/3、44 ～ 47-1/4）…… 55
Fig.52　SK14277 出土遺物実測図 3（1/5）…… 56
Fig.53　土坑 SK14307 実測図（1/50）…… 56
Fig.54　SK14307 出土遺物実測図（1/3、21-1/2）…… 57
Fig.55　土坑 SK14310 実測図（1/30）…… 58
Fig.56　SK14310 出土遺物実測図（1/3）…… 58
Fig.57　土坑 SK14339 実測図（1/30）…… 59
Fig.58　SK14339 出土遺物実測図 1（1/5）…… 60
Fig.59　SK14339 出土遺物実測図 2（1/5）…… 61
Fig.60　土坑 SK14510 実測図（1/30）…… 62
Fig.61　SK14510 出土遺物実測図 1（1/3）…… 62
Fig.62　SK14510 出土遺物実測図 2（1/5）…… 63
Fig.63　SK14510 出土遺物実測図 3（1/5）…… 64
Fig.64　SK14510 出土遺物実測図 4（1/5）…… 65
Fig.65　SK14510 出土遺物実測図 5（1/5）…… 66
Fig.66　SK14510 出土遺物実測図 6（1/5）…… 67
Fig.67　SK14510 出土遺物実測図 7（1/5）…… 68
Fig.68　土坑 SK14511 実測図（1/30）…… 69
Fig.69　SK14511 出土遺物実測図 1（1/3）…… 70
Fig.70　SK14511 出土遺物実測図 2（1/5）…… 71
Fig.71　土坑 SK14513 実測図（1/30）…… 72
Fig.72　SK14513 出土遺物実測図 1（1/3）…… 73

Fig.73　SK14513 出土遺物実測図２（1/5）…… 74
Fig.74　SK14513 出土遺物実測図３（1/5）…… 75
Fig.75　SK14513 出土遺物実測図４（1/5）…… 76
Fig.76　SK14513 出土遺物実測図５（1/5）…… 77
Fig.77　SK14513 出土遺物実測図６（1/5）…… 78
Fig.78　SK14513 出土遺物実測図７（1/5）…… 79
Fig.79　SK14513 出土遺物実測図８（1/5）…… 80
Fig.80　土坑 SK14524 実測図（1/30）…… 81
Fig.81　SK14524 出土遺物実測図１（1/3）…… 82
Fig.82　SK14524 出土遺物実測図２（1/3、56-1/5）…… 83
Fig.83　土坑 SK14529 実測図（1/30）…… 84
Fig.84　SK14529 出土遺物実測図（1/3、8・9-1/5）…… 85
Fig.85　土坑 SK14534 実測図（1/30）…… 86
Fig.86　SK14534 出土遺物実測図（1/3）…… 86
Fig.87　その他の出土遺物実測図１（1/3、14-1/1、15-1/2、16 ～ 23-1/5）…… 89
Fig.88　その他の出土遺物実測図２（1/5）…… 90
Fig.89　第 23 次調査　下層遺構配置図（1/300）…… 91
Fig.90　第 23 次調査　包含層出土遺物実測図（1/3）…… 92
Fig.91　第 24 次調査　下層遺構配置図（1/300）…… 93
Fig.92　土坑 SK18286 実測図（1/20）…… 94
Fig.93　SK18286 出土遺物実測図１（１は 1/3、他は 1/4）…… 95
Fig.94　SK18286 出土遺物実測図２（1/4）…… 96
Fig.95　土坑 SK18290 実測図（1/20）…… 97
Fig.96　SK18290 出土遺物実測図１（14 ～ 15 は 1/3、他は 1/4）…… 98
Fig.97　SK18290 出土遺物実測図２（1/4）…… 99
Fig.98　土坑 SK18310 実測図（1/20）…… 100
Fig.99　SK18310 出土遺物実測図１（1/4）…… 101
Fig.100　SK18310 出土遺物実測図２（1/4）…… 102
Fig.101　土坑 SK18313・18385 実測図（1/20）…… 103
Fig.102　SK18313・18385 出土遺物実測図（1/4）…… 104
Fig.103　土坑 SK18328 実測図（1/20）…… 105
Fig.104　SK18328 出土遺物実測図（1/4）…… 105
Fig.105　土坑 SK18364 実測図（1/20）…… 106
Fig.106　SK18364 出土遺物実測図（1/4）…… 107
Fig.107　土坑 SK18376 実測図（1/20）…… 108
Fig.108　SK18376 出土遺物実測図（76 は 1/3、他は 1/4）…… 108
Fig.109　土坑 SK18377 実測図（1/20）…… 109
Fig.110　SK18377 出土遺物実測図（1/4）…… 110
Fig.111　土坑 SK18396 実測図（1/30）…… 111
Fig.112　土坑 SK18613 実測図（1/30）…… 111
Fig.113　SK18613 出土遺物実測図（1/3）…… 111
Fig.114　第 25・26 次調査　下層遺構配置図（1/300）…… 112
Fig.115　土坑 SK19514・SK19516 位置図及び遺構実測図（1/80、1/40）…… 113
Fig.116　第 27・28 次調査　下層遺構配置図（1/300）…… 114
Fig.117　土坑 SK21123 実測図（1/40）…… 114
Fig.118　SK21123 出土遺物実測図（1 は 1/3、2 は 1/4）…… 114
Fig.119　土坑 SK21125 実測図（1/40）…… 115

Fig.120　土坑 SK21127 実測図（1/40）…… 115
Fig.121　SK21125・SK21127 出土遺物実測図（3 ～ 12 は 1/3、他は 1/4）…… 116
Fig.122　第 31 次調査　古代遺構配置図（1/300）…… 117
Fig.123　土坑 SK25044・25045・25049 実測図（1/40）…… 118
Fig.124　SK25044 出土遺物実測図 1（1/3、1/4）…… 120
Fig.125　SK25044 出土遺物実測図 2（1/4）…… 121
Fig.126　SK25045・25049 出土遺物実測図（1/3、1/4）…… 122
Fig.127　SK25051 出土遺物実測図 1（1/3）…… 124
Fig.128　SK25051 出土遺物実測図 2（1/3、1/4）…… 125
Fig.129　SK25052 出土遺物実測図 1（1/3）…… 126
Fig.130　SK25052 出土遺物実測図 2（1/4）…… 127
Fig.131　整地層及び土層実測図（1/300、1/80）…… 129
Fig.132　中世整地層出土遺物実測図 1（1/3、1/4）…… 130
Fig.133　中世整地層出土遺物実測図 2（1/3、1/4）…… 131
Fig.134　中世整地層出土遺物実測図 3（1/2、1/3、1/4）…… 132
Fig.135　中世整地崩落瓦層出土遺物実測図 1（1/3）…… 133
Fig.136　中世整地崩落瓦層出土遺物実測図 2（1/2、1/4）…… 134
Fig.137　中世整地面下層出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）…… 135
Fig.138　中世整地面下層北側斜面出土遺物実測図 1（1/2、1/3）…… 136
Fig.139　中世整地面下層北側斜面出土遺物実測図 2（1/4）…… 137
Fig.140　崖下平坦面出土遺物実測図 1（1/3、1/4）…… 138
Fig.141　北側斜面出土銅印実測図（1/2）…… 139
Fig.142　第 21 次調査トレンチ 03-2 トレンチ土層及び出土遺物実測図（1/100、1/6）…… 140

図　版　目　次

Ph.1　第 20 次調査区全景 …… 34
Ph.2　SK14271 出土長沙水注 …… 42
Ph.3　SK14274・14308 …… 49
Ph.4　SK14339 出土遺物 …… 61
Ph.5　SK14510 出土遺物 …… 68
Ph.6　SK14513 出土遺物 …… 81
Ph.7　SK14529 出土遺物 …… 84
Ph.8　SK14534 出土遺物 …… 87
Ph.9　その他の出土遺物 …… 88
Ph.10　第 23 次調査包含層出土遺物 …… 92
Ph.11　第 24 次調査区南半部の遺構（南から）…… 93
Ph.12　SK25051 ～ 25053（右は SK25051 の近影）…… 118
Ph.13　「好」銘銅印 …… 139
Ph.14　押印イメージ …… 139

表　目　次

Tab.1　調査計画表 …… 1
Tab.2　鴻臚館跡関係調査報告書一覧 …… 3
Tab.3　鴻臚館跡調査地点一覧 …… 6
Tab.4　出土土師器観察表 …… 123
Tab.5　鴻臚館跡検出遺構の時期区分（修正案）…… 142

第一章　はじめに

1．調査の経緯と経過

昭和 62 年（1987)、福岡市中央区城内の平和台野球場外野席の改修工事に伴い、鴻臚館跡第 3 次調査として行った試掘調査により、遺構の残りが想定外に良いことが判明するとともに、土坑から出土した多量の中国陶磁器やイスラムガラス等により、この遺跡が鴻臚館跡である可能性が極めて高いことが明らかとなった。

翌昭和 63 年度から確認調査を開始し、緑地部分の南側テニスコート（第Ⅰ期調査）やその周囲の福岡城土塁下部（第Ⅲ期調査)、平成 11 年からは、撤去された平和台野球場跡地内南半（第Ⅳ期調査）の調査を実施し、平成 18 年度から平成 25 年度に実施した野球場跡地北半（第Ⅴ期調査）をもって、ようやく鴻臚館跡の主要部分の確認調査は終了した。これらの調査により、筑紫館以来の施設の構造や変遷が明らかになるとともに、大宰府における外交、交易面での鴻臚館の在り方の理解につながった。

Tab.1 調査計画表

長期計画	調査対象地	調査面積	実施及び計画期間	調査目的
第Ⅰ期	平和台野球場南側	6,456㎡	昭和 63 ～平成 4 年度	鴻臚館跡の遺構の有無と範囲の確認
第Ⅱ期	舞鶴公園西広場	1,410㎡	平成 5 ～ 6 年度	鴻臚館跡の範囲確認、及び福岡城築城時旧地形の復元と藩主邸の確認
第Ⅲ期	平和台野球場南側土塁ほか	2,114㎡	平成 7 ～ 10 年度	平和台野球場南側土塁下の遺構確認・平和台野球場解体工事立会・試掘
第Ⅳ期	平和台野球場跡南半分	15,095㎡	平成 11 ～ 17 年度	鴻臚館跡の史跡指定に向けての範囲確認・鴻臚館時代の地形復元
第Ⅴ期	平和台野球場跡北半分	対象面積 16,000㎡	平成 18 ～ 25 年度	鴻臚北館の構造確認と北側汀線の確認、外郭施設の検出
第Ⅵ期	福岡高等裁判所とその周辺	対象面積 12,000㎡	平成 31 ～ 34 年度（予定）	鴻臚中島館の可能性が指摘されており、その確認
第Ⅶ期	舞鶴球技場とその周辺	対象面積 12,000㎡	平成 35 年度以降（未定）	鴻臚館客館部分（第Ⅰ期～第Ⅴ期調査区）に隣接する諸施設の確認

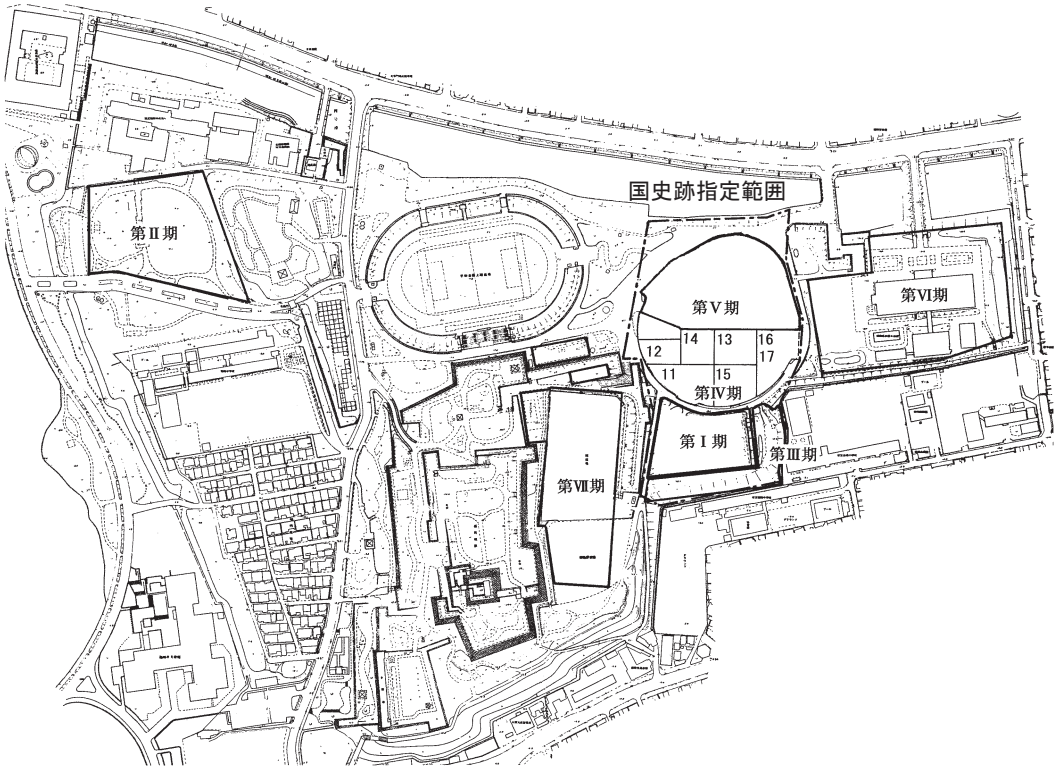


Fig.1　鴻臚館跡発掘調査計画図（平成 28 年 3 月現在）

今後は鴻臚館の全容解明に向けて、史跡指定地外の遺構確認調査（第Ⅵ期、第Ⅶ期調査）の継続とともに、発掘調査が終了した史跡指定部分の環境整備にどのように取り組んでいくかが課題となっている。このため、平成 25 年度にはこれまでの「鴻臚館跡調査研究指導委員会」に代わって新たに「鴻臚館跡整備検討委員会」を組織し、発掘調査や今後の整備について学識経験者等の指導・助言を受け、また文化庁や福岡県とも協議を行いながら事業を進め、平成 26 年度には鴻臚館跡の将来にわたる整備の考え方を示す「国史跡鴻臚館跡整備基本構想」を策定した。さらに、平成 27 年度からは早期に整備事業を推進するため「国史跡鴻臚館跡整備基本計画」の策定に着手した。（菅波）

2．調査体制

今回報告する第Ⅴ期調査より前の組織体制については「鴻臚館跡 18」に詳細があるので、ここでは第Ⅴ期調査にかかる平成 18 年以降の体制を示す。（菅波）

調査主体	福岡市教育委員会教育長	植木とみ子（～ H18 年度）、山田裕嗣（～ H22 年度）、酒井龍彦（～ H27 年度）、星子明夫（H28 年度）
	〃　教育次長	陶山博通（H18 年度）、貞刈厚仁（H18 ～ 19 年度）、中島淳一郎（H21 ～ 22 年度）、中沢浩（H23 年度）
調査総括	文化財部長	山崎純男（～ H18）、矢野三津夫（H19 ～ 20 年度）、宮川秋雄（H21 ～ 22 年度）、藤尾浩（H23 年～ 24 年度）西嶋祐二（H25 ～ 26 年度）、菊田浩二（H27 ～ 28 年度）
	文化財整備課長	横山邦継（H18 ～ 20 年度）、井澤洋一（H21 年度）、秋吉誠（H22 年度）、有川由美（H23 年度）
	大規模史跡整備推進課長	田中壽夫（H24 ～ 25 年度）、宮井善朗（H26 ～ 28 年度）
調査担当	文化財整備課整備第 2 係長	大庭康時（～ H18 年度）、吉武　学（H19 ～ 22、24 年度）
	行政企画担当主査	常松幹雄（H23 年度）
	鴻臚館跡整備係長	菅波正人（H25 ～ 28 年度）
	専門調査員	山口譲治、池崎譲二
整理協力	田中克子（技能員）、石田晴美、後藤富美、篠田千恵子、徳田裕子、冨永静子、安田美哉、吉野満美子、吉本久美子	

（五十音順、敬省略）

【鴻臚館跡整備検討委員会】（平成 29 年 3 月現在）

岩永省三（考古学）、小田富士雄（考古学 / 委員長）、包清博之（環境設計学）、狩野　久（国史学）、河原純之（考古学）、坂上康俊（国史学）、佐藤　信（国史学 / 副委員長）、沢村　明（文化経済学）、杉本正美（造園学）、箱崎和久（建築史）、松村恵司（考古学）

（五十音順、敬称略）

3．報告書の作成

鴻臚館跡では発掘調査により自然地形を利用した谷（堀）を挟んで南北に相似形の施設があったことが判明し、北の施設を文献に見える「鴻臚北館」と推定し、相対する南の施設を「南館」と仮称している。発掘調査は「南館」が先行して平成 15 年度に終了し、「谷（堀）」部分は 17 年度終了、「北館」についても 25 年度に終了した。報告書は調査が先行した谷部分・南館部分の報告書作成にまず取り組み、次に北館へと移行し、20 年度に『鴻臚館跡 18 －谷（堀）部分の調査－』で谷部分について報告した。ついで 23 年度に『鴻臚館跡 19 －南館部分の調査（1）－』で南館部分の建物遺構について、24 年度の『鴻臚館跡 20 －南館部分の調査（2）－』では建物遺構以外の遺構のうち第Ⅰ・Ⅲ期調査分について報告した。25 年度に建物遺構以外の遺構のうち第Ⅳ期調査分（平和台野球場跡地南半）について報告し、南館部分の鴻臚館関係遺構の調査報告は完了となった。北館については 27 年度に建物遺構を中心に報告し、本書では建物遺構以外の遺構について報告する（菅波）。

Tab.2　鴻臚館跡関係調査報告書一覧

No.	発　　行	報告書名	刊行年
1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」福岡県文化財調査報告書第 34 集	1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』稿本	1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址内堀外壁石積の調査」福岡市第 101 集	1983
4	池崎譲二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」福岡市第 101 集	1983
5	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」福岡市第 101 集	1983
6	田崎博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」福岡市第 101 集	1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報」福岡市第 270 集	1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」福岡市第 315 集	1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」福岡市第 355 集	1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告」福岡市第 372 集	1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」福岡市第 416 集	1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告」福岡市第 486 集	1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡７　鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告」福岡市第 487 集	1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡８　平成７・８年度発掘調査概要報告」福岡市第 545 集	1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡９　平成９年度発掘調査概要報告」福岡市第 586 集	1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 10　平成 10 年度発掘調査概要報告」福岡市第 620 集	1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 11　平成 11 年度発掘調査報告」福岡市第 695 集	2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 12　平成 12 年度発掘調査報告」福岡市第 733 集	2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 13　平成 13 年度発掘調査報告」福岡市第 745 集	2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 14」福岡市第 783 集	2004
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 15　平成 14 年度発掘調査報告書」福岡市第 838 集	2005
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 16　平成 15 年度発掘調査報告書」福岡市第 875 集	2006
23	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 17　平成 16・17 年度発掘調査報告書」福岡市第 968 集	2007
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 18　谷（堀）部分の調査」福岡市第 1022 集	2009
25	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 19　南館部分の調査（1）」福岡市第 1175 集	2012
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 20　南館部分の調査（1）」福岡市第 1213 集	2013
27	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 21　南館部分の調査（1）」福岡市第 1248 集	2014
28	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 22　北館部分の調査（1）」福岡市第 1300 集	2016
29	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡 23　北館部分の調査（1）」福岡市第 1326 集	2017

４．鴻臚館跡南館の概要

（1）遺構・遺物の概要（Fig. ４）

鴻臚館（筑紫館）の築造前には東に伸びる２つの丘陵があり、これを削平造成して平坦な台地を造り、南北に２つの施設を設けた。丘陵間の谷を活かして東に開口する東西方向の堀とし、南北を隔てるとともに、谷の東西に土橋・木橋・陸橋などを設けて連絡路とした。南館は北館より１～1.5 m程高い位置にある。南北の台地上には、それぞれ柱列（柵）や布掘り塀、建物群があり、東門やトイレなどが設けられた。台地は周辺低地から３～４ m程度高く、台地下の低地部には外郭施設である築地塀が巡らされた可能性がある。

遺構・遺物の検討の結果、鴻臚館跡南館部分検出の建物遺構は五時期（第Ⅰ～Ⅴ期）に区分される。建物関係遺構は第Ⅰ～Ⅲ期で確認しており、第Ⅳ・Ⅴ期については区画溝の一部を確認したが、明確な建物遺構は確認できない。ただしこの時期に比定される瓦が多数出土することから瓦葺建物が存続したことは間違いない。また、概ね 11 世紀代とみられる瓦が谷の北斜面に多く出土する状況から、鴻臚館末期には建物が北館に集約された可能性が指摘されている。

第Ⅰ期の南館は規模東西 52 m、南北 37 m程度で、推定復元ではあるが、長舎が中心建物を取り囲む構造となる。北館での数棟程度の建物を塀で囲む構造と比較すると、両者に儀礼空間と宿舎空間といった機能差があったことが想定される。

第Ⅱ期は掘立柱式の東門と布掘り塀が検出されたが、塀の内部で柱穴が確認できないことから、建物は礎石式であったと想定される。整地層下の礎石据付け穴（SP824･828･829）や SB32・330、馬道石組排水溝の下層の瓦を立てた排水溝など、二時期以上の建物が重なっている状況が窺え、これらの下層遺構が第Ⅱ期となる可能性がある。

第Ⅲ期は第Ⅱ期の中軸線と踏襲し、施設の拡張と大型の礎石建物を回廊で取り囲む構造に改変している。大型の礎石建物は宿舎と考えられ、第Ⅱ期でも同様の建物があったと想定する。第Ⅲ期は新羅の使節の往来が途絶える時期にも関わらず施設が拡大しており、対外関係や客館としての役割の変化を含めた検討が必要である。

第Ⅳ・Ⅴ期については区画溝 SD15052・15098 を除き、明確な建物遺構を確認していない。南館の土坑群は、概ね第Ⅳ・Ⅴ期に位置づけられる遺構であり、南館出土遺物の大半がこれらの遺構から出土したものである。土坑出土遺物のうち、国産土器である土師器・須恵器の占める割合は極端に低く、編年的な時期の比定が困難な遺構が多く、中国産陶磁器等で大まかな時期を比定せざるをえない。南館で報告した 77 の遺構のうち、第Ⅳ期（９世紀後半～ 10 世紀前半）に位置付けられるものは 21、第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）は 23 であり、その他の 33 は第Ⅳ～Ⅴ期のものとみられるが詳細時期不明である（第Ⅳ期遺構に切られるものを５含む）。うち、第Ⅳ期に含めた土坑 SK155・224 は時期的にやや古相であり、第Ⅲ期（８世紀後半～９世紀前半）に遡る可能性を持つ。

これらの土坑の用途は、多くが廃棄物を処理したものであるが、SK53・54・208 等は方形プランの整った形状を持つ土坑であり、本来他の目的で造られたものがゴミ穴に転用された可能性を持つものである。その他、馬歯等の獣骨・魚骨等の食物残滓とみられる自然遺物が出土した土坑 SK56・75 等は生活ゴミを廃棄するための土坑とみられ、建物を壊した際に礎石を埋め込んだ土坑 SK62、不要になった瓦を廃棄した瓦溜りである SK24・27・36・37・66 など、様々な性格のものがある。第Ⅳ期の土坑は陶磁器等の廃棄遺物に獣骨類等の自然遺物が混じるゴミ穴が多いのに対し、第Ⅴ期の土坑は瓦を処理するための瓦溜りが多いことは指摘される。（菅波）

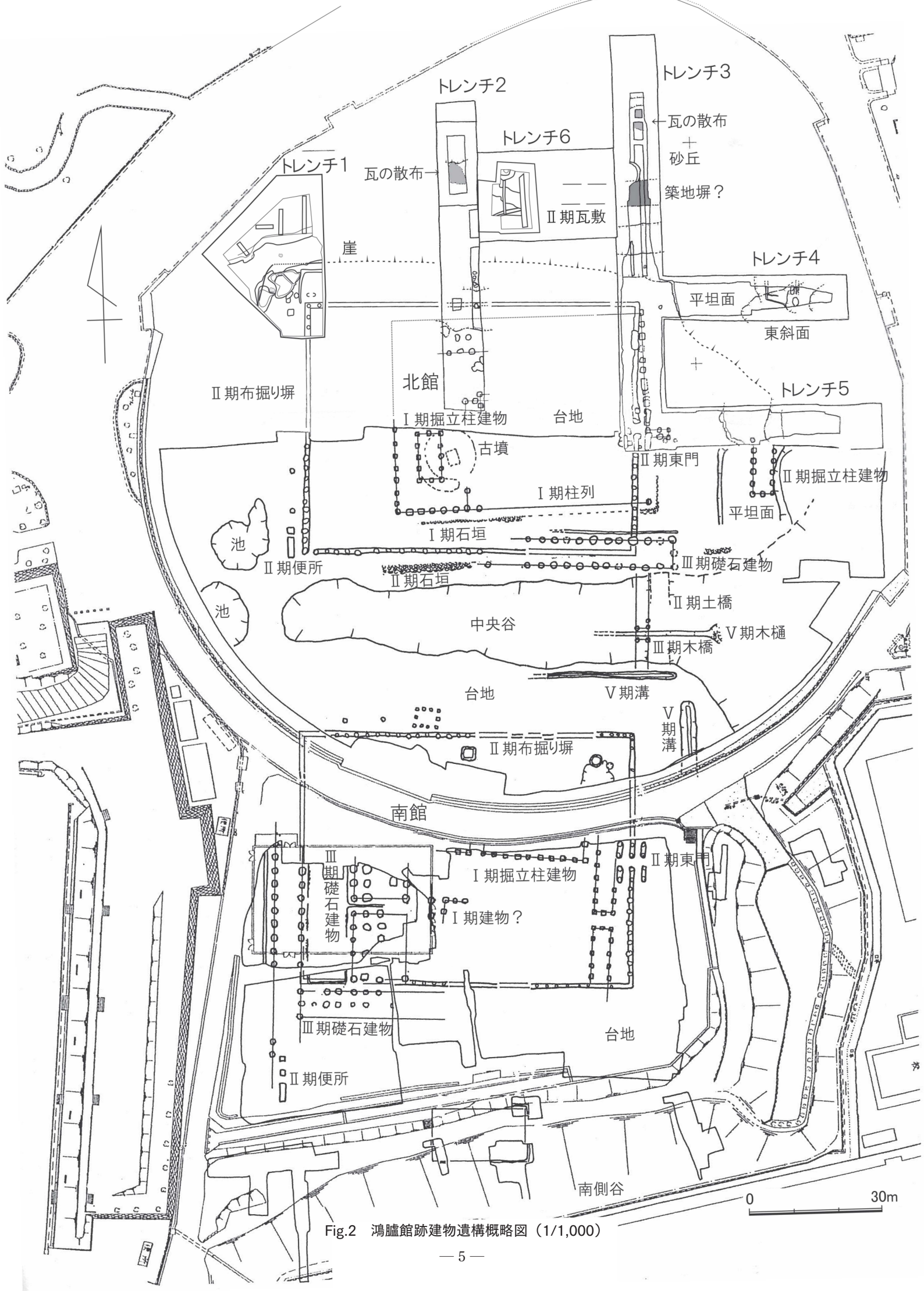


Fig.2　鴻臚館跡建物遺構概略図（1/1,000）

Tab.3　鴻臚館跡調査地点一覧（※網掛けは本書に関係する調査）　平成 29 年 3 月現在

年度	調査番号	鴻臚館跡調査次数	福岡城跡調査次数	調査地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
S.26	5102	1		三の丸中央部	テニスコート建設		5108（3日間）	九州文化総合研究所
S.38	6301	2	1	三の丸東郭	裁判所建設	596	631007 ～ 631105 640327 ～ 640331	福岡県教育委員会
S.62	8747	3	9	三の丸中央部	野球場改修	650	871225 ～ 880120	山崎純男・吉武学
S.63	8829	4	10	三の丸中央部	範囲確認	856	880727 ～ 881210	山崎純男・吉武学
H.1	8910	5	13	三の丸中央部	範囲確認	1,200	890420 ～ 891207	山崎純男・吉武学
H.2	9005	6	15	三の丸中央部	範囲確認	1,300	900409 ～ 910131	山崎純男・吉武学
H.3	9130	7	17	三の丸中央部	範囲確認	1,000	910501 ～ 920331	山崎純男・瀧本正志
H.4	9218	8	19	三の丸中央部	範囲確認	1,670	920615 ～ 921030	山崎純男・瀧本正志
	9236	9	20	三の丸中央部	範囲確認	430	920910 ～ 930331	山崎純男・瀧本正志
H.5	9326	10	22	三の丸西郭	範囲確認	450	930816 ～ 940228	田中壽夫・瀧本正志
H.6	9420	11	27	三の丸中央部	史跡整備	50	940606 ～ 940731	田中壽夫・瀧本正志
	9432	11	28	三の丸西郭	範囲確認	850	940801 ～ 950320	田中壽夫・瀧本正志
	9463	11	30	三の丸東郭土塁	範囲確認	60	950201 ～ 950217	田中壽夫・瀧本正志
H.7	9537	12	31	三の丸西郭・中央部	範囲確認	300	951101 ～ 960329	田中壽夫
H.8	9620	13	35	三ノ丸中央郭	範囲確認	450	960704 ～ 961204	田中壽夫
H.9	9736	14	39	三ノ丸中央郭	範囲確認	204	970818 ～ 980131	田中壽夫
H.10	9807	15	41	野球場解体	公園整備	230	980410 ～ 980416	田中壽夫・池崎譲二
	9831	16	42	野球場跡全体	試掘	930	980922 ～ 990120	塩屋勝利・池崎譲二
H.11	9910	17	43	野球場跡南半	範囲確認	3,500	990422 ～ 000315	塩屋勝利・池崎譲二
H.12	0008	18	44	野球場跡南半	範囲確認	1,750	000425 ～ 010316	塩屋勝利・池崎譲二
H.13	0109	19	47	野球場跡南半	範囲確認	2,000	010521 ～ 020329	折尾学・池崎譲二
H.14	0218	20	49	野球場跡南半	範囲確認	1,200	020513 ～ 030331	折尾学・大庭康時
H.15	0309	21	50	野球場跡南半	範囲確認	2,425	030506 ～ 040331	折尾学・大庭康時
H.16	0415	22	51	野球場跡南半	範囲確認	2,110	040401 ～ 050331	折尾学・大庭康時
H.17	0502	23	52	野球場跡南半	範囲確認	2,110	050404 ～ 060331	横山邦継・大庭康時
H.18	0617	24	57	野球場跡北半	範囲確認	820	060401 ～ 070331	大庭康時・中村啓太郎
H.19	0706	25	59	野球場跡北半	範囲確認	504	070401 ～ 080331	吉武学・中村啓太郎
H.20	0821	26	60	野球場跡北半	範囲確認	860	080701 ～ 090331	吉武学・中村啓太郎
H.21	0906	27	61	野球場跡北半	範囲確認	900	090401 ～ 000331	吉武学・中村啓太郎
H.22	1013	28	62	野球場跡北半	範囲確認	970	100602 ～ 110331	吉武学・久住猛雄
H.23	1116	29	65	野球場跡北半	範囲確認	500	110601 ～ 111222	常松幹雄・吉武学
H.24	1205	30	69	野球場跡北半	範囲確認	1,180	120417 ～ 130329	吉武学
H.25	1314	31	70	野球場跡北半	範囲確認	800	130701 ～ 140328	菅波正人

第二章　調査の記録

1．調査の概要

（1）北館に関わる調査概要

北館に関わる調査は第Ⅳ期調査区（第 18 ～ 20・23 次）及び第Ⅴ期調査区（第 24 ～ 31 次）が該当する。今回の報告書では建物遺構以外の遺構を報告するものであるが、調査概要を以下に示す。

第 18 次調査 (H12) では、南館同様の布掘り塀を確認し、南北に相似形の施設が存在したことを確認した。第 19 次調査（H13）では第Ⅲ期の礎石建物を確認した。第 20 次調査では中央の谷の北側に第Ⅱ期の石垣遺構が存在することを確認した。また、先行する第Ⅰ期の区画施設、掘立柱建物を確認した。

第 24 次、25 次調査（H18 ～ H19）のトレンチ 2 では、北へ落ちる崖の落ち際と、北側低地の砂丘上に鴻臚館の瓦が広がる状況等を確認した。第 25 ～ 26 次調査（H19 ～ 21）のトレンチ 3 では、台地上において第Ⅰ期柱列を検出し、柱列の東辺に門遺構が取り付くことや、第Ⅱ期布掘り塀の北東角、第Ⅲ期建物に伴うとみられる礎石一つ等を確認した。崖下砂丘上においては、平安時代の粘土整地層等を検出し、築地の存在の可能性が指摘された。第 27 次、28 次調査（H21 ～ 22）のトレンチ 4 では、鴻臚館の北東角の状況を確認し、東側（正面側）が雛壇状に高くなる構造であったことが判明した。また第 28 次（H22）のトレンチ 5 では、第Ⅰ期東門に付属する施設のあること等を確認している。第 31 次調査 (H25) のトレンチ 1 では、北館の北西隅の造成の状況を確認した。北館の北では台地が落ち、約 4 mの段差で砂丘へと続く。台地下には瓦を敷き詰めた通路状の遺構が巡り、その更に北の砂丘上には粘土による整地層が認められた。第 30 次、31 次調査（H24 ～ 25）のトレンチ 6 でも同様の整地層を確認したが、この場所に外郭施設（築地塀）の存在については、なお検討を要する。（菅波）

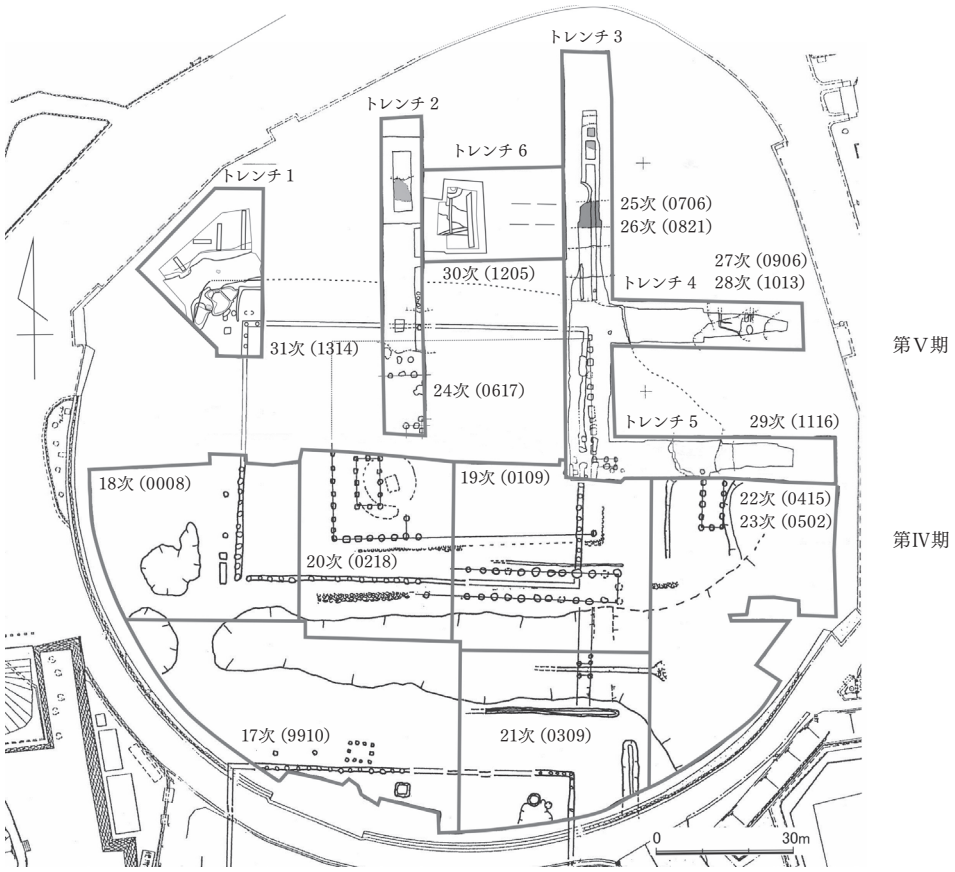


Fig.3　鴻臚館跡第Ⅳ期、Ⅴ期調査地点位置図（1/1,500）

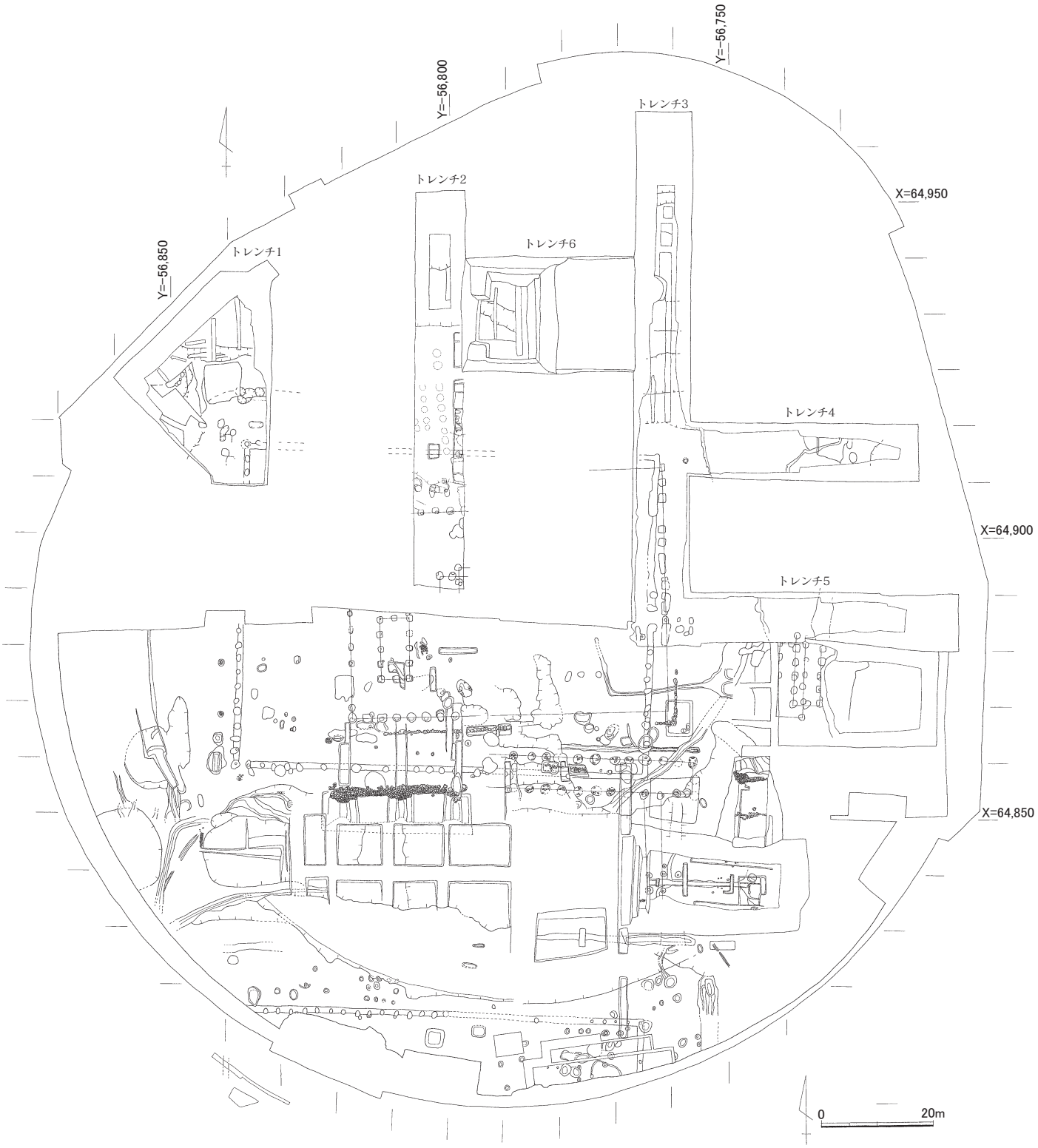


Fig.4　鴻臚館跡北館遺構配置図（1/1,000）

（2）第 18 次調査（0008）

第 18 次調査区は旧平和台球場のライト側グランド、スタンド部分にあたり、球場建設時の工事で特にスタンド寄りのグランド部分は削平され、上部遺構の遺存状況は良くない。そのなかで検出した古代の遺構としては、第Ⅱ期の布掘り塀、便所遺構、土坑、谷造成事業、溝、池等がある（Fig. 5）。このうち谷、溝、池については『鴻臚館跡 18』の中で「谷」部分の遺構として報告し、布掘り塀、便所遺構、造成事業については『鴻臚館跡 22』の中で報告済みである。本書ではこれらを除く土坑等について報告する。

土坑 SK1110　Fig.6

第Ⅱ期の布掘り塀 SA1104 南列掘方を切り込んだ径 2 m程の不整円形、深さ 30cm 程の浅い皿状の土坑である。下面に多量の瓦破片が廃棄されている。

SK1110 出土遺物　Fig.7

多量の瓦に混じり少量の中国陶磁が含まれている。**1** は小さな玉縁口縁をもつ邢窯系白磁碗、**2** は越州窯系青磁碗口縁部破片である

Fig.5　第 18 次調査　古代遺構配置図（1/300）

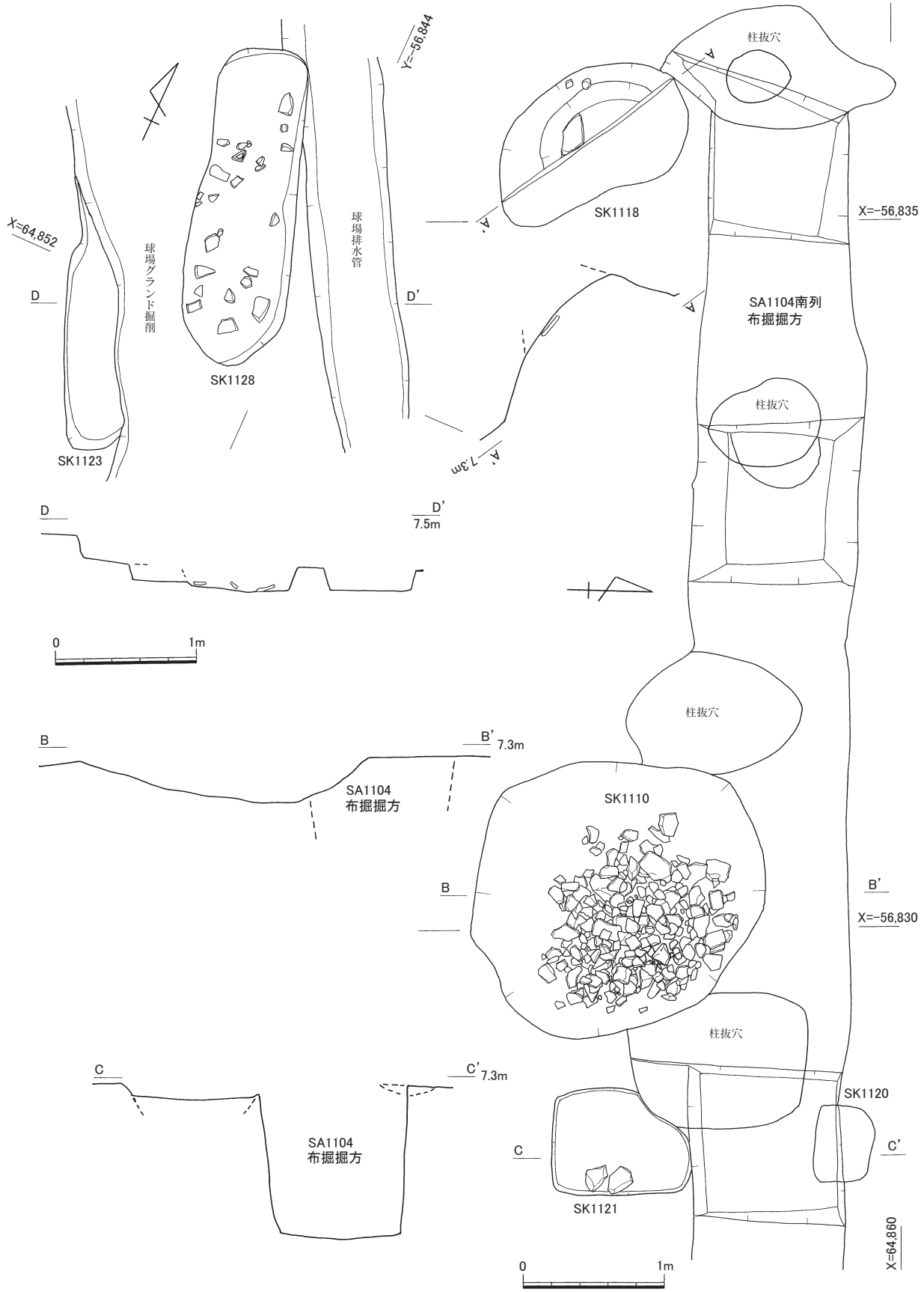


Fig.6　土坑 SK1110・1118・1120・1121・1123・1128 実測図（1/40）

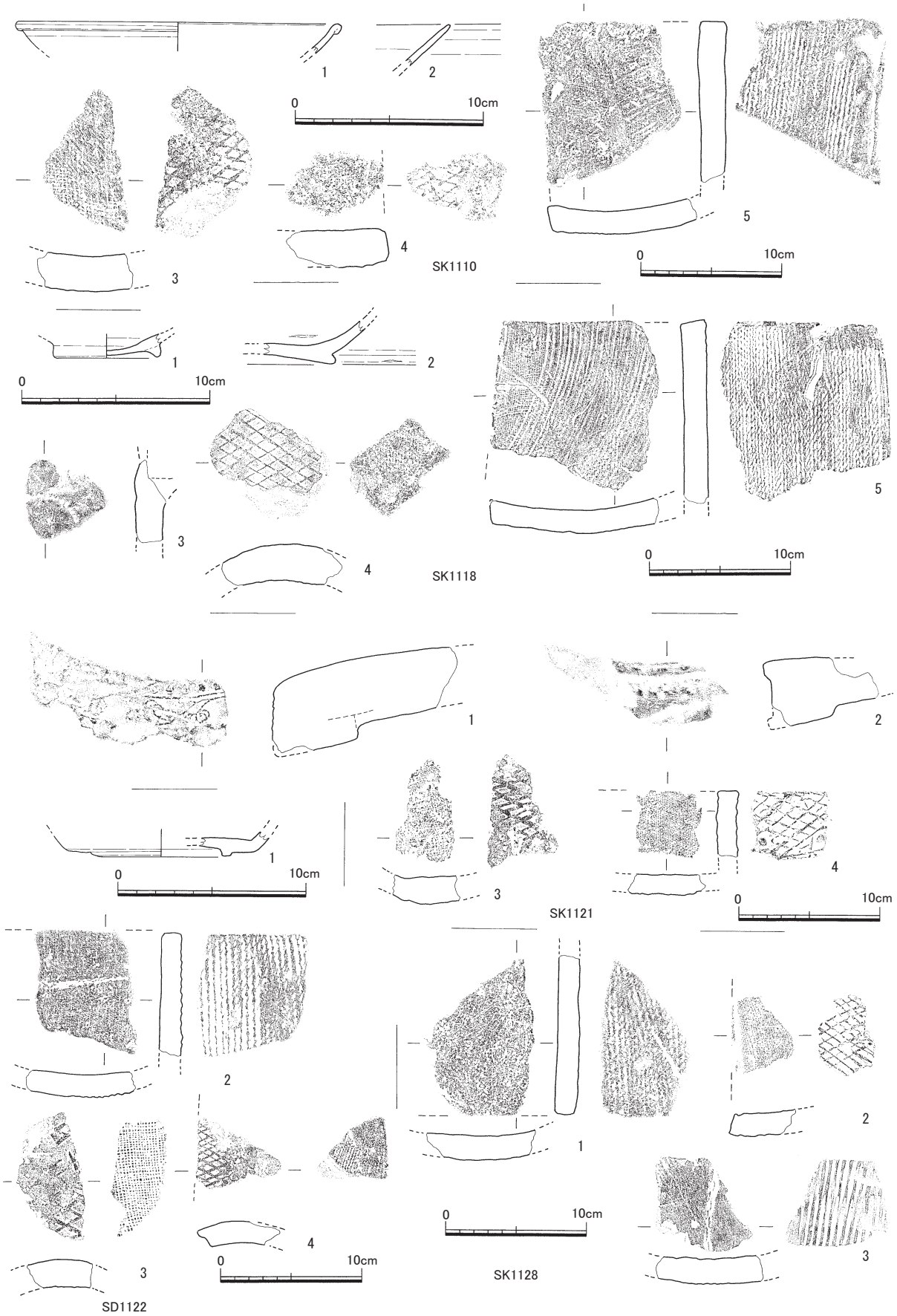


Fig.7　SK1110・1118・1121・1128・SD1122 出土遺物実測図（1/3、1/4）

土坑 SK1118　Fig.6

SA1104 南列掘方西端の柱抜き穴に接する、1.5 × 0.9m の不整長円形の掘方をもつ土坑である。SA1104 との関連を確認するために半裁し掘り下げたが、関連性が認められず下半は未掘である。後世の建物柱穴の可能性がある。

SK1118 出土遺物　Fig.7

少量の瓦、陶磁器類が出土している。**1** は土師器高台付碗、**2** は越州窯青磁碗である。**3** は鴻臚館式軒丸瓦の瓦当小破片で表面磨耗著しい。

土坑 SK1120　Fig.6

布掘り塀 SA1104 南列掘方に切り込む浅く小規模な土坑である。柱抜き穴確認トレンチで半裁したが、遺物はほとんど含まれない。性格は不明である。

土坑 SK1121　Fig.6

SA1104 南列掘方と柱抜き穴に接する。0.8 × 1.0m の不整長方形の平面形を持つ掘り方を持つ。上面輪郭の確認のみをおこなった。後世の建物柱穴の可能性がある。

SK1121 出土遺物　Fig.7

少量の瓦が出土している。**1** は分厚い胎の軒平瓦であるが、二次被熱による剝離摩耗が著しく型式は不明。内区に左行唐草文、外区に珠文が辛うじて確認できる。**2** も軒平瓦であるが、摩耗が著しく均整唐草文が辛うじて観察される。鴻臚館式か。

溝 SD1122　Fig.5

埋め立て造成 SM1132 を掘り込んだ細長く浅い溝または土坑である。球場グランド部分掘り下げで削られ、全体形は不明である。SK1123、1128 に類似しており、同様の廃棄物処理土坑であろうか。

SD1122 出土遺物　Fig.7

少量の瓦片に混じって須恵器片がみられる。**1** は高台付き坏身である。

土坑 SK1123　Fig.6

球場グランド部分掘り下げと排水管掘り方で削平を受け、僅かな窪みとして確認できた土坑である。木炭片を多く含む。遺物は微量である。

土坑 SK1128　Fig.6

SK1123 の北東に僅かに離れて平行する浅い土坑である。球場グランド部分掘り下げと排水管掘り方で削平を受け、僅かに床面が残る。床面には瓦片がやや多く残り、木炭片が多く含まれる。状況から見ると SK1123 と 1128 は一体の廃棄物処理土坑であった可能性が高く、グランド部分掘り下げにより分断されたものであろう。

SK1128 出土遺物　Fig.7

床面に瓦片がやや多く残る。縄目叩き **1**、格子叩き **2**、平行叩き **3** 等がみられる。（池崎）

（3）第 19 次調査（0109）

第 19 次調査区は、前年度の調査で確認した北館Ⅱ期布掘り塀の東辺を確定することを主目的に、旧平和台球場のレフト側グランド部分あたりに設定した。球場建設時の工事の影響は前年度調査区より軽微で、古代の遺構としては、Ⅱ期布掘り塀の延長部と東辺、東門の他、Ⅲ期礎石建物、Ⅰ期造成石垣等検出した（Fig.8）。このうち建物関係遺構については『鴻臚館跡 22』の中で報告済みである。本書ではこれらを除く土坑等について報告する。

土坑 SK1231　Fig.8

調査区北西部で検出された土坑である。周辺に遺構は少なく関連性がみられない。平面プランの確認のみで掘り下げは行っていない。

SK1231 出土遺物　Fig.10

少量の瓦**2・3**に須恵器甕破片**1**が出土している。

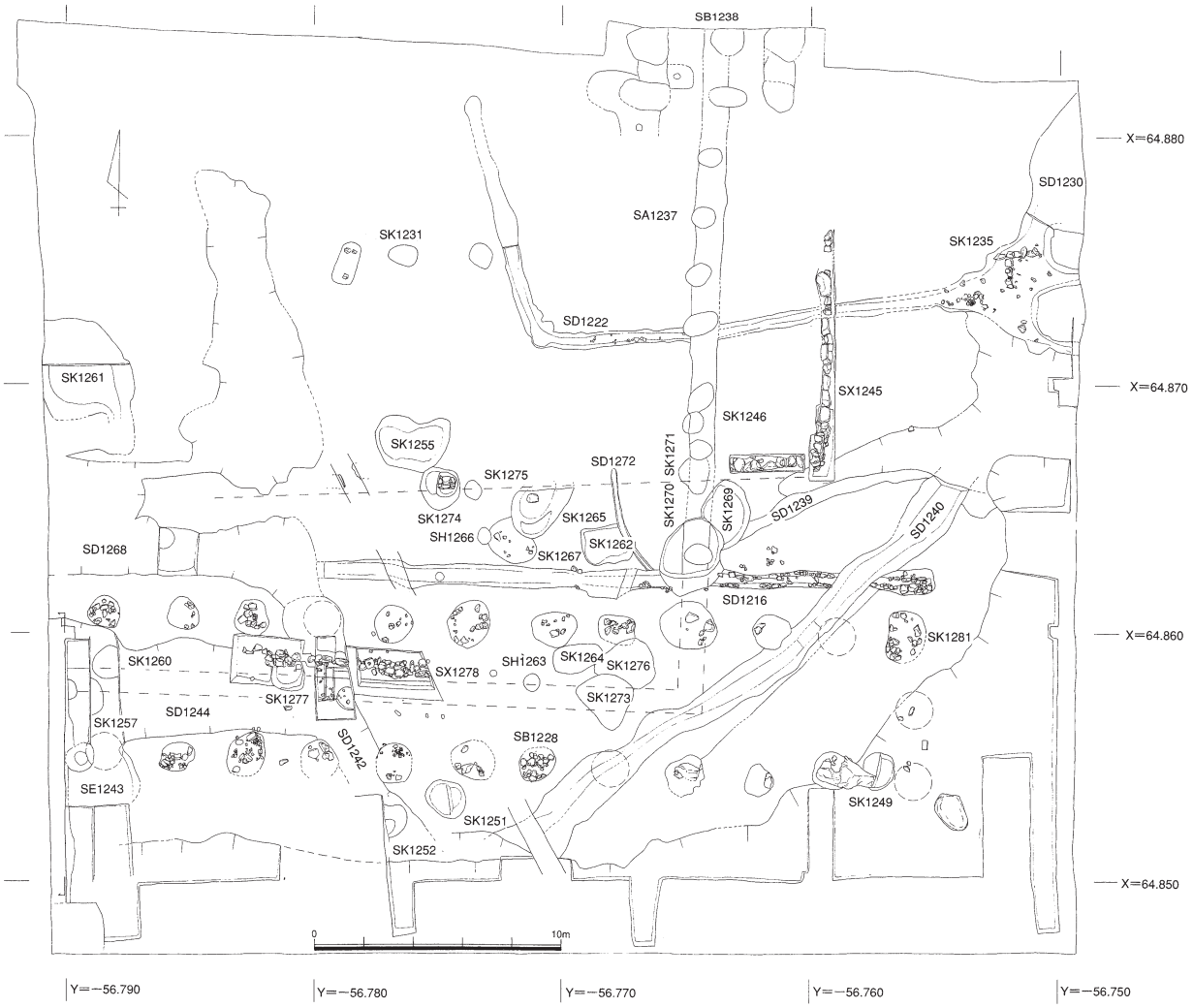


Fig.8　第 19 次調査　古代・中世遺構配置図（1/300）

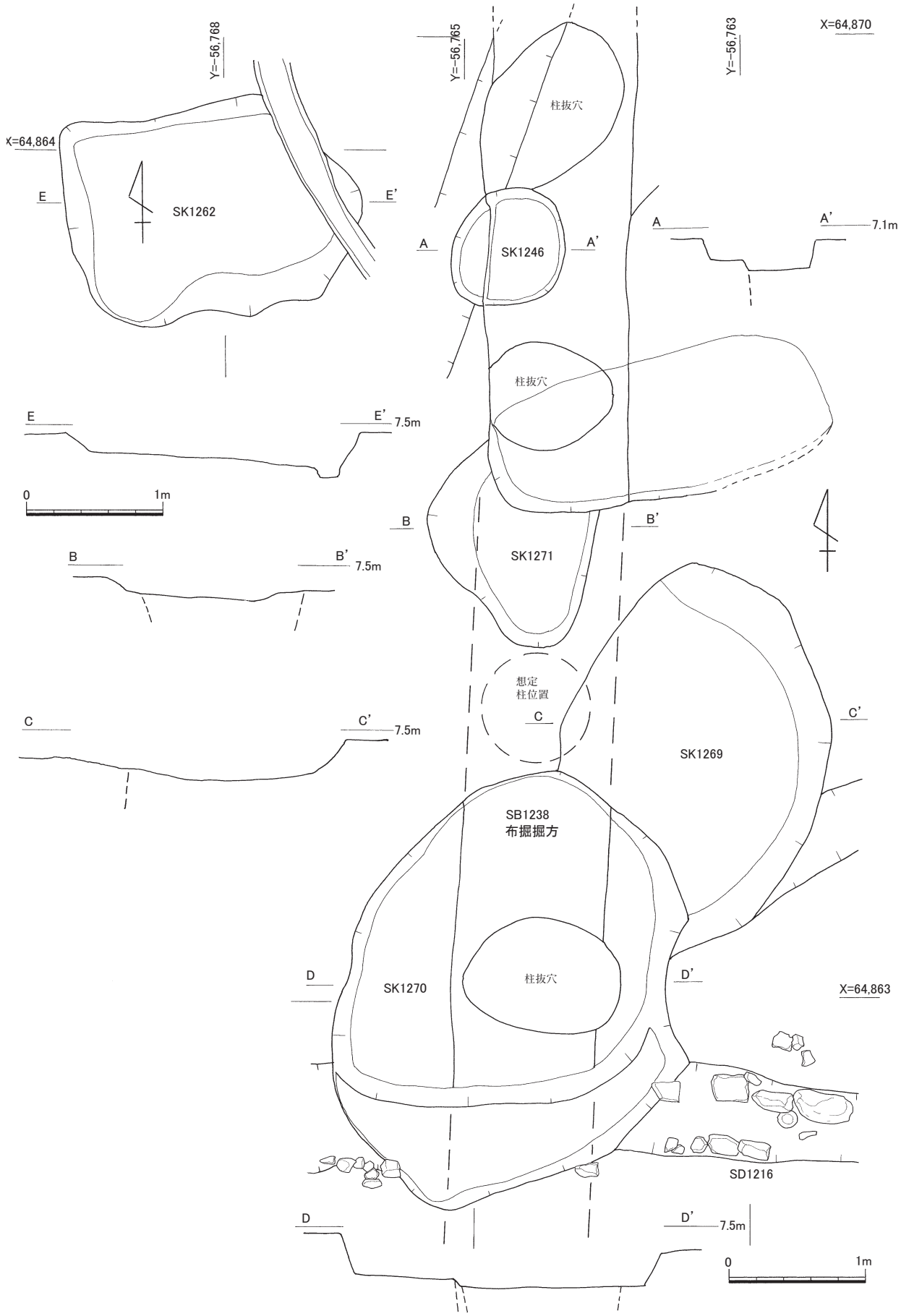


Fig.9　土坑 SK1246・1262・1269・1270・1271 実測図（1/40）

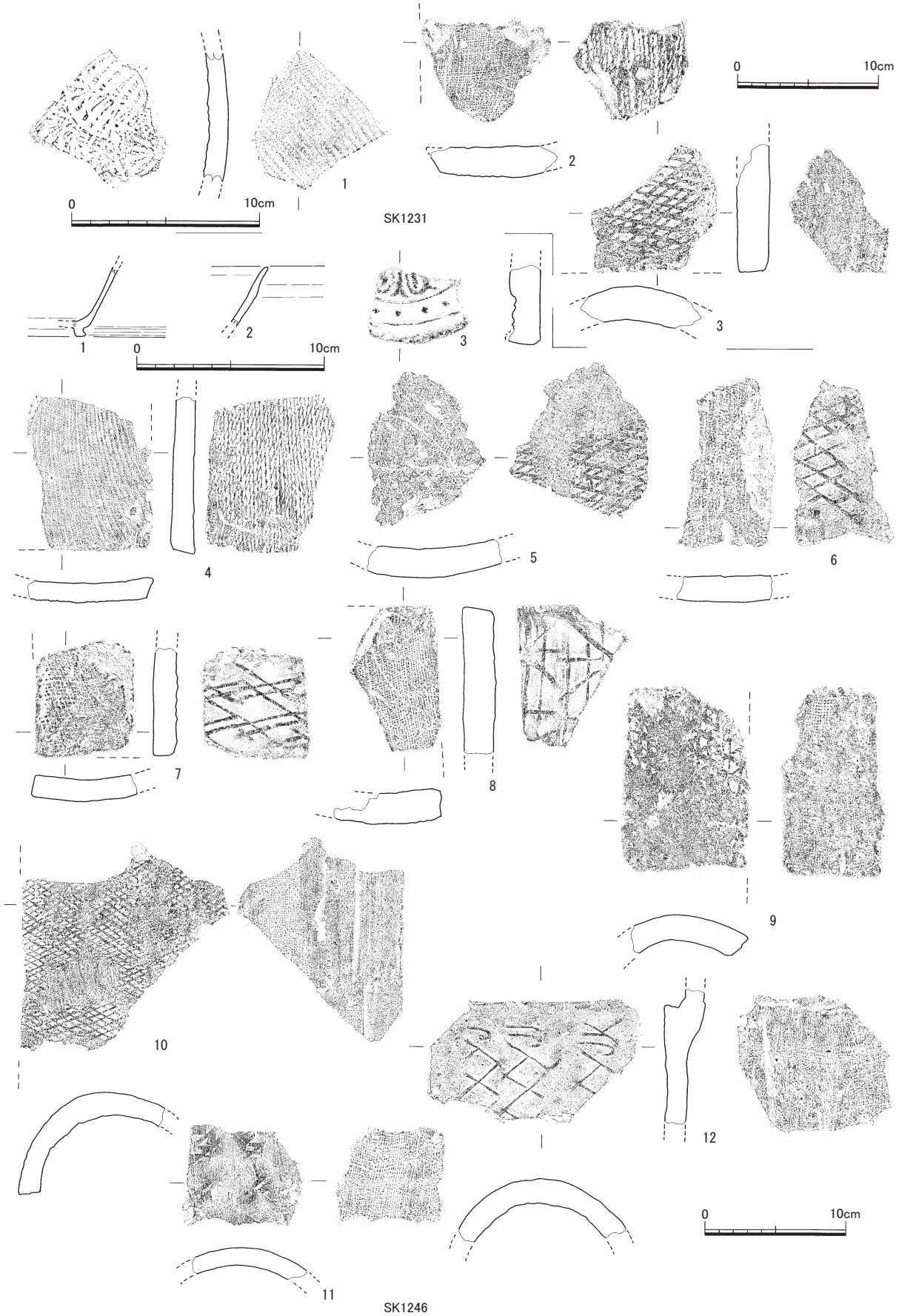


Fig.10　SK1231・1246 出土遺物実測図（1/3、1/4）

土坑 SK1246　Fig.9

布掘り塀 SB1238 東辺の一部を掘り込んだ径 0.9 mほどの浅い皿状の円形土坑である。多くの瓦が含まれており、後の建物の礎石根固め穴の可能性もある。

SK1246 出土遺物　Fig.10

1・2 は須恵器坏身でいずれも小破片である。**3** は鴻臚館式軒丸瓦、その他種々の叩き文様の瓦がみられる **4～12**。

土坑 SK1255　Fig.11

東西約 3m、南北約 2m の不整長方形で、深さ約 0.4 mの浅い皿状をなす。南側を江戸時代福岡城城内道路側溝に削られている。整然とした層をなし、平均的に多量の遺物が出土し、炭を含む層を挟むことから廃棄物処理土坑であろう。鴻臚館終末期Ⅴ期の遺構と考えられる。

SK1255 出土遺物　Fig.12.13

1～4 は土師器で、**1** はヘラ切り底の灯明皿、**2～3** は高台付きの碗である。**5・6** は須恵器で、それぞれ坏蓋、甕である。**7～13** は中国製白磁碗で、**8・9** は輪花をなす。**7・12** は口縁端部を小さく折り曲げ、**10・11** は口縁端部を折り曲げ、小さな玉縁をつくるものである。いずれも邢窯系の製品であろう。**14** も中国製白磁皿で、高台内に「鄭」と思われる墨書がある。**15～21** は越州窯系青磁である。**22・23** は中国製陶器で、**22** が褐釉壺、**23** が黒釉鉢の口縁部破片である。**24・25** は新羅焼き甕の口縁部破片である。**26・27** は鴻臚館式軒丸瓦、**28** は鴻臚館式軒平瓦の小破片である。**29・30** は「今行」銘のある格子目叩き丸瓦、平瓦である。この他、縄目叩き **31** の他、多種の格子叩きが含まれる。

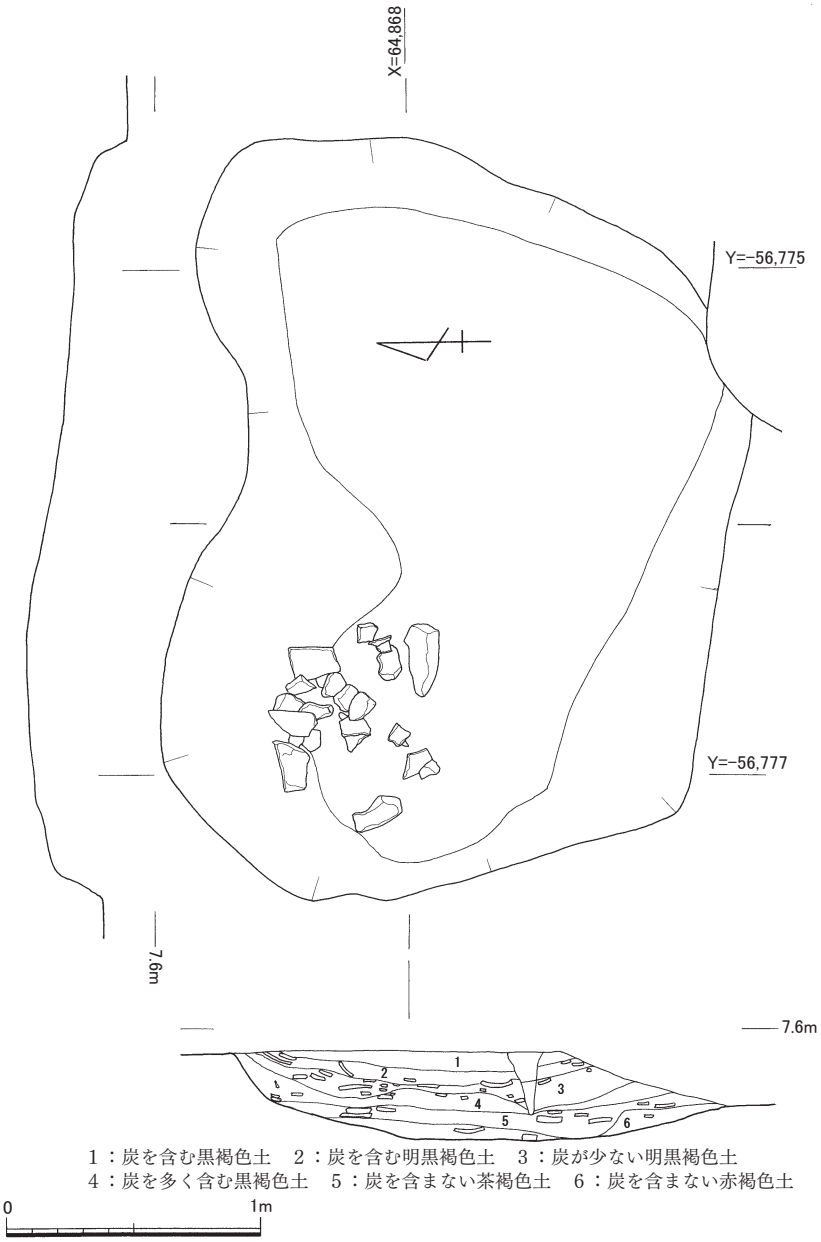


Fig.11　土坑 SK1255 実測図（1/30）

土坑 SK1257~1260　Fig.8

Ⅱ期布掘り塀南列想定ライン上にⅢ期礎石建物 SB1228 が検

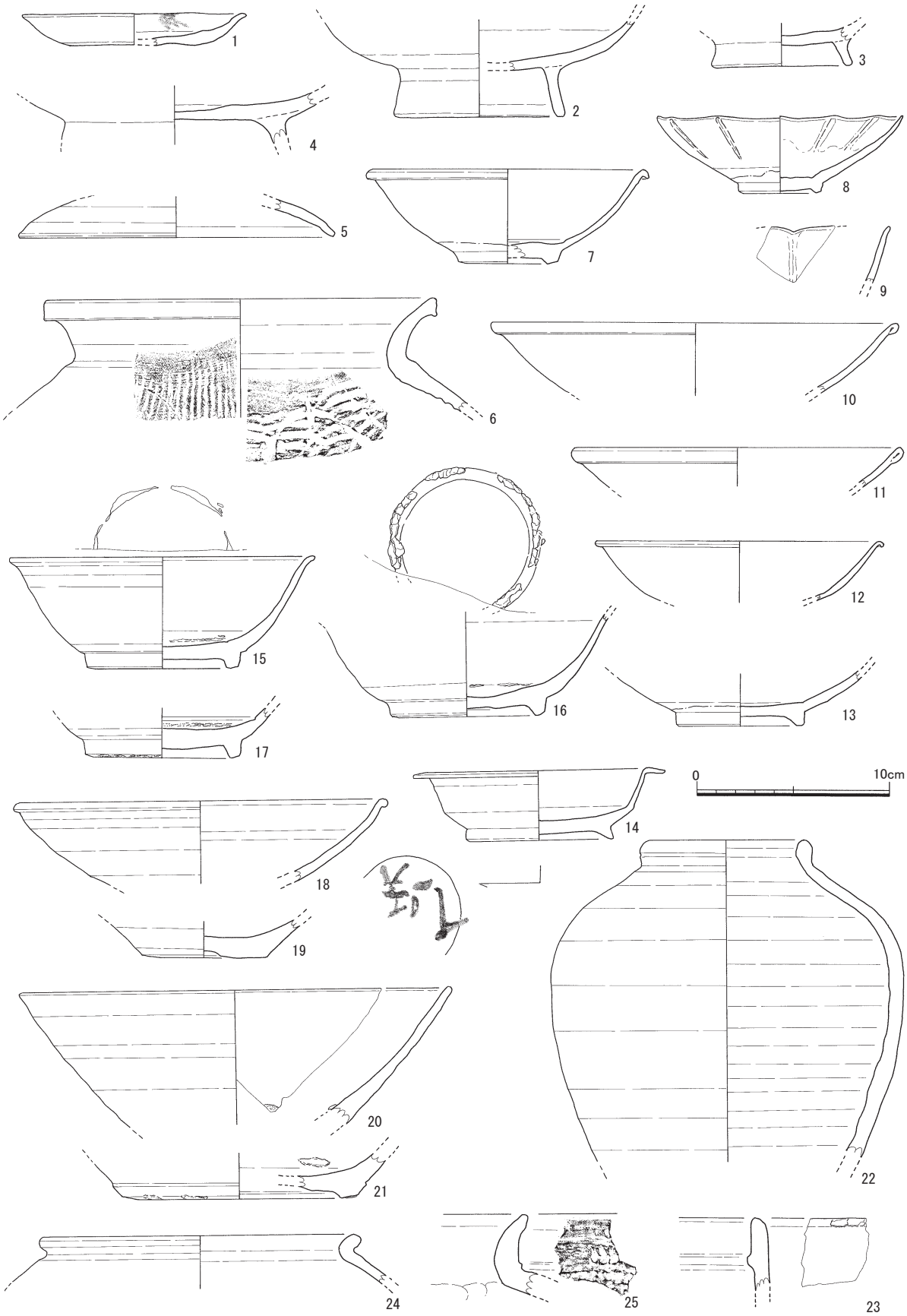


Fig.12　SK1255 出土遺物実測図 1 （1/3）

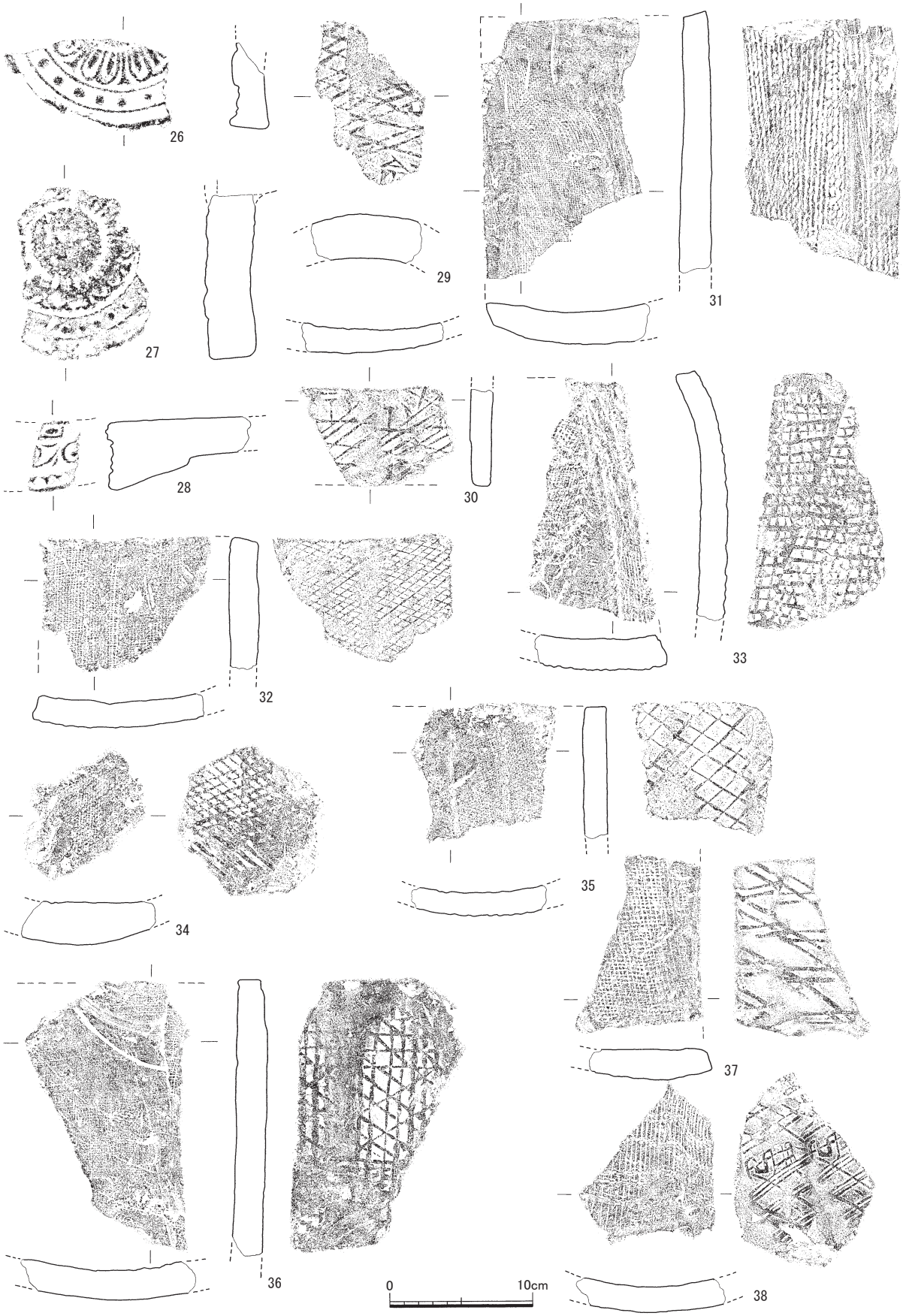


Fig.13　SK1255 出土遺物実測図２（1/4）

出されたため、下層のⅡ期布掘り塀の確認は影響を最小限に留めるために調査区西端にトレンチを設定して行った。SK1257 ～ 1260 はこのトレンチ内で検出したものである。いずれも明瞭な掘り方を持つものではなく、礎石建物基礎整地土のブロックを示すものであろう。便宜上 SK の符合を付している。多量の遺物が含まれている。

SK1258 出土遺物　Fig.14

多量の縄目叩き、各種の格子叩き瓦が含まれている**7～14**。**1** は邢窯系白磁玉縁碗、**2** は越州窯系青磁碗、**3** は越州窯系青磁合子蓋である。**4** は砂岩製石球。**5** は面戸瓦、**6** は縁辺を整形した瓦玉である。

SK1259 出土遺物　Fig.15

多量の縄目叩き、各種の格子叩き瓦が含まれている**2～8**。**1** は邢窯系白磁の瓜割り胴部の壺または水注である。**2** は「今行」銘の平瓦である。

土坑 SK1262　Fig.9

SB1228 に伴う雨落溝 SD1216 の北に接する不整形の遺構で瓦小破片が多く廃棄されている。浅く、炭は含むものの内部で火を焚いた痕跡もなく、Ⅲ期礎石建物の基礎整地に伴うブロック状整地痕であろう。

SK1262 出土遺物　Fig.16

1～4 は須恵器で**1・2** が坏蓋、**3** が坏身、**4** が壺底部である。**5・6** は邢窯系白磁碗、**7～10** は越州窯系青磁で、**7・8** が碗、**9** が鉢、**10** が胴部瓜割りの水注である。**11・12** は長沙窯の深い青緑釉を施した陶枕で同一個体である。**11** は上部平坦面で、隅部分と短軸両端部が含まれ短軸幅 10.0cm である。**12** は体部下端部破片で、底部から 3 ～ 5mm の高さまで施釉され、以下と底部は露胎である。ＳＫ１２６５からも同一個体と思われる小破片が出土している。国内では希有な出土例で注目すべき資料である。**13** は新羅焼き壺である。**14** は鴻臚館式軒丸瓦、**15・16** は鴻臚館式軒平瓦である。その他多量の瓦小片が出土している。

土坑 SK1264　Fig.17

SB1228 の礎石列間にある 2.1 × 1.5m、深さ 0.5m 程の不整楕円形をした廃棄物処理土坑で、Ⅲ期建物廃棄後、鴻臚館終末期頃営まれたものである。内面で数回の焼却作業を行っている。

SK1264 出土遺物　Fig.18

1～8 は土師器で、**1・2** が皿、**3～6** は高台付き碗、**7・8** は二次被熱による赤化がみられ製塩土器であろう。**9～12** は須恵器で、**9** は坏蓋、**10・11** は坏身、**12** は脚部分である。**13～16** は越州窯系青磁で、**13～15** は碗、**16** は四耳壺と思われる耳部分の破片である。**17** は中国製陶器四耳壺で、中世博多でもよく見られる器形である。

土坑 SK1265・1267　Fig.19

いずれも SB1228 の北側にある皿状窪みでブロック状整地痕と思われる。

SK1265 出土遺物　Fig.20

1 は土師器高台付き坏、**2** は須恵器壺口縁部、**3** は邢窯系白磁碗、**4・5** は越州窯系青磁碗である。**6** は長沙窯青緑釉陶枕の小破片で、接合はしないがＳＫ１２６２出土品と同一個体と思われる。**8** は鴻臚館式軒丸瓦、**9・10** は鴻臚館式軒平瓦、その他多量の瓦が含まれている。

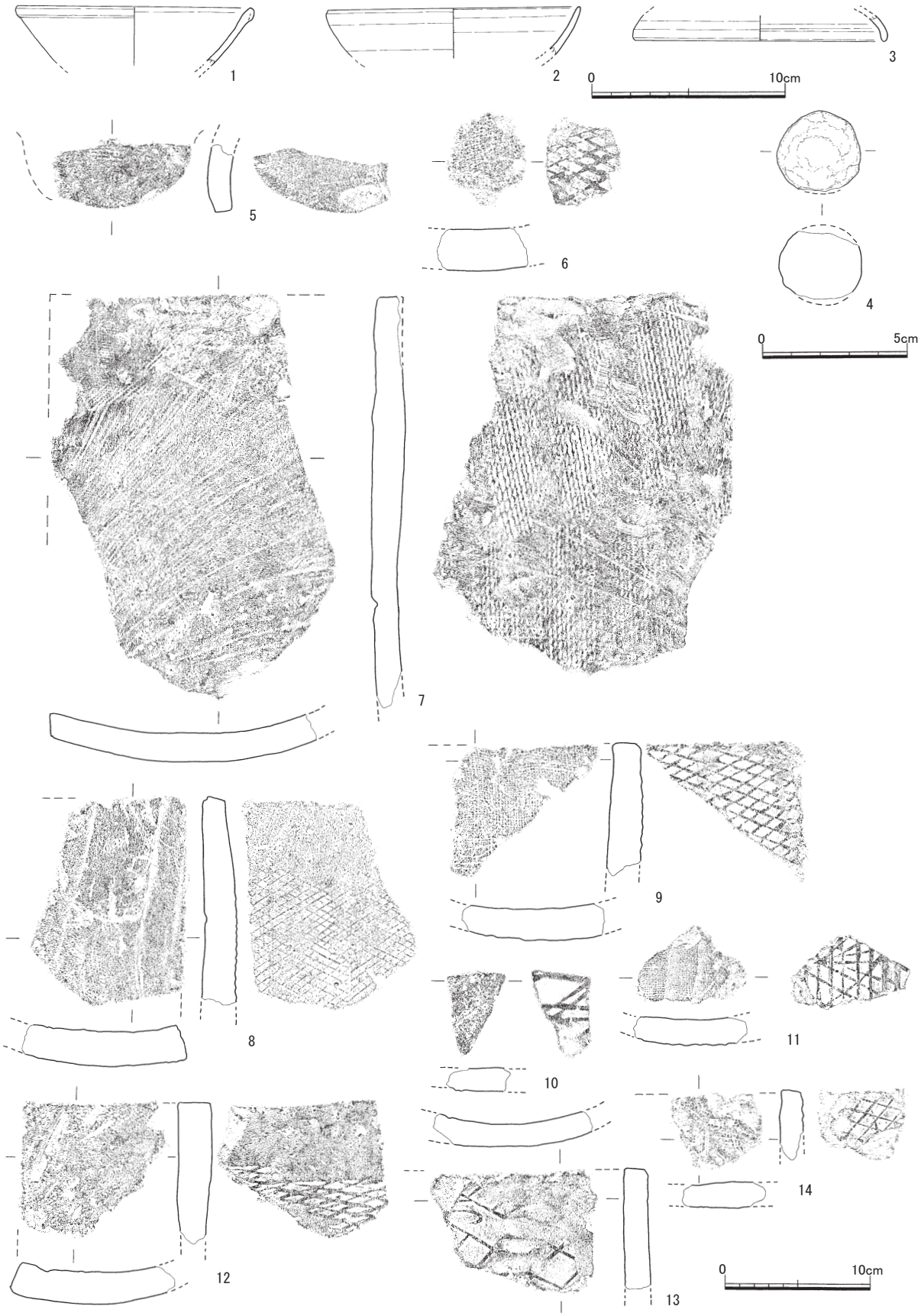


Fig.14　SK1258 出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

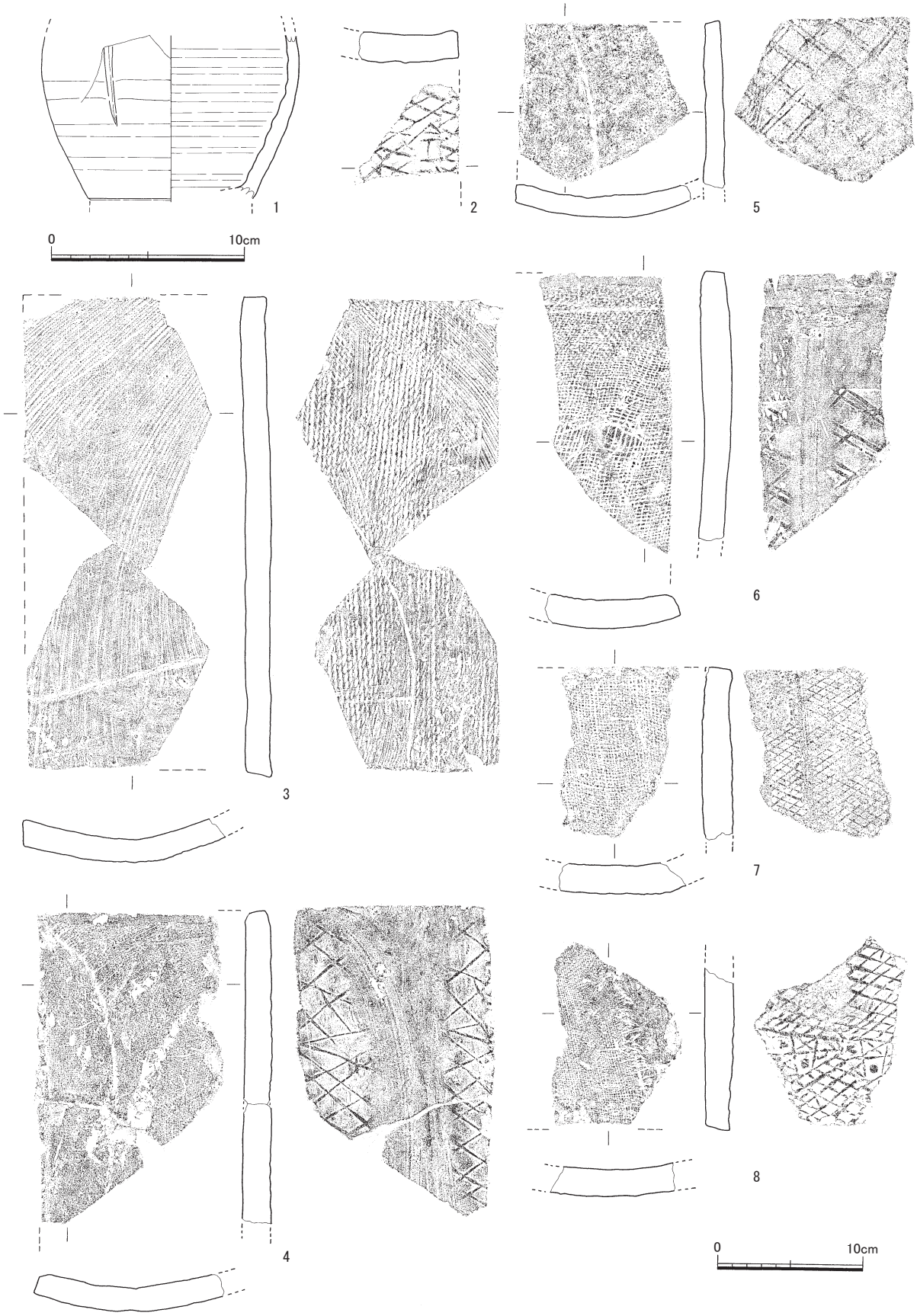


Fig.15　SK1259 出土遺物実測図（1/3、1/4）

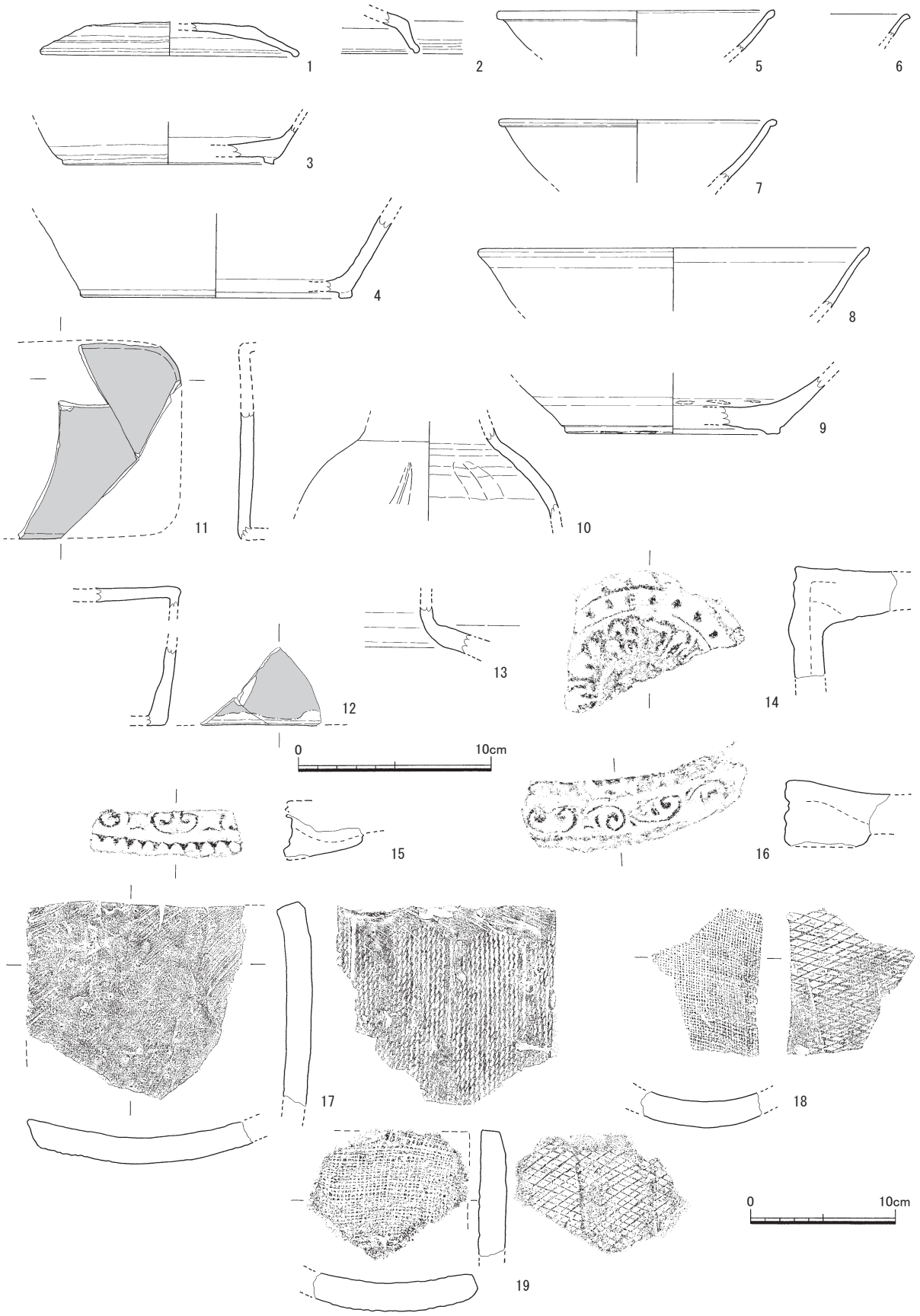


Fig.16　SK1262 出土遺物実測図（1/3、1/4）

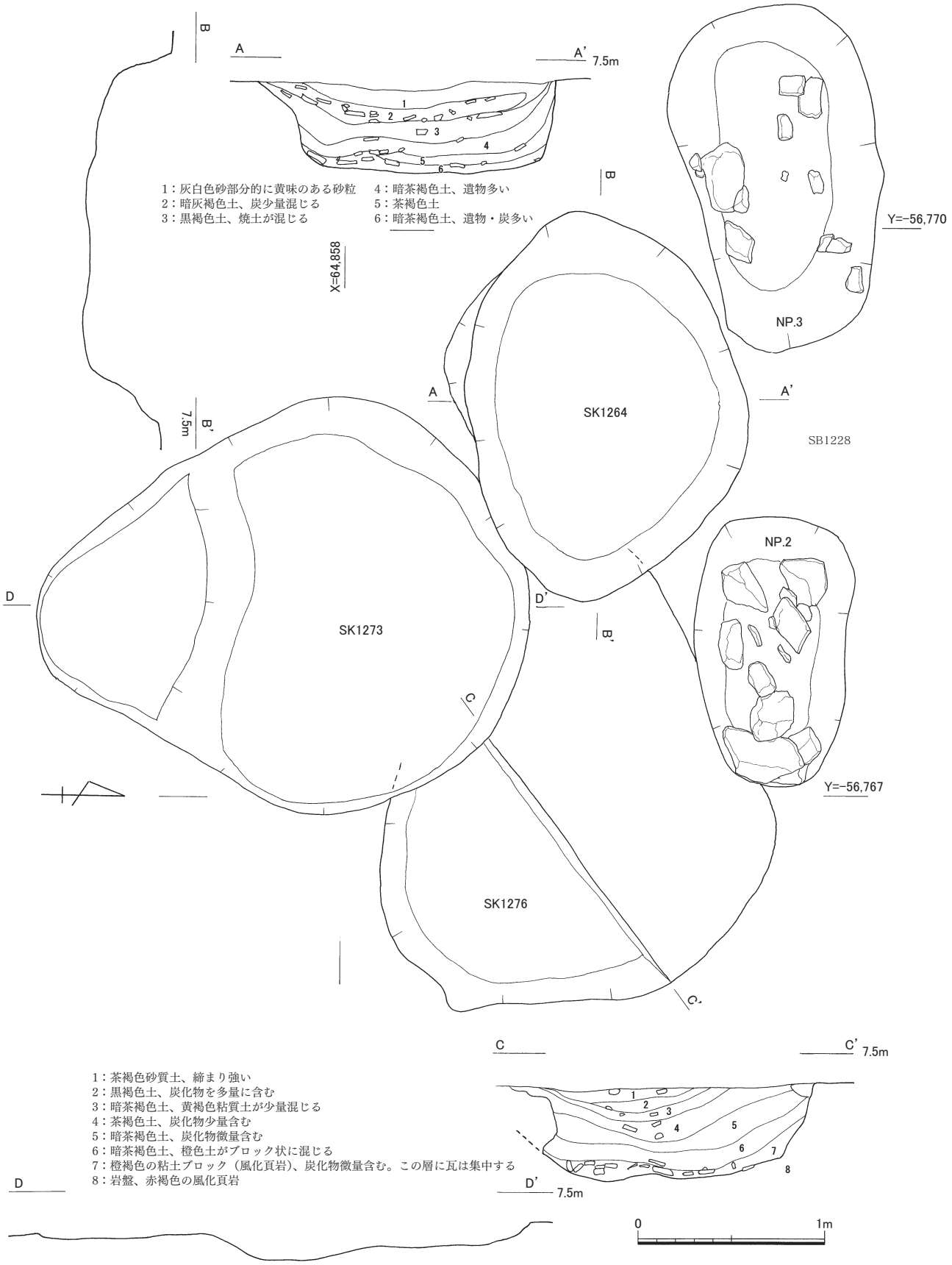


Fig.17　土坑 SK1264・1273・1276 実測図（1/30）

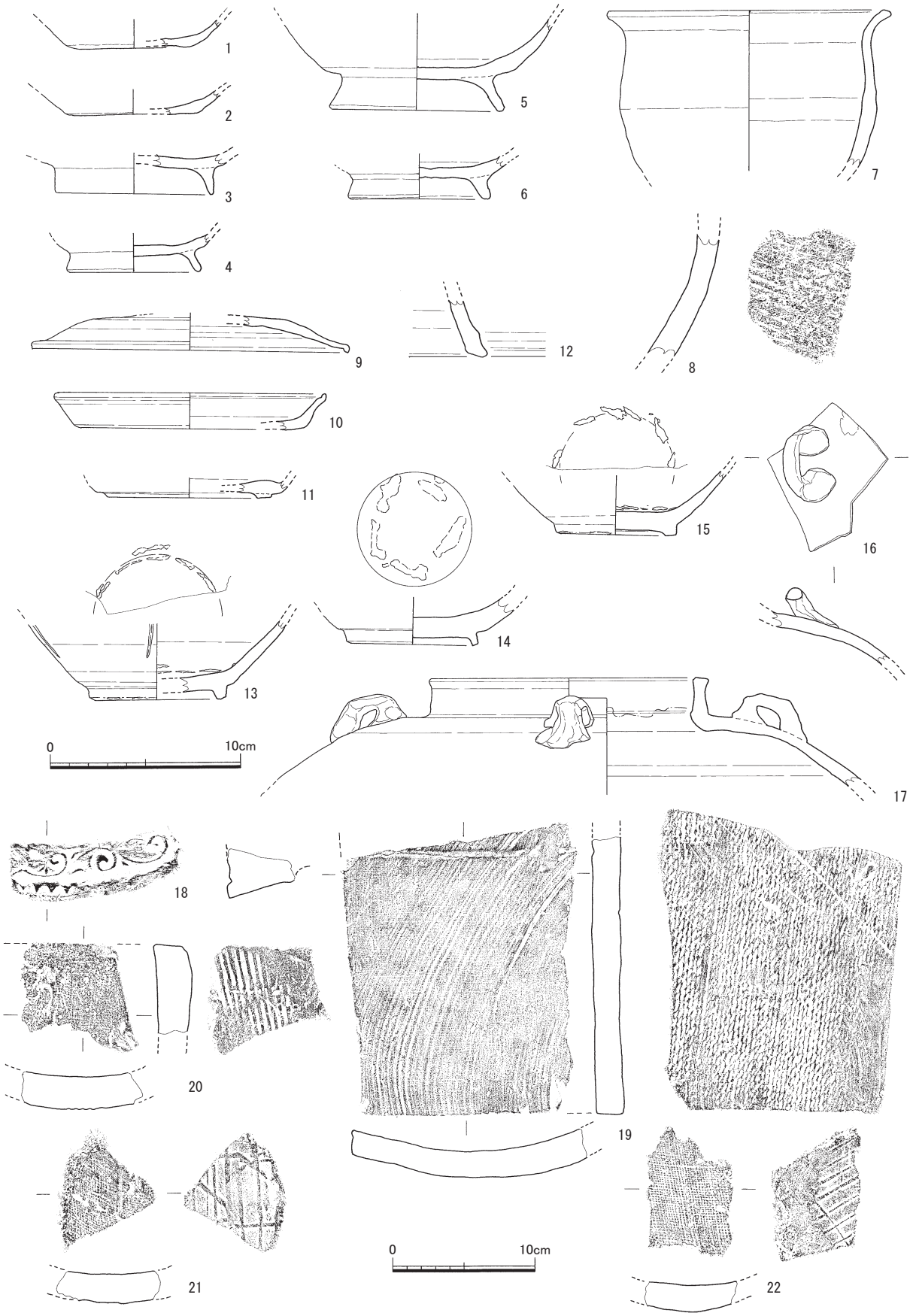


Fig.18　SK1264 出土遺物実測図（1/3、1/4）

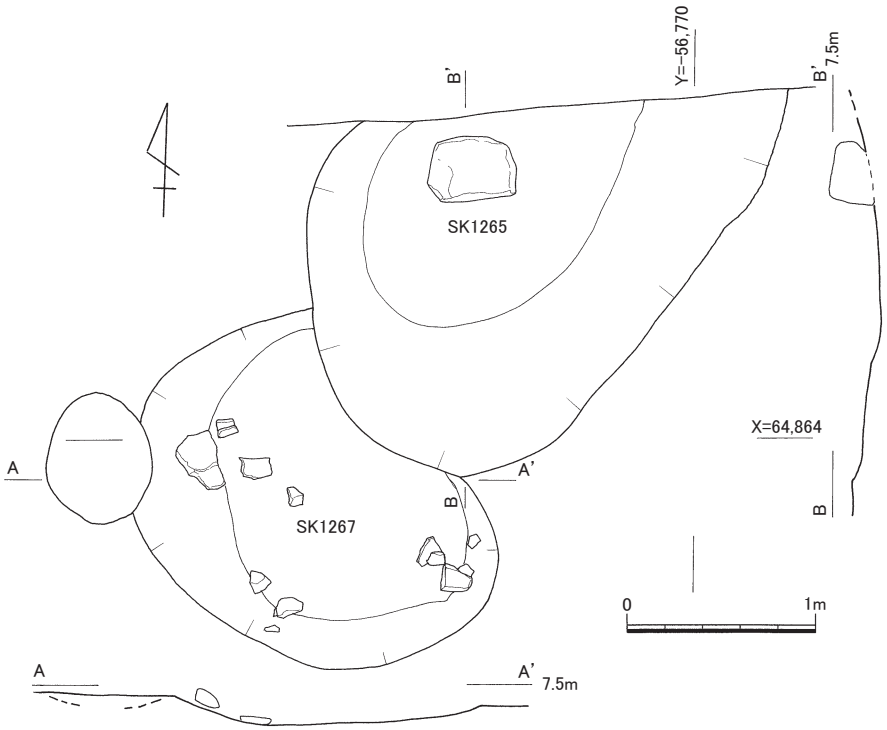


Fig.19　土坑 SK1265・1267 実測図（1/40）

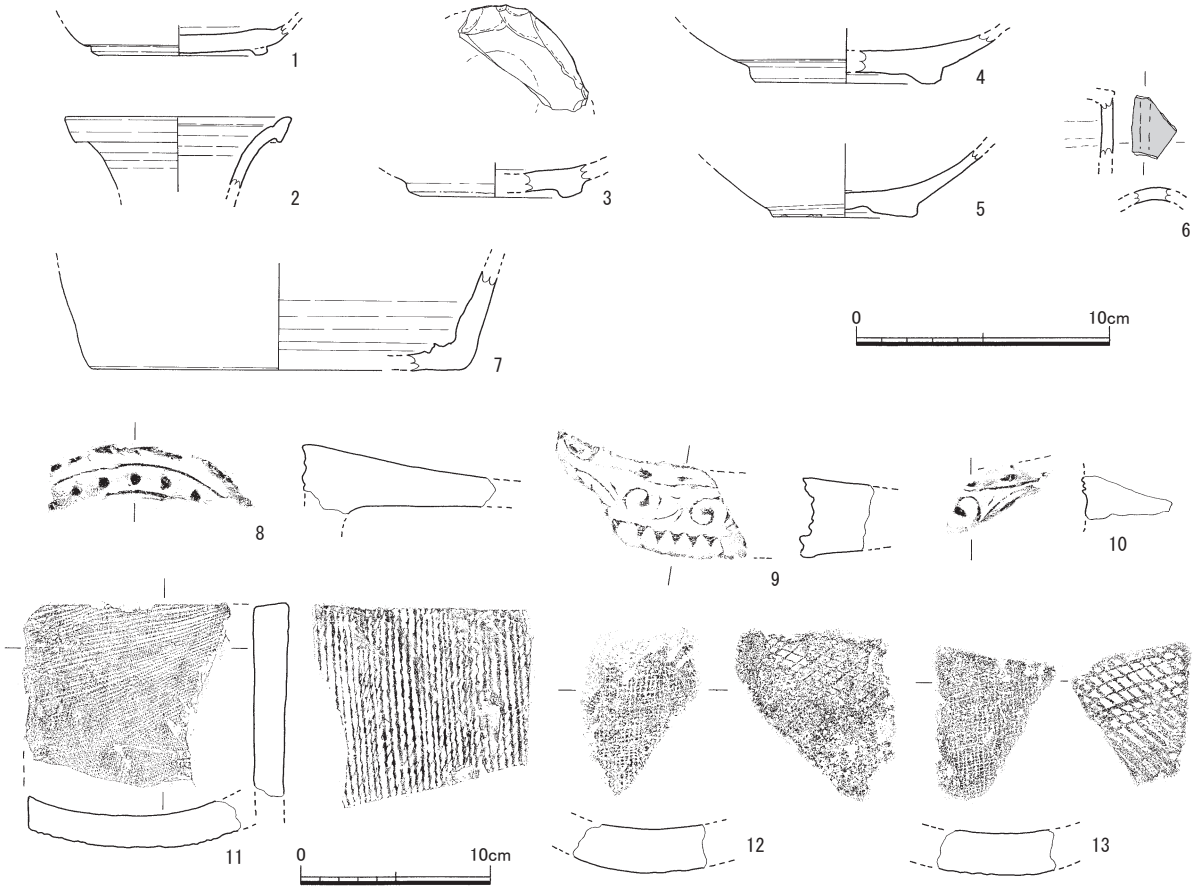


Fig.20　SK1265 出土遺物実測図（1/3、1/4）

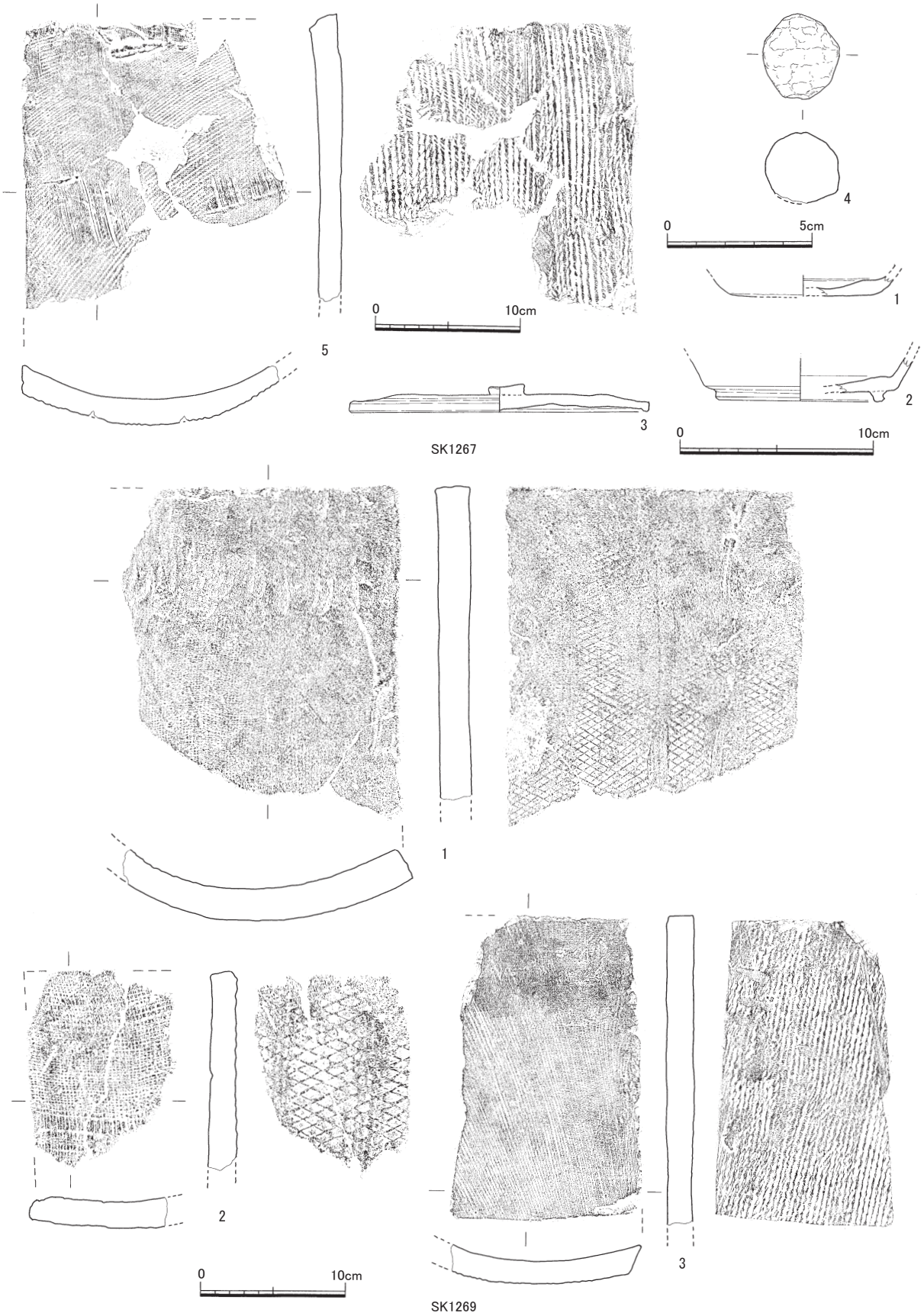


Fig.21　SK1267・1269 出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

SK1267 出土遺物　Fig.21

1 は土師器皿、**2** は土師器高台付き坏、**3** は須恵器坏蓋である。**4** は砂岩製石球である。その他多量の瓦が含まれている。

土坑 SK1269　Fig.9

布掘り塀 SB1238 東辺の一部を掘り込んだ深さ 0.2 mほどの浅い皿状の土坑である。Ⅲ期礎石建物またはそれ以降の建物の基礎整地に伴うブロック状整地痕であろう。

SK1269 出土遺物　Fig.21

布目叩き、多種の格子目叩きなど多くの瓦が含まれている。

土坑 SK1270　Fig.9

布掘り塀 SB1238 東辺の一部を掘り込んだ深さ 0.3 mほどの浅い皿状の土坑である。Ⅲ期礎石建物またはそれ以降の建物の基礎整地に伴うブロック状整地痕であろう。

SK1270 出土遺物　Fig.23

多量の瓦類と共に土器、陶磁器が多く出土している。**1～4** は土師器で、**1・2** が皿、**3** が高台付き碗、**4** が甕口縁部である。**5** は須恵器坏蓋である。**6～11** は邢窯系白磁碗で、**6～9** は小さな玉縁口縁を持つ蛇の目高台である。**12～14** は越州窯系青磁で、**12・13** は碗、**14** は壺または水注の頸部破片である。**15** は中国製陶器碗または鉢の底部破片、**16** は砂岩製の石球である。**17・18** は鴻臚館式軒丸瓦、**19** は鴻臚館式軒平瓦、その他縄目叩き、各種格子叩きがみられる。**21** は「今行」銘叩き、**23** は塼の破片である。

土坑 SK1271　Fig.9

布掘り塀 SB1238 東辺上の浅い皿状窪みである。Ⅲ期建物以降の基礎整地に伴うブロック状整地痕であろう。

SK1271 出土遺物　Fig.24

1・2 は越州窯系青磁で、**1** は碗、**2** は壺または水注の頸部破片である。**3** は鴻臚館式軒丸瓦である。その他縄目叩き、各種格子叩き瓦があるが量的には多くない。

土坑 SK1273　Fig.17

SB1228 の南北礎石列間に掘り込まれた浅い廃

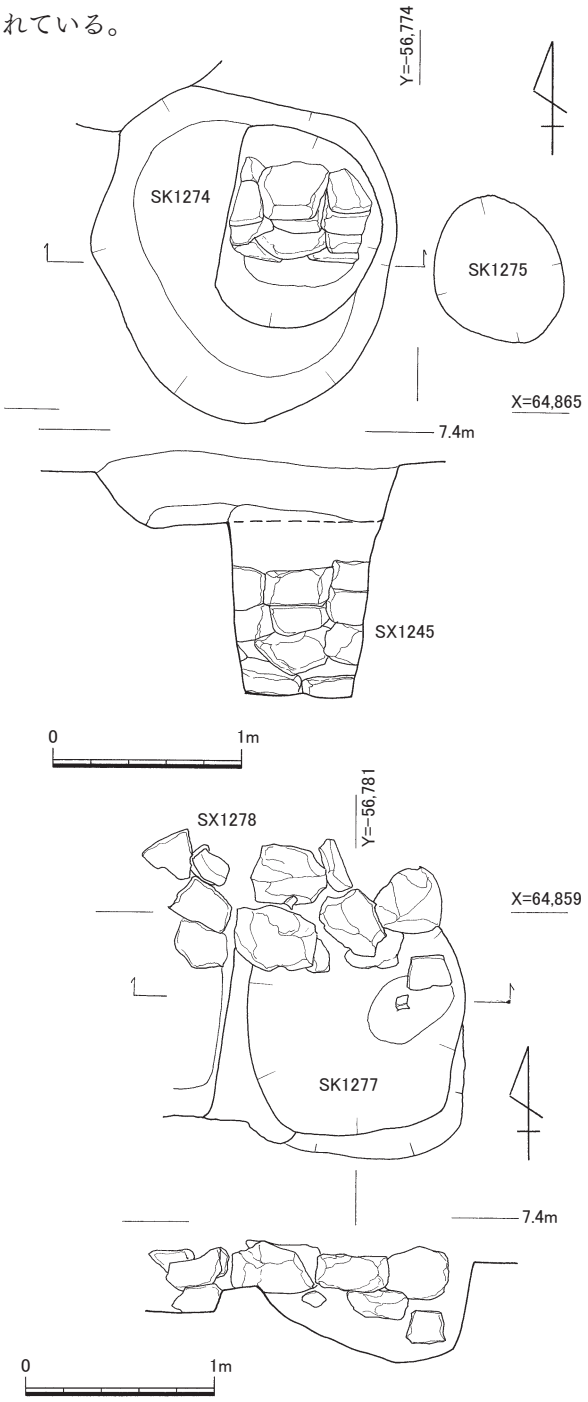


Fig.22　土坑 SK1274・1277 実測図（1/40）

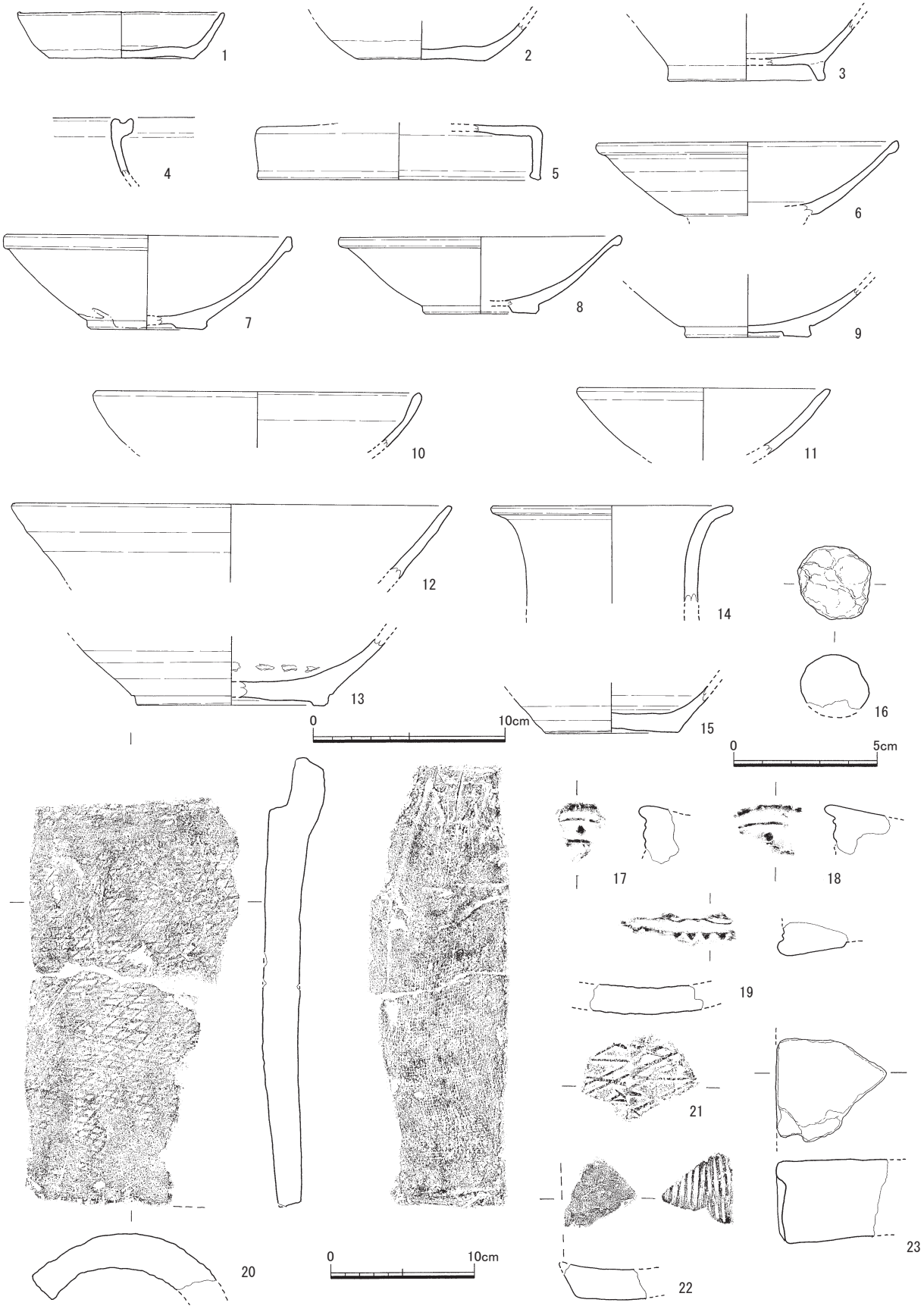


Fig.23　SK1270 出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

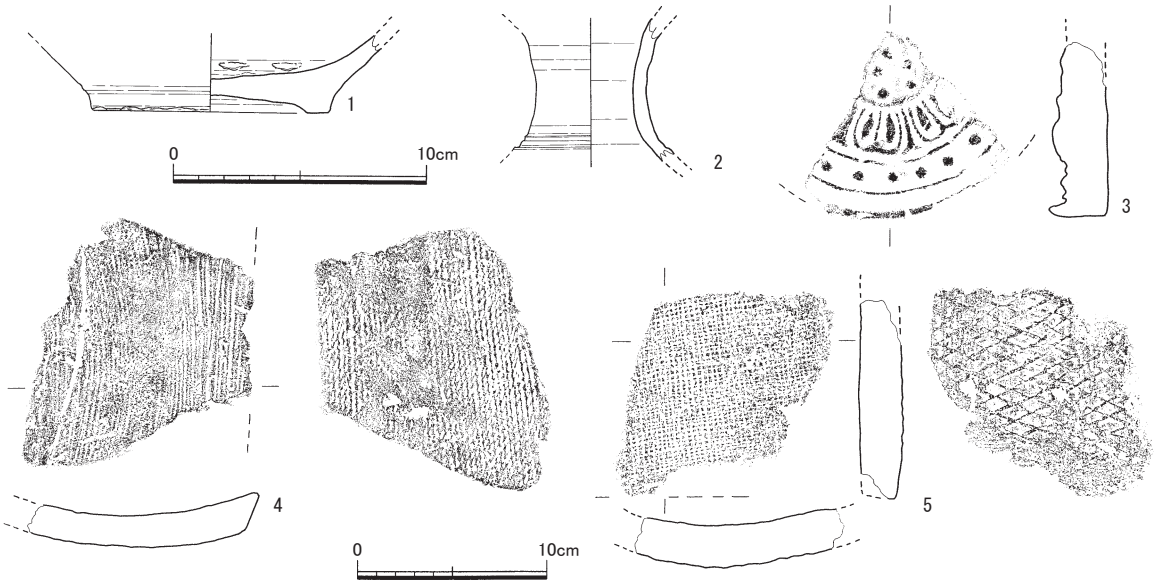


Fig.24　SK1271 出土遺物実測図（1/3、1/4）

棄物処理土坑である。内面で数回の焼却作業が行われている。SK1276 を切り、Ⅳ期以降の遺構である。

SK1273 出土遺物　Fig.25

1 は土師器高台付き碗、**2～4** は須恵器で、**2** が坏蓋、**3** が坏身、**4** が広口壺である。**5～7** は越州窯系青磁で、**5・6** が碗、**7** が体部を瓜割りにする壺である。**8** は新羅焼き壺で SK1264 出土破片と接合する。**9** は鴻臚館式軒平瓦で、その他、多くの縄目叩き、各種格子叩き瓦がある。

土坑 SK1274　Fig.22

SK1255 に接する径 1.5m、深さ 0.3m 程の廃棄物処理土坑で、内面で数回の焼却作業が行われている。Ⅳ期以降の遺構である。この床面の一部は石垣列 SX1245 の延長線確認のため掘り下げている。

SK1274 出土遺物　Fig.26

1～8 は土師器高台付き碗、**9** は幅広の玉縁の白磁碗である。**10** は鴻臚館式軒丸瓦、**11** は同じく鴻臚館式軒平瓦である。ここでも多種の叩き文様の瓦がみられる。**16** は「介」銘の叩きがある。

土坑 SK1276　Fig.17

SK1264、1273 に切られた廃棄物処理土坑で、内面で焼却作業が行われており、灰が層になって堆積している。SB1238 廃絶後、Ⅳ期以降の遺構である。

SK1276 出土遺物　Fig.27

1 は面戸瓦、**2** は熨斗瓦である。ここでも多種の叩き文様の瓦がみられる。**3** は「介」銘がある。

土坑 SK1277　Fig.22

石積遺構 SX1278 の南に接して掘り込まれた廃棄物処理土坑である。Ⅱ期布掘り SA1237 を切る。灰、炭が混じり、内面で焼却作業が行われている。Ⅳ期以降の遺構である。

SK1277 出土遺物　Fig.27

1 はヘラ切り底の土師器皿、**2** は須恵器坏蓋、**3** は越州窯系青磁碗である。**4** は内面に特徴的な櫛掻きをした長沙窯系卸し目皿で、外面に黄釉、口唇部に褐釉を施す。多種の叩き文様の瓦がみられる。（池崎）

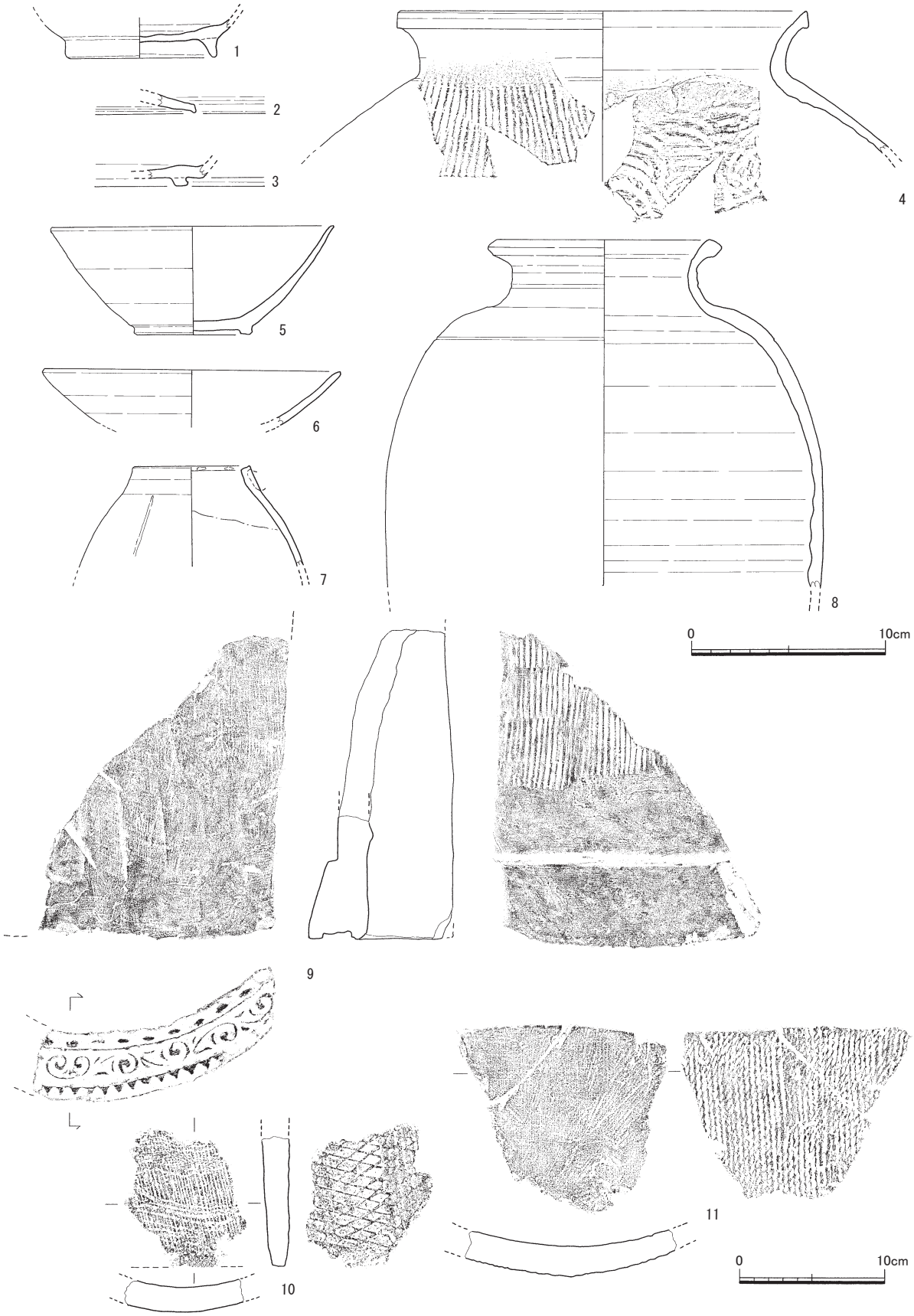


Fig.25　SK1273 出土遺物実測図（1/3、1/4）

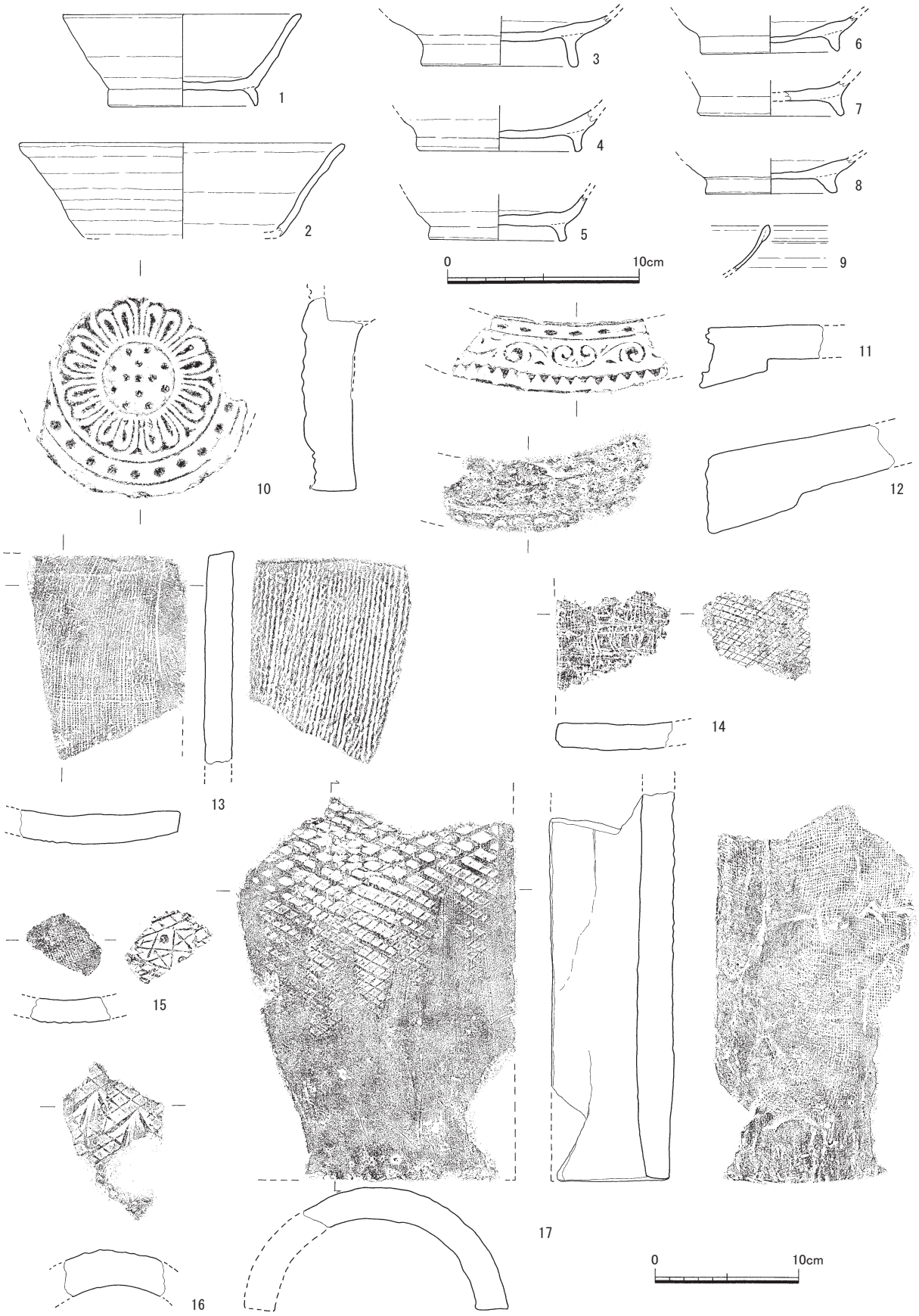


Fig.26　SK1274 出土遺物実測図（1/3、1/4）

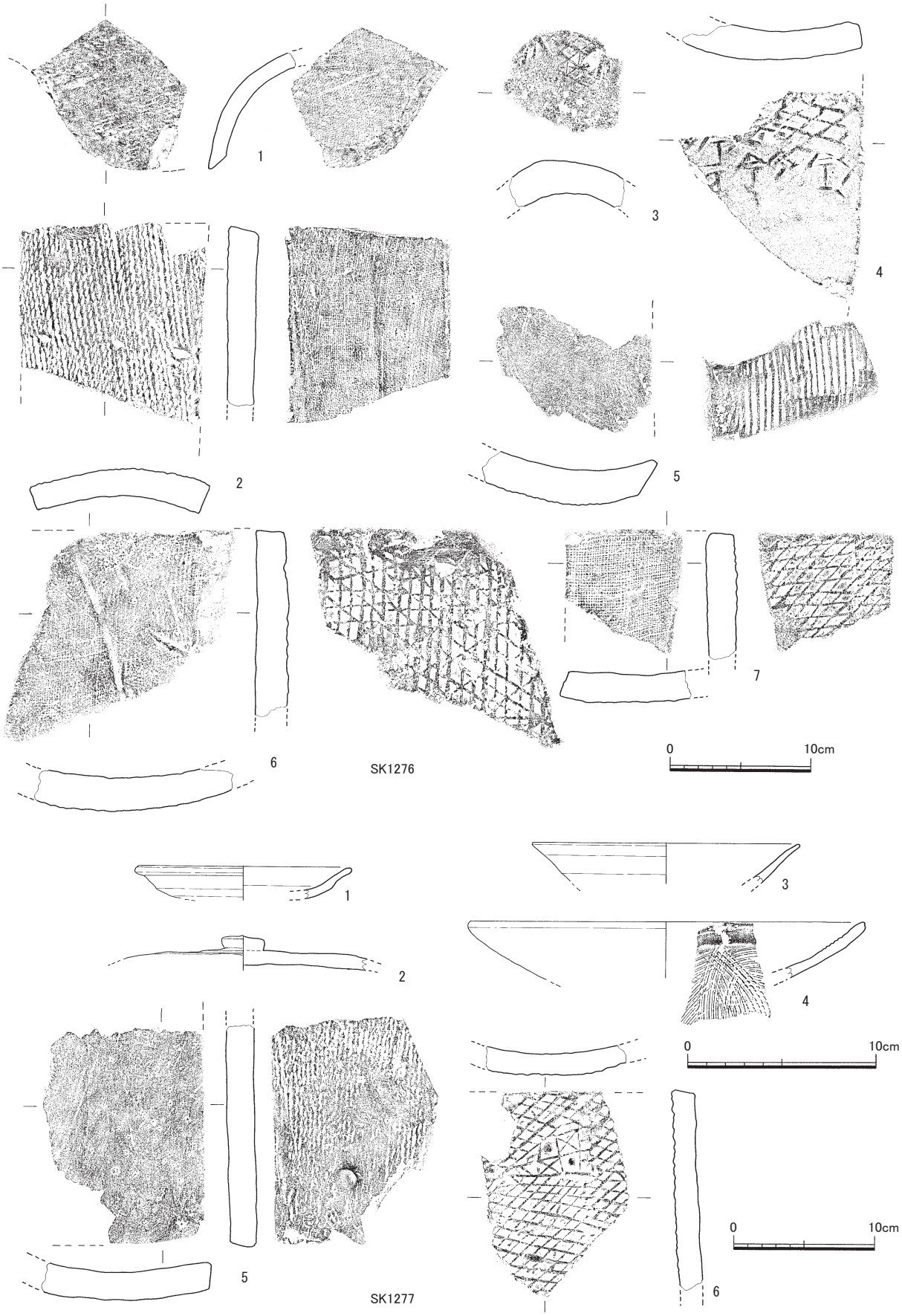


Fig.27　SK1276・1277 出土遺物実測図（1/3、1/4）

（4）第 20 次調査（0218）

第Ⅳ期調査区の中央に位置し、平成 14 年度に調査を行い、概要は『鴻臚館跡 15』に報告している。調査面積 1,800㎡。遺構番号は、14001 ～ 14535。遺構検出面は、風化頁岩岩盤及び整地層で、地山の岩盤は、調査区西辺の北半分から、南辺の西半分のほぼ三角形部分で露出していた。調査地点は平和台球場グラウンド部分にあたり、大きく削平を受けている。

旧陸軍歩兵 24 連隊関係遺構に関しては、ゴミ穴 2 基が検出されたに過ぎない。近世では、福岡城三之丸を東西に走る道路部分が大半を占め、道路側溝、側溝の北に展開した家臣屋敷の塀跡、掘立柱穴、池と思われる不整形土坑、廃棄土坑などが出土した。中世の遺構としては、柱穴、土坑、池状遺構などがある。鴻臚館時代の遺構としては、柱穴、土坑、石垣、谷（堀）などを検出した。

土坑には、瓦を主体とした廃棄土坑と、土師器の坏・碗を多く含む廃棄土坑とがある。一方、陶磁器を主体とする、あるいは多く含む廃棄土坑は検出できなかった。

これらの廃棄土坑は、第 20 次調査地点の中ほどから南に分布している。第 20 次調査地点の南辺には、南館と北館を隔てる中央谷の崖が検出されており、そこには、鴻臚館跡第Ⅱ期には石垣が築かれていた（SX14528）。すなわち、廃棄土坑は、北館の中央部を避け、北館南辺寄りに掘削されたこ

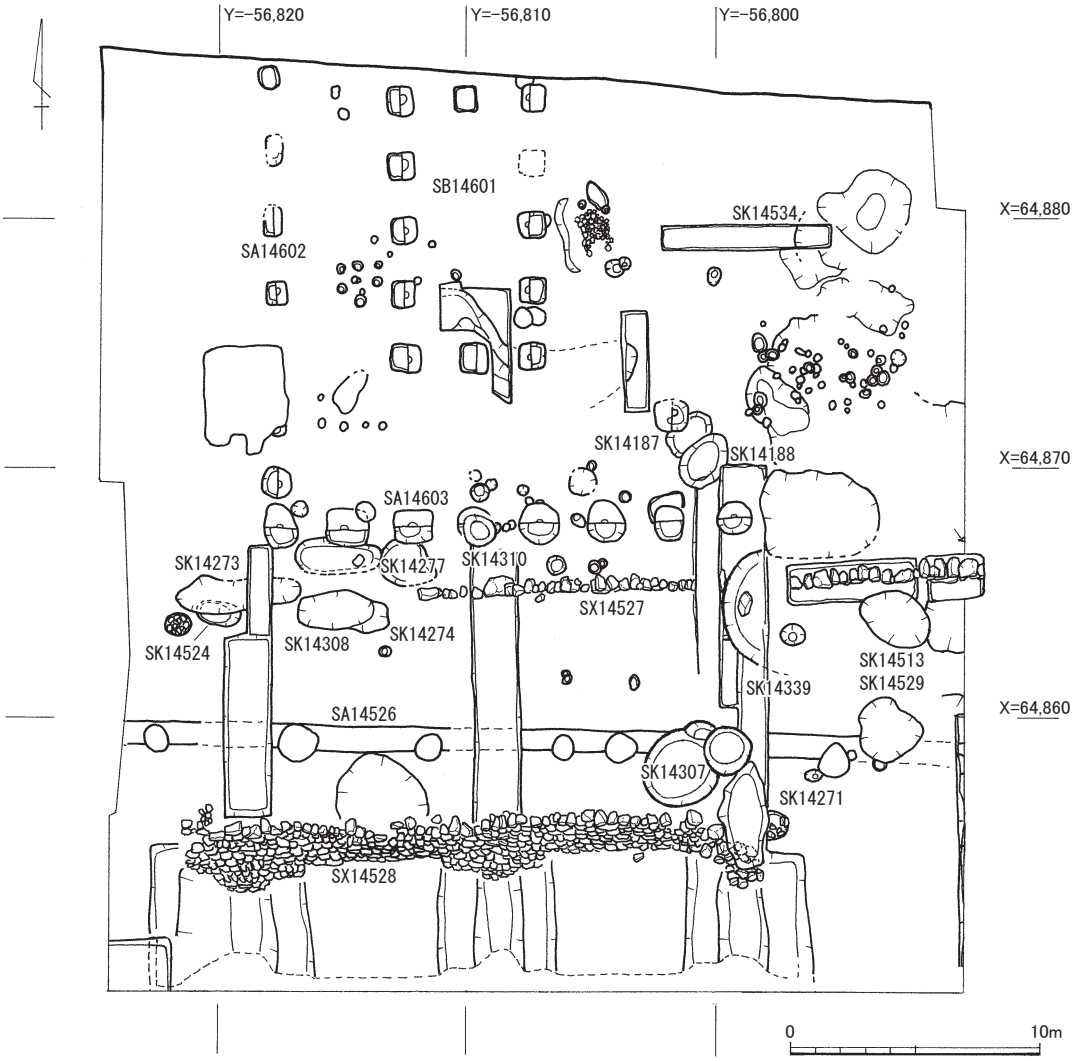


Fig.28　第 20 次調査　古代遺構配置図（1/300）

とになる。とはいえ、第Ⅱ期石垣遺構は、第Ⅱ期の布掘り柱列や第Ⅲ期の回廊状礎石建物と近接しており、廃棄土坑が掘られた場所は明らかに北館施設内にあたる。

また、第 20 次調査においては、平成 13 年度に実施した第 19 次調査の第Ⅰ期石垣遺構 SX1245 を精査するため、当該部分に東西 12 m、南北 18.3 m の調査区を設けた（Fig.29）。この補足調査区においては、SX1245 を調査するために、その前面を掘り下げる必要があったことから、瓦を主体とした廃棄土坑二基を完掘した。

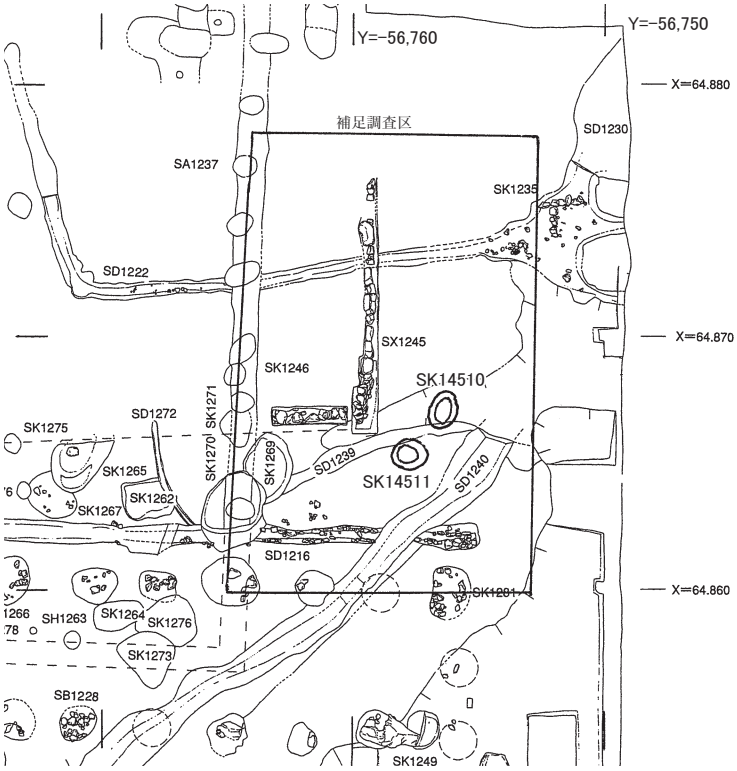


Fig.29　第 19 次調査区内 SK14510・SK14511 位置図（1/300）

Ph.1　第 20 次調査区全景

SK14187

径約 190㎝の略円形を呈する土坑である。深さは、10㎝前後を計る。削平のためか、浅いくぼみ状を呈する。SK14188 に切られる。

出土遺物を Fig.31 に示す。**1・2** は、土師器の碗である。体部は丸みを持ち、小さく外反して口縁部となる。高台は高く、外側に開き気味に作る。内外面ともに横撫で調整で、篦磨きはされない。**3・4** は、白磁である。**3** は碗で、小さい玉縁となる。**4** は、皿の底部である。高台畳付から外底部にかけて、露胎となる。**5** は、越州窯系青磁の壺である。体部外面は全面施釉で、外底部の縁辺のみ釉を剝いで、細かい白砂の目跡が残る。**6** は、土師器の高杯である。脚の筒状部分の破片で、篦状工具で縦に削り、多角形に面取りする。

このほか、瓦が出土している。単線の格子叩き文が多数を占める。

出土遺物や SK14188 の年代観から、10 世紀後半頃の廃棄土坑と考えられる。

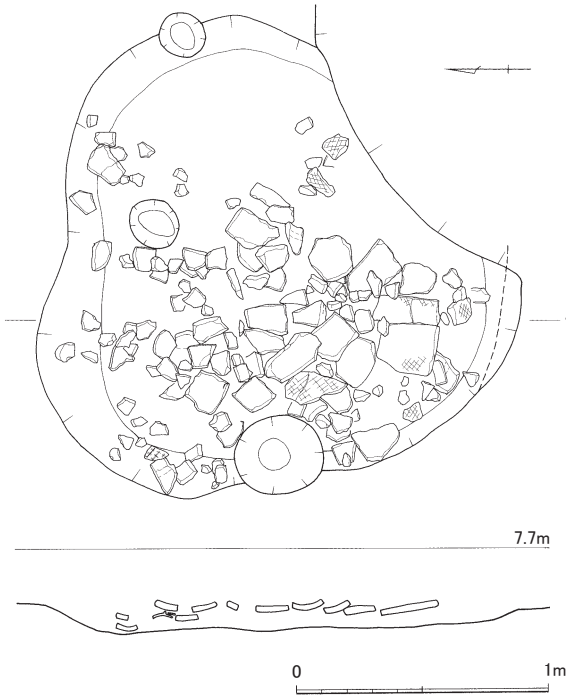


Fig.30　土坑 SK14187 実測図（1/30）

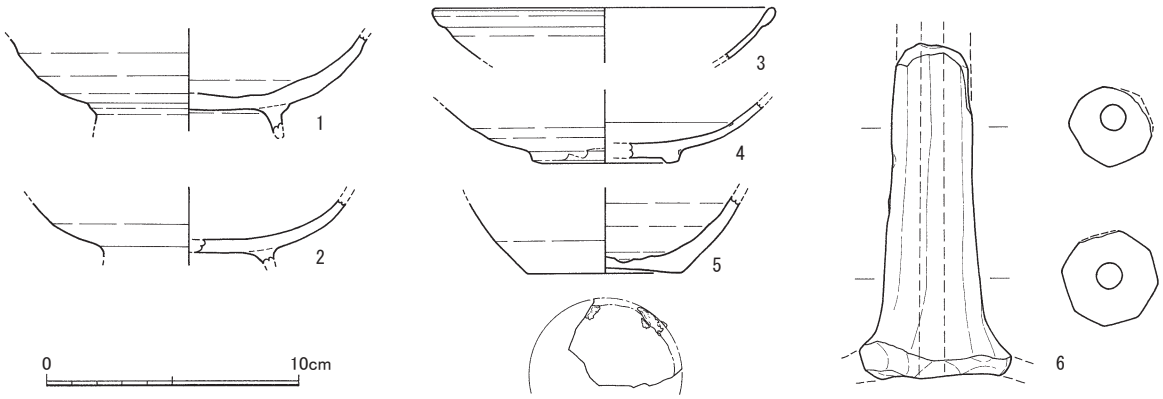


Fig.31　SK14187 出土遺物実測図（1/3）

SK14188

調査区中央付近で検出した土坑である。長径 230㎝、短径 170㎝の楕円形を呈し、深さは 40㎝をはかる。土坑内のやや北寄りに、２基の柱穴が掘り込まれているが、本遺構に後出する遺構である。埋土は次の通りである。①　黄茶色粘質土、②　暗灰色土、③　灰色粘土、④　暗褐色土、⑤　黒灰色粘土、⑥　灰白色粘土、⑦　黄色粘土。

遺物は、埋土の上半分に集中して出土しており、下半分からは大きな破片は出土していない。瓦を主として廃棄しているが、土坑のほぼ中央に無遺物の部分があり、瓦は小口を揃えそれを取り巻くように出土している。また、中央部付近の瓦は、黄茶色粘質土で巻かれており、この無遺物部分に柱の当りなどを想定することも可能かもしれない。

出土遺物を Fig.33 ～ 36 に示す。**1 ～ 3** は、越州窯系青磁碗である。全面施釉で、見込みと高台畳付には目跡がめぐる。火熱を受けたようで、釉表は若干荒れている。**4・5** は、白磁碗である。**5** は輪花碗で、高台畳付き内は露胎となる。**6** は、土師器の高台付きの鉢である。

7 ～ 29 には、瓦を図示した。**7 ～ 27** は平瓦である。**7 ～ 9** は、縄目叩きを持つもので、**7** の凹面にはコビキ痕が、**8** の凹面には縦方向の掻き目が認められる。長側の小口は、ヘラ切りされる。**10 ～ 12** は、細かい格子目叩きを施すものである。叩き文様の分類では、3Aa 類にあたる。**11** は熨斗瓦であろう。長側の両小口はヘラで面取りされている。**12** の長側の小口は、内側からヘラを入れ、折り取っている。6J 類である。**13 ～ 19** は、やや大きめの格子叩きを行なうもので、3Ab 類に分類される。**13** は方形、**14 ～ 19** は菱形の格子である。**13 ～ 15・17・18** の長側小口はヘラ切り、**16・19** はヘラで切れ目を入れてから折り取る。**18・19** の凹面端部付近は撫で調整を加えるが、横方向のコテ状工具痕跡が認められる。**20** は、複線の方形格子叩きである。長側小口は、ヘラ切りする。「賀」の一部と思われるハネの残角が見られる。3Ba2-2 類。**21 ～ 25** は、複線の菱形格子叩きを持つものである。3Bb 類。**21・25** の長側小口はヘラ切り、他は切れ目を入れて折り取る。**26** は、格子叩きであるが、右上がりの線が三重であったり単線であったりと、変則的である。文字を叩打しているが、文字としての態をなしていない。小口はヘラ切りする。3bd 類。**27** は、網目状あるいは蜘蛛巣状の叩き目を持つ。6D 類か。小口は、切れ目を入れて折り取る。**28・29** は丸瓦である。単線の格子叩きをおこなう。

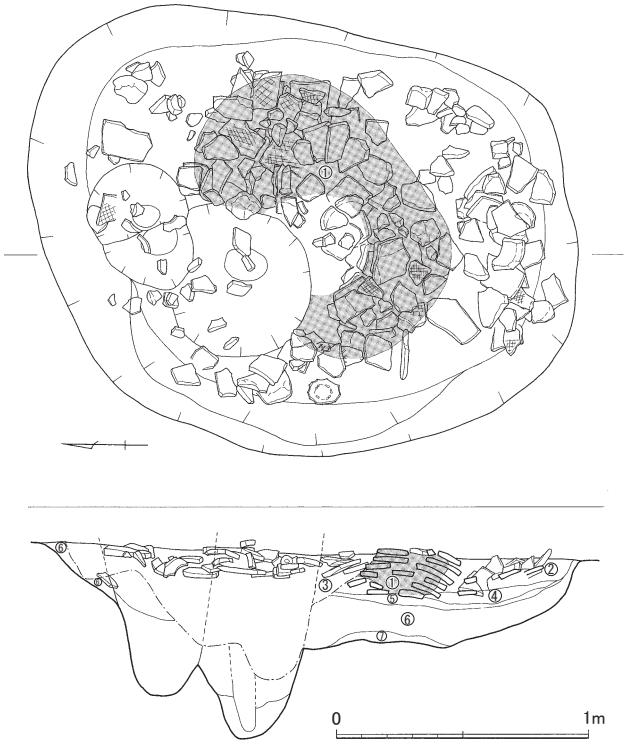


Fig.32　土坑 SK14188 実測図（1/30）

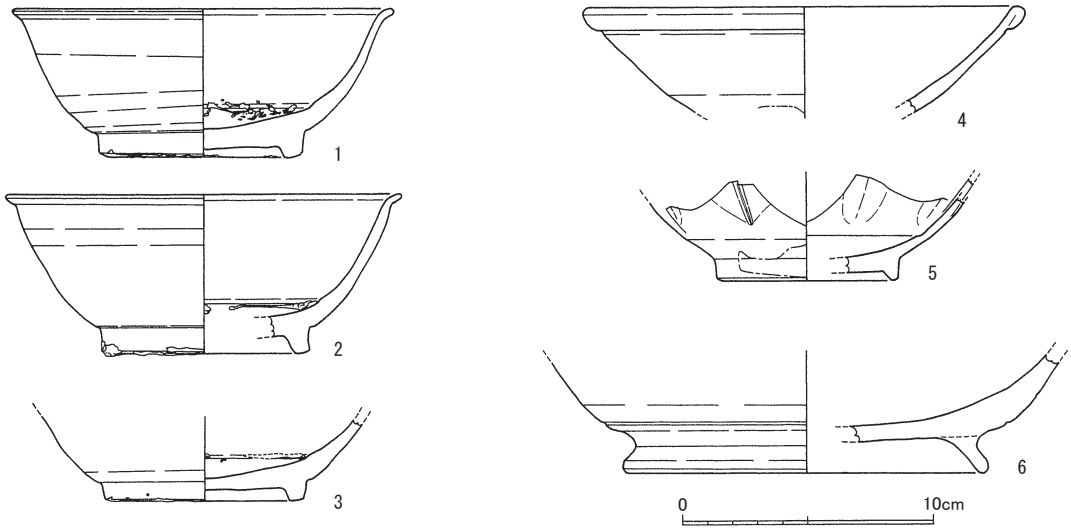


Fig.33　SK14188 出土遺物実測図 1（1/3）

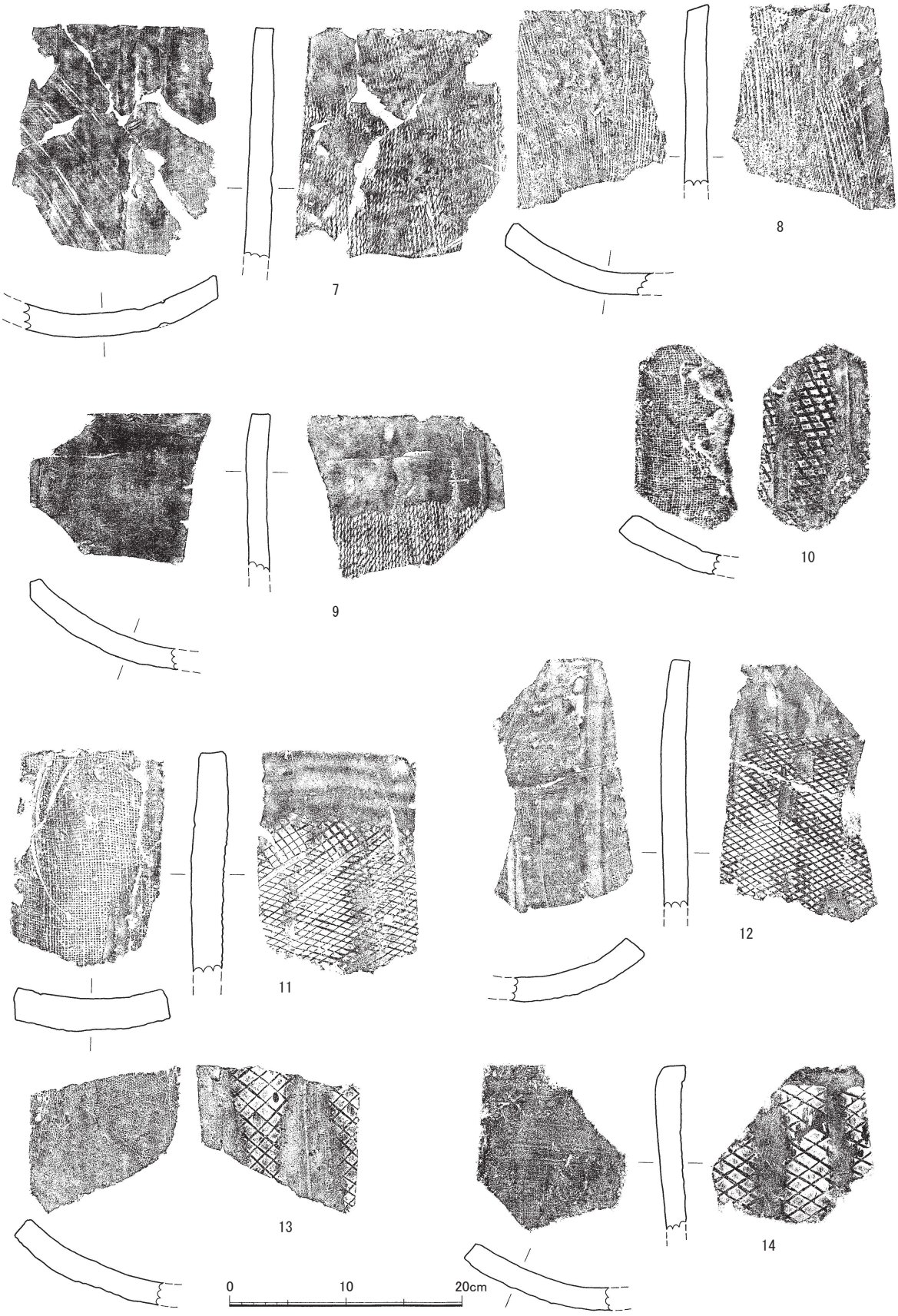


Fig.34　SK14188 出土遺物実測図２（1/5）

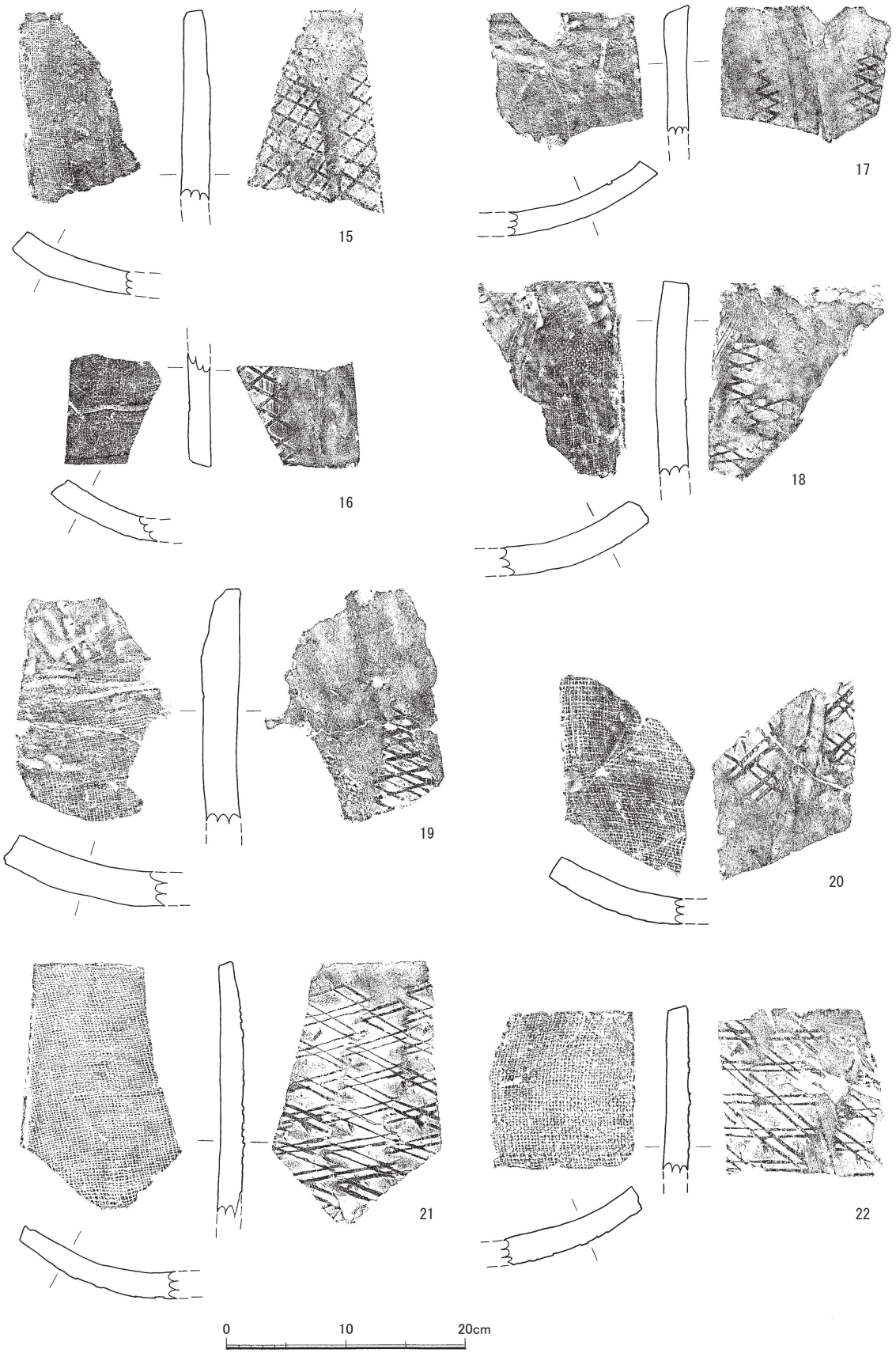


Fig.35　SK14188 出土遺物実測図３（1/5）

小口は、内側から切れ目を入れ、折り取っている。**28** の凹面には、全体に縦方向の繊維痕が見られる。3Ac1-1 類。

なお、**9～12・14・18～20・23・25～29** は、前述した黄茶色粘質土に封入されていた瓦である。出土した土師器から判断して、鴻臚館第Ⅴ期の 10 世紀後半に位置付けられよう。

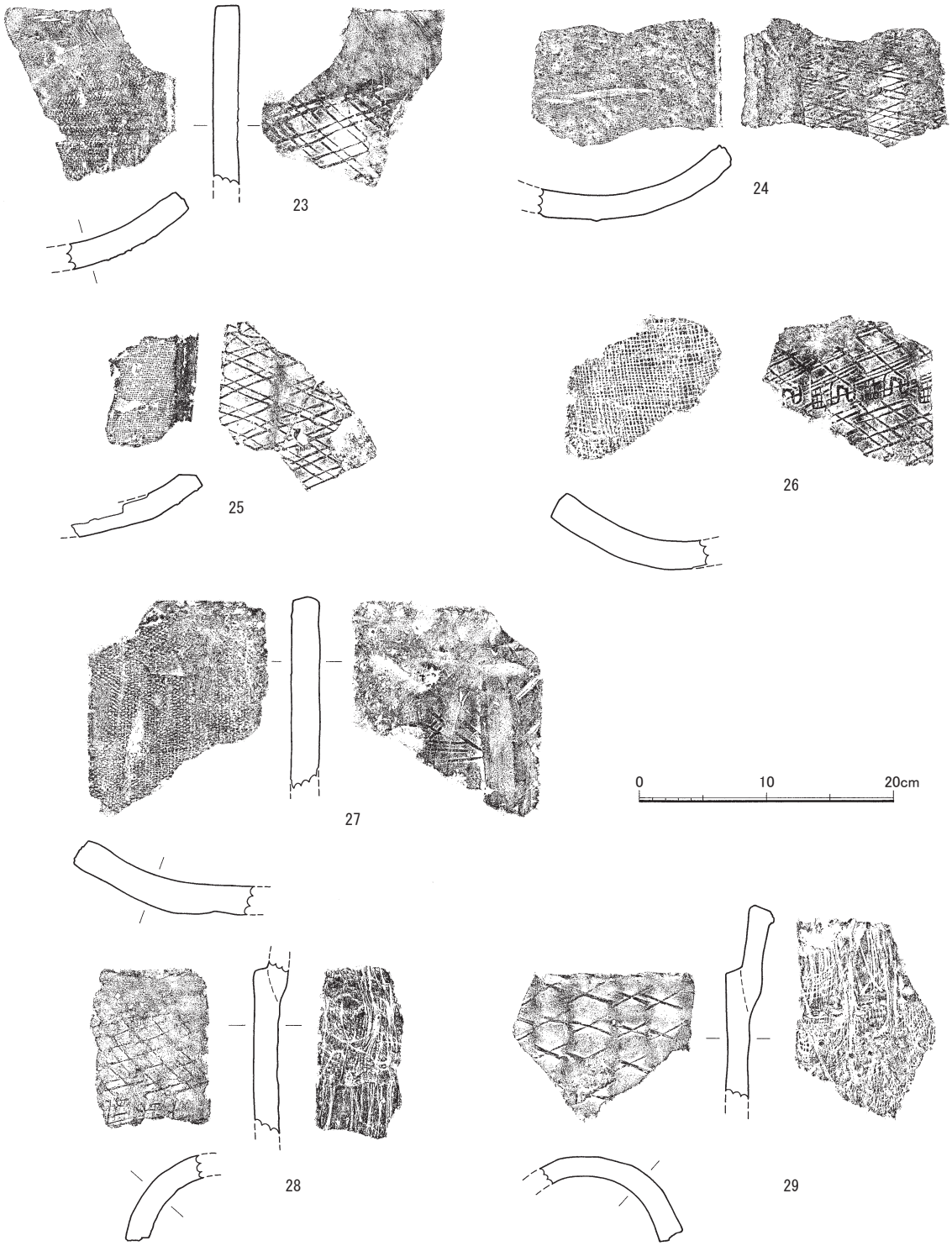


Fig.36　SK14188 出土遺物実測図４（1/5）

SK14271

長軸 450㎝、短軸 175㎝の木葉形を呈する。深さ 10㎝程度の浅い土坑に、瓦の小片を主とした遺物を一括廃棄した遺構である。なお、位置的には第Ⅱ期石垣 SX14528 の直上に当たる。

出土遺物の一部を、Fig.38 ～ 40 に示す。**1 ～ 10** は、土師器である。**1 ～ 3** は、平底の坏である。底径が 6.5㎝前後と小さく薄い **1** のタイプと、底径 8 ～ 10㎝でやや厚手に作る **2・3** などの二タイプがある。**4・5** は碗の口縁部である。**6・7** は、外底部の縁に高台を貼り付けた碗である。**8** は口径 20.8㎝に復元でき、鉢である。体部内面の上半から外面は横撫で、体部の下半は研磨している。**9・10** は、甕である。体部外面は、縦方向に刷毛目、内面は斜めに削り上げる。**9** の外面には、煤が付着している。

11 は、瓦質土器の鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚し、端部は内側に張り出す。

12 は、白釉に緑彩した二彩陶器の蓋である。

13 ～ 37 は、越州窯系青磁である。**13** は、香炉の口縁部であろう。全体に施釉した後、口縁端部の釉を削り取る。**14** は茶托である。**15 ～ 36** は、碗である。**15 ～ 17・19 ～ 24・27 ～ 32・34・35** は、精製品で、全面施釉する。**24・35** は、施釉後に畳付きの釉をかきとる。**18・25・26・33・36** は、粗製品である。**33・36** の外底部は、露胎である。**33** の見込みには、沈線で花文が描かれる。**37** は、大型の香炉の脚であろう。全面施釉する。小破片であり、破片上部には透かし文様の彫り込みが認められるが、透かし孔の形状はうかがえない。

38 ～ 55 は、白磁碗である。**38・55** は畳付きを、**52 ～ 54** は畳付きから高台内を露胎とする。口縁部は、内湾気味の体部から直行した口縁を持つ **38 ～ 43** と、玉縁口縁となる **50**、直線的に開いて玉縁となる **44 ～ 49**、外反する **51** の

Fig.37　土坑 SK14271 実測図（1/30）

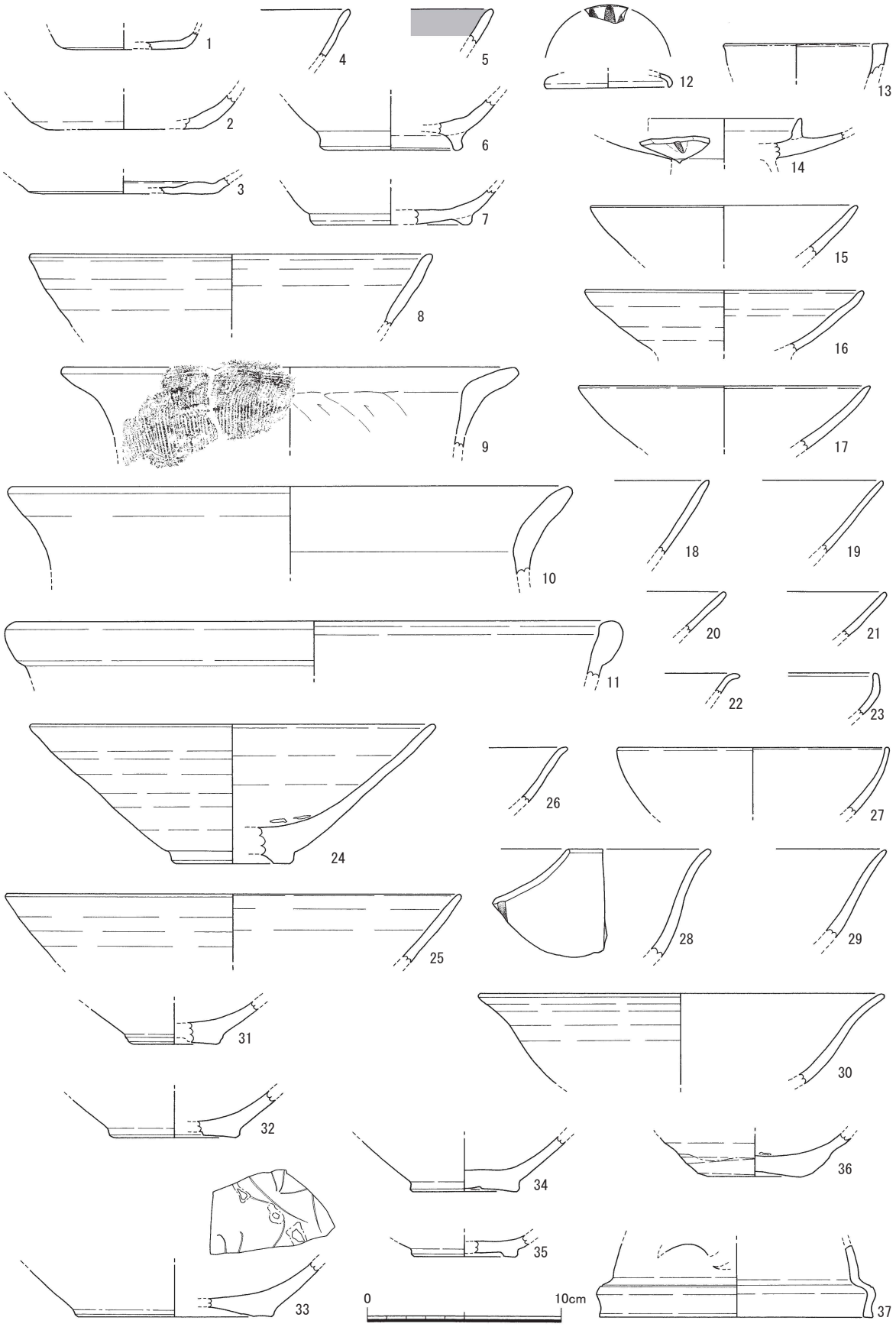


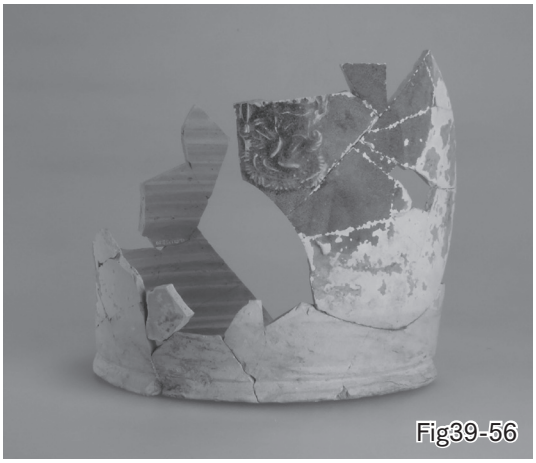
Fig.38　SK14271 出土遺物実測図１（1/3）

三タイプが見られる。底部は、幅のある玉璧高台の **38・52・53** と、幅は狭いが角張った畳付きの **54・55** がある。

56・57 は、長沙窯の陶器である。**56** は、水注である。舞踏する人物像の貼花文（胡旋舞文）に褐彩を施す。**57** は、青緑色釉を施した陶枕である。第 19 次調査で出土した陶枕（本報告書 P.22、Fig.16-11・12）と、同一個体の可能性が高い。

58・59 は、石玉である。砂岩製。削り上げて、扁平な球形に作る。被熱して、濃い褐色を呈する。

60 は、鴻臚館式軒平瓦の瓦当である。**61** は、



Ph.2　SK14271 出土長沙水注

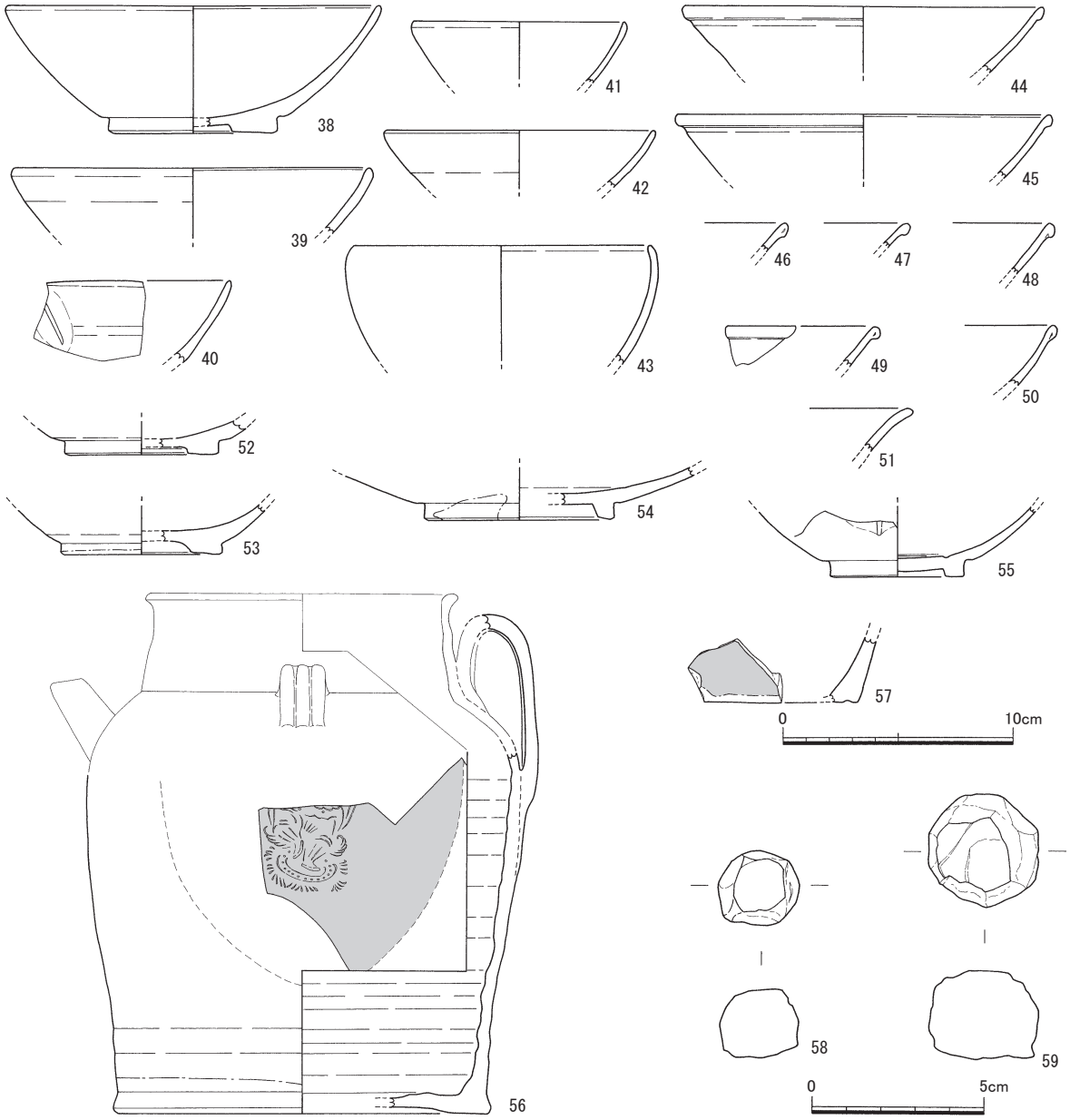


Fig.39　SK14271 出土遺物実測図２（1/3、58・59-1/2）

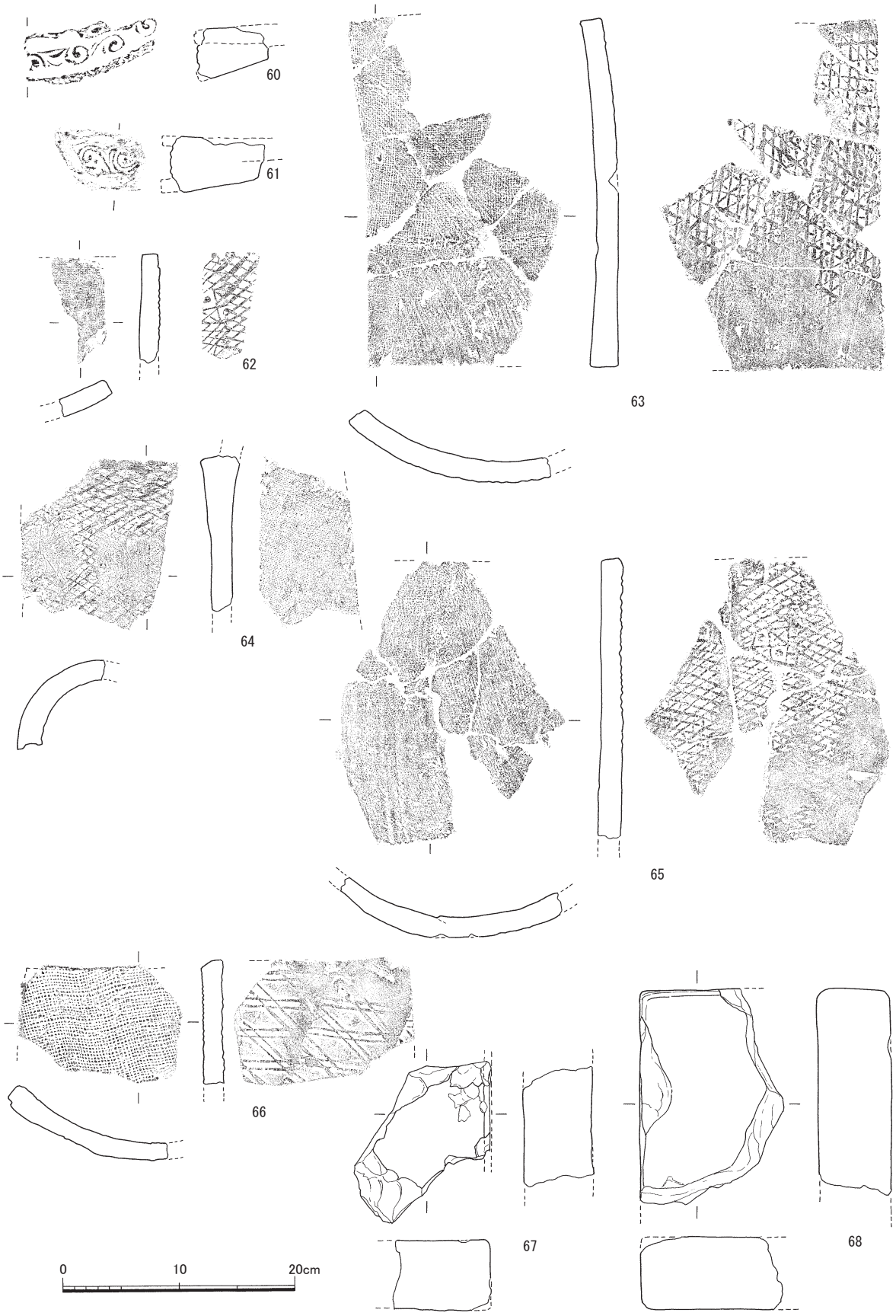


Fig.40　SK14271 出土遺物実測図３（1/5）

軒平瓦の瓦当で、大宰府分類の 662 型式にあたる。

62・63・65・66 は平瓦、**64** は丸瓦である。**64** は単線の格子叩きで 3Aa1-2 類、**66** は複線の斜格子叩き文で 3Ba-1 類、**63** は単線の斜格子に縦線が加わる 5B 類、**62・65** は 6G 類に分類される。

67・68 は、瓦塼である。ともに 6 cm 強の厚さを持ち、同一規格で作られた製品の可能性がある。このほか、無釉陶器の鉢が出土している。小片であるが、口縁形態は **11** に似る。

第Ⅳ期、9 世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

SK14273

大量の瓦を一括廃棄した土坑である。長軸 480㎝をはかる大型土坑であるが、北側は平和台球場の排水溝（暗渠）に破壊されている。排水溝の北側には遺構は及んでおらず、短軸は 150㎝程度と推定復元される。

検出面からの遺構の深さは、25㎝ほどである。なお、後述する SK14524 とは重複関係にあり、これに後出する。

出土遺物の一部を、Fig.42 ～ 44 に図示する。

1 ～ 11 は土師器である。**1・2** は坏で、底部をヘラ切りする。体部は、横撫で調整である。全形を知りうる **1** によれば、体部は内湾気味に立ち上がり、小さく外反する口縁を作る。**3 ～ 10** は、碗である。高台の形態は、高く「ハ」字状に開く **3 ～ 5** と、低く断面三角形に作る **6 ～ 10** に分かれる。碗の体部に対して、概して高台が広く作られている。**11** は、甕である。器面が荒れていて、調整痕は残らないが、外反気味に開く口縁の外面には、丸い凹みが並んでおり、指頭痕とみられる。体部内面は、削り上げであろう。

12 ～ 15 は、越州窯系青磁碗である。**12 ～ 14** の体部下位は、施釉されておらず、粗製品である。**15** は、精製品である。全面に施釉した後、畳付きの釉を削り取る。

16 ～ 18 は、白磁である。**16** は壺の口縁部で、内外面ともに施釉する。透明釉の下に白色の土が

Fig.41　土坑 SK14273 実測図（1/30）

塗られている状況がうかがわれ、白化粧していることが知れる。**17・18** は、碗である。**17** は口縁部を折り返して、玉縁につくる。**18** は、角張った高台を持つ。全面施釉の後、畳付きの釉を掻きとる。**18** においても、釉下に白化粧が認められる。これらの点から、**16・18** は、定窯の製品である可能性が考えられる。

19 ～ 34 は、瓦である。**19 ～ 21** は、縄目叩きの平瓦である。凹面は布目であるが、**19・20** には、粘土ブロックから切り出した際のコビキ痕が、明瞭に残っている。**22 ～ 29** は、単線の斜格子叩きである。**22** は、**23・25** よりも格子の目が大きいタイプで、3Ab-1 類、**23** は 3Aa2-1a 類、**25** は、3Aa2-1a 類に分類されている。**26** は斜格子に縦線を加えた 5B 類に分類される。**27** は、右上がりの斜線に横線などを加えた叩き文様で、6C 類とされる。**28・29** は、●や×の文様区画が入る 6G 類である。**30・31** は、複線の斜格子叩きである。**30** は、3Bb 類で、「弓」字状の叩き文様が加わる。**31** は、3Ba1 類である。**32 ～ 34** は、丸瓦である。**32・33** は単線の斜格子叩きで、**32** には「介」字が、**33** には「今行」の左字に似た叩きが入るが、細部は異なり、文字としての判読は不可能である。**32** は 3Aa1-2 類、**33** は 3Aa2-2 類である。**34** は、不等間隔の斜線となるもので、「Y」字様の文様が加わる。6D 類である。

19 ～ 21 の縄目叩きの瓦は、長側縁をヘラで削って面取りしているが、他の格子目叩きの瓦は、凹面側からヘラで厚みの半ば付近まで切れ込みを入れ、折り取っており、その後の面取りは行わないなど、成形に明らかな差異が認められる。

SK14273 は、出土した土師器の形態的特徴などから、鴻臚館第Ⅳ期の 10 世紀前半に属する瓦廃棄遺構と考えられる。

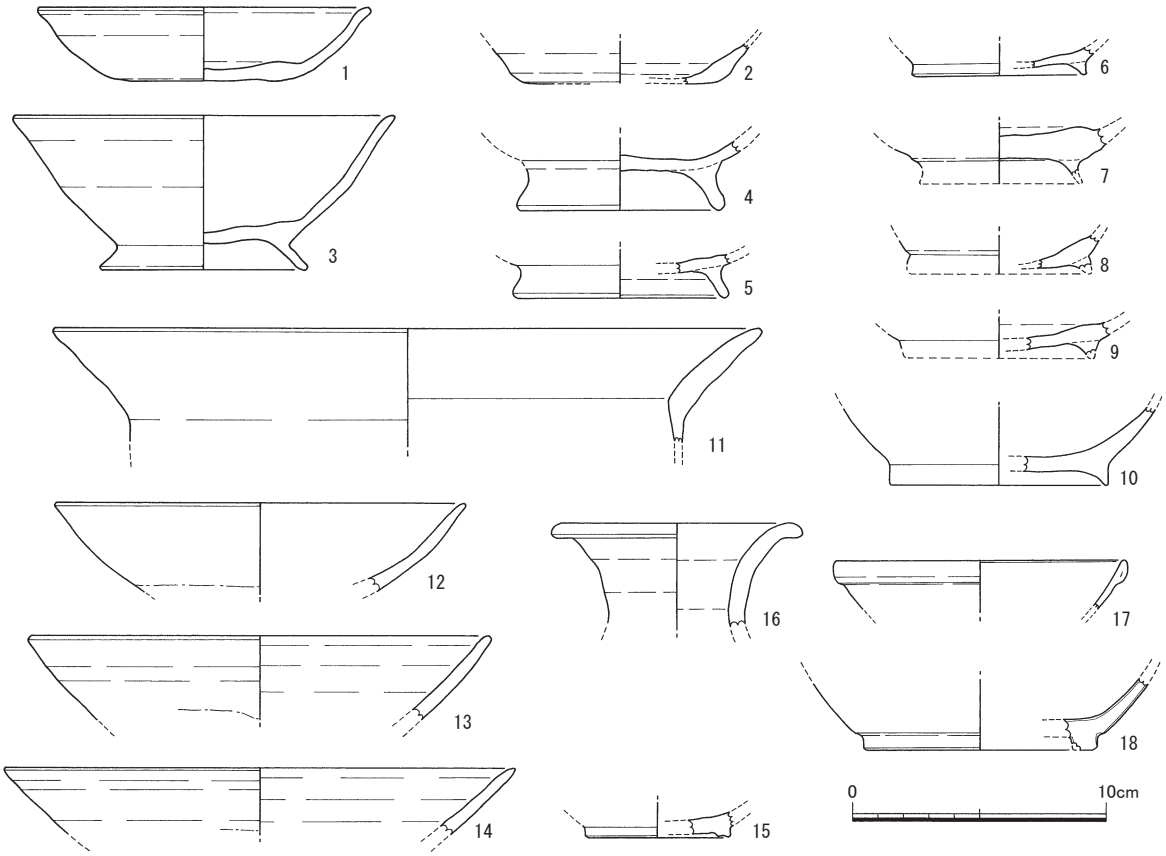


Fig.42　SK14273 出土遺物実測図 1（1/3）

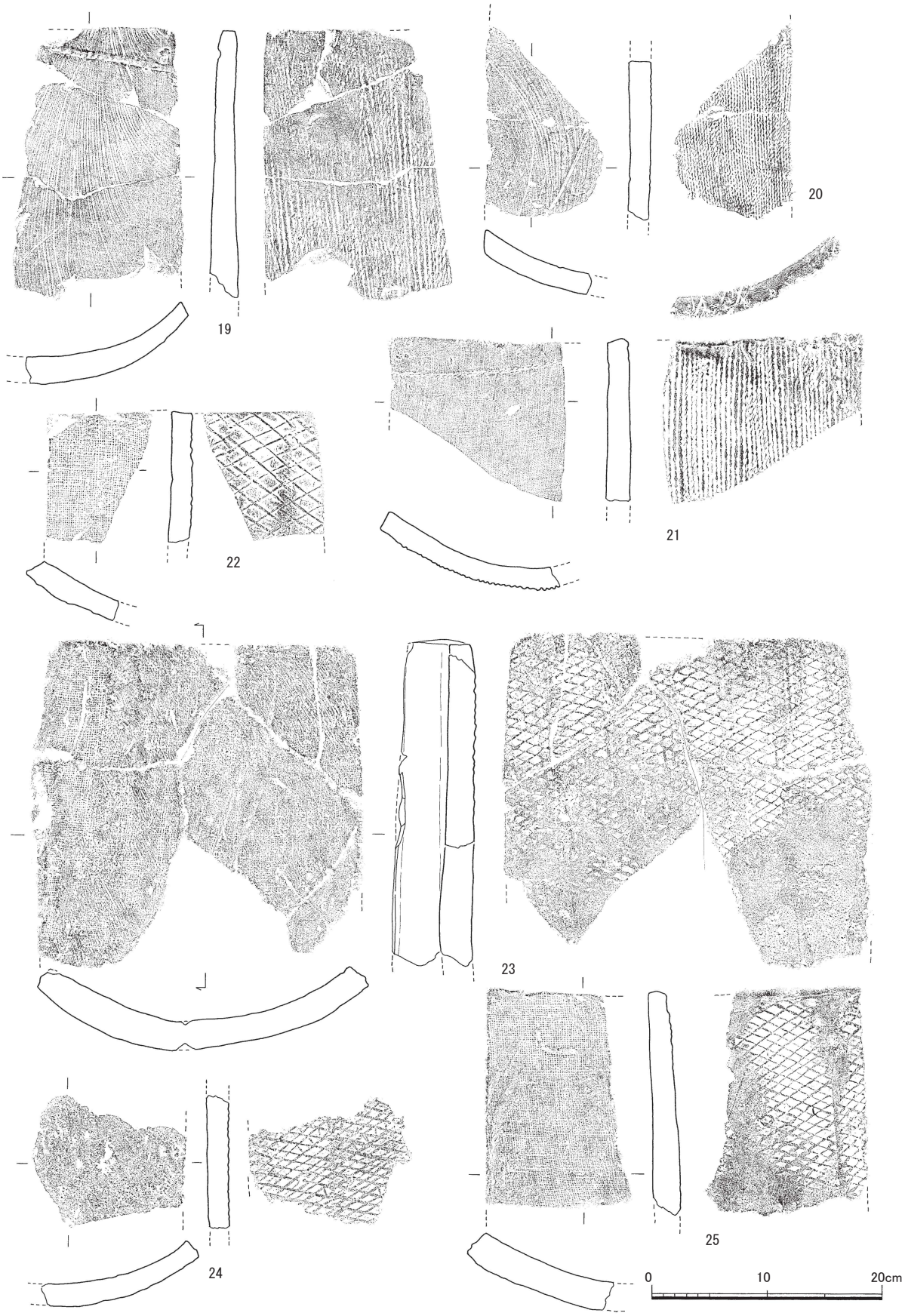


Fig.43　SK14273 出土遺物実測図２（1/5）

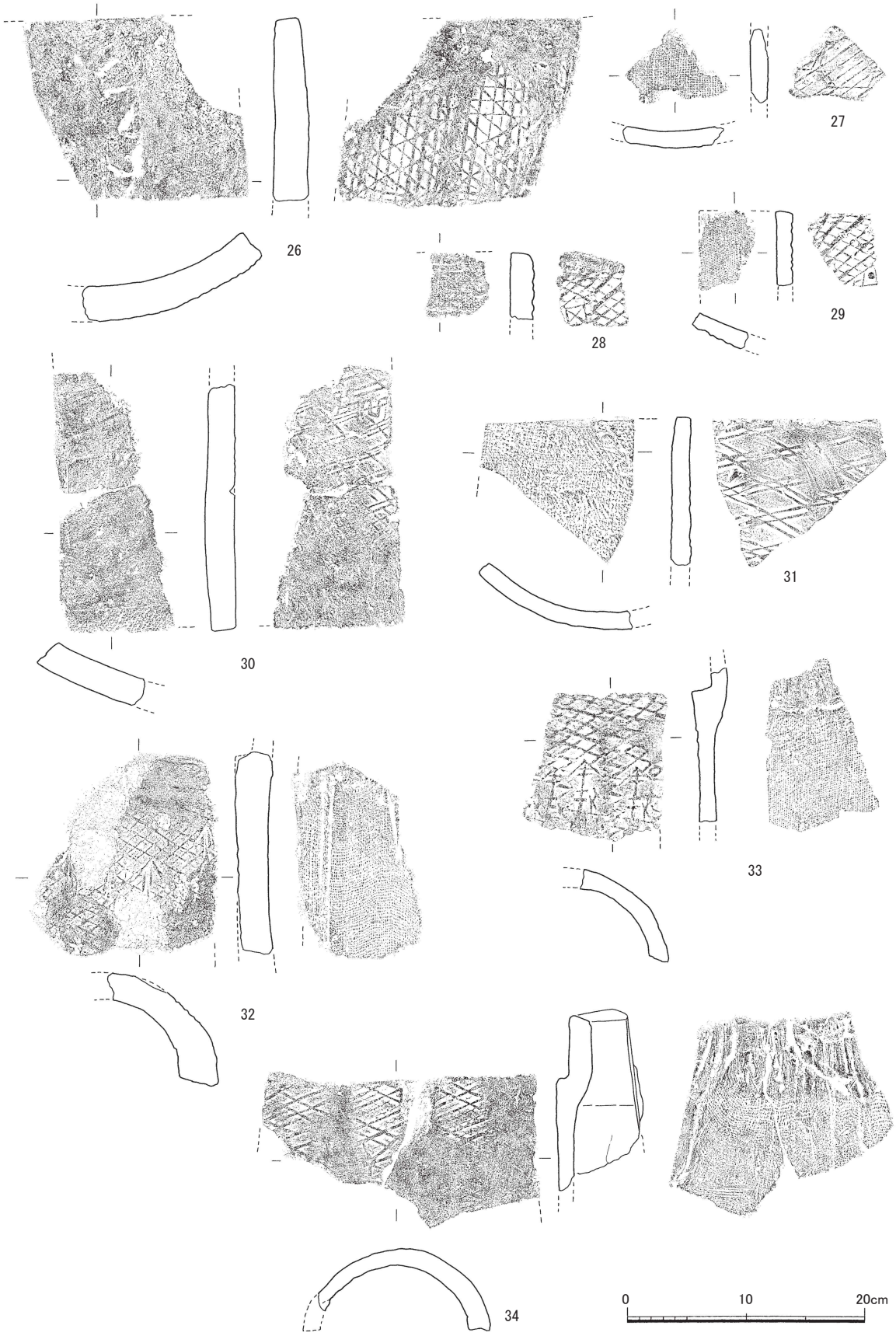


Fig.44　SK14273 出土遺物実測図３（1/5）

SK14274・SK14308

長軸 330㎝、短軸 180㎝の小判形を呈する土坑で、深さは約 40㎝をはかる。

遺構検出段階には、長軸 380㎝の小判型として認定した（SK14274）。ところが、全体的に掘り下げを開始したところ、床面が二段掘り状を呈することが判明した。また、遺構検出面では、特に遺物は露出していなかったが、東側の一部を残して一面に炭の層が広がり、多量の土師器が散らばって出土した（Ph.3）。そのため、この部分を SK14308 とし、全面的な掘削は避け、表面に散らばった土師器を取り上げた上で、長軸方向に半割、さらに短軸方向にベルトを残して、部分的な掘り下げを行うに留めた。

なお、遺物の分布状況から判断して、SK14308 は、SK14274 を切る土坑である。

SK14308 においては、土層観察からは、土坑床面から壁面にかけて、おおむね三層にわたって粘土を敷き、その上に炭の層が乗り、土師器が集中出土する状態が看取できた。そのため、調査時には、土師器焼成遺構の可能性を念頭に置いて精査したが、床面に張られた粘土に被熱した形跡はなく、土師器の出土状況を見ると、床面に並べ置いた状況は認めにくく、また完形で出土した土師器は少ないなど、焼成状況を示す要素は認められなかった。

また、床面に粘土を貼ることによる遺構の性格付けは不明である。

Fig.46 に示したのは、SK14274 として取り上げた出土遺物である。SK14274 調査段階では、SK14308 を一緒に掘り下げているため、図示した遺物の大部分は、SK14308 に由来するものと思われる。

1 ～ 42 は、土師器である。**1 ～ 21** は坏で、底部は回転ヘラ切りする。体部から口縁部は、外反して開くものと、まっすぐに直行して開くものとがある。底部は、平坦で体部との境界に明瞭な角をなすものと、凸底気味で丸みを持って体部に移行するものとがある。**22 ～ 36** は、碗である。底部

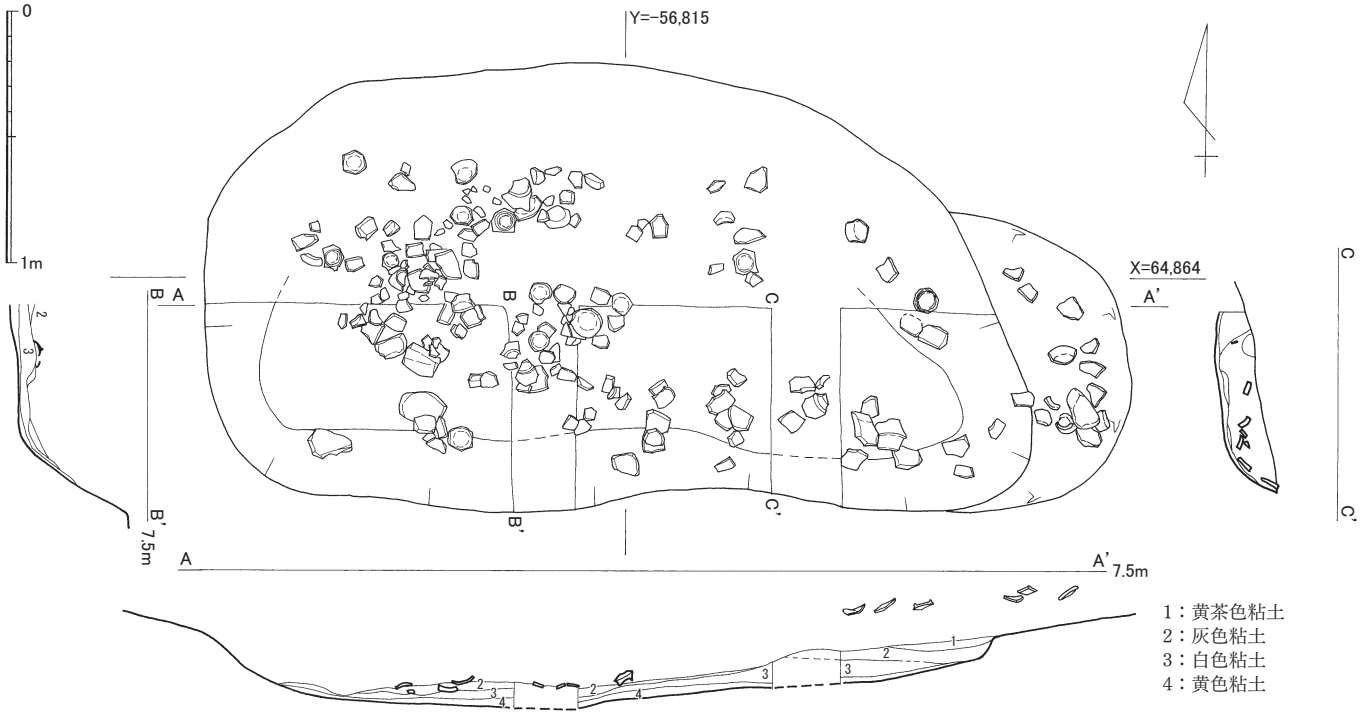


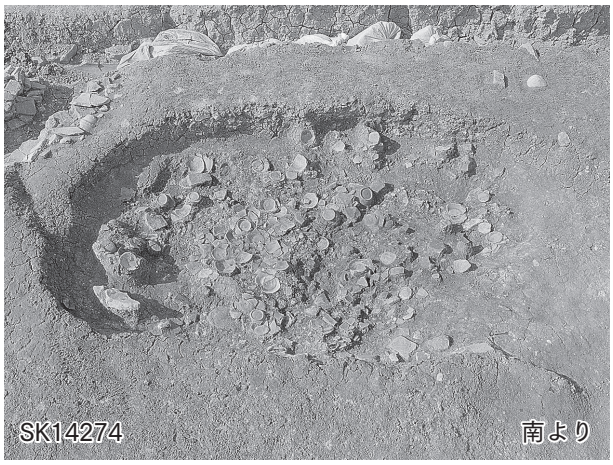
Fig.45　土坑 SK14274 実測図（1/30）

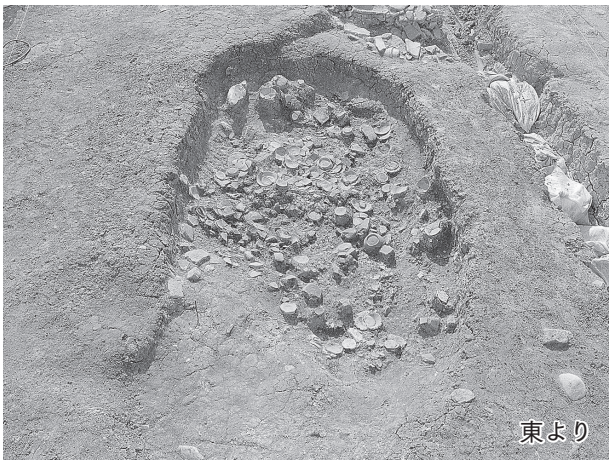
から体部に移行する境部分、もしくはそのやや内側に高台を貼り付ける。**37 ～ 39** は、黒色土器である。**37・38** は、内外面ともに黒色処理をした黒色土器 B 類、**39** は内面にのみ黒色処理をした A 類である。いずれも器面調整は横撫でであり、ヘラ磨きは認められない。**40** は、鉢の底部であろう。丸みが強い体部の底近くに、大きく「ハ」字形に開いた高台を貼り付ける。内面は灰黒色を呈し、黒色土器 A 類の可能性がある。**41** は、鉢の口縁であると思われる。破面観察から、内外面は異なる粘土板を貼り合わせたもので、内面の粘土の上端を折り返して外面の粘土を包み込み、玉縁状の口縁を作っている。**42** は、褶曲した粘土板である。肌理はきわめて細かく、砂粒はまったく含まない。白味の強い灰白色を呈する。土師器の生地と考えられる。

43 は、越州窯系青磁碗である。外底部は露胎であり、粗製品に分類される。**44** は、無釉陶器の甕底部である。内外面ともに、横撫で調整される。

Fig.47・48 に示したのは、SK14308 出土遺物である。**45 ～ 107** は、土師器である。**45 ～ 75** は坏である。底部がやや下がって凸底状を呈するもの、ほぼ平坦なものなど若干の差異はあるが、おおむね、平底から外反しつつ大きく開く体部を持つ。**62・75・76** においては、底部の回転ヘラ切り痕が明瞭に残っていた。また、**64** の内面には、煤が薄く付着しており、灯明皿として使用された可能性が考えられる。**77 ～ 81・83 ～ 108** は、碗である。全形を知りうる **77 ～ 81・83・84** をみると、若干小ぶりで体部下半の丸みが強い **77** と、丸みを持つ腰部から外反気味に大きく開く体部を作る **78 ～ 81・83・84** の二タイプに分けることができる。**82** は、黒色土器 B 類の碗である。

109 は、越州窯系青磁碗である。幅の狭い玉璧状高台に作る。体部下位は施釉されず、露胎である。





Ph.3　SK14274・14308

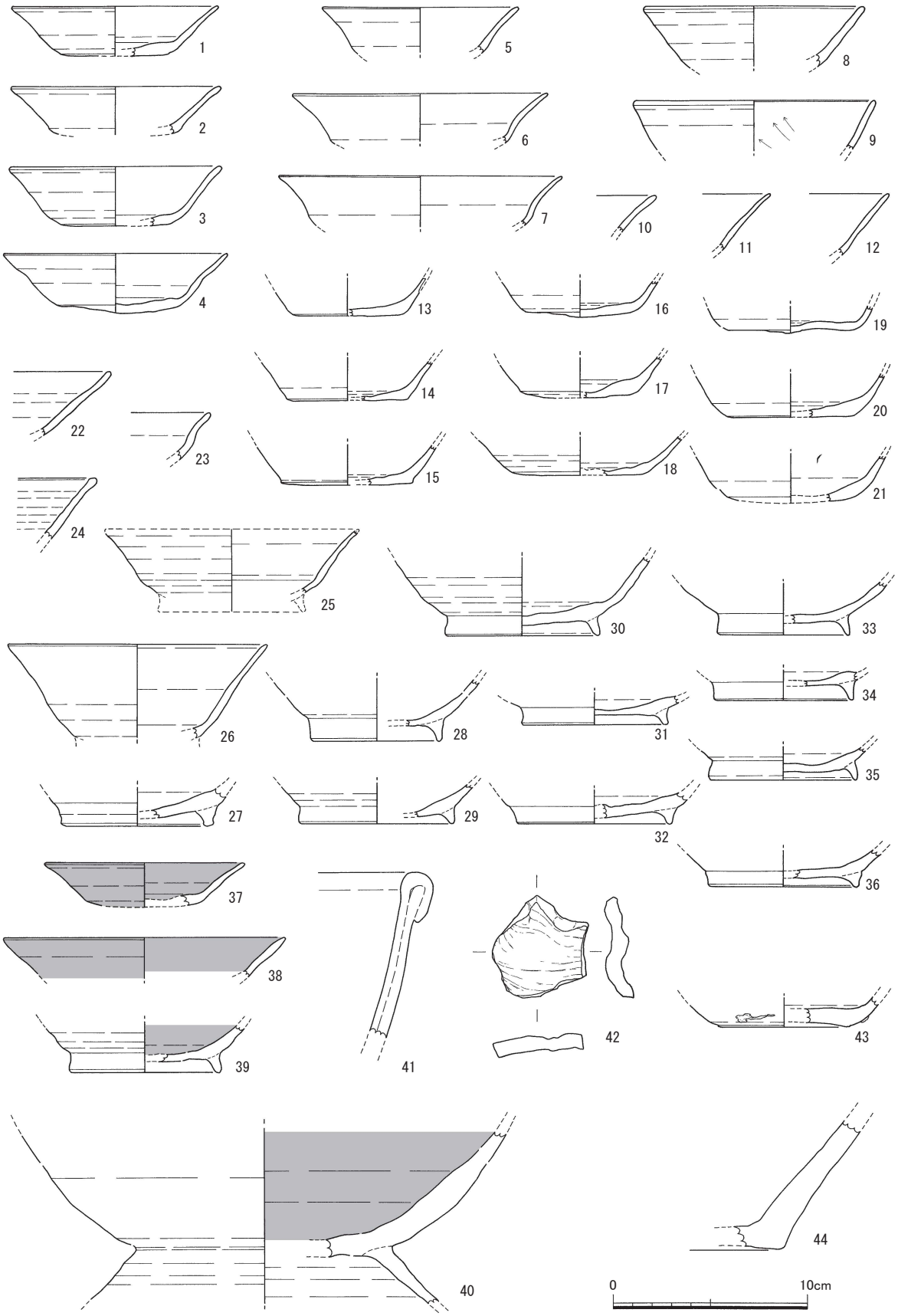


Fig.46　SK14274 出土遺物実測図（1/3）

見込みには、目跡が残る。粗製品に属する。

110・111 は、石玉である。砂岩製。敲打および削りで球形に整える。被熱したようで、表面が赤化している。

このほか、陶磁器・瓦は若干出土しているが、出土遺物のほとんどは、土師器である。9 世紀後半に属すると考えられる。

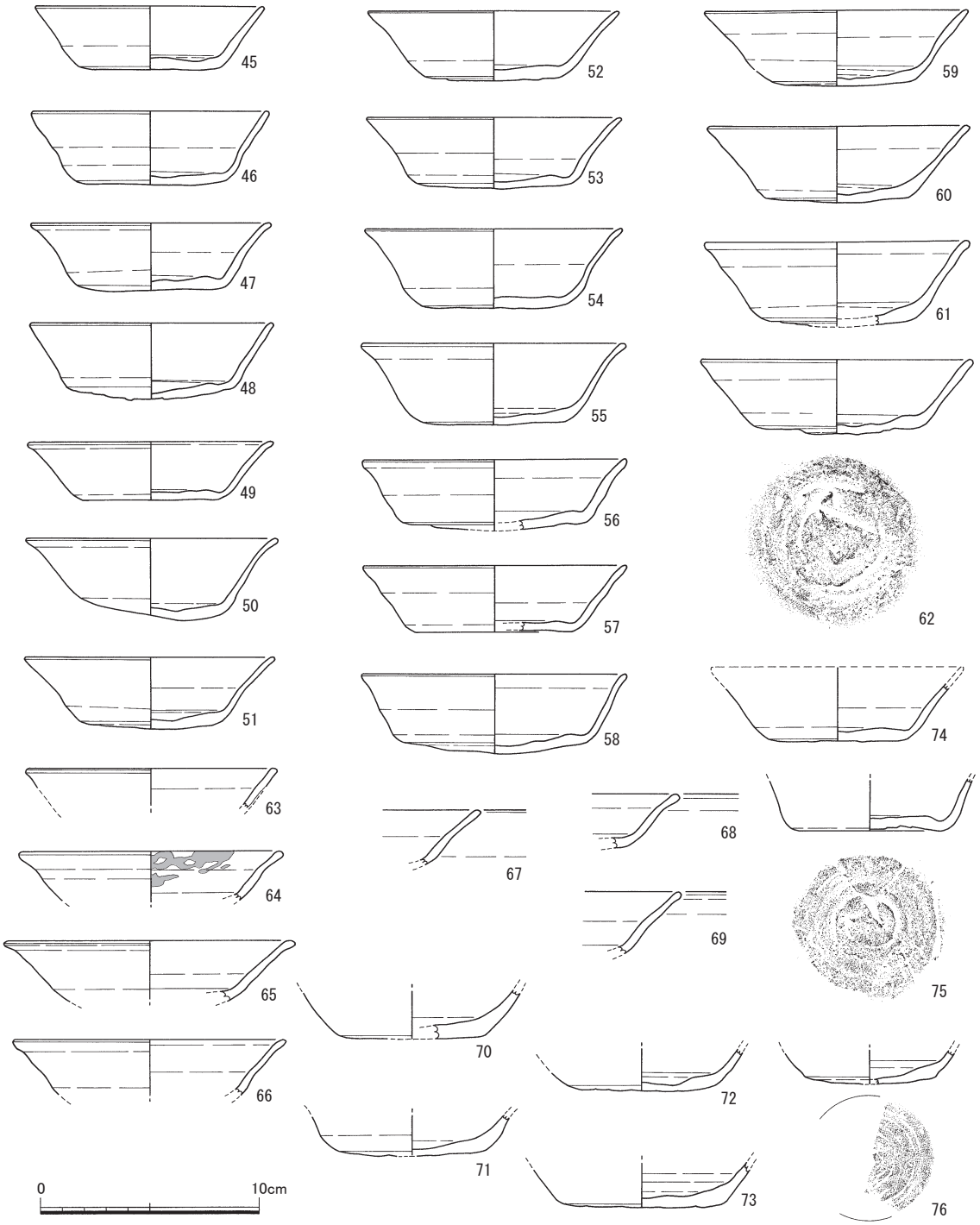


Fig.47　SK14308 出土遺物実測図 1（1/3）

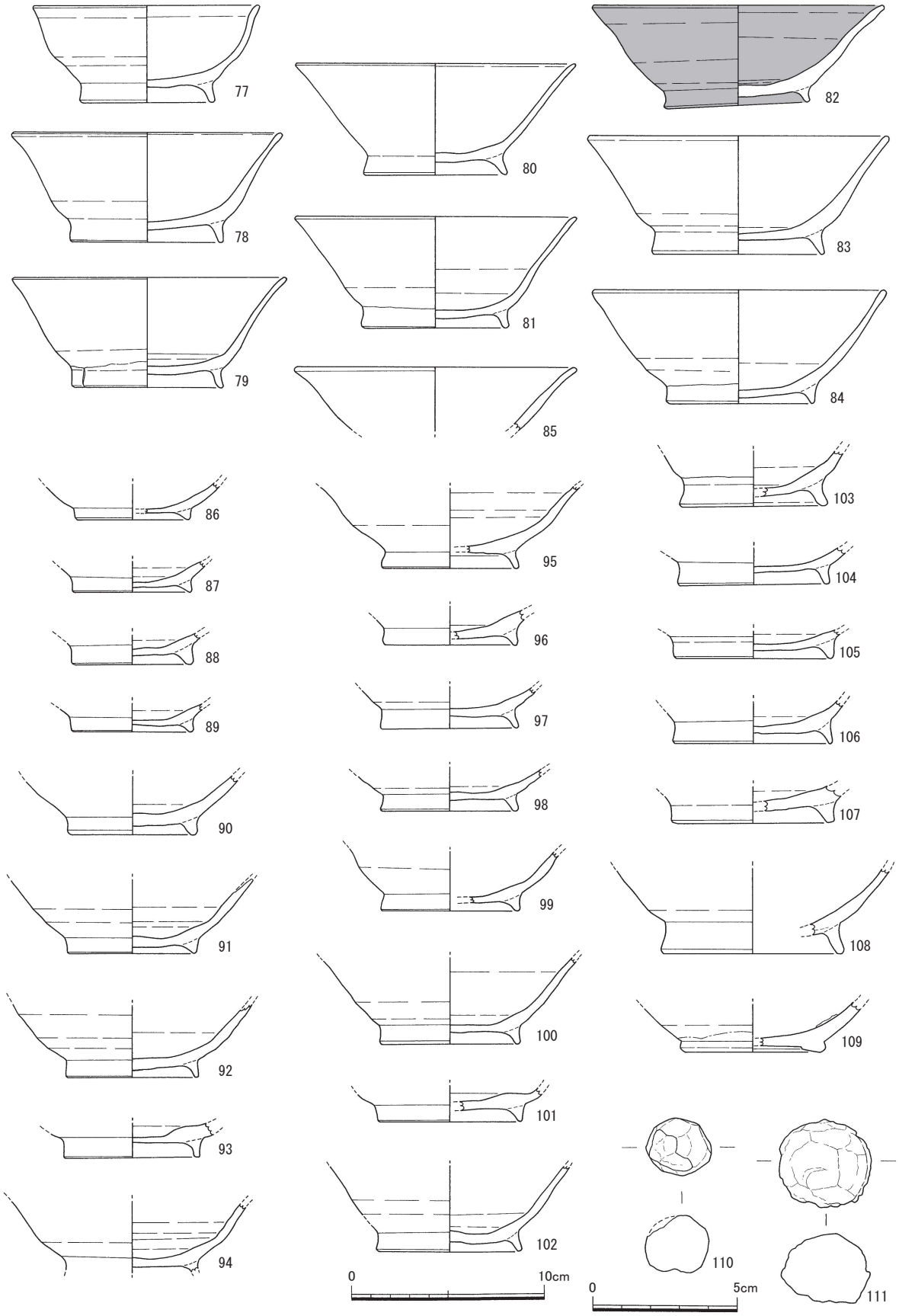


Fig.48　SK14308 出土遺物実測図２（1/3、110・111-1/2）

SK14277

第Ⅰ期の掘立柱列 SA14603 の柱穴 SP14488 を切る土坑である。土坑の中央を東西に平和台球場の暗渠が貫いている。

土坑は、おおむね三角形を呈し、東西最大長約 240㎝、南北長 220㎝をはかる。深さは、20㎝前後をはかる。

遺物は、土坑の西辺から南辺にかけて出土し、上層ではほぼ全体に土師器・瓦・陶磁器などが、下層では土坑の北寄りに固まって須恵器・土師器などが出土した。

Fig.49　土坑 SK14277 実測図（1/30）

出土遺物の一部を Fig.50 ～ 52 に示す。**1 ～ 35** は、土師器である。**1 ～ 18** は、坏である。底部は、凸状に丸みを帯びるものと、平坦なものとがある。体部は、外反して開くものと直行するものがあるが、前者が多数を占める。底部は回転ヘラ切りで、**16** には明瞭に痕跡が残っている。**19 ～ 31** は、碗である。**19・20** は低くて小振りな高台が、径広く貼り付けられたもので、碗というよりはむしろ高台付坏の形態である。**21 ～ 24** は、厚手の断面三角形を呈する高台が、狭い径でつくもの、**25 ～ 28** は、小振りな断面三角形の高台が、やはり狭い径で付けられたものである。**29 ～ 31** は、薄くて高い高台がやや裾広がりに直立するもので、高台径は比較的広い。**32** は、碗もしくは鉢か。口径は、19.8㎝と、大きい。内外面ともに横撫で調整だが、体部外面下端付近では、横方向のヘラ削りが認められる。**33 ～ 35** は、黒色土器 A 類の碗である。形態的には、土師器碗と共通する。

36 は、緑釉陶器碗である。削り出しの輪高台である。土師質。京都洛西産であろう。

37 ～ 39 は、越州窯系青磁碗である。胎土はきめ細かく密であるが、外底部は露胎であり、粗製品に分類される。いずれも火熱を受け、釉は荒れて剥離気味である。**38・39** には見込みに目跡が残るが、**37** には目跡は見られない。**40** は、無釉陶器である。甕の口縁か。わずかに内傾しつつ直立する口縁で、口唇部は直裁する。横なで調整の後、口縁内面に、幅広く横位のヘラ削りを行う。粗砂を多く含む胎土で、淡灰褐色を呈する。**41 ～ 43** は、白磁碗である。**42・43** は、若干釉が荒れており、二次的に火にあたったものと推測できる。

44 ～ 47 は、須恵器である。**44・45** は、甕の口縁である。**44** の頚部には、横方向の平行叩き目が残り、櫛描き波状文を加える。**45** は、横なで調整、体部内面は同心円叩きをなで消している。**46・47** は、壺の底部であろう。**46** は、外面を回転ヘラ削り、内面は静止横なで調整する。**47** の内外面は、回転横なで調整する。

48 は、玄武岩製の砥石である。砥面は、使用で磨り減り、大きく湾曲している。

49 ～ 55 は、平瓦である。**55** は平行叩き、**54** は斜格子に縦線を加えた叩き文様が見られる。

これらの出土遺物から、第Ⅳ期の 9 世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

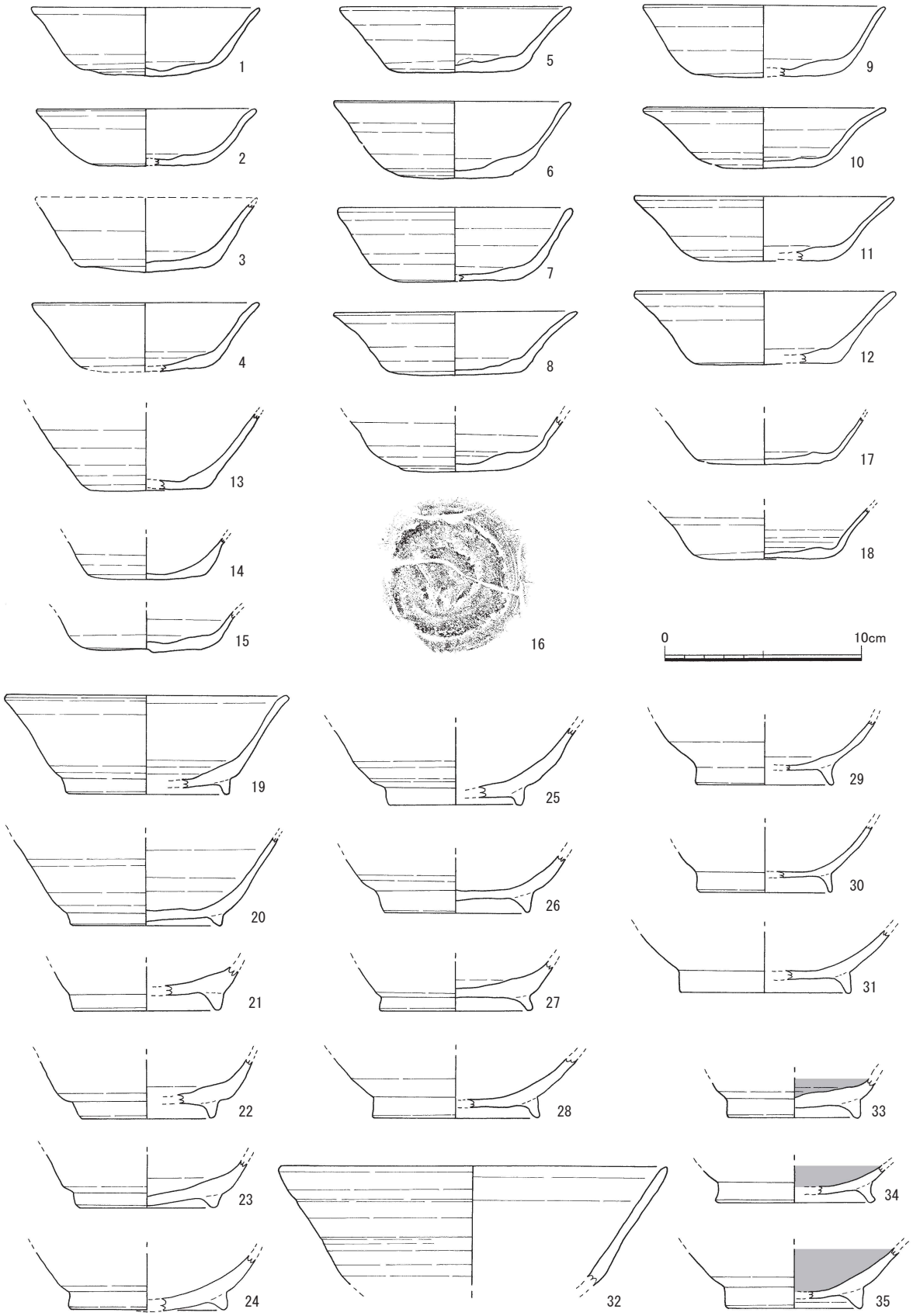


Fig.50　SK14277 出土遺物実測図１（1/3）

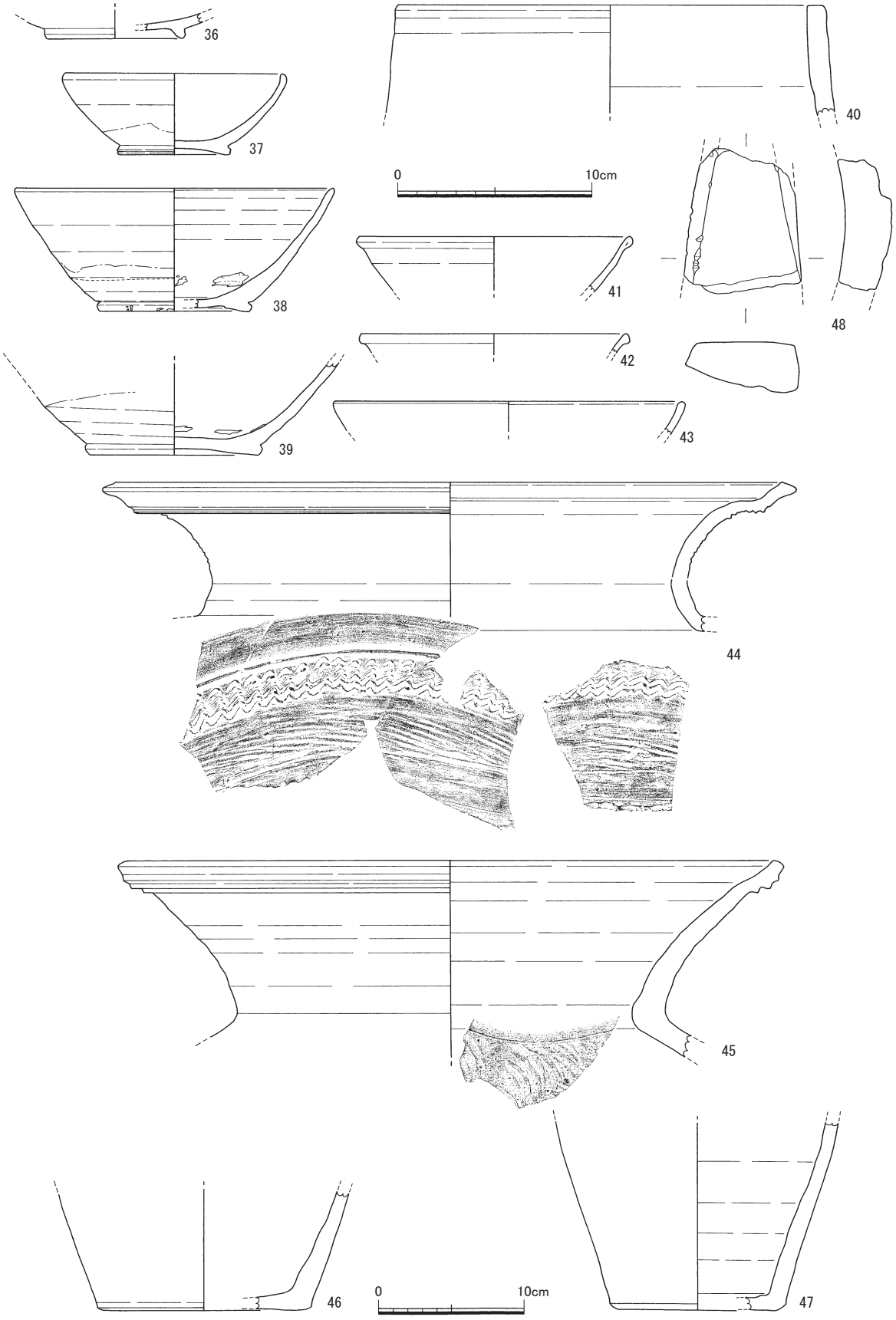


Fig.51　SK14277 出土遺物実測図２（1/3、44 ～ 47-1/4）

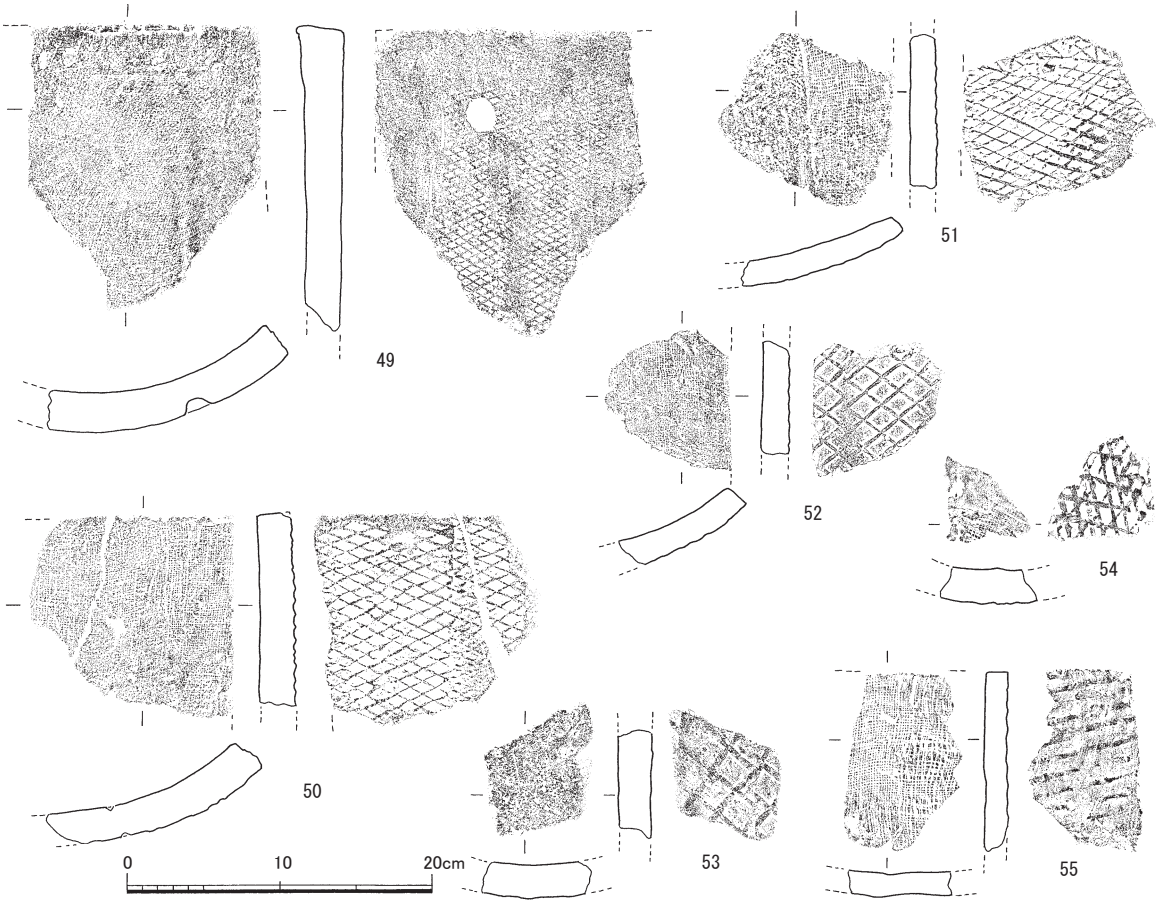


Fig.52　SK14277 出土遺物実測図３（1/5）

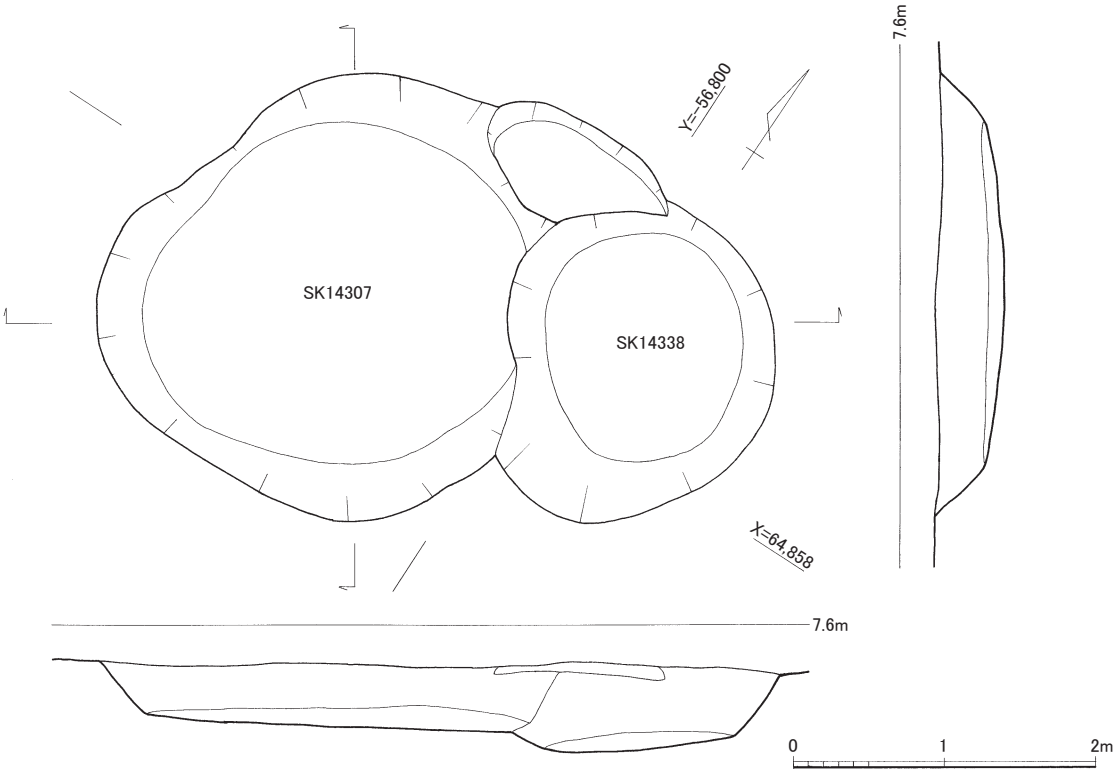


Fig.53　土坑 SK14307 実測図（1/50）

SK14307

長径推定 330㎝、短径 290㎝の楕円形を呈する土坑で、深さは 50㎝をはかる。第Ⅱ期 布掘り掘立柱列である SA14526 の上位に当り、これに後出する。SK14338 に切られるが、SK14338 の時期は、遺物が少なく、明らかではない。

出土遺物の内、土師器・陶磁器を Fig.54 に示す。**1 ～ 4** は、土師器である。**1** は坏で、底部をヘラ切りする。**2 ～ 4** は、碗である。

5 ～ 12 は越州窯系青磁で、**5 ～ 7** は碗、**8・9** は瓶、**10 ～ 12** は蓋である。**5** は、内湾した口縁

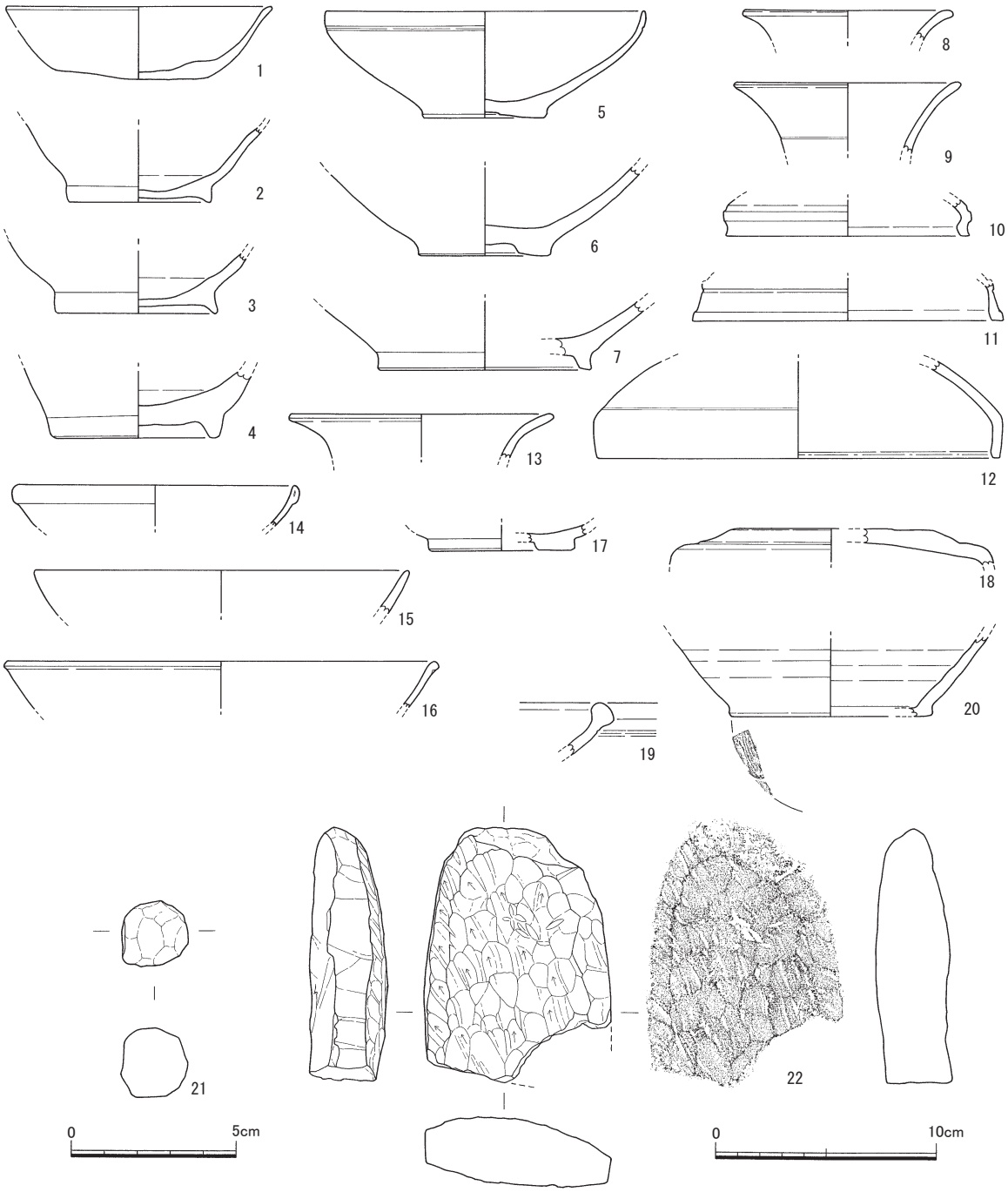


Fig.54　SK14307 出土遺物実測図（1/3、21-1/2）

の碗で、高台は玉璧高台に作る。全面施釉で、高台畳付きには、砂目が残る。**10・11** は、香炉の可能性がある。**12** は、大型の合子の蓋であろう。すべて全面施釉である。**13** は、褐釉陶器の瓶である。**14 ～ 17** は、白磁の碗である。**17** の高台は、玉璧高台につくる。

18 ～ 20 は須恵器である。**18** は蓋であるが、内面がつるつるに磨れており、硯に転用された可能性が考えられる。墨は付着していないが、転用硯であろう。**19・20** は、京都篠窯の鉢である。**20** の底部には、糸切り痕が残る。

21・22 は、石製品である。**21** は、石玉で砂岩製。被熱して、暗褐色を呈する。**22** は、石錘であろう。滑石製。全面を粗く削って、成形している。図の右下が弧を描いて欠損しており、本来は釣り鐘型の平面形状であったと推測できる。

このほか、瓦が出土している。

これらの出土遺物から、9 世紀後半を前後する時期の土坑と考えられる。

SK14310

直径 120㎝程度の、略円形を呈する土坑である。第Ⅰ期掘立柱列 SA14603 を構成する柱穴である SP14501 の上位にあたり、これに後出する。

検出時の状況で保存・埋め戻しすることとしたため、表面に露出した遺物についてのみ、取り上げをおこなった。

出土遺物の一部を Fig.56 に示す。**1・2** は、越州窯系青磁である。**1** は鉢である。削り出しの輪高台で、全面施釉した後、畳付きの釉を掻き取る。見込みと畳付きに、重ね焼きの目跡が並ぶ。**2** は、碗の口縁である。釉は風化して、剥落している。**3** は、白磁碗である。玉璧高台に作る。全面施釉で、畳付きの釉を掻き取り、露胎とする。**4** は、陶器碗である。二次的に被熱し、釉はほとんど剥落しているが、白化粧が認められる。胎土は淡赤褐色を呈し、長沙窯の可能性が考えられる。**5** は、陶器の壺である。二次的に被熱し、釉は剥落する。頸部内面から外面は、釉下に白化粧している。

このほか、瓦片が多数出土している。

9 世紀の土坑であろう。

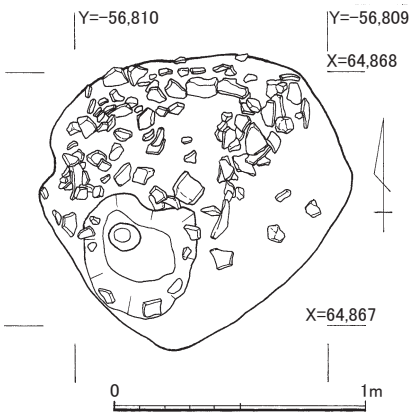


Fig.55　土坑 SK14310 実測図（1/30）

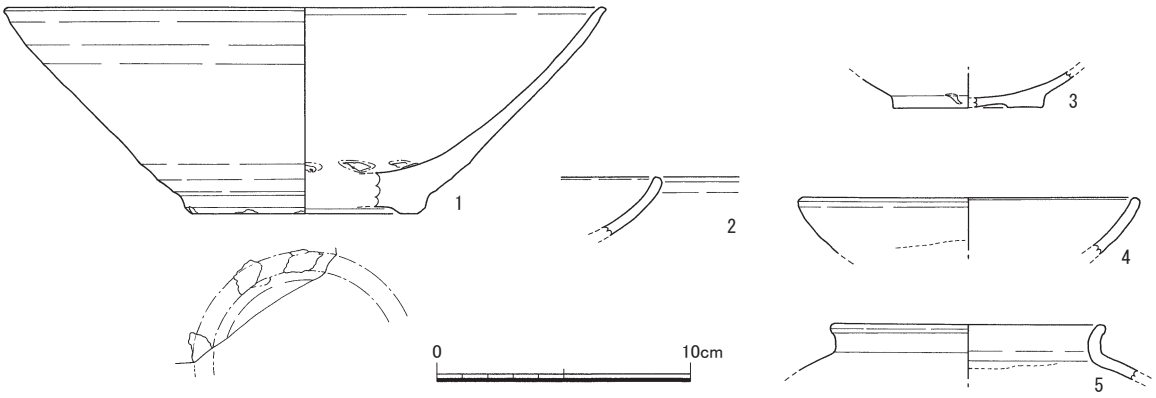


Fig.56　SK14310 出土遺物実測図（1/3）

SK14339

02 － 3 トレンチ北端で確認した土坑である。第Ⅰ期石垣 SX14527 の上部を破壊して掘り込まれた土坑で、トレンチ土層壁を残すため、西半分のみを調査している。検出面上で確認した限りでは、直径 360㎝の円形を呈する。

埋土中に、扁平な玄武岩が、縦に落ち込んでいた。石材や寸法から、第Ⅲ期鴻臚館の礎石と思われる。すなわち、後述する年代観が正しければ、鴻臚館第Ⅳ期には、早くも前段階の礎石が廃され、動かされていたことがわかる。

出土遺物としては、土師器・輸入陶磁器・瓦などがみられるが、土師器・陶磁器は小片で量も少なく、図示に耐えない。

Fig.58・59 に、瓦を示す。**1 ～ 14** は平瓦である。**1** は、縄目叩きで、小口はヘラで面取りする。**2・3** は、単線の細かい斜格子で、**2** は 3Aa1-1、**3** は 3Aa2-1a に分類される。**4** は、単線で目の粗い格子に中に細く十字文が入る 4Bb 類である。**5 ～ 10** は単線の粗い斜格子に縦線が加わりさらに十字文を入れるもので、4A 類である。4A 類と 4Bb 類は、小口をヘラで削って面取りしている。**11** は、複線の方形斜格子で、3Ba2-1a 類。比較的薄手、精緻な作りである。小口は、内側から切り込み、折り取る。**12** は、端部付近の破片であるためか、叩き目が認められず、縦方向に強い板撫で痕が残る。**13** は、6G 類の叩き目を持つ。**14** は小片のため、分類しにくいが、6D 類か。**15 ～ 17** は、丸瓦である。**15・16** は単線の斜格子で、3Ac 類である。**17** は、縄目叩きで、小口はヘラ削りで面取りする。

このほか、鴻臚館Ⅰ式の軒平瓦当が出土している。

図示できなかったが、土師器などから、10 世紀代の土坑と推定される。

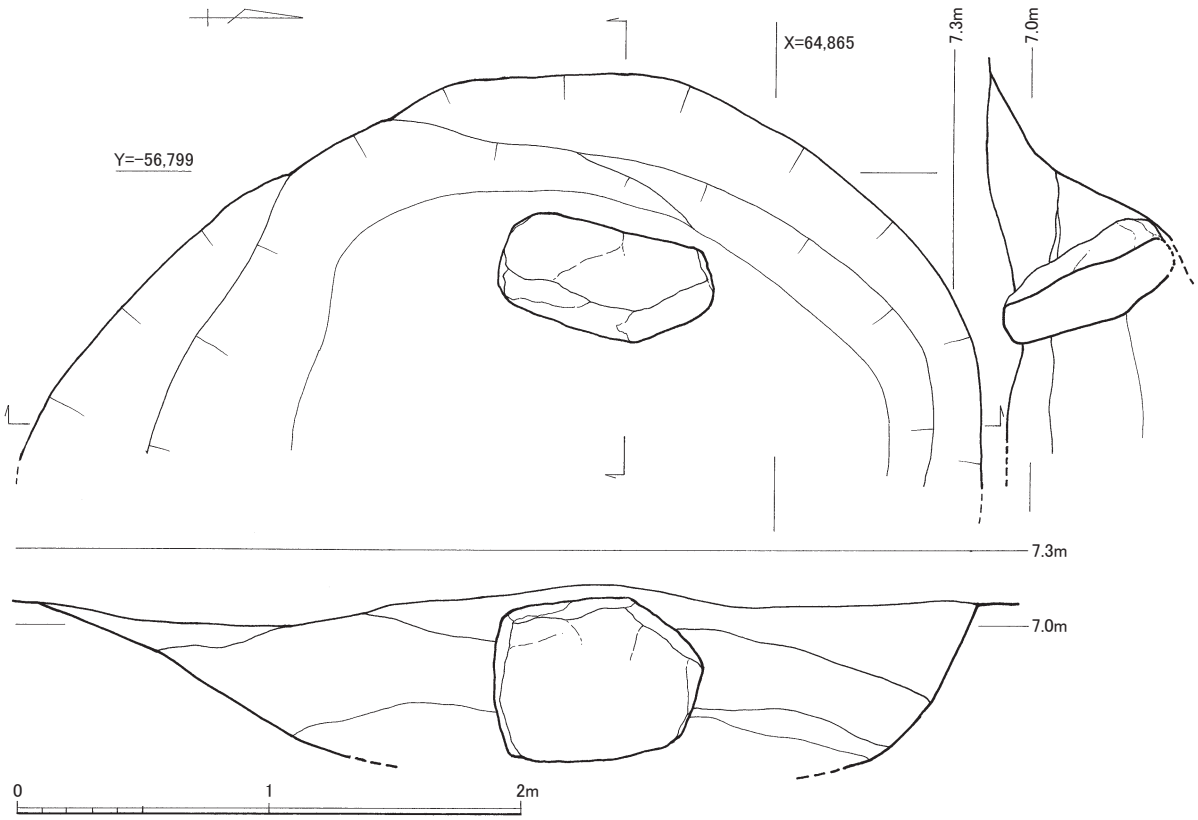


Fig.57　土坑 SK14339 実測図（1/30）

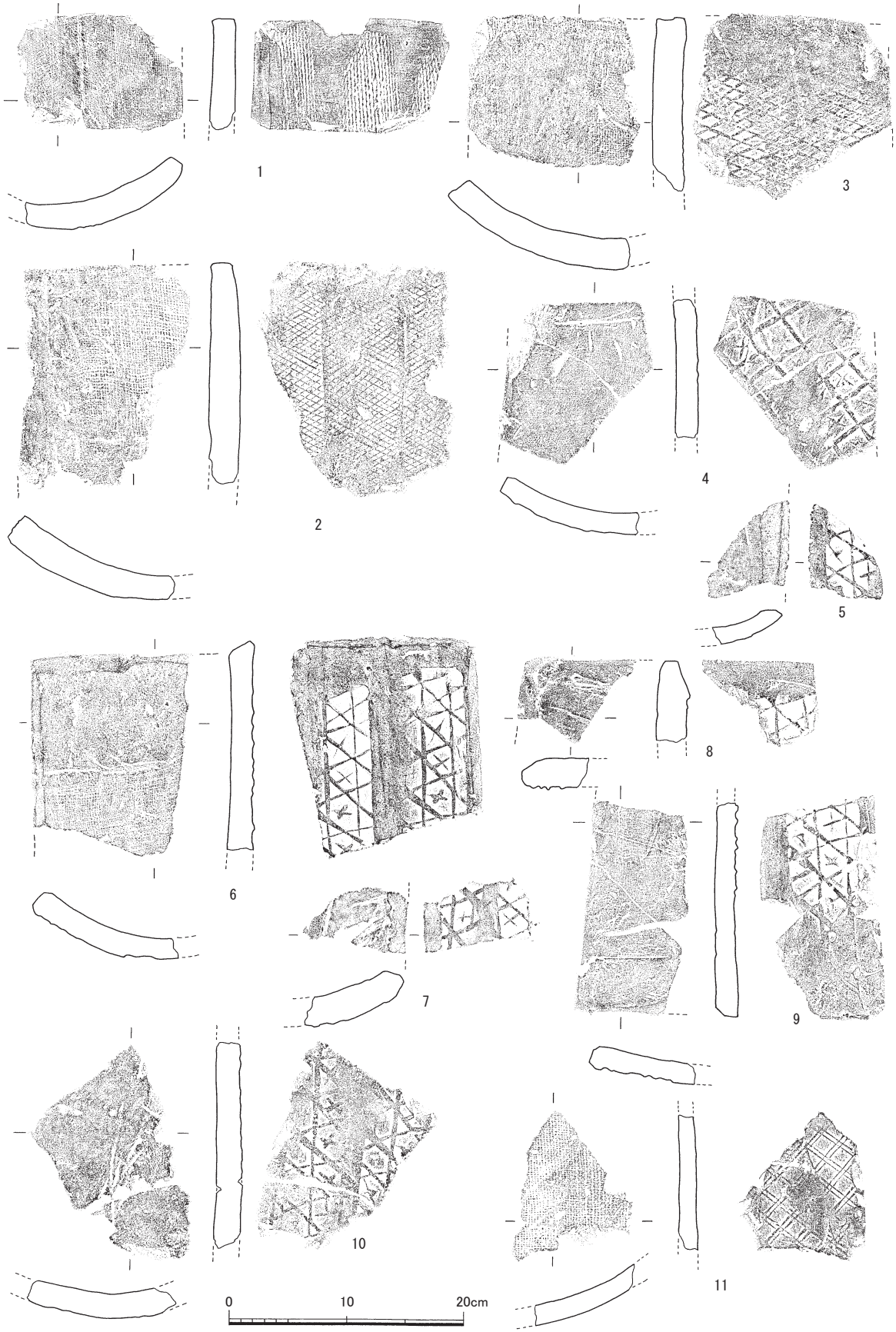


Fig.58　SK14339 出土遺物実測図１（1/5）

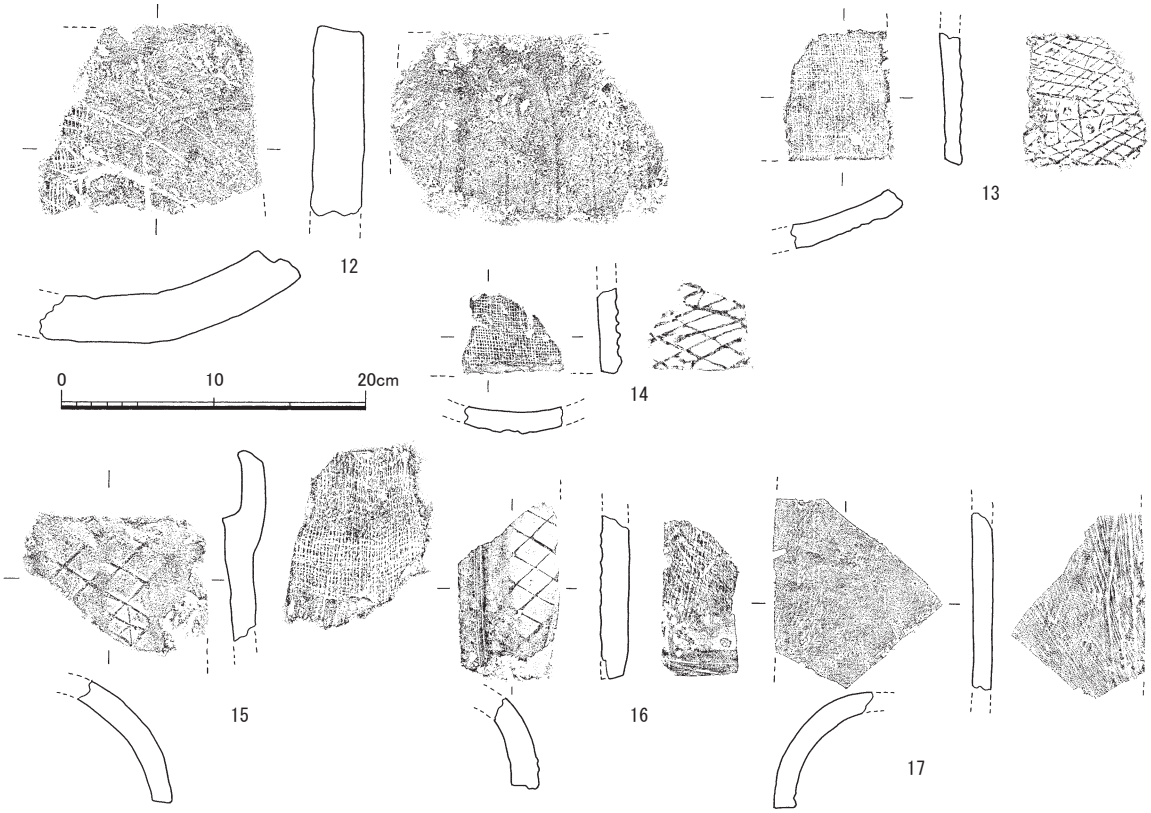
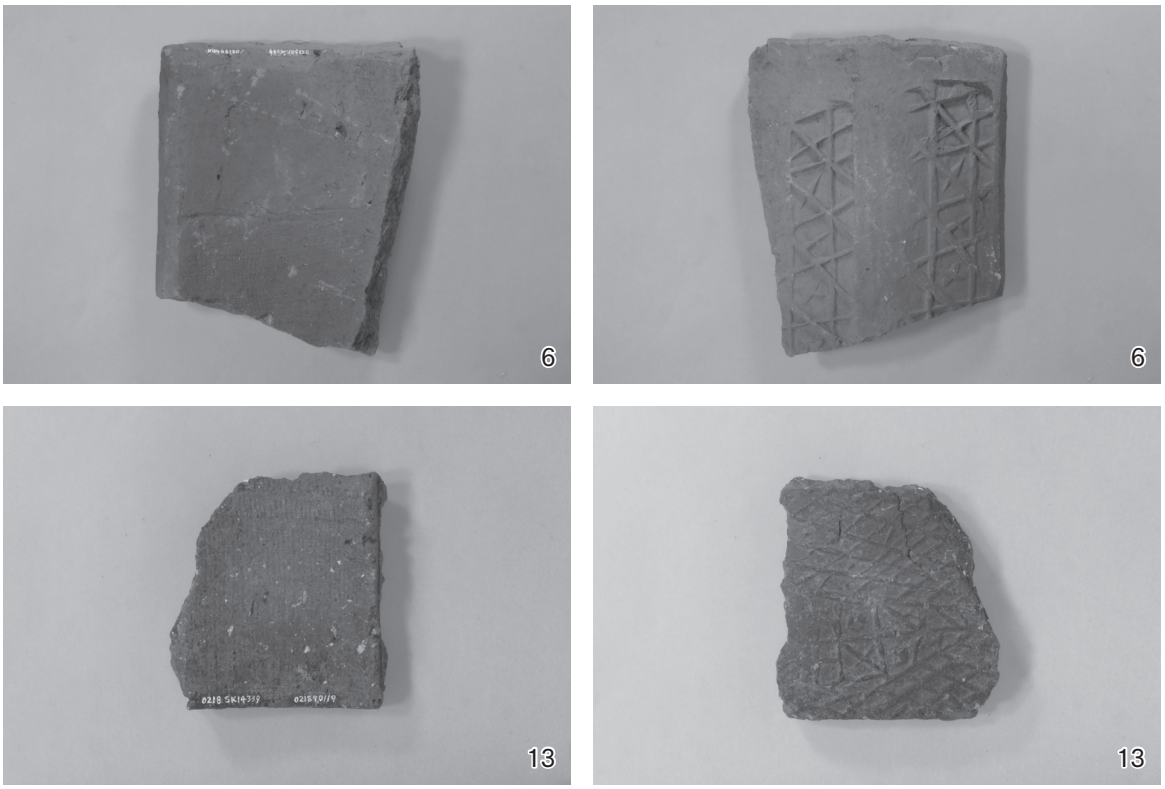


Fig.59　SK14339 出土遺物実測図２（1/5）



Ph.4　SK14339 出土遺物

SK14510

第 20 次調査においては、平成 13 年度に実施した第 19 次調査の第Ⅰ期石垣遺構 SX1245 を精査するため、当該部分に東西 12 m、南北 18.3 m の調査区を設け、石垣前面を大きく掘削した。

SK14510 は、掘り下げに先だって、掘削範囲にかかる遺構の完掘を行なった過程で調査した土坑である。

土坑は、長軸 178㎝、短軸 126㎝の卵形を呈し、検出面からの深さは 50㎝をはかる。土坑内には、ほぼ全面にわたって、ぎっしりと瓦が詰っていた。廃棄されていた瓦に、大ぶりな破片が多いのが特徴である。

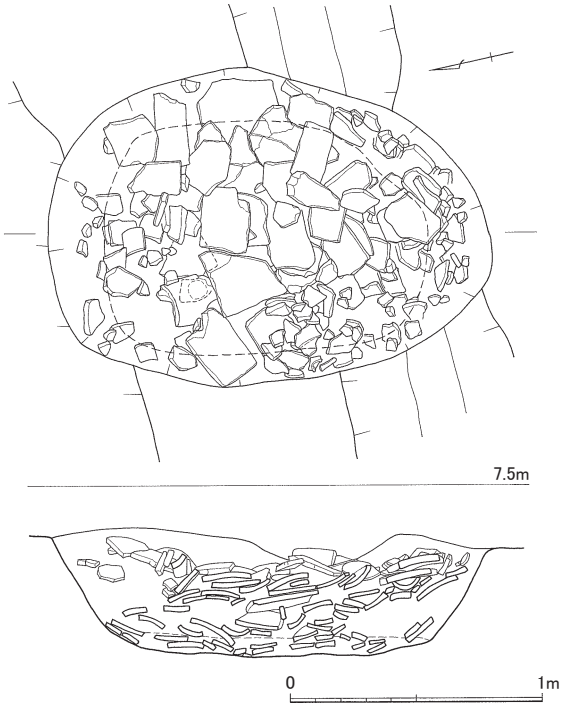


Fig.60　土坑 SK14510 実測図（1/30）

これらの瓦には、葺いた際の下端側に焼け焦げた痕跡を持つものがみられ、屋根の上に葺かれた状態で、被熱したことを示している。もとより、火災にあった建物一棟分の瓦としては、かなり少ない量である。おそらく、焼損した建物を再建するにあたって、破損して再利用できなかった瓦だけを一括廃棄した土坑であろう。

出土遺物としては、土師器・輸入陶磁器なども見られたが、小片のため、土師器で図示に耐えるものはない。輸入陶磁器を Fig.61 に、瓦を Fig.62 ～ 67 に示す。

1 ～ 3 は、越州窯系青磁である。**1・3** は碗、**2** は皿で、全面に施釉する精製品である。**3** は、あるいは鉢の可能性もある大ぶりな底部で、低平な角高台を持ち、高台の内側に重ね焼きの目跡がめぐる。**4** は、白磁碗である。高台は、幅広で平坦に作る。

5 は、赤間石の小破片である。小口の一面は遺存しており、平坦に研磨されている。石材・研磨の特徴から石硯の一部と考えられる。石硯は、漢代のパレット状の硯を別にすれば、晩唐から北宋にかけて次第に形制を整え、我が国に伝来したもので、鴻臚館においても中国産の石硯が出土している。一方、国産の石硯は、赤間石を用いて 12 世紀には生産が始まっていたと考えられている。本例が石硯の破片であるとすれば、これを 150 年ほど遡るものであり、日本国内での石硯生産を物語る最古の遺物となる。今後、類例の増加を待って評価することとしたい。

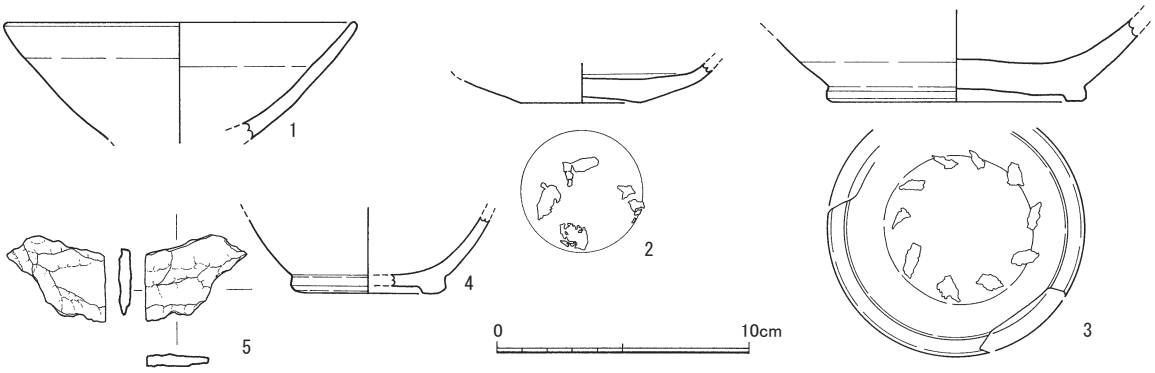


Fig.61　SK14510 出土遺物実測図 1（1/3）

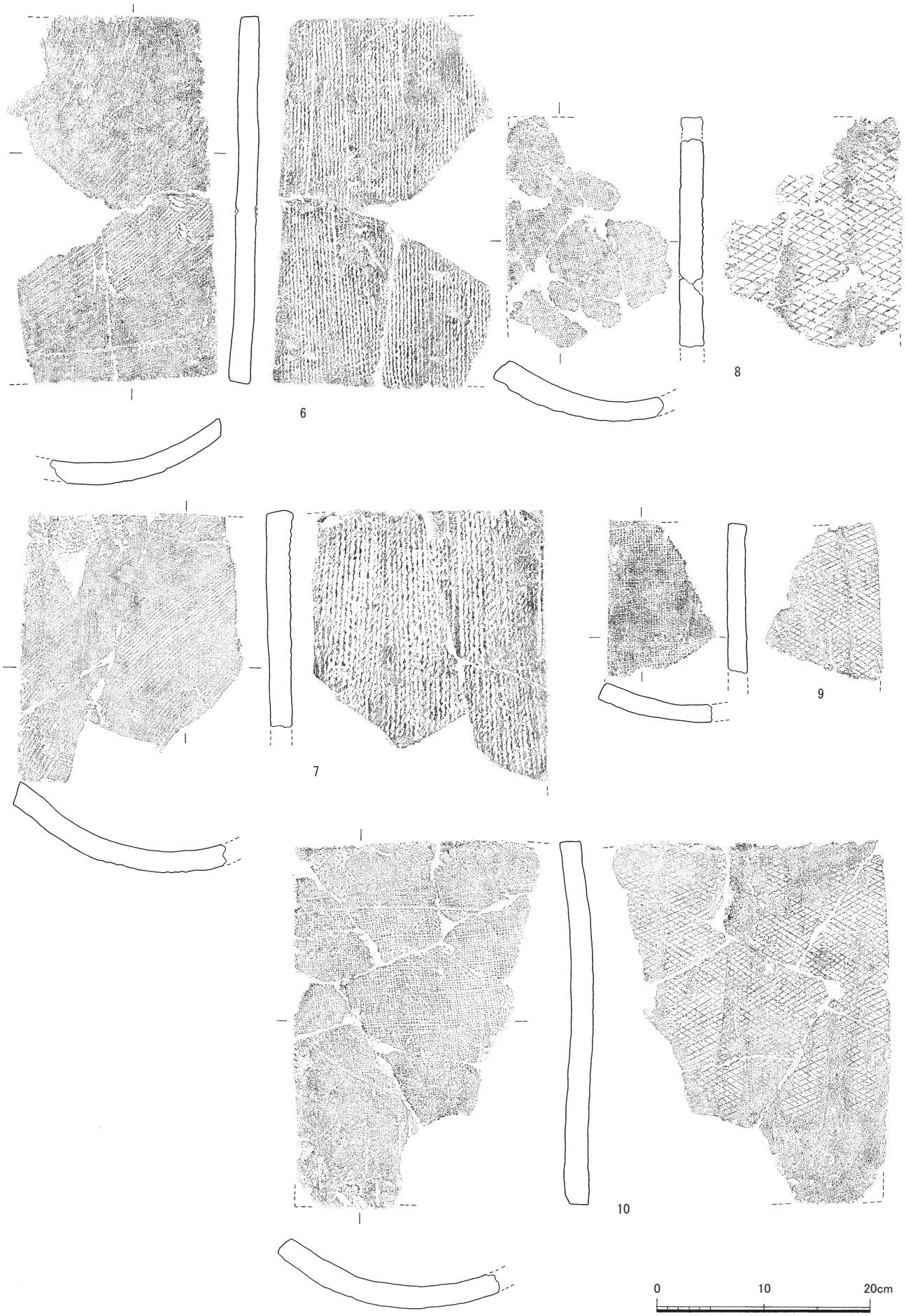


Fig.62　SK14510 出土遺物実測図２（1/5）

Fig.63　SK14510 出土遺物実測図３（1/5）

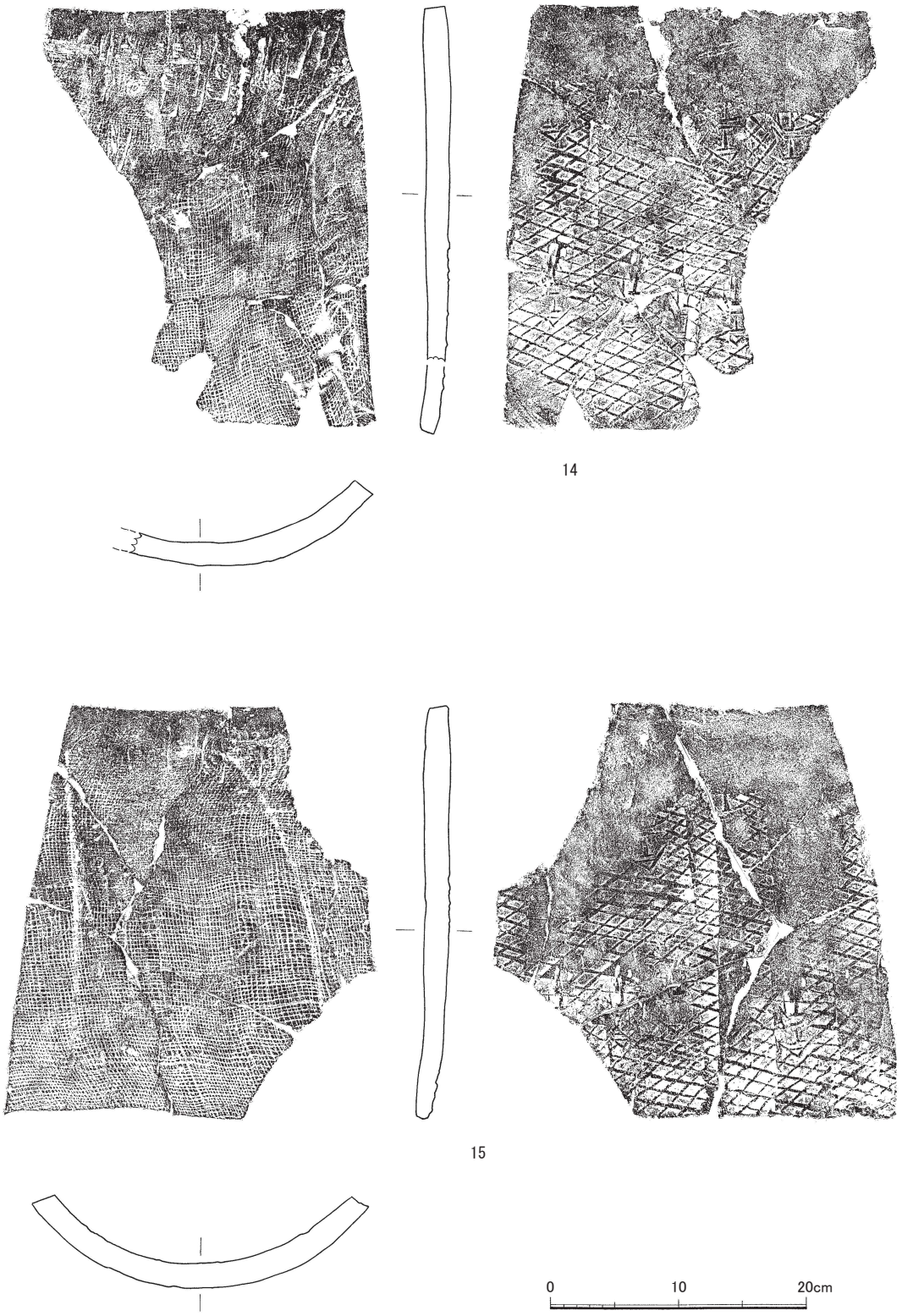


Fig.64　SK14510 出土遺物実測図４（1/5）

6～18 は、平瓦である。**6・7** は、縄目叩きを施す。内面には、布目の下に粘土板から切り離した際のコビキ痕跡が明瞭に残り、一枚作りであることを物語っている。長側小口は、ヘラ切りである。胎土は、若干の砂粒は含むものの、全体的にきめが細かい。焼成は、須恵質や硬い瓦質を呈するものが多く、総じて良好といえる。**9・10** は、細かい単線の斜格子叩きを持つ。3Aa1-2 類に分類される。**8・12～16** は、**9・10** に比べやや目の大きい単線の斜格子で、**8・12・14・16** は 3Aa2-1a 類、**13・15** は 3Aa2-2 類である。**12～16** は、文字を叩打するものである。文字は、「今行」の左字とされる。瓦の縦寸法は、**14** で 35㎝、**15・16** で 33㎝、幅は **15** の中程で 26㎝をはかる。桶巻作りで、長側小口は内側からヘラで切り込みを入れ、折り取っている。内面の円弧から推定して、一回の桶巻で 4 枚の瓦を分割したものと思われる。また、軒側の小口の内面には、工具による横方向の削り痕跡が残る。胎土には、砂礫を多く含むが、生地のきめは比較的細かい。瓦質に焼成されるが、表面は黒化せず、淡黄褐色を呈している。**17** の叩き文様は、単線の斜格子に平行縦線が加わる。また、さらに部分的に横線と斜線が集約して蜘蛛巣状を呈する。長側小口は、内側から切り込んで折り取る。5B 類である。**18** は、単線の斜格子に魚鱗形の記号が加わる。長側小口は、内側から切り込んで折り取る。6G 類。このタイプは、他に比べて厚みがあり、胎土も粗い。**11** は、格子叩きであるが、分類は不明。

19～22 は、丸瓦である。**19・21・22** は、一端に段差を設けた玉縁式丸瓦である。**19** の玉縁部分は、円筒状に長くのびる。凸面には縄目叩きが認められ、両端部分は、薄く削りをいれる。胎土は、

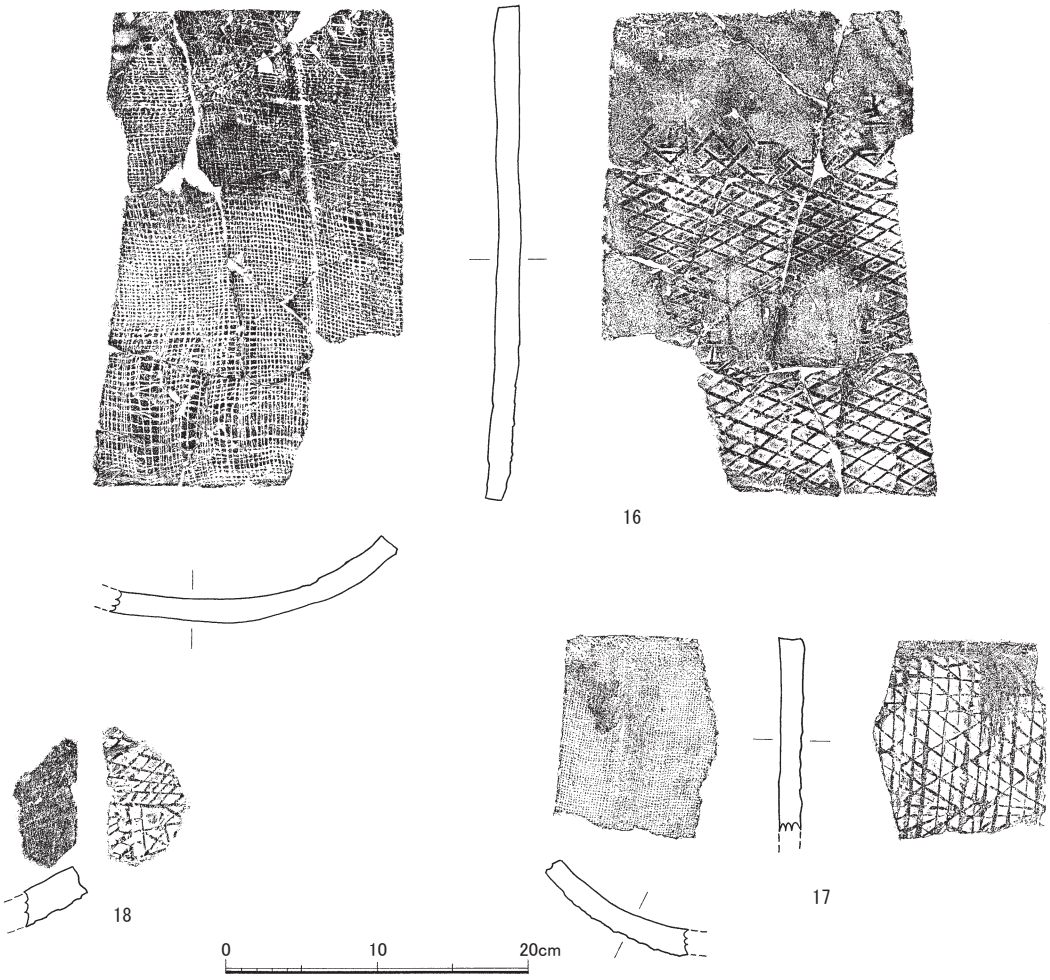


Fig.65　SK14510 出土遺物実測図 5（1/5）

Fig.66　SK14510 出土遺物実測図６（1/5）

きめ細かく精良で、須恵質に焼成されている。筒部の長さ 29.3㎝、玉縁長 8.7㎝。幅が狭く、精緻な作りである。**21・22** は、裁頭円錐状の玉縁を持つ。玉縁は短い。筒部の凸面は、単線の斜格子叩きである。胎土は、砂礫を多く含み、粗い。瓦質焼成である。**20** は、一端を細く作る無段式丸瓦で、いわゆる行基式丸瓦である。上端が残っていないので全長は不明だが、現存長 33㎝をはかる。凸面は縄目叩きされる。鴻臚館跡出土瓦では、無段式は希少で、平成 14 年度調査でも明らかにそれと知れるのは、この一点だけである。

出土した陶磁器の特徴などから見て、10 世紀後半の遺構とみて、大過ないであろう。

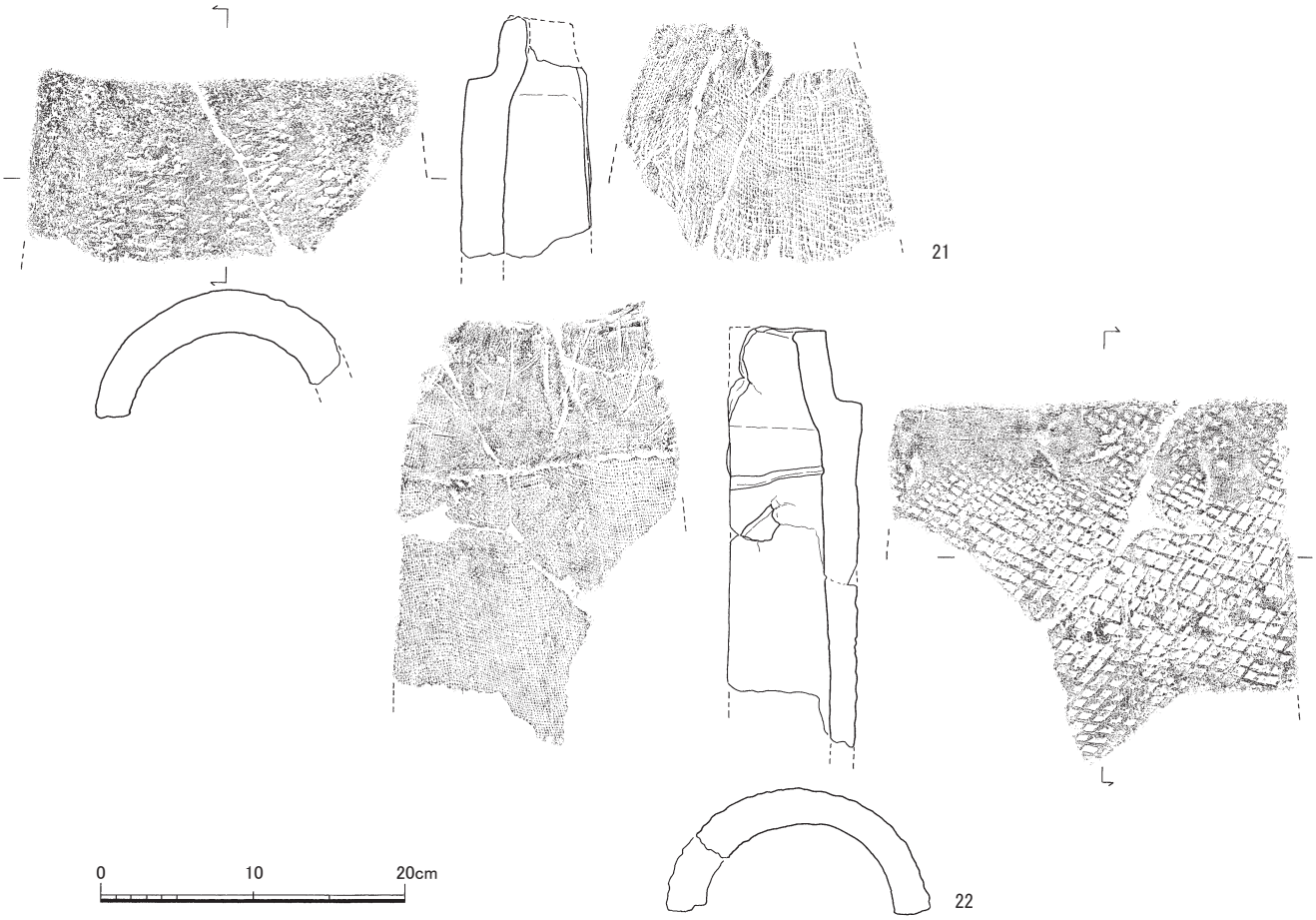
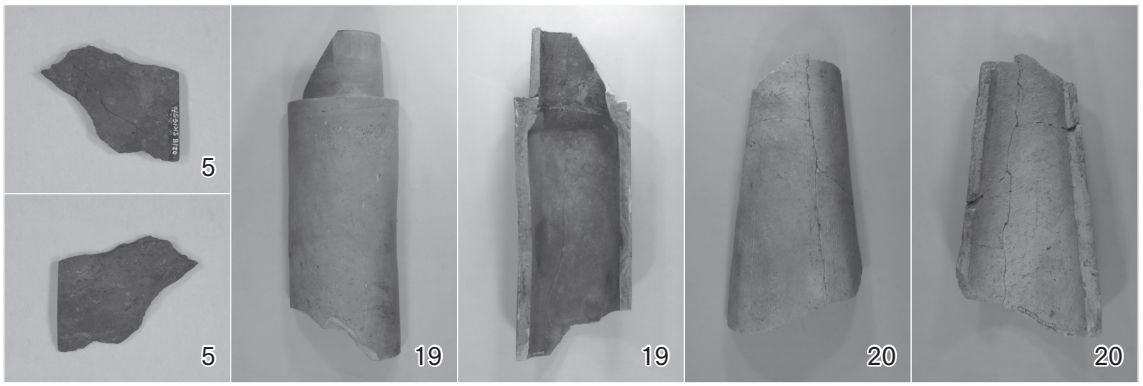


Fig.67　SK14510 出土遺物実測図 7（1/5）



Ph.5　SK14510 出土遺物

SK14511

SK14510 と同様に、平成 13 年度調査区において調査した土坑である。

長軸 155㎝、短軸 115㎝の卵形を呈し、検出面からの深さは 40㎝をはかる。床面付近には、木炭片を含む炭まじりのベタベタな粘質土が堆積しており、それを 10㎝程度の厚さで黄茶色粘質土が覆っていた。粘質土の上面には、部分的に焼けた面が確認できた。

下層の炭まじり層は土師器を主体に、黄茶色粘質土には瓦片が混じっていた。SK14510 のように被災した瓦を一括廃棄したような状況は認められない。

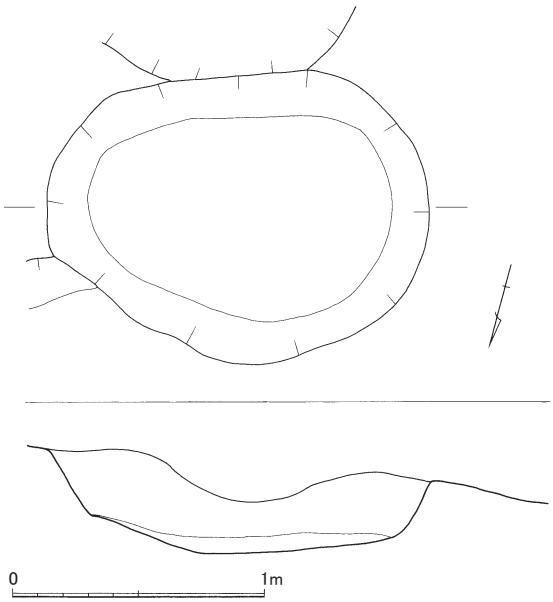


Fig.68　土坑 SK14511 実測図（1/30）

出土遺物の一部を Fig.69・70 に示す。**1 ～ 18** は、土師器である。**1 ～ 5** は坏、**6 ～ 16** は碗である。低平な高台を持つ **7・9・14・15** と、比較的高く、まっすぐに立つ高台の **6・8・10・12・13・16** がある。体部の腰に丸みを持ち、直線的もしくは外反気味に開く **6 ～ 9** と、全体的に内湾気味の丸みを持つ **10** がある。いずれも、体部は横撫で調整している。**16** の高台端部には、煤が付着している。**17** は、黒色土器Ｂ類の皿である。やや内湾気味の浅い皿部に、断面三角形の低い高台が付く。横撫で調整で、ヘラ磨きは行なわれていない。内外面ともに炭素が吸着し、光沢のある漆黒色を呈する。**18** は、黒色土器Ａ類の甕である。外面は横撫で調整、内面は横方向にヘラ磨きする。内面には炭素が吸着し、黒色を呈する。

19 は、緑釉陶器である。内面には沈線で花文を描く。胎土は灰色でややきめは粗いが緻密で、須恵質に焼成されている。釉は、若草色で、光沢を持ち、全面に薄く施される。尾張の猿投窯の緑釉陶器で、黒笹 90 号窯式と思われる。

20 ～ 23 は、越州窯系青磁の碗である。**23** は、体部に縦にヘラを当てて窪ませ、輪花に作る。**24・25** は、白磁碗である。**24** は、口縁端部を折り返して、小さな玉縁に作る。**25** は、大きく直線的に開く体部を持つ。**26** は、施釉陶器の鉢である。赤褐色できめ細かい胎土に、黄味がかった暗緑色の釉がかかる。外底部は露胎である。ただし、火熱を受けている様で、釉色は、本来異なっていた可能性も考えられる。内面にも施釉されていたと思われるが、釉は飛んでしまい、下地である白色の化粧土が全体に露出している。

27 は、土錘である。半分ほどに折れているが、長い紡錘形に復元できる。土師質に焼成される。

28 ～ 36・39 は、平瓦である。**28 ～ 33・36** は、縄目の叩き痕跡を持つものである。**28・29・31・32** の凹面には、粘土板から切り離した際のコビキ痕跡が残っており、長側小口はヘラで切って、平坦に面取りされる。**30・33** の小口もヘラで削るが、凹面側と凸面側の両側から面取りする様に削られている。**34・35** は、細かい単線の斜格子である。3Aa1-1 類。小口は、内側から切り込んで折り取る。**36** は、非常にきめ細かい胎土で、薄手に作られており、厚さは 1.25㎝にすぎない。焼成は須恵質で、青灰色を呈する。長側小口は、内側からヘラで切り込み、折り取る。**39** は、縦の平行線を基調に、横線や斜線を加えた叩き文様である。5C 類に分類される。胎土には、大小の砂礫が混じり粗い。焼成は不良で、土師質を呈する。**37・38** は、丸瓦である。**37** には、単線の斜格子叩きが

見られる。**34・35** に比較して格子目はやや大きく、3Aa2-1a 類である。**38** の叩き痕跡は不明瞭だが、平行する斜線である。2C 類。二次的に火熱を受け、焼き締まっている。

23 の青磁が後出する要素を持つが、出土遺物を全体的にみて、9 世紀後半に位置付けられる。

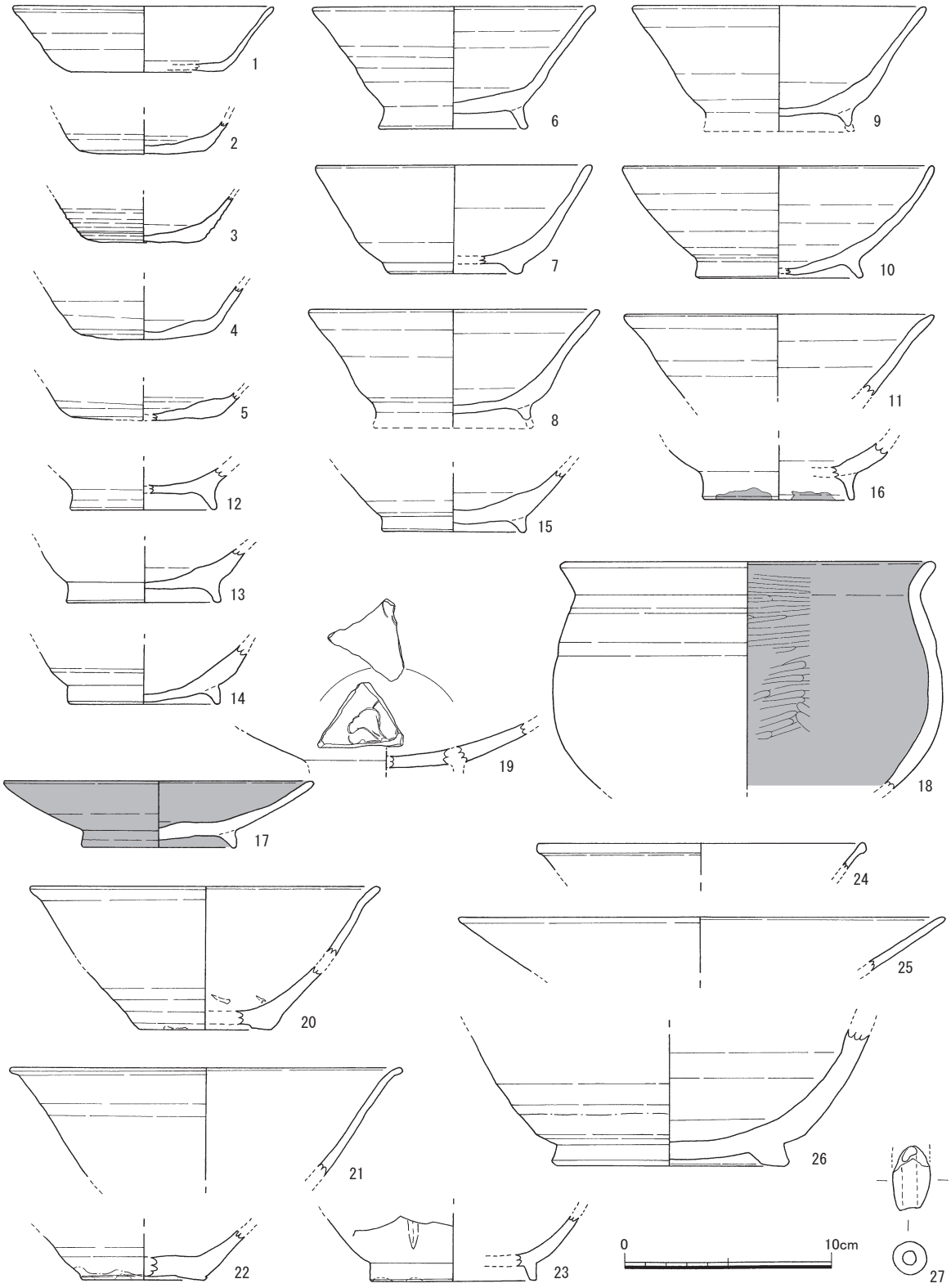


Fig.69　SK14511 出土遺物実測図 1（1/3）

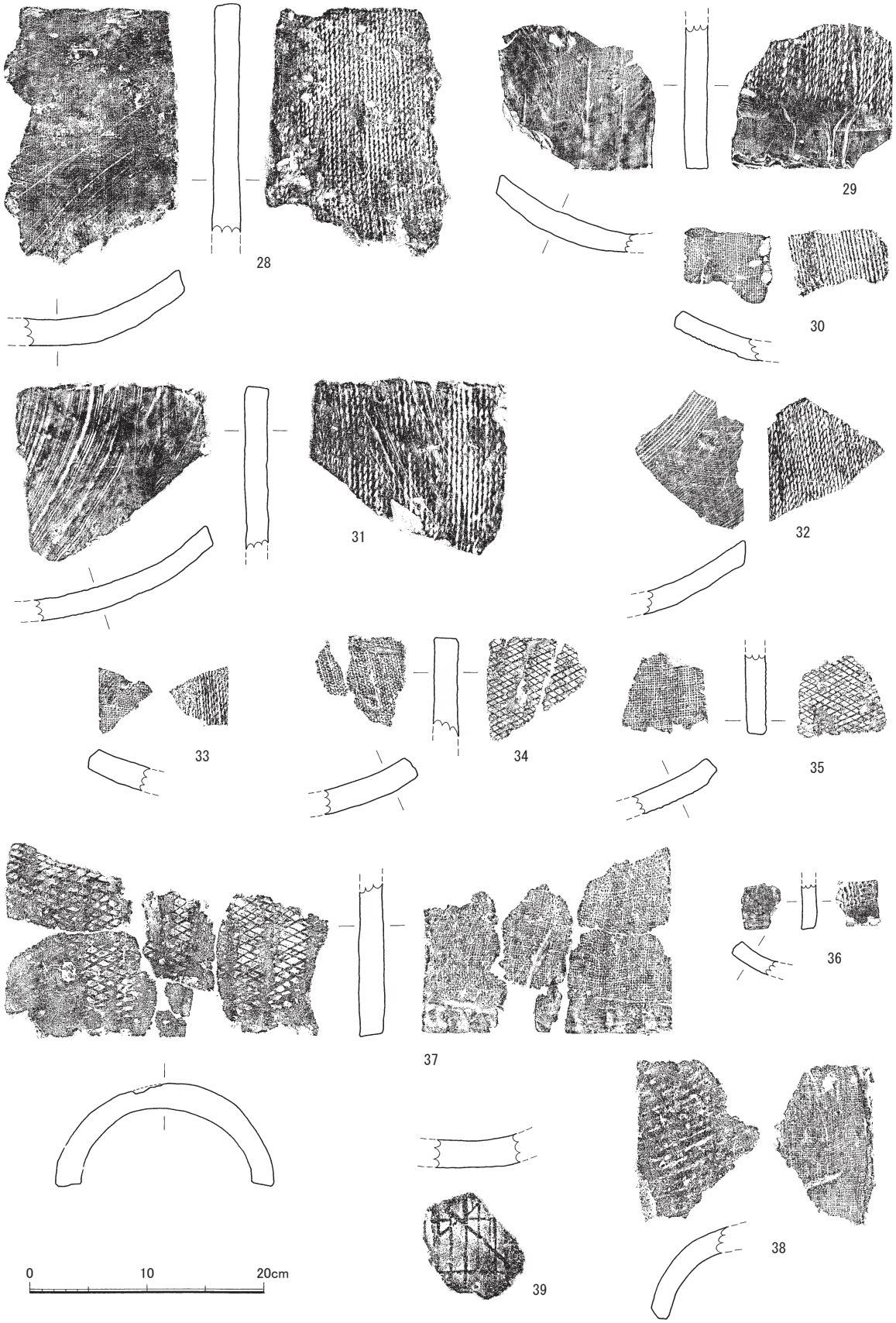


Fig.70　SK14511 出土遺物実測図２（1/5）

SK14513

調査区東辺近くから検出した土坑である。土坑の東端部は、第Ⅰ期石垣調査に際して設定したグリッド掘削後の、降雨による崩落で失われている。復元長軸 310㎝、短軸 220㎝の卵形を呈し、検出面からの深さは 30㎝前後をはかる。

瓦を主として廃棄しているが、土師器と少量の陶磁器が出土している。遺物の包含量が多く、密に廃棄されていたため、保存することとし、半裁して断面図を作成した状態で、埋め戻した。

出土遺物の一部を、Fig.72 ～ 79 に示す。**1 ～ 26** は、土師器である。**1 ～ 13** は、坏である。底部は回転ヘラ切りで、板目圧痕が認められる。**14 ～ 17** は、碗である。高台は高く、径が大きい。**25** は、黒色土器Ａ類の小碗である。内面はヘラ磨きで黒色処理、外面は横なで調整する。**24** は、高台付き鉢である。底部は、円盤貼り付けで、さらに高台を付けている。**26** は、甕である。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横位のヘラ削りで、口縁部は横なで調整する。**27 ～ 30** は、越州窯系青磁である。**30** は、壺の口縁部であろう。頚部から短く外反し、丸く収める。**27 ～ 29** は、碗である。**28・27** は、火熱に合い、釉が剥離気味となる。外面の下半部は露胎であり、粗製品に分類される。**29** は、全面施釉で、畳付きのみ露胎とする。**31 ～ 33** は、白磁の碗である。**33** は玉璧高台で、全面施釉の後、畳付きの釉を掻き取る。**34** は、長沙窯の水注である。褐彩が施される。

35 ～ 78 には、瓦を示す。**35 ～ 63** は、平瓦である。**35 ～ 39・42・43** は、縄目叩きである。凹面には、粘土板から切り離した際のコビキ痕跡が見られる。長側小口は、ヘラ切りで面取りされて

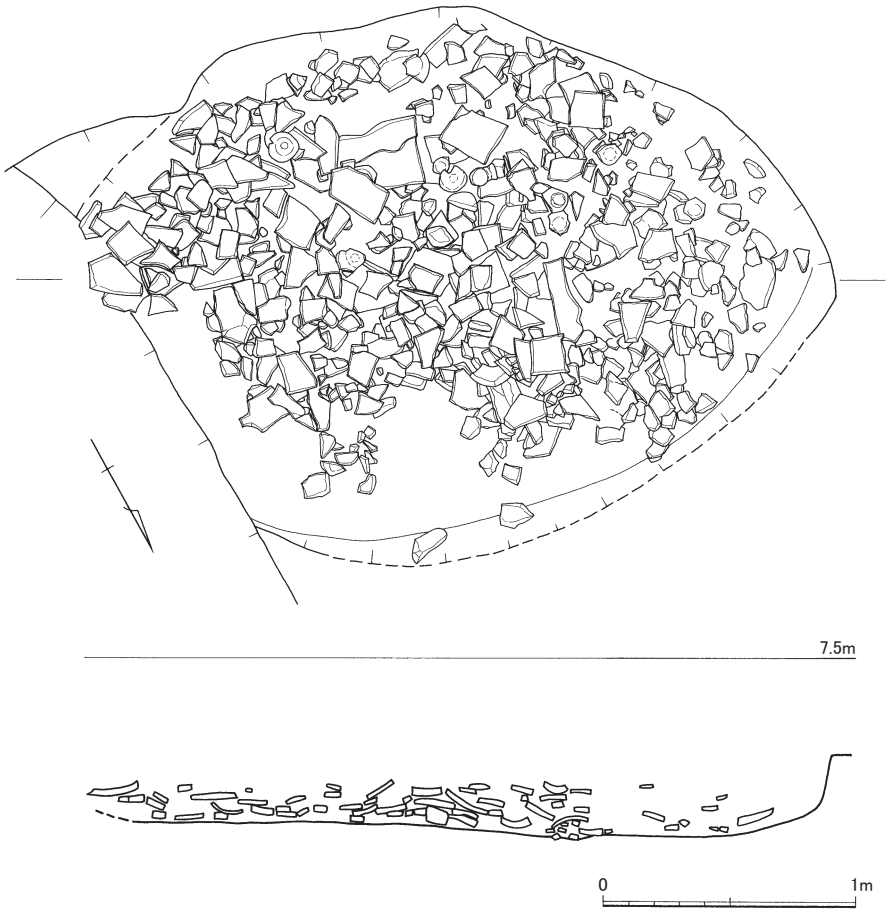


Fig.71　土坑 SK14513 実測図（1/30）

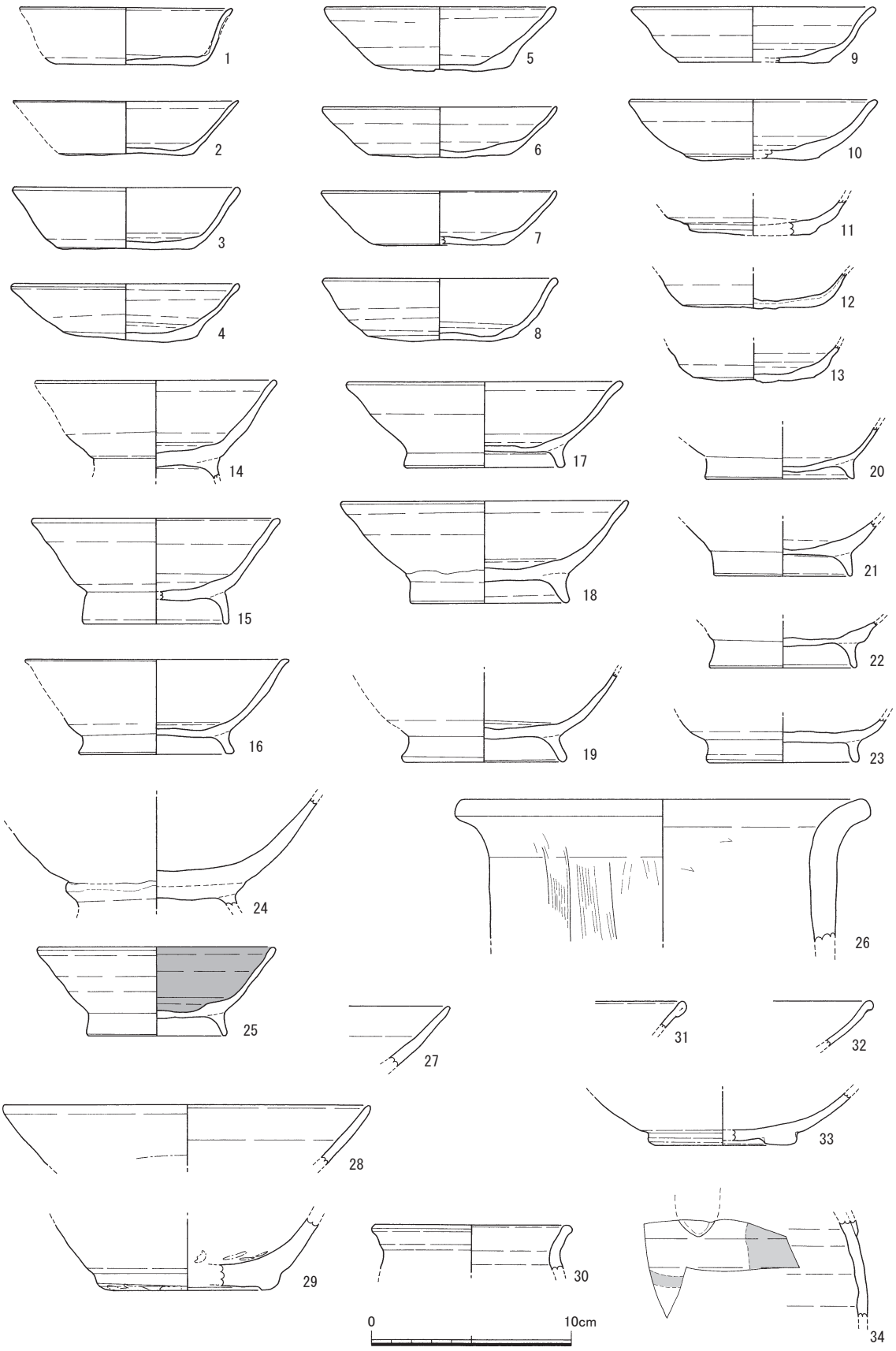


Fig.72　SK14513 出土遺物実測図１（1/3）

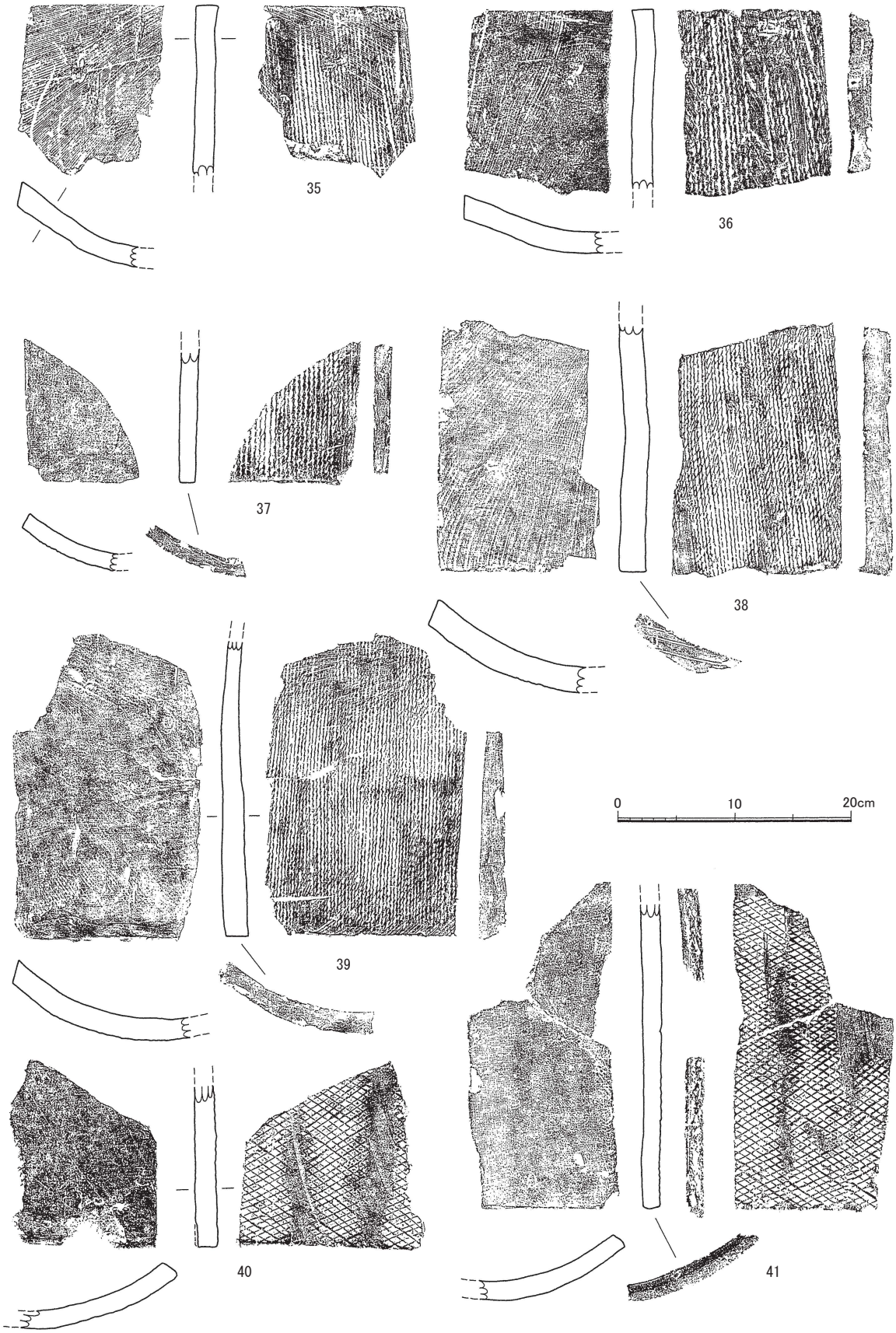


Fig.73　SK14513 出土遺物実測図２（1/5）

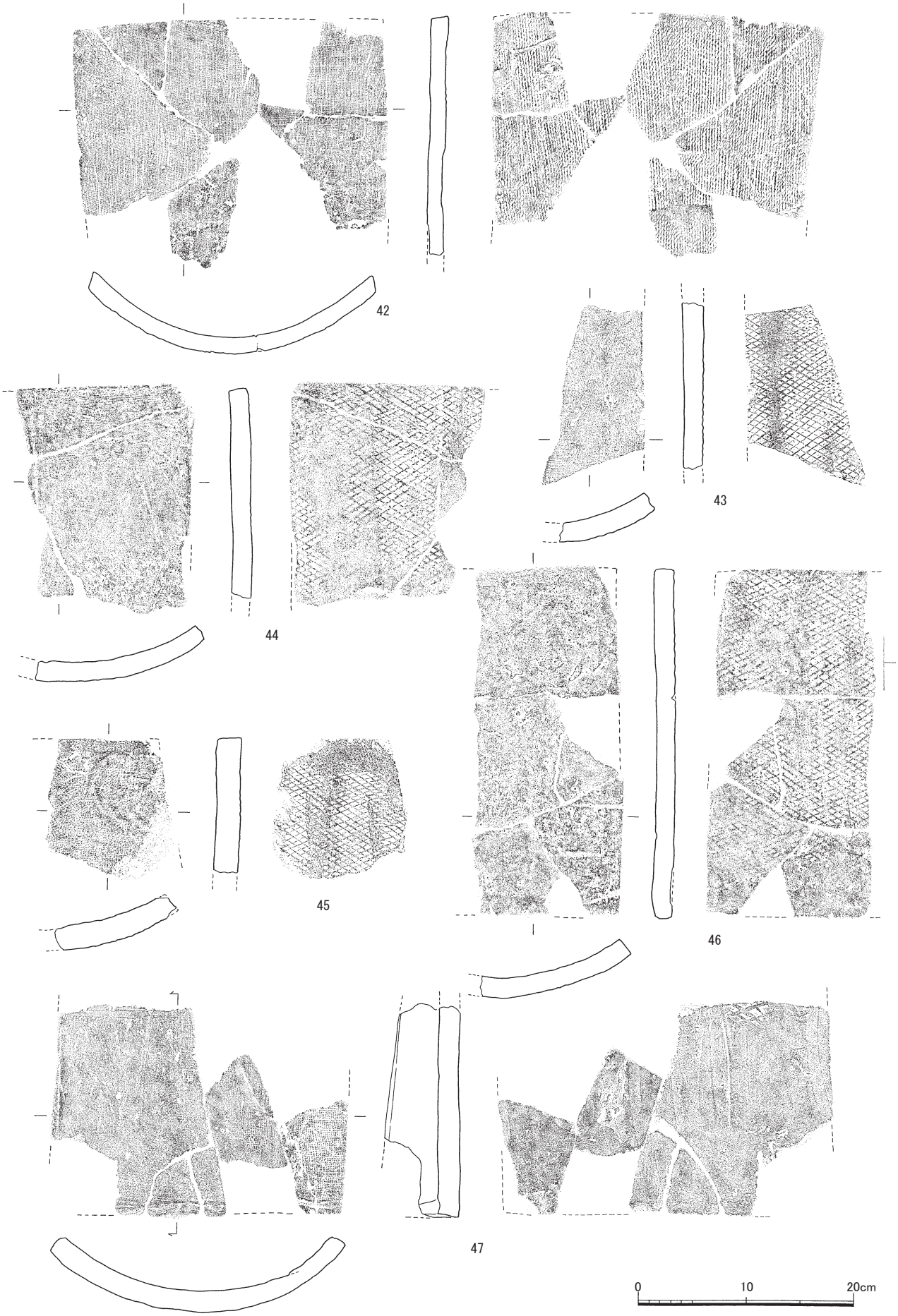


Fig.74　SK14513 出土遺物実測図３（1/5）

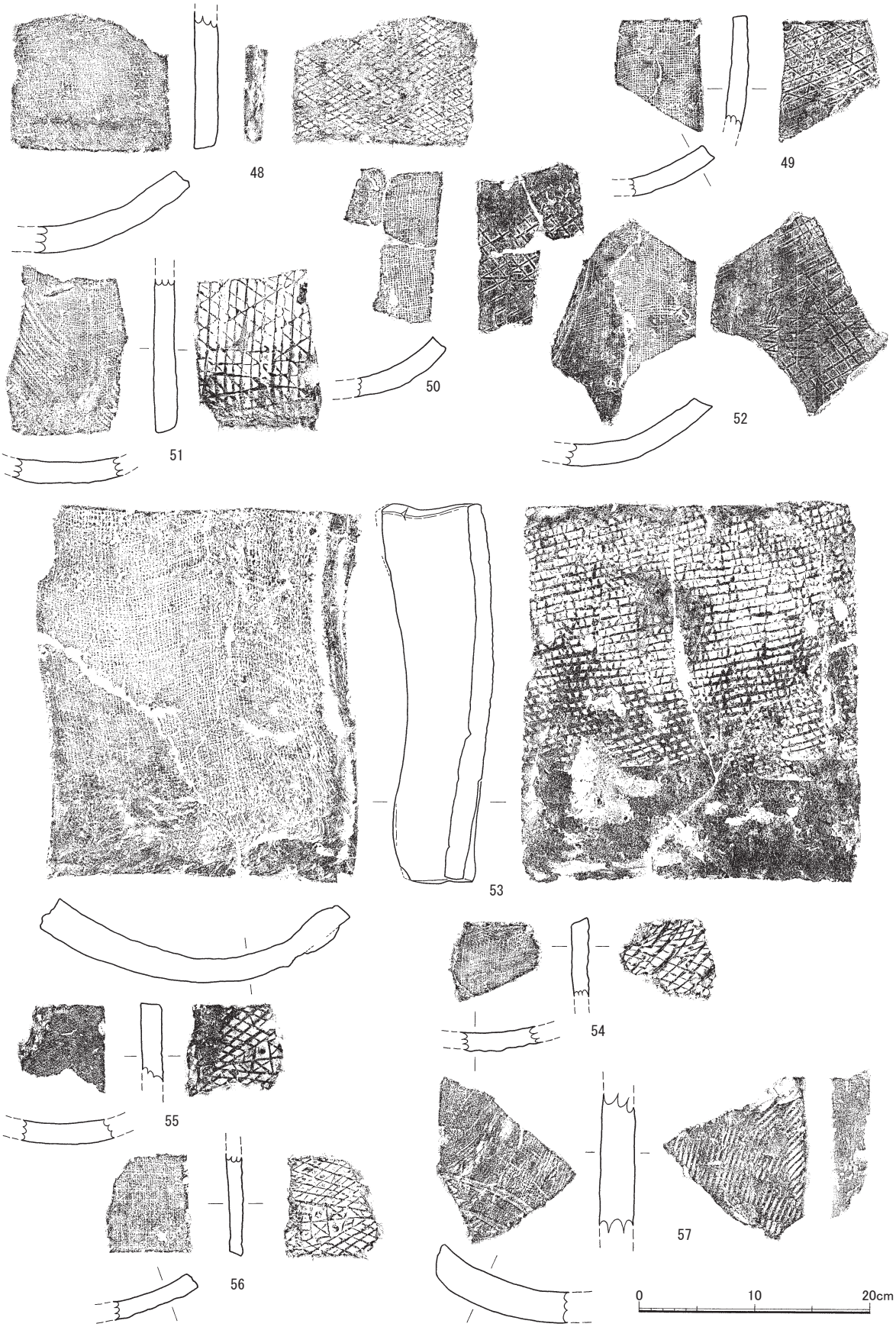


Fig.75　SK14513 出土遺物実測図４（1/5）

いる。**40・41・43～46・48・62** は、単線の細かい斜格子である。長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。**62** は 3Aa1-1 類、他は 3Aa1-2 類である。**47** はやや目が粗く、3Aa2-1b に分類されている。**49** は、単線の斜格子であるが、ところどころに縦線と横線がかむ。長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。**50・51** は、単線の斜格子であるが、平行横線が、部分的に加わる。長側小口は、内側から切れ目を入れて、折り取る。6C 類である。**51** は、単線の斜格子に間隔の狭い平行縦線を加えるもので、下端近くには平行横線も加わる。5B 類である。**53** は、目は細かいが不規則な単線の格子目叩きである。全体が遺存するが、火災にあった為か、大きく歪んで湾曲してい

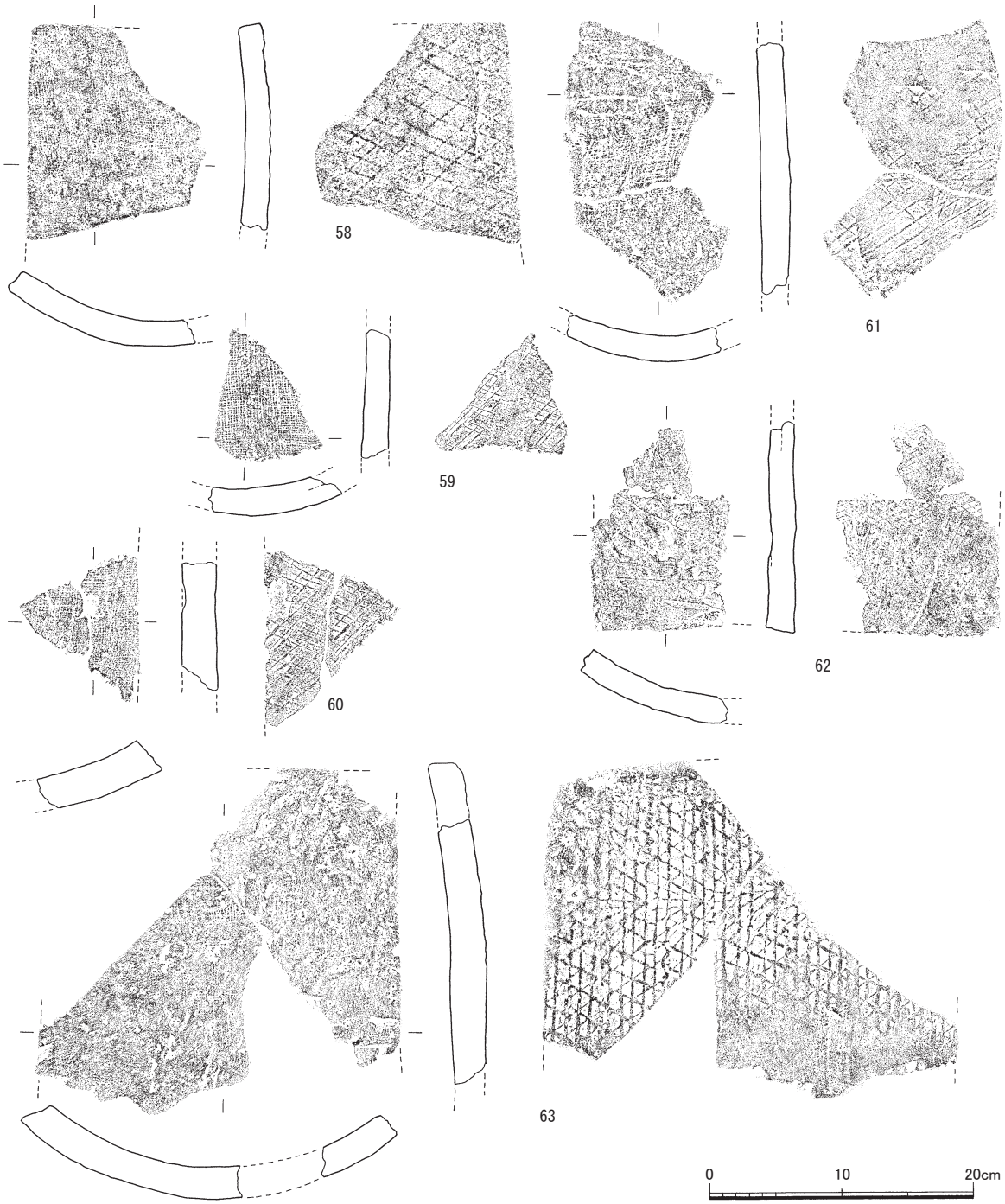


Fig.76　SK14513 出土遺物実測図５（1/5）

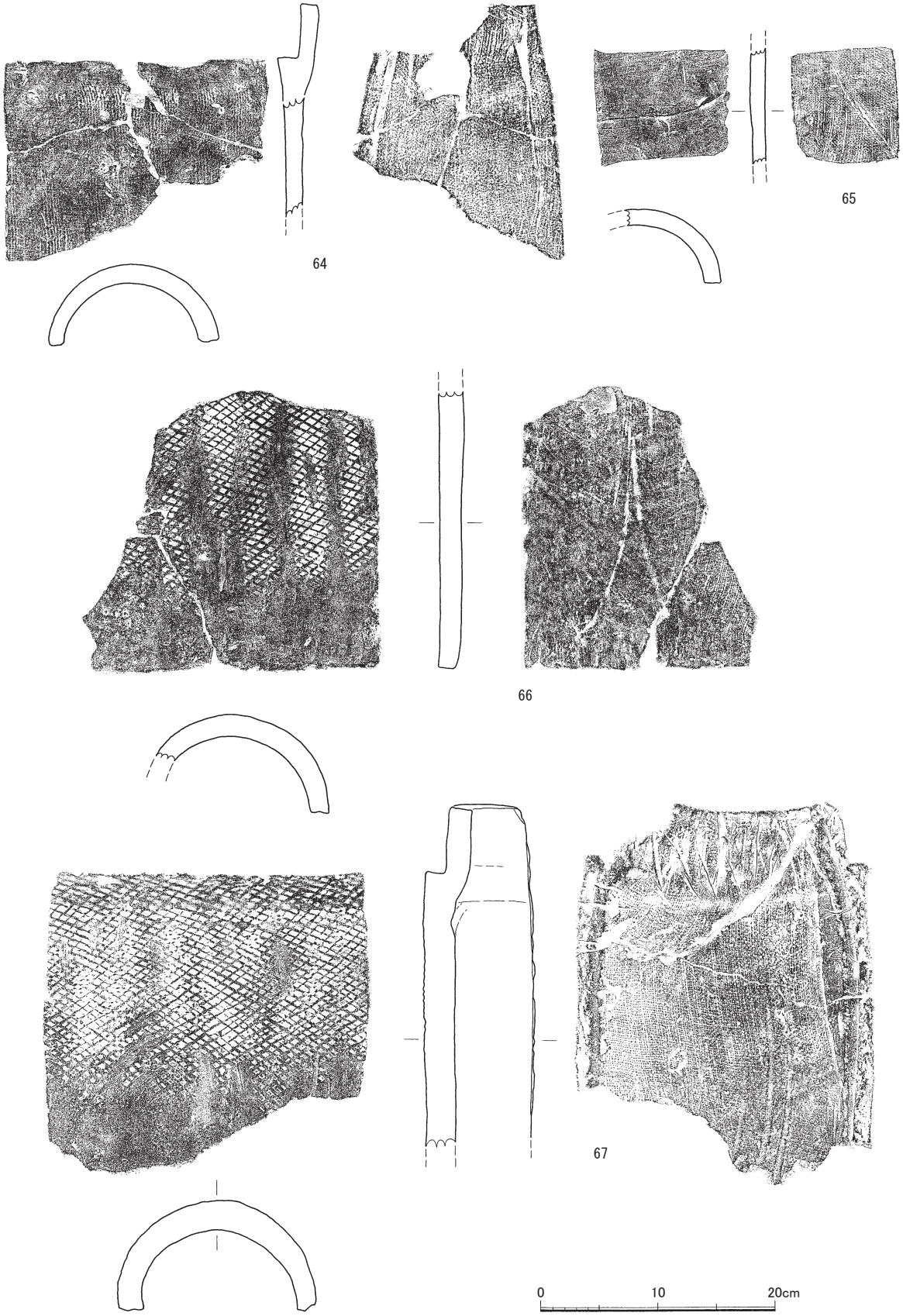


Fig.77　SK14513 出土遺物実測図６（1/5）

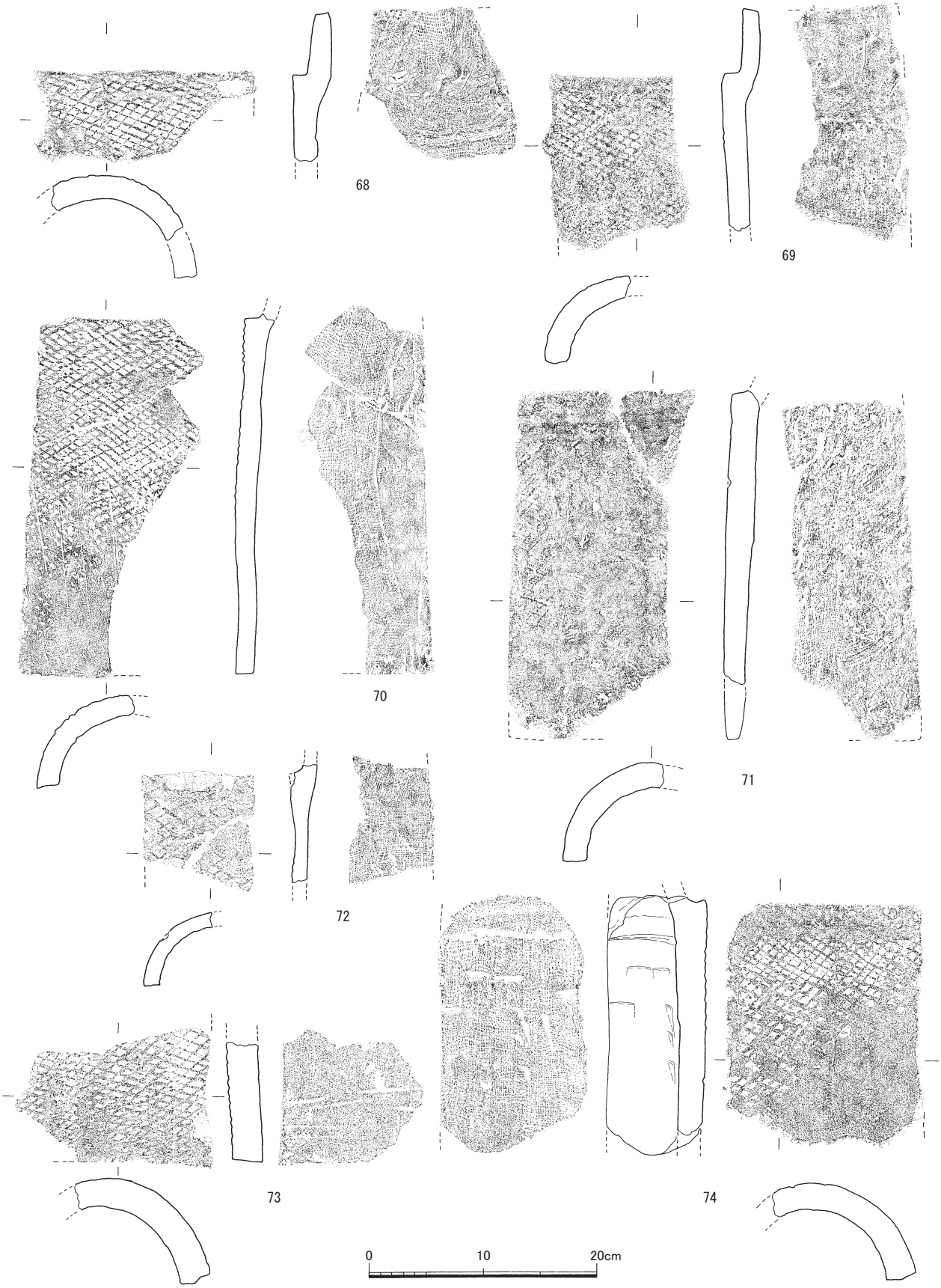


Fig.78　SK14513 出土遺物実測図７（1/5）

る。また、厚みも不均一で作りは粗い。長側小口は、内側から切れ目を入れて折り取る。1A 類である。長側辺 33㎝。**54 ～ 56** は、単線の斜格子であるが、三角形の記号状の叩き文様をはさんで、上下で斜格子の方向が異なる。6G 類である。**57** は、平行線の叩き目である。厚手に作り、小口はヘラで面取りしている。2C 類である。**58** は目の粗い単線の斜格子叩きで、3Ab-2 類である。**59・60** は、目の粗い単線の斜格子に、さらに細線の格子を加えたもので、3Ab-6a 類である。**61** は、右上がりの斜線を主文とし、これに交差する斜線を加える。6C 類である。**63** は、密な縦線を主に、斜格子を加えたもので、5B 類に分類される。

64 ～ 78 は、丸瓦である。**64・65** は縄目叩きである。**66・67・69・70** は細かい斜格子で 3Aa1-2

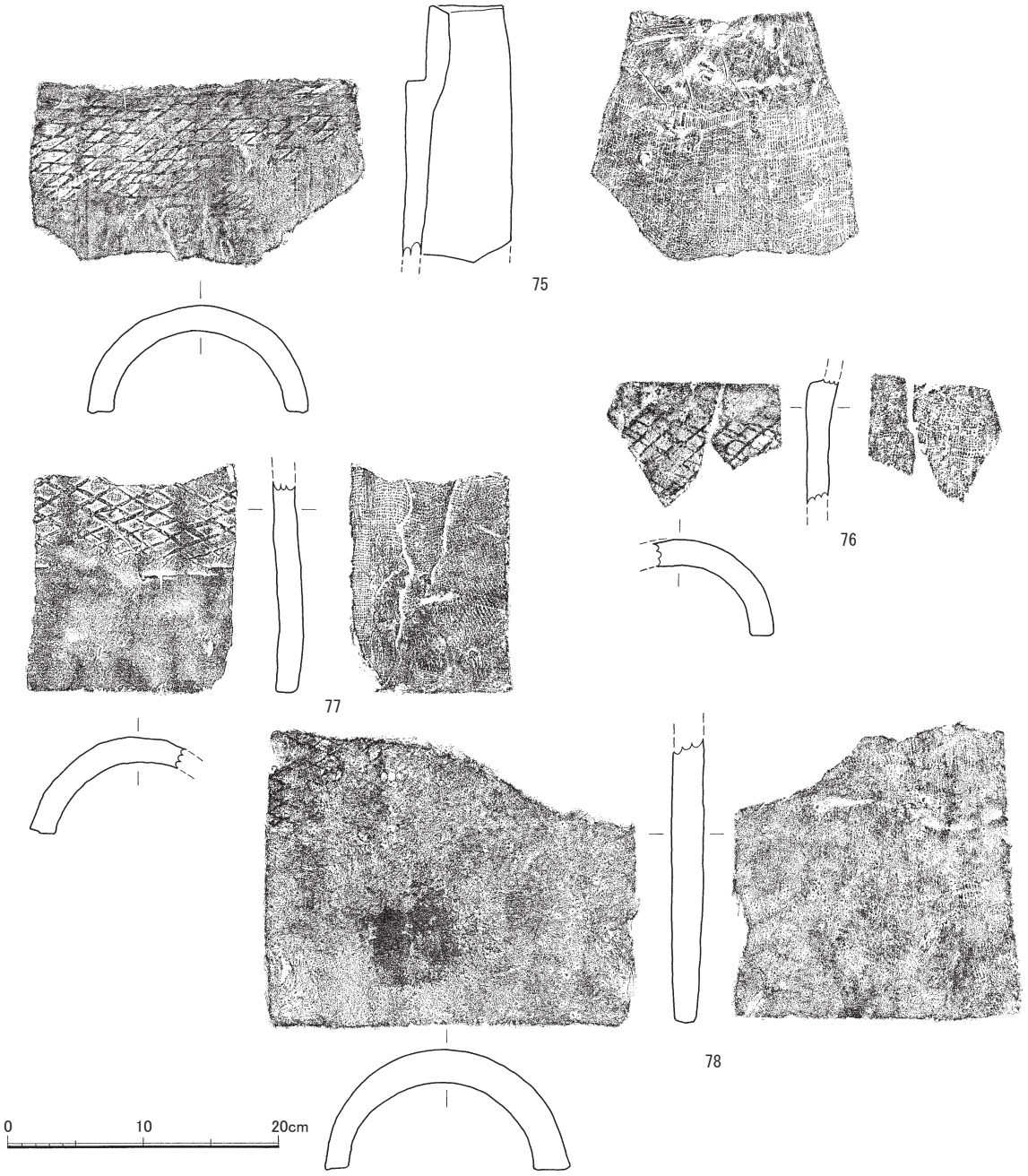
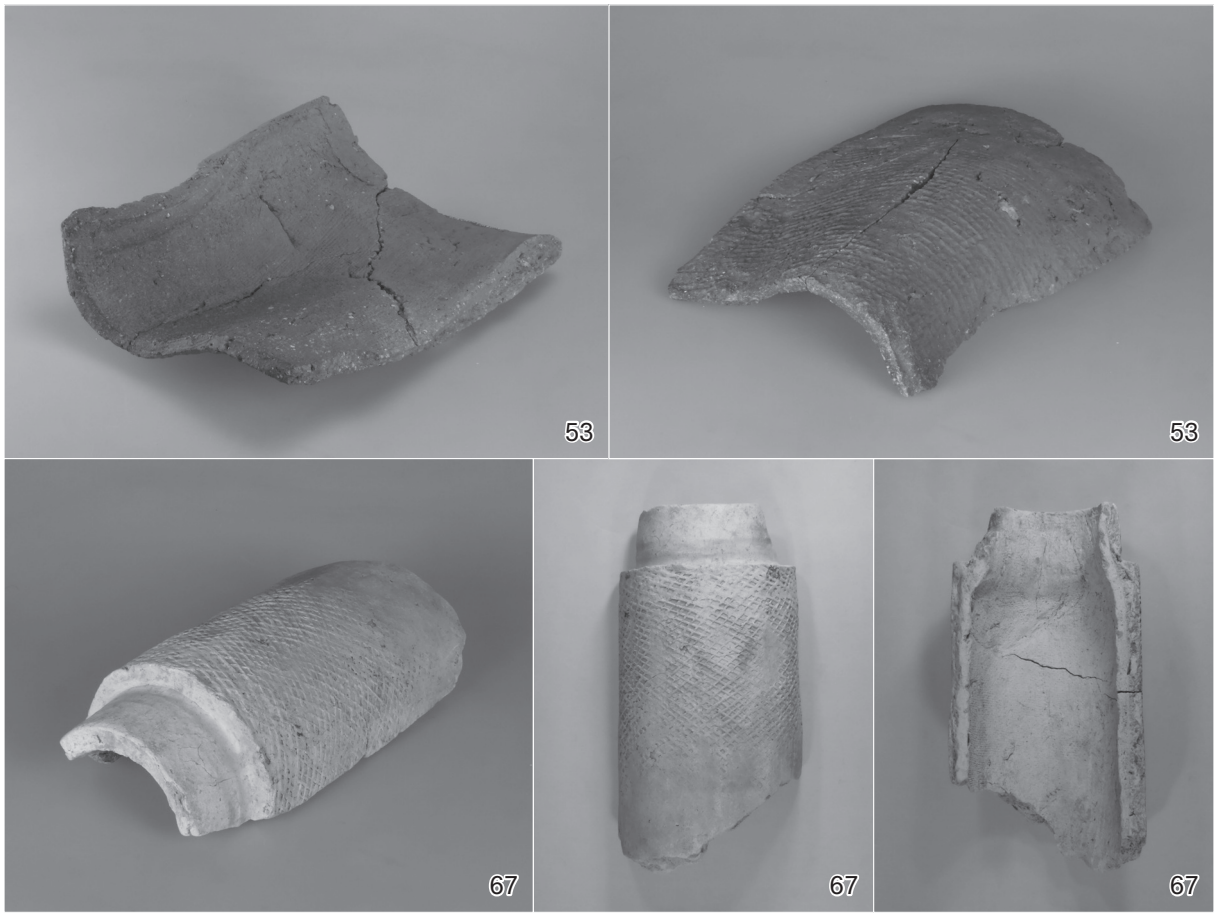


Fig.79　SK14513 出土遺物実測図８（1/5）



Ph.6　SK14513 出土遺物

類、**71 ～ 75** はやや目の大きい斜格子で、3Aa2 類である。**76** は、斜格子叩きであるが、右下がりの斜線が複線となるもので、3Be 類である。**77・78** は、やや大きめの単線の斜格子叩きをもつもので、3Ab 類に分類される。

出土した土師器から、9 世紀末～ 10 世紀初頭に属するものと思われる。

SK14524

SK14273 の下部から検出した土坑である。

平面形は、長軸 170㎝、短軸 100㎝の小判型を呈する。床面は、東から西に次第に深さを増しており、遺構検出面からの深さは、15 ～ 40㎝をはかる。

土師器・瓦を主に廃棄していた。SK14273 調査後、その床面から検出したため、埋土上位から出土した遺物に関しては、SK14273 出土遺物との分離が困難で、一部の遺物が SK14273 出土として取り上げた遺物に紛れ込んだものと思われる。

出土遺物を、Fig.81・82 に示す。**1 ～ 50**

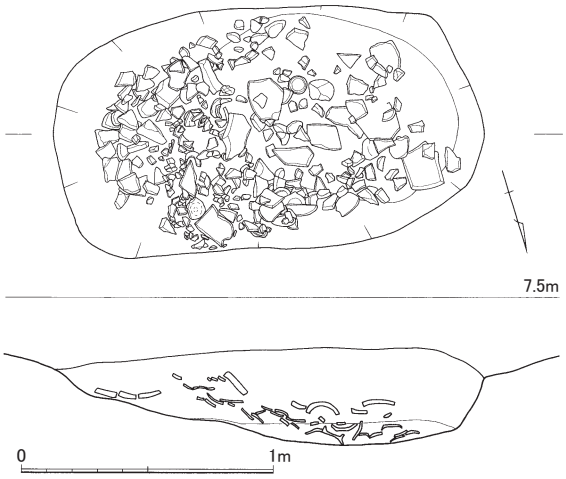


Fig.80　土坑 SK14524 実測図（1/30）

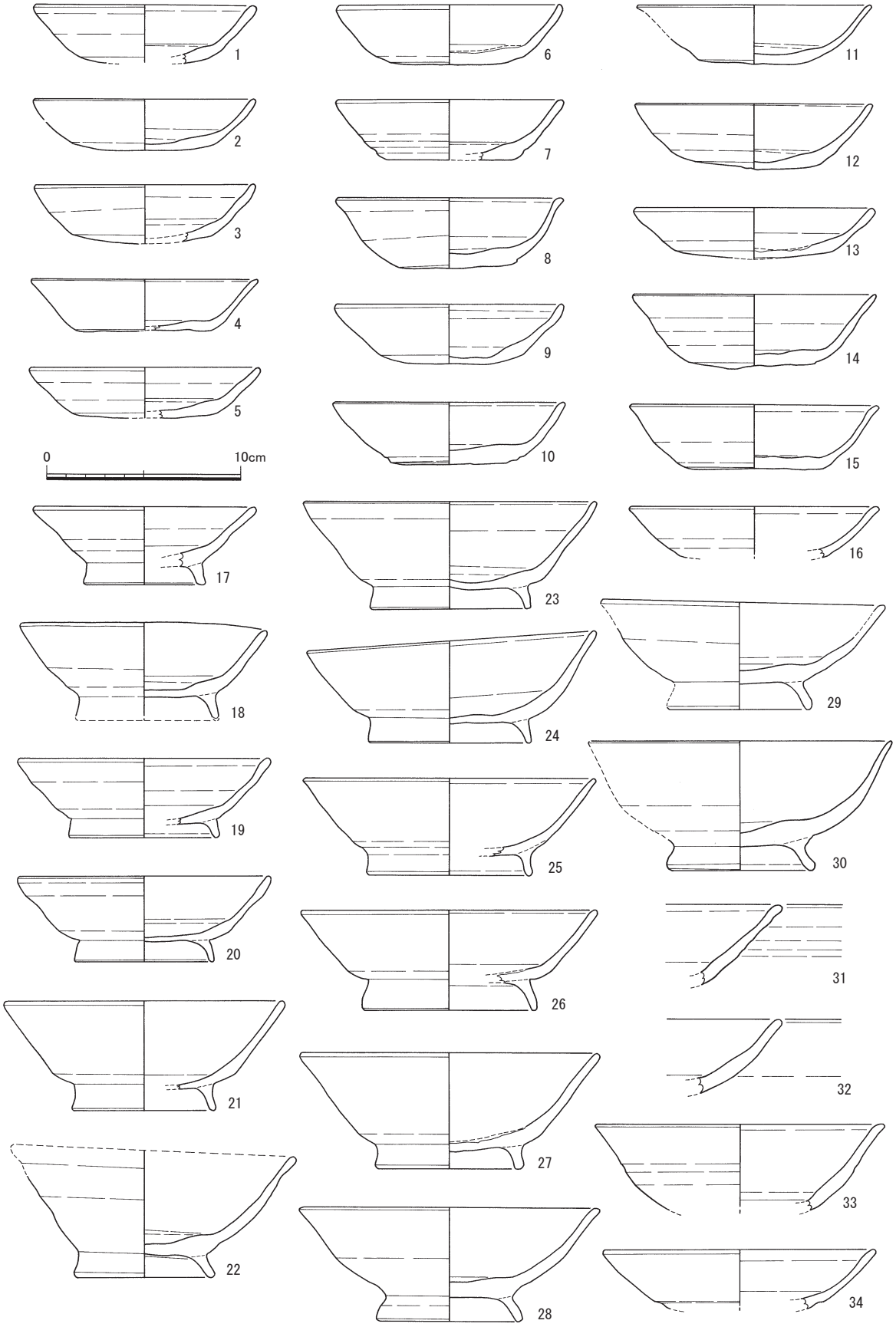


Fig.81　SK14524 出土遺物実測図１（1/3）

は、土師器である。**1 ～ 16** は坏である。体部に内湾気味の丸みを持つ **1 ～ 3・5 ～ 7・9・10・12・13** と、直線的に開く **4・14**、薄手で内湾気味の体部から小さく外反する口縁となる **8・11・15** の三タイプがある。底部は、丸底気味の凸底に作るものと、平底に作るタイプとがある。**17 ～ 50** は、碗である。**17 ～ 20** は小碗で、口径 11㎝～ 13㎝をはかる。**21 ～ 30** は、口径 14.4㎝～ 15.6㎝である。体部は、丸みを持って内湾する腰部から屈折し、直線的もしくは外反気味に大きく開いて、口縁につづく。高台は高く、外方に踏ん張る。少数ではあるが、**30** のように体部下半の丸みが強く、口縁は外反し、器が深く、高台径の小さいものが見られる。これらの碗の体部は、横撫で調整されており、ヘラ磨きは認められない。底部の破片では、高台径が小さく、高く細い高台が、「八」字状に外方に踏ん張るものが見られる（**43・47・48**）。

51 は、黒色土器 A 類の碗である。器面は摩耗していて、調整痕は不明。

52・53 は須恵器である。**52** は、蓋である。全体に薄手で、焼成が良く暗灰色を呈する。**53** は、

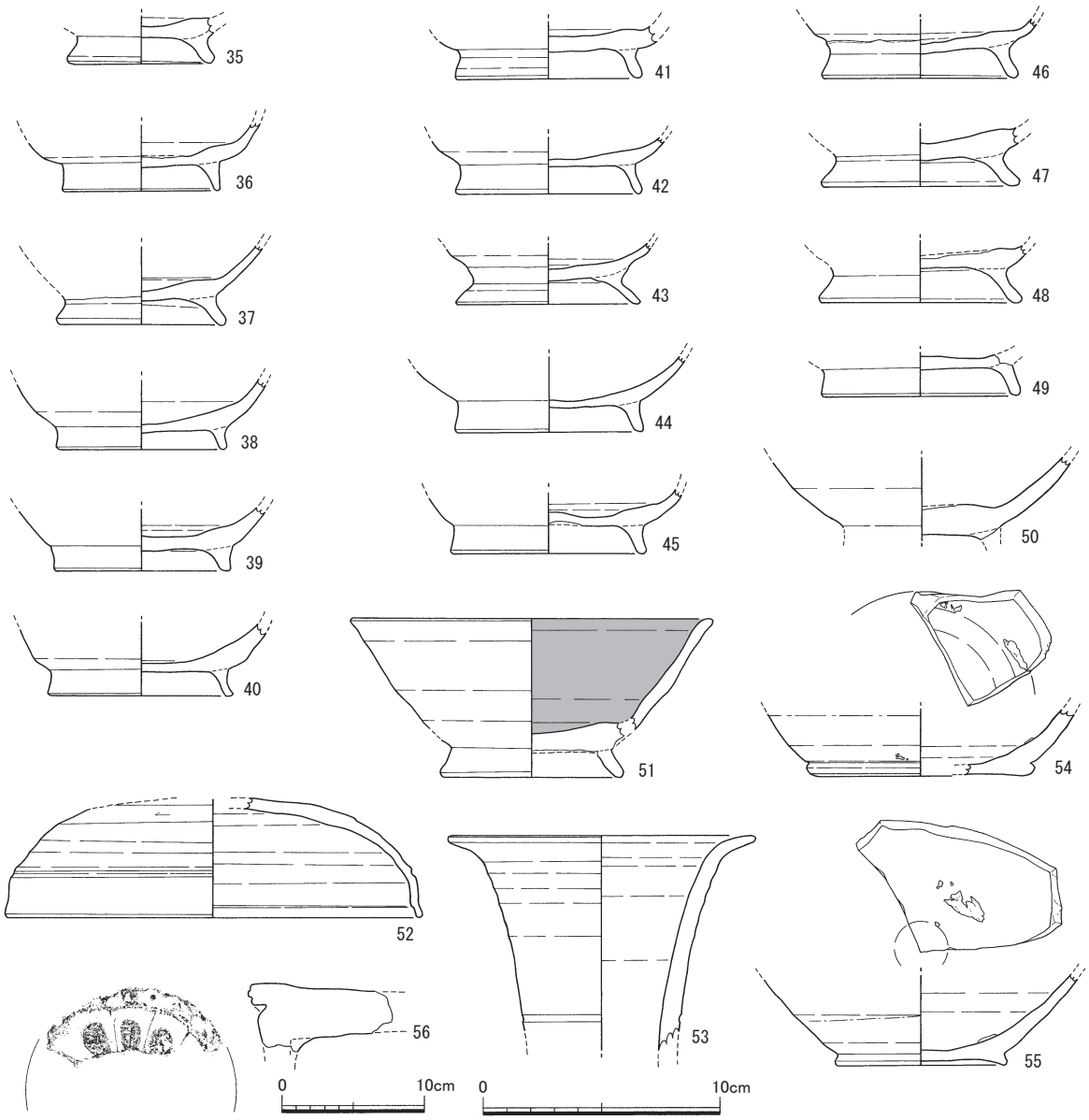


Fig.82　SK14524 出土遺物実測図２（1/3、56-1/5）

壺の口縁で、大きくラッパ型に開く。

54・55 は、越州窯系青磁の碗である。体部下位を露胎とする粗製品で、見込みには目跡が並んでいる。

56 は、軒丸瓦の瓦当である。外区には珠文が並び、内区には単弁の花弁が見られる。

土師器・陶磁器から見て、10 世紀前半の廃棄土坑であると考えられる。

SK14529

調査区東辺付近から検出した遺構で、第Ⅱ期布掘り掘立柱列 SA14526 の上位にあたる。

瓦と土師器・陶磁器の集中分布が見られた箇所で精査したが、特に土坑を示すような明瞭な掘り方などは見られなかった。削平によって大部分が失われ、床面付近が、窪み状に残っていたものと推測する。

出土遺物を Fig.84 に示す。**1 ～ 3** は、土師器の碗である。体部の丸みは強く、口縁部が小さく外反す

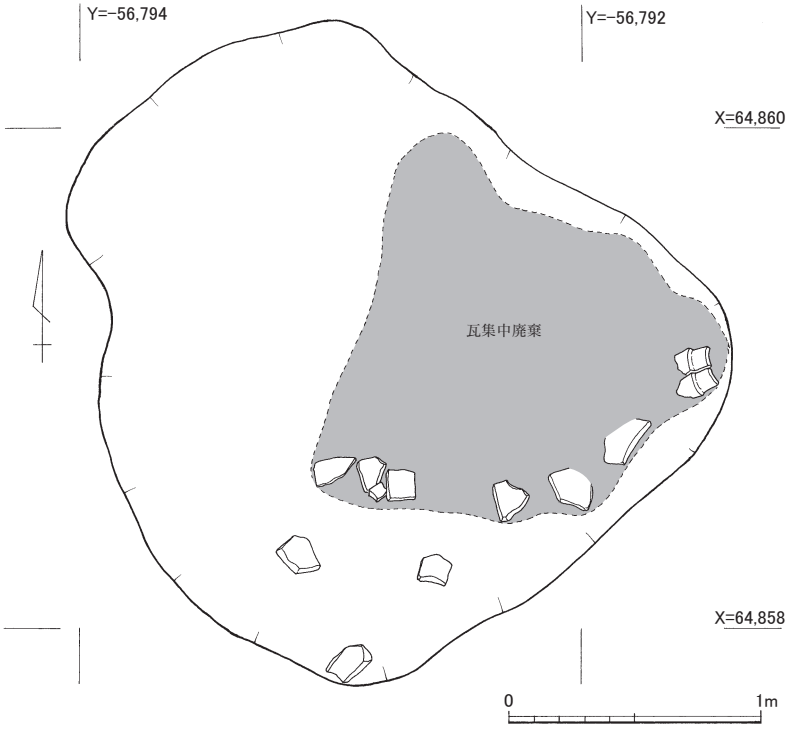


Fig.83　土坑 SK14529 実測図（1/30）

Ph.7　SK14529 出土遺物

る。高台の径は小さく、やや厚手である。体部の磨耗が激しく、調整痕は観察できない。

4 は、黒色土器 A 類の碗である。丸みの強い体部に小さく外反した口縁を持つ。高台は、径が小さめで、細く、「八」字状に外方にやや踏ん張り気味に作る。体部外面は磨耗しているが、内面にはヘラ磨きが認められる。

5 は越州窯系青磁碗の口縁部破片である。**6・7** は白磁である。**6** は低平な輪高台、**7** は幅の広い玉璧高台である。外底部は露胎となる。

8 は、丸瓦である。ほぼ完品で、長さ 33㎝と若干短めである。単線の斜格子叩きに「介」字を加える。3Aa2-1a 類に分類される。**9** は、平瓦である。複線の斜格子で、長側小口はヘラ切りしている。3Bb2 類である。

土師器の特徴から、11 世紀前半に属すると思われる。

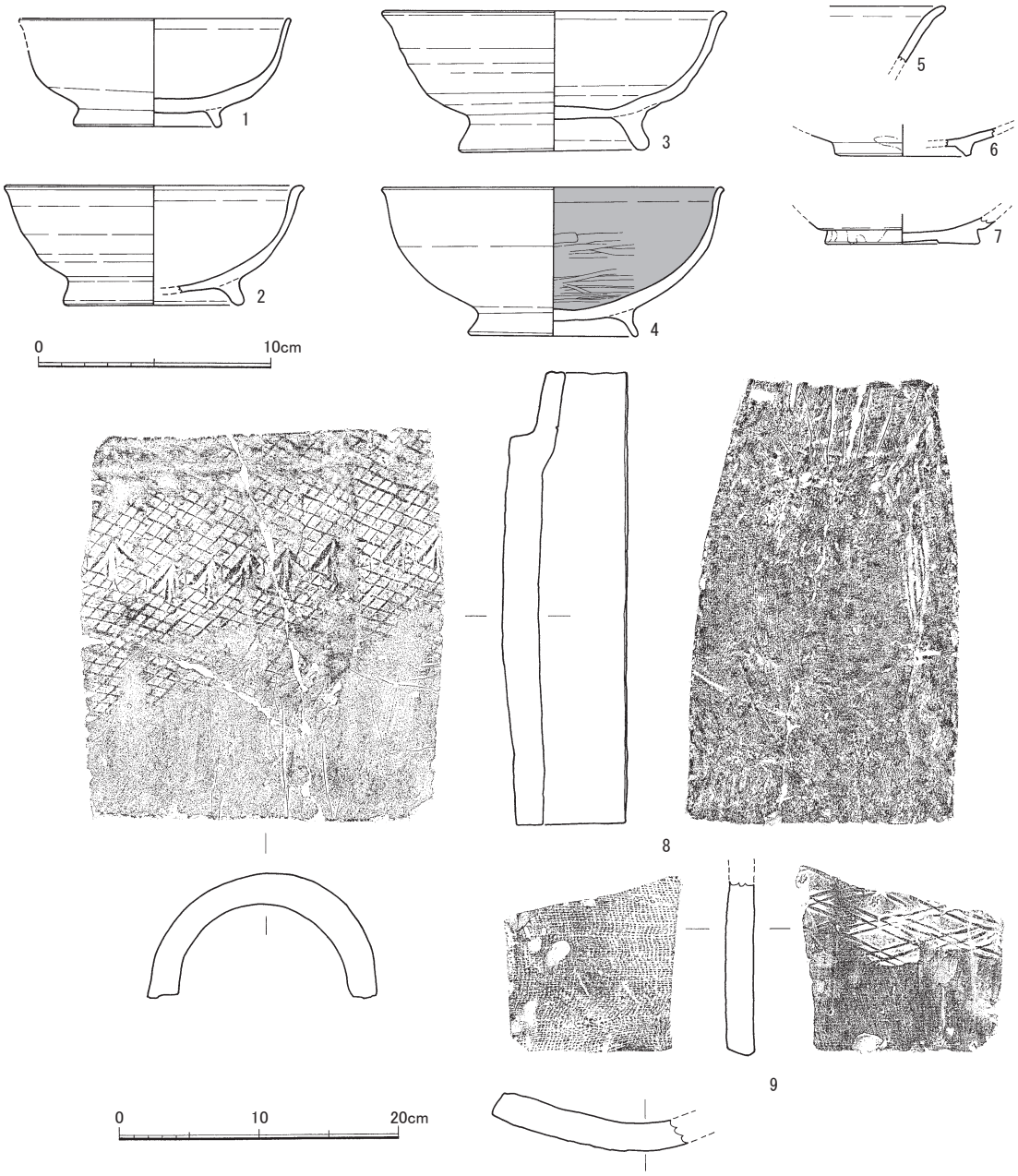


Fig.84　SK14529 出土遺物実測図（1/3、8・9-1/5）

SK14534

02 － 4 トレンチの壁面で確認した土坑である。トレンチの東端近くの北壁と南壁に、土坑の落ちが顕れたもので、トレンチ東側の中世の池状遺構である SX14340 B の下層に広がると思われるが、SX14340 B を保存するため、遺構検出・確認はおこなわなかった。

Fig.86 に図示した遺物は、トレンチ壁面に露出して出土したものである。

1 は、土師器の碗である。体部は失われているが、遺存部分から見て、丸味を持つ大振りな碗と推測できる。高台径は狭く、丸底気味の底部の中寄りに貼り付けている。高さのある高台は、「八」字状に外方に踏ん張る。

2 ～ 4 は、越州窯系青磁の碗である。いずれも器壁は薄く、精製品であろう。**2** は、内面全体に大きく花文を描く浅碗である。片切り彫りで花弁を描き、毛彫りでうめている。外底部の高台内側には、大きな目跡がみられる。**5 ～ 9** は、白磁碗である。**5** は小碗で、釉は若干青味を帯びている。口縁部は、折り返して小さな玉縁口縁とする。**6** は、大ぶりな碗である。口縁

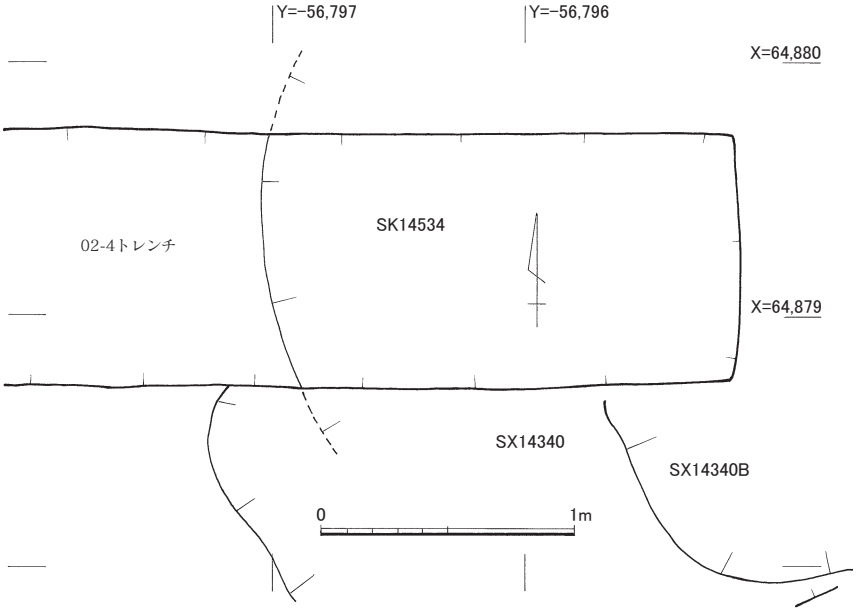


Fig.85　土坑 SK14534 実測図（1/30）

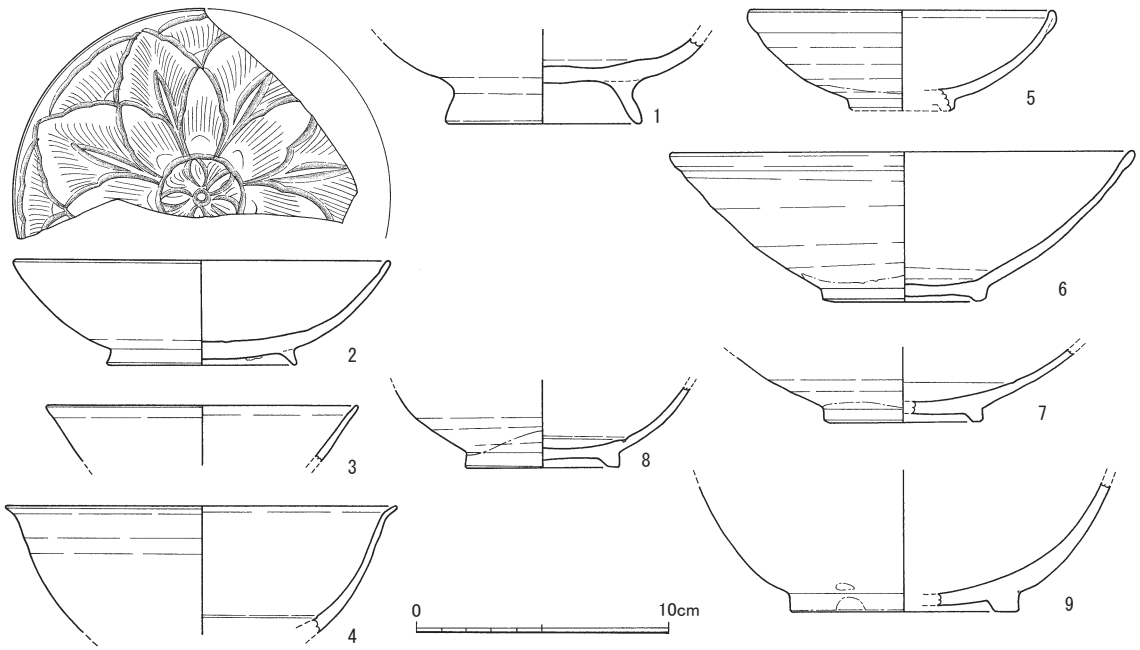
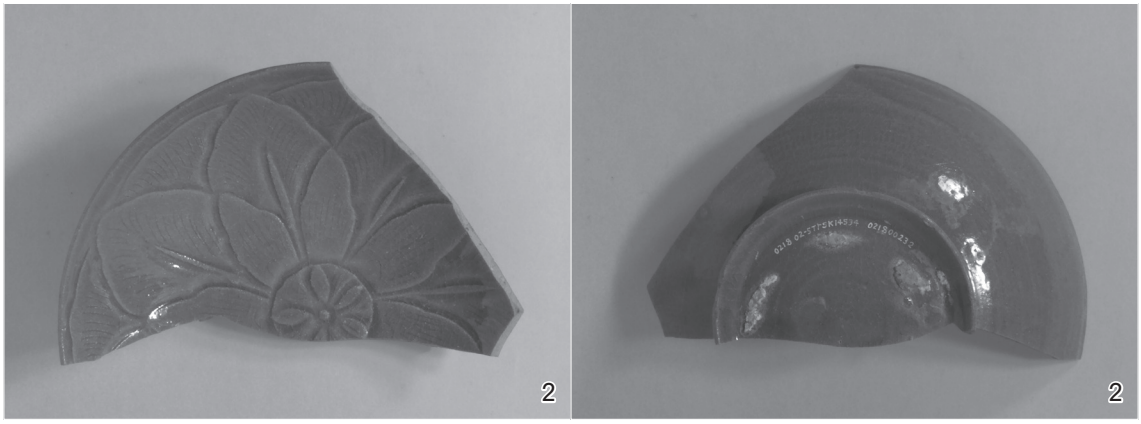


Fig.86　SK14534 出土遺物実測図（1/3）

部は玉縁状となるが、折り返したものではなく、回転撫でによって引き出したものであろう。**5～8**は、体部下位から外底部を露胎とする。胎土は緻密だが、きめはやや粗い。**9**は、大振りで鉢とするべきか。高台は、幅のある角高台である。胎土はきめ細かく精良で、純白色を呈する。釉調も均質で貫入などは全くなく、全面施釉の後、畳付の釉を掻き取る。

以上の出土遺物から、11 世紀前半の土坑と考えられる。



Ph.8　SK14534 出土遺物

その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺物の内、特徴的な遺物を、まとめて報告する（Fig.87・88）。

1は、越州窯系青磁の合子蓋である。上面には、沈線で花文を描く。

2・3は、長沙窯の青磁碗である。外底部は、露胎となる。底部は、玉璧高台に作る。

4～7は、白磁である。**4・5**は皿で、体部上半は、外側から縦にヘラ状工具で押して、輪花に作る。外底部は、露胎となる。**6・7**は大ぶりな碗である。口縁は、折り返して小さな玉縁に作る。外底部は露胎である。

8～10は国産の緑釉陶器である。**8・9**は東濃窯の、**10**は洛西窯の製品と思われる。

11は、灰釉陶器の碗である。見込みには、円形の重ね焼き痕跡がある。釉は刷毛塗りだが、ほとんど剝落している。黒笹 14 号窯式であろう。

12は、越州窯系青磁の皿である。体部はわずかしか遺存しないが、縦に歪ませており、輪花にしたものと思われる。見込みには、沈線で花文を描く。全面施釉で、外底部には目跡が並ぶ。

13は、広東青磁の碗で、梅県窯の製品と思われる。胎土は淡茶色で粗く、白化粧の上に緑色の透明釉を施す。底部中央に丸く凹線を入れ、玉璧高台に作る。梅県窯の青磁は、未だ日本国内では出土事例が極めて少なく、全国的に貴重な遺物と言える。

14は、砂金である。柱穴からの出土で、古代に属することは確実であると思われるが、共伴遺物が少なく、年代を特定することはできない。長さ 16.08mm、幅 8.9mm、最大厚 3 mm、重さ 2.75g をはかる。福岡市埋蔵文化財センターにおいて行なった蛍光Ｘ線による分析値は、Au99.5％であり、純度の高い金である。

15は、挂甲鉄小札であろう。６枚が錆付いている。Ｘ線で透過したが、綴穴は確認できなかった。札幅は、2.1 ～ 2.3cm をはかる。

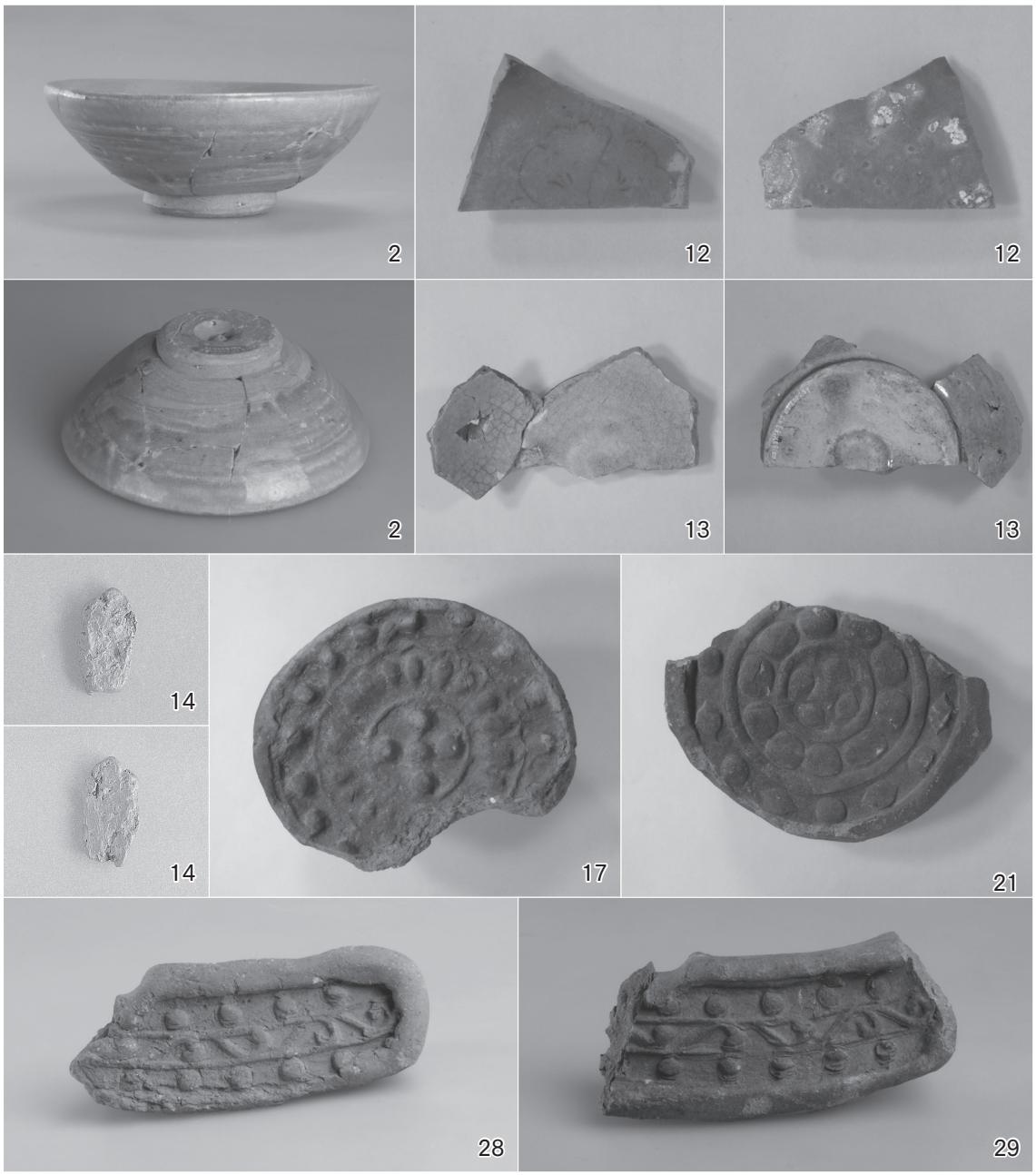
16～23は、軒丸瓦である。**16**は、鴻臚館式である。**17**は、退化した複弁を持つ。歪んだ楕円形で、外形そのものが崩れている。大宰府分類では 208Bb 形式である。**18～20**は、単弁に作る。**18**は

082A 型式に当たる。**19・20** では、花弁は複線の隆起線で示されている。**19** は 135 型式、**20** は 132 型式である。**21 ～ 23** は、花弁が失われ、楕円に変わっている。049 型式である。

24 ～ 32 は、軒平瓦である。**24・25** は鴻臚館式、**26** は老司式である。鴻臚館式の平瓦の凸面には部分には、2B 類に分類される縦方向の平行叩きが見られる。**27 ～ 32** は、**21 ～ 23** の軒丸瓦に対応する型式であろう。退化した唐草文が配される。上面の中ほどに、指で押さえ込んだ溝が見られる。大宰府分類 605 型式である。

33・34 は、平瓦である。崩れた斜格子に文字様の叩打が加えられている。3Bd 類である。

35 は、丸瓦である。崩れた網状の斜格子叩きが施されている。6E 類であろう。（大庭）



Ph.9　その他の出土遺物

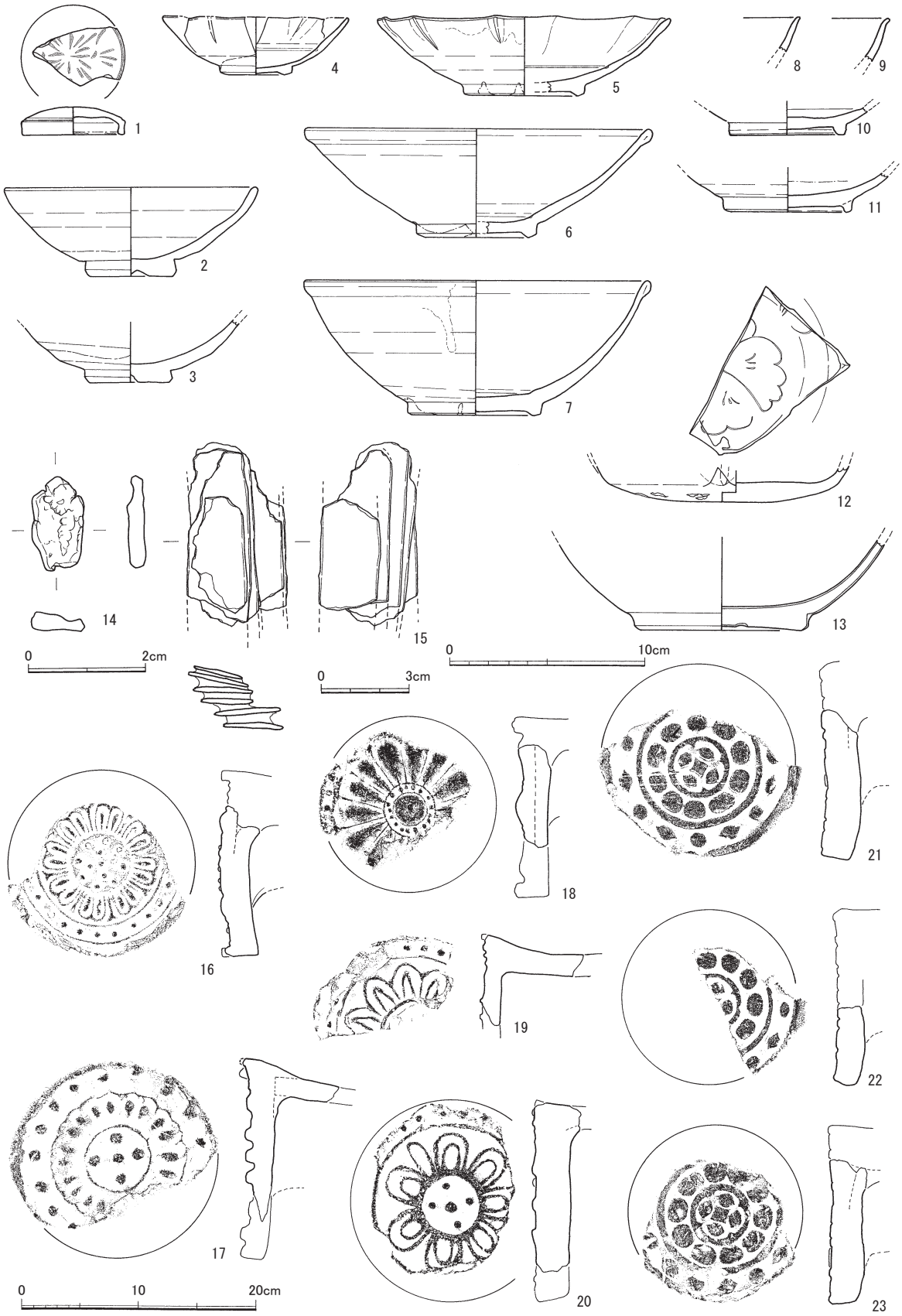


Fig.87　その他の出土遺物実測図１（1/3、14-1/1、15-1/2、16 ～ 23-1/5）

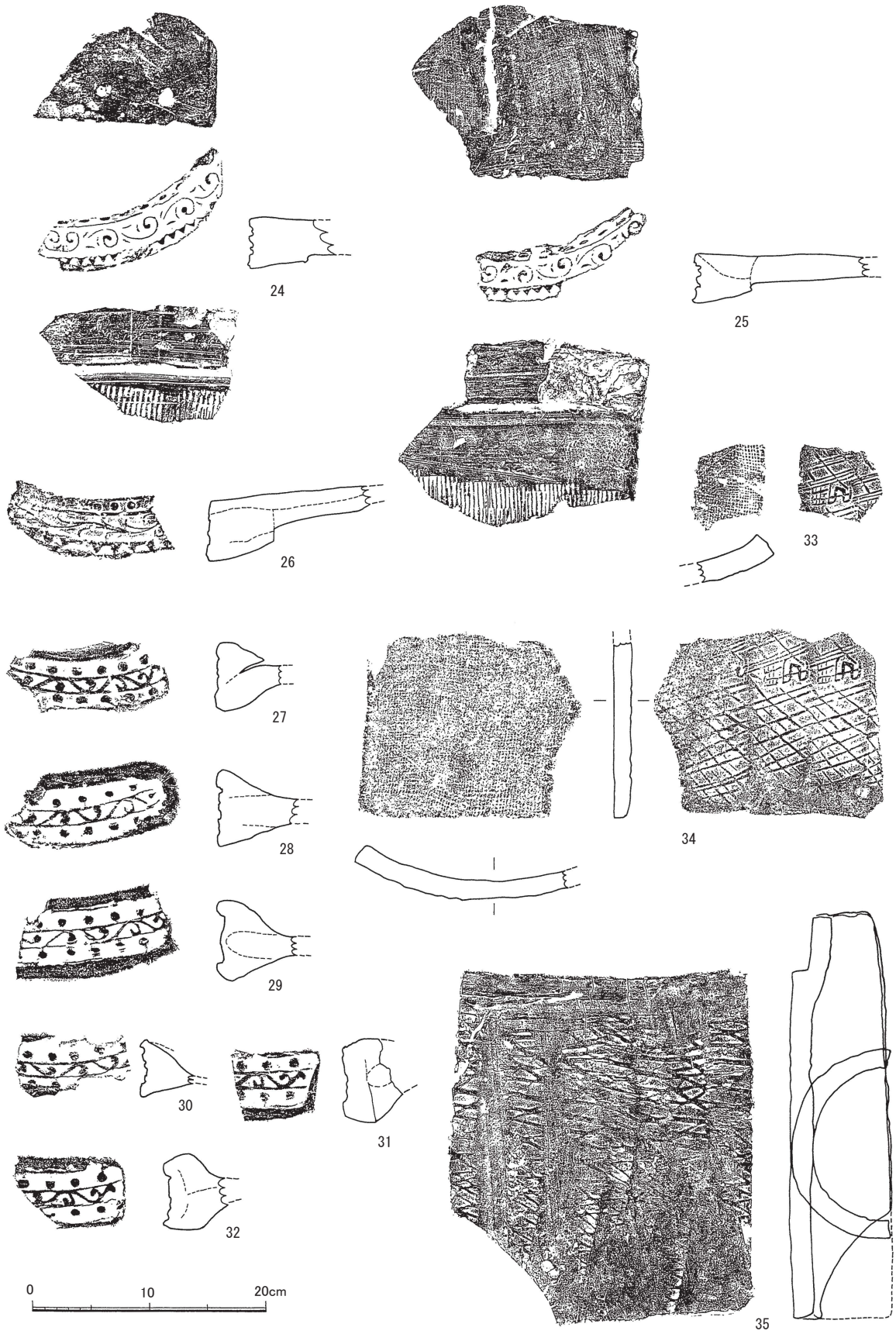


Fig.88　その他の出土遺物実測図２（1/5）

（5）第 23 次調査（0502）

第Ⅳ期調査区の東端に位置し、平成 17 年度に調査を行い、概要は『鴻臚館跡 17』に報告している。平成 16 年度調査（0415）の下層部分にあたり、調査面積は 1,520㎡である。

遺構検出面は、基本的に茶褐色の粘質土で、盛り土整地面である。西から東に大きく三段に下降するが、中世の屋敷地造成にかかる段切り造成によるものである。しかし、古代においても調査区東側に大きな谷が存在したことは 1963・1964 年の第 2 次調査から明らかであり、中世の段切り造成は古代の地形を利用したものであったことが推測できる。

中世の遺構としては、谷斜面を登る堀（堀底道）、段切り造成、溝、土坑、柱穴などを検出した。

古代の遺構としては、柱穴、広場状造成面、石垣を調査した。また、古代に属する可能性を持つ土坑、数基を調査したが、明らかに古代に属することを示す遺物は得られなかった。『鴻臚館跡 22』に示された北館の建物遺構や地形造成を考えると、第 23 次調査地点は鴻臚館客館東正面の導入路部分にあたり、ごみ穴など廃棄土坑を掘った可能性は低いのではなかろうか。

本報告書においては、遺構としての報告は行わず、看過できない出土遺物の報告を行うにとどめる。

包含層出土遺物

1 は、白磁碗である。外底部は露胎で、「李」の墨書が書かれている。中国人の姓を記した墨書陶磁器は、博多遺跡群では大量にみられるものであり、日宋貿易において、貨物積載の時点で、積み

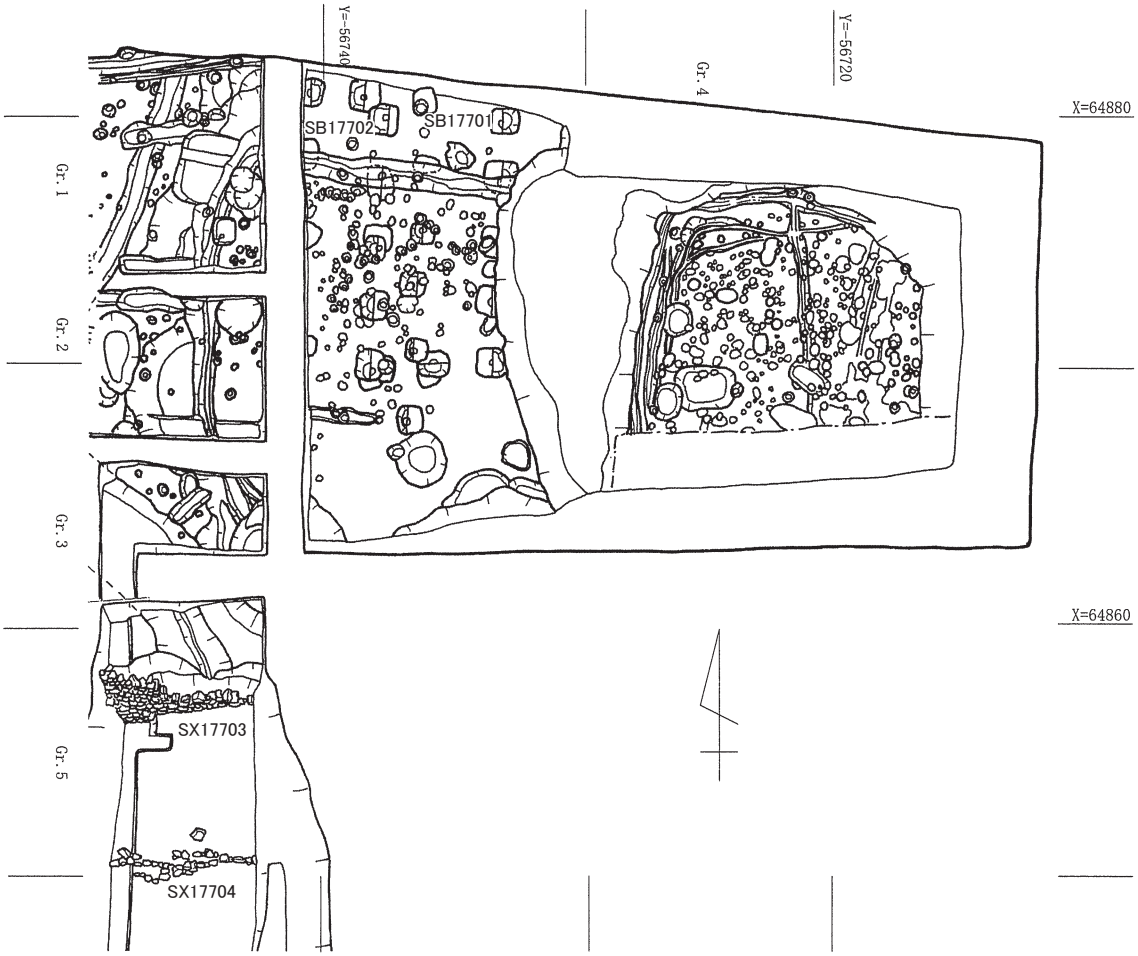


Fig.89　第 23 次調査　下層遺構配置図（1/300）

荷の帰属を表すために記したものと考えられている。鴻臚館跡の発掘調査では、これまでの調査で「綱」・「呉」・「鄭」などの墨書が各一点ではあるが出土している。

2～9 は、挂甲の鉄小札である。錆が著しかったため、孔の位置は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、片多雅樹氏（現長崎県埋蔵文化財センター）のご協力を得てX線撮影し、確認した。小札には綴孔の配列から、図番号と同じく8種類がある。綴じた状態で出土しているのは、頭側から中央2孔－左右2孔－中央2孔－左右2孔－左右1孔のタイプで、5枚の小札がそれぞれの右側の孔と左側の孔を重ねた状況で錆着している。これには、内側の上部に中央2孔－左右2孔－中央2孔の小型の小札が、札をまたいで綴付けられている。小札は、革紐等で綴じ合わせたものと思われるが、綴じ紐の遺存は確認できなかった。法量は、**2** で長9.6㎝・幅1.5㎝、**5** では長9.0㎝・幅1.7㎝、**9** は長5.8㎝・幅2.3㎝である。小型小札の **8** は、同型と思われる **5** の内側に綴付けられた小札から、長4.5㎝・幅1.2㎝と推定される。

10 は、水銀である。掘立柱建物SB17701の柱穴SP17157調査時に、柱穴に接した土中から水銀が染み出してきたため、土壌ごと掘り上げて抽出した。採取できた水銀は、192ｇである。（大庭）

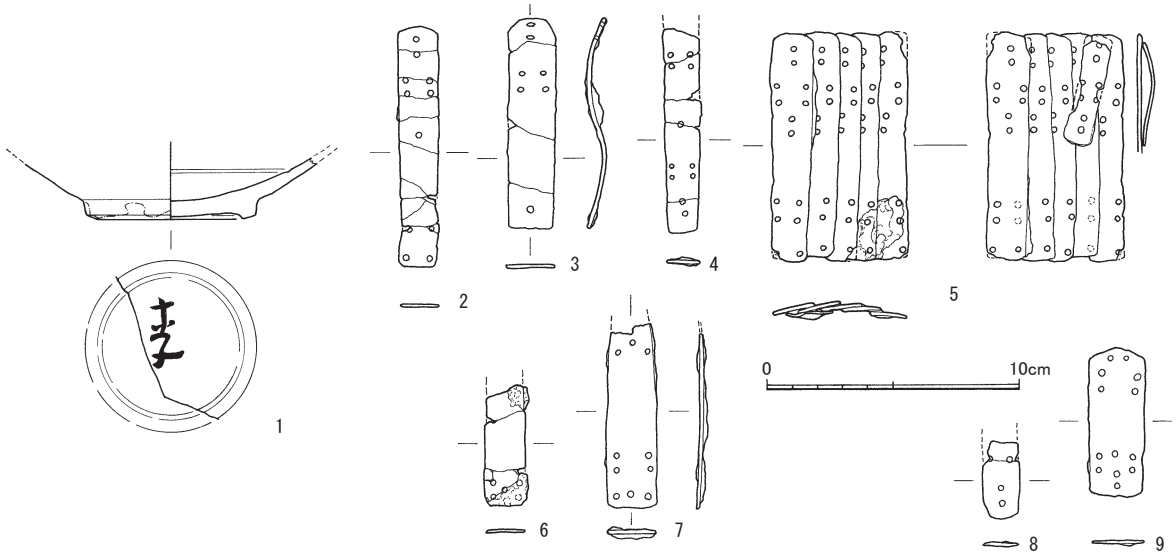
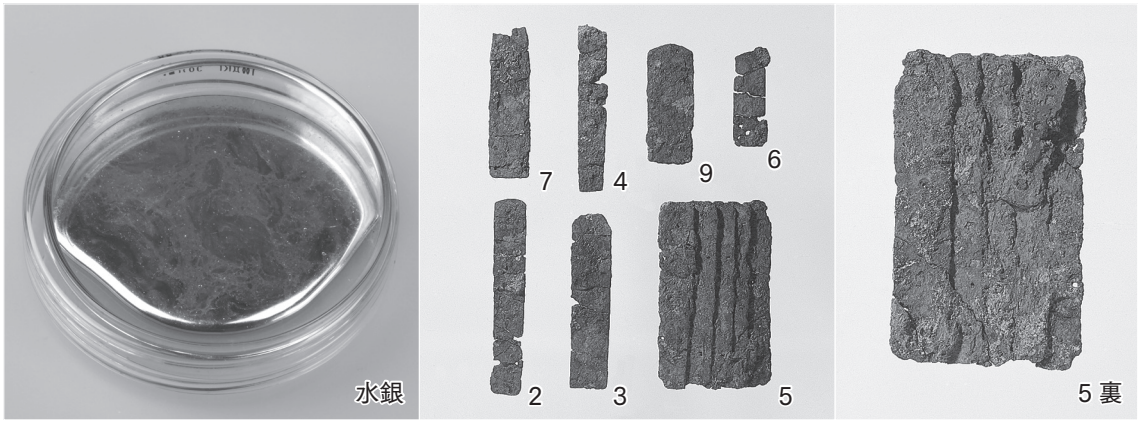


Fig.90　第23次調査　包含層出土遺物実測図（1/3）



Ph.10　第23次調査包含層出土遺物

（6）第 24 次調査（0617）

概要　Fig.91

第 24 次調査はトレンチ 2 を対象として平成 19 ～ 20 年度に実施した。トレンチの南側約 1/4 ほどで台地が北へ落ち、北半は海へと続く砂丘となる。トレンチの南側では遺構面が風化頁岩岩盤で、古代から近代までの遺構が重複して検出されるが、これに対して北半は近世初頭の福岡城築城時に厚く盛土整地されており、遺構面が 2 面に分けられる。すなわち上層が近世～近代の遺構面で、厚さ 3.4 m の築城盛土を挟んで下層が古代～中世の遺構面である。

調査区南側約 1/4 の範囲は風化頁岩岩盤が遺構検出面で、柱穴や土坑等の古代遺構を確認した。Fig.91 の SK18286 のあたりから斜面 SX18600 にかけて近世盛土に覆われているが、この部分は近世築城前に削平を受けたと考えられる部分で、本来は岩盤面が水平に SX18600 の落ち際まで連続していたものと考えられる。

建物関係遺構としては前年度に報告した布掘り塀 SA18601、北へ向かって落ちる斜面 SX18600 がある。今回報告する遺構は台地上の岩盤面で確認した土坑 10 基で、大半が瓦を廃棄するために掘られた廃棄土坑である。

Ph.11　第 24 次調査区南半部の遺構（南から）

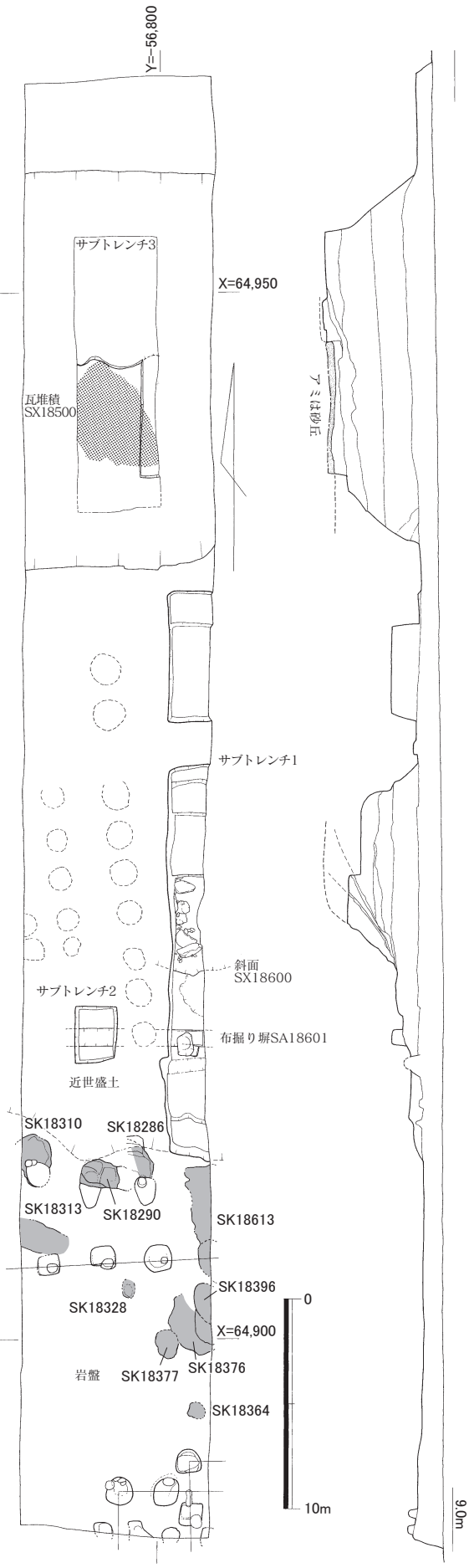


Fig.91　第 24 次調査　下層遺構配置図（1/300）

土坑 SK18286　Fig.92

今回報告の一連の土坑群のうち最も北側に位置する遺構である。割れた瓦を処理するために掘った廃棄土坑であろう。遺構の北端部分は削平を受け、近世盛土に覆われている。遺構の西側は野球場土管埋設による攪乱溝に破壊されている。南側には先行する古代の柱穴 SP18400 がある。遺構面は風化頁岩岩盤である。方形プランをなすものとみられるが、後世の破壊等により不明確である。底面は平坦で、中央南寄りに浅く窪む部分がある。現状で南北長約 2 m、東西長 1.1 m以上を測る。断面形は逆台形状で浅く、遺構検出面から底面まで最大 20㎝が残る。土坑覆土は暗褐色粘質土で、割れた瓦片を多量に含む。

SK18286 出土遺物　Fig.93・94

土師器（椀）、須恵器（壺他）が数点、瓦がコンテナ 5 箱出土した。

1 は土師器高台付き椀である。**2** は鴻臚館式（223 型式）軒丸瓦で磨滅が著しい。**3** は 243a 型式軒丸瓦で丸瓦との接合部から剥がれる。**4** は軒平瓦で 662Ab 型式。平瓦凸面の敲打痕は摩滅して不明瞭。**5**～**8** は丸瓦の小片で、凹面は布目が付く。凸面の敲打痕は **5** が縄目で他は斜格子目である。鴻臚館跡敲打痕分類では **6** が 3Aa2-1、**7** は不明で内外面に自然釉がかかる。**8** は摩滅して不明瞭。**9**～**13** は平瓦で凹面は布目が付く。凸面の敲打痕は **9**・**10** が縄目叩き、**11** が斜格子 3Aa1-2、**12** が斜格子 5B、**13** はナデ調整により不明瞭。鴻臚館跡第Ⅳ～Ⅴ期の遺構とみられるが、詳細時期は不明である。

（瓦の敲打痕分類は『鴻臚館跡 21』P14 ～ P41 による。）

Fig.92　土坑 SK18286 実測図（1/20）

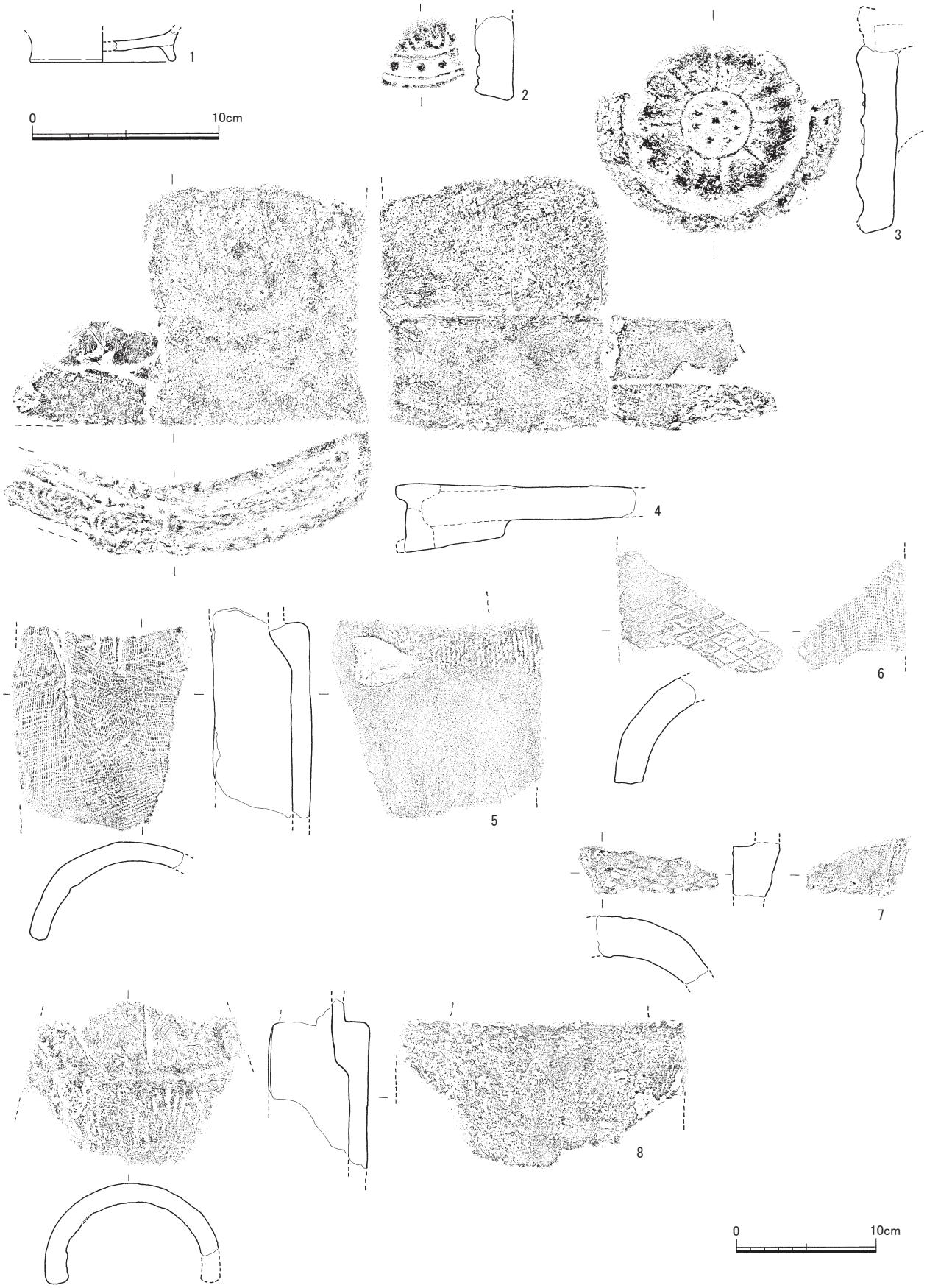


Fig.93　SK18286 出土遺物実測図 1 （1 は 1/3、他は 1/4）

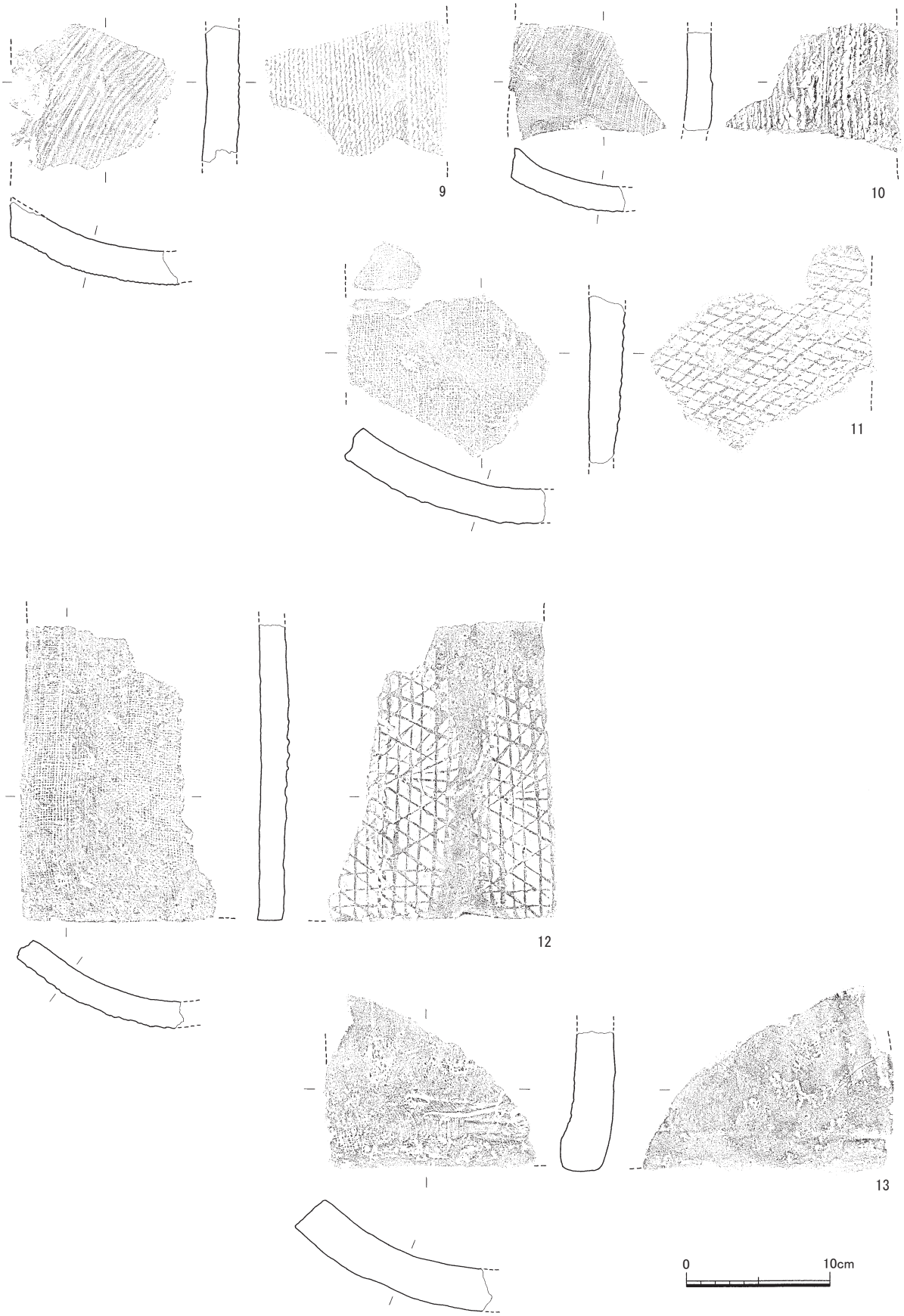


Fig.94　SK18286 出土遺物実測図２（1/4）

土坑 SK18290　Fig.95

攪乱溝を挟んで土坑 SK18286 の西隣りに位置する。東西に長い隅丸長方形プランを呈し、南北長 1.3 m、東西長 2.2 mを測り、東端は攪乱溝に切られるが攪乱溝（幅 50㎝）の東側までは遺構が及ばないため、東西長 2.3 ～ 2.4 m程度と考えられる。下層に柱穴状の遺構 SP18295 があり、遺物がやや沈み込むため西端は SP18295 まで少し掘り過ぎた。断面形は浅い皿状を呈し、底面は平坦でなく凹凸があり、最も深い部分で遺構面から 30㎝を測る。遺構覆土は暗褐色粘質土で、割れた瓦を多量に含む。瓦を処理するために掘られた廃棄土坑であろう。

SK18290 出土遺物　Fig.96・97

土師器（椀他）、須恵器（坏・壺他）、中国産陶磁器（白磁・越州窯系青磁）、中世土器（瓦質土器・陶器）、近現代遺物、鉄滓が少量、瓦がコンテナ 25 箱出土した。

14 は陶器壺で口縁部が外に折れて鍔状に肥厚し、体外面には沈線 4 条が巡る。色調はあずき色で胎土に白色微粒子を含む。タイ産か。**15** は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片で、内面に片切彫で施文する。

16・17 は軒平瓦の瓦当小片で、磨滅が著しいが **16** は 662 型式、**17** は 601A 型式か。**18 ～ 23** は丸瓦で、**19** は内外面に、**20** は外面に意図的に施釉する。瓦凸面の敲打痕分類は **18 ～ 20** は不明、**21** は 3Aa2-1、**22** は 3Ab-6b、**23** は 5A である。**24 ～ 31** は平瓦で、敲打痕分類は **24・25** が縄目で **24** は縄目が粗い。他は斜格子目で、**26** が 3Aa2-2、**27** が 3Aa2-1、**28** が 3Aa1-3、**29 ～ 31** が 5B である。側面調整が観察できる平瓦では **25** がヘラ調整、他はいずれも切り込みによる載面と押し割りによる破面が残る。

中世～近現代遺物をかなり含むが混入品と考えられ、古代の土坑であろう。

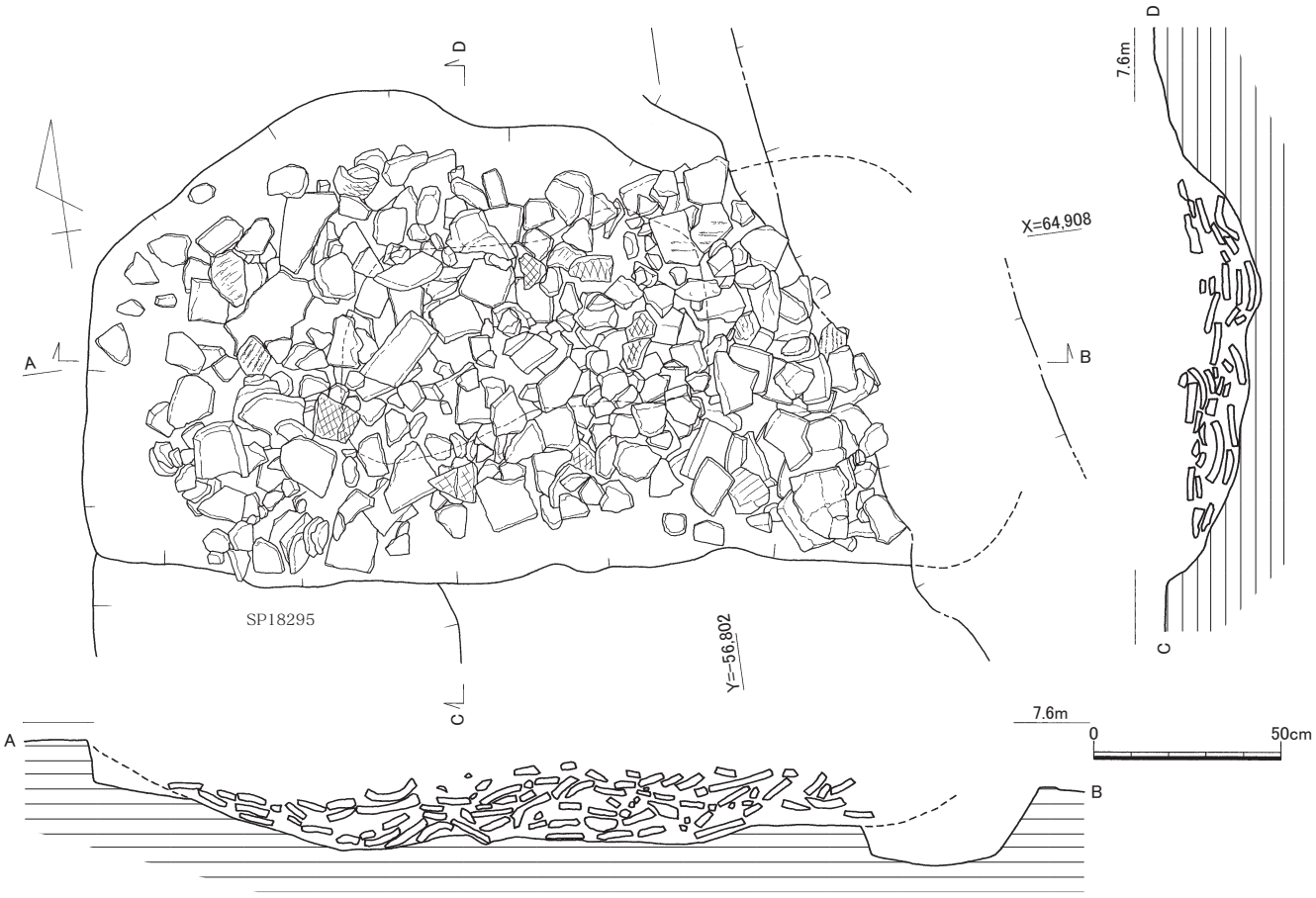


Fig.95　土坑 SK18290 実測図（1/20）

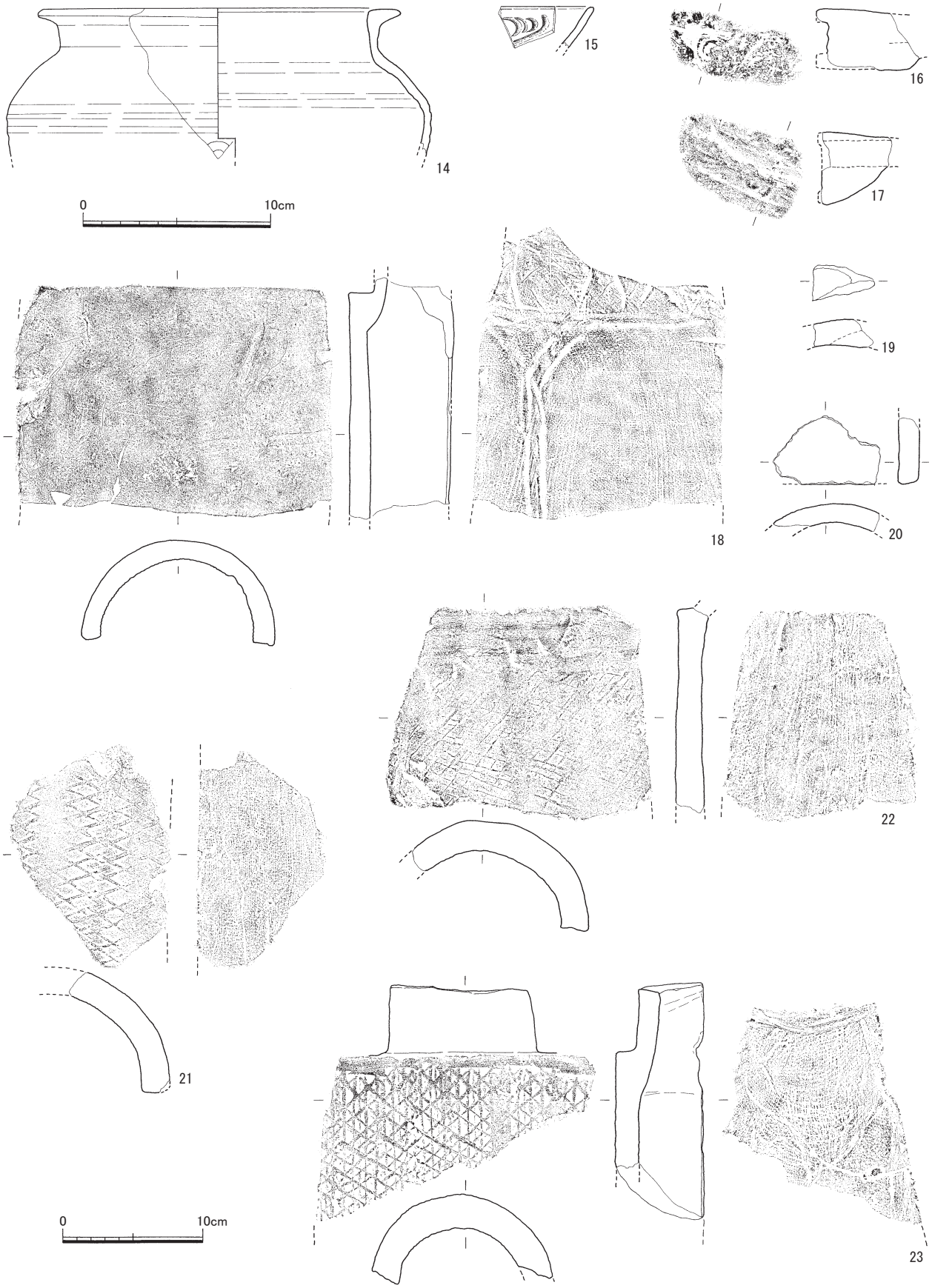


Fig.96　SK18290 出土遺物実測図 1（14 ～ 15 は 1/3、他は 1/4）

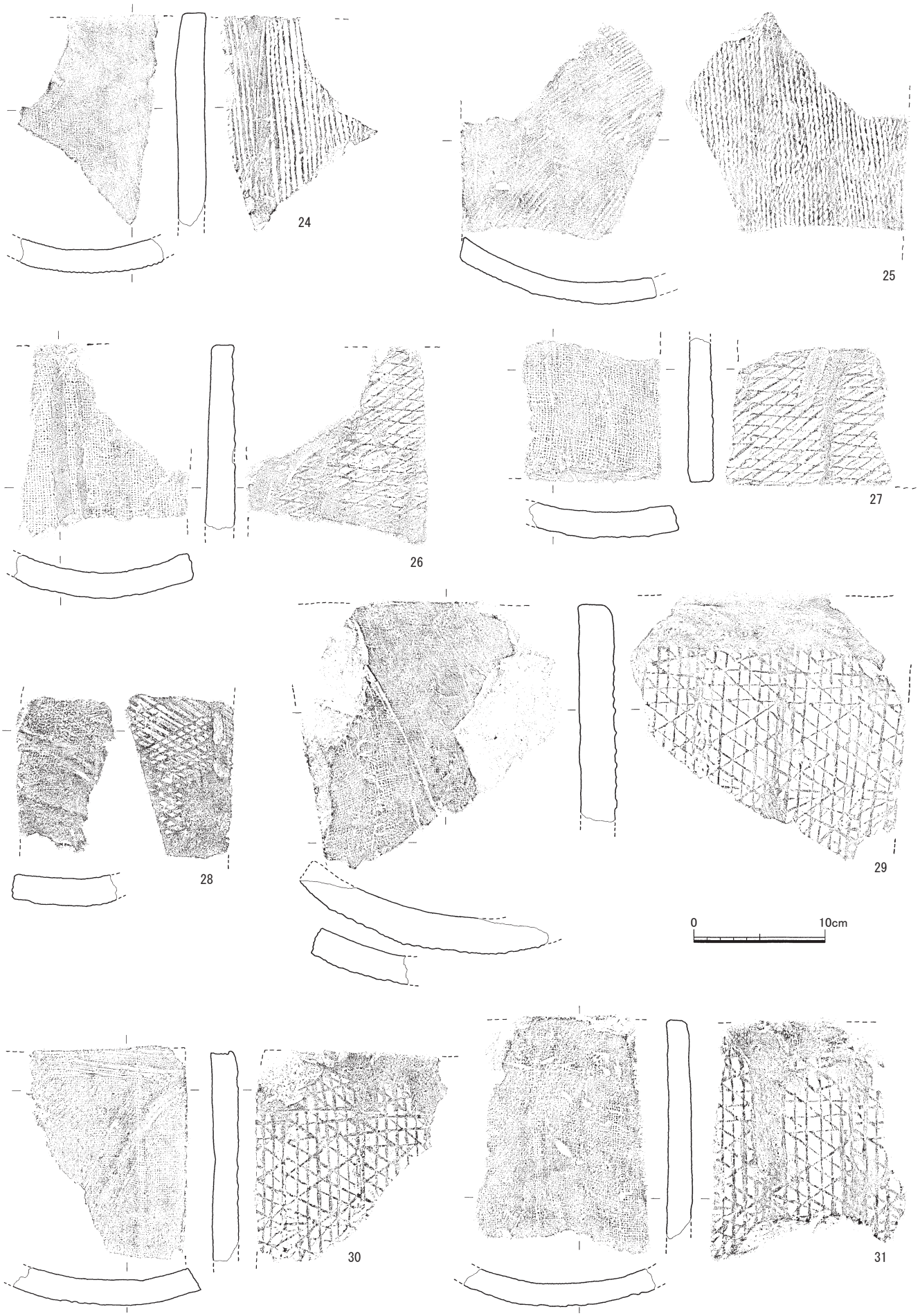


Fig.97　SK18290 出土遺物実測図２（1/4）

土坑 SK18310　Fig.98

SK18290 の西に約 1.5 m離れて検出した廃棄土坑である。風化頁岩岩盤に掘り込む。調査区壁際に位置しており、西端は調査区外に伸びる。平面形や深さの違いから２基の切り合いと考えられ、北側を SK18310a、南側を SK18310b とする。ｂが先行する。**SK18310a** は不整な隅丸方形で、西端は調査区壁にかかり攪乱に切られ、北端にも攪乱坑がある。南北 1.8 m、東西 1.8 m以上。断面形は浅い皿状で深さ 15㎝ほどが残り、底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色粘質土で瓦が密に詰まる。底面に貼り付いた瓦１枚の層の上に炭化物が厚さ１㎝前後堆積するが全面には及ばず、土坑の南東部分にのみに堆積層がみられ、この層が SK18310b の上面を覆っている。**SK18310b** は円形で、中央～東は攪乱坑・攪乱溝に切られ、径 1.15 m、深さ 20㎝弱。SK18310a と切り合う部分に浅い窪みが２つある。底面に貼り付いて炭化物の層が厚さ２～３㎝に堆積しており、その上に瓦を廃棄しているがａに比べると瓦の量は少ない。火災等で毀損した瓦等の建築材をまとめて廃棄した土坑であろうか。

SK18310 出土遺物　Fig.99・100

土師器(坏・椀)、須恵器(高坏・坏他)、近世陶器(唐津)、鉄滓が少量、瓦がコンテナ 20 箱出土した。

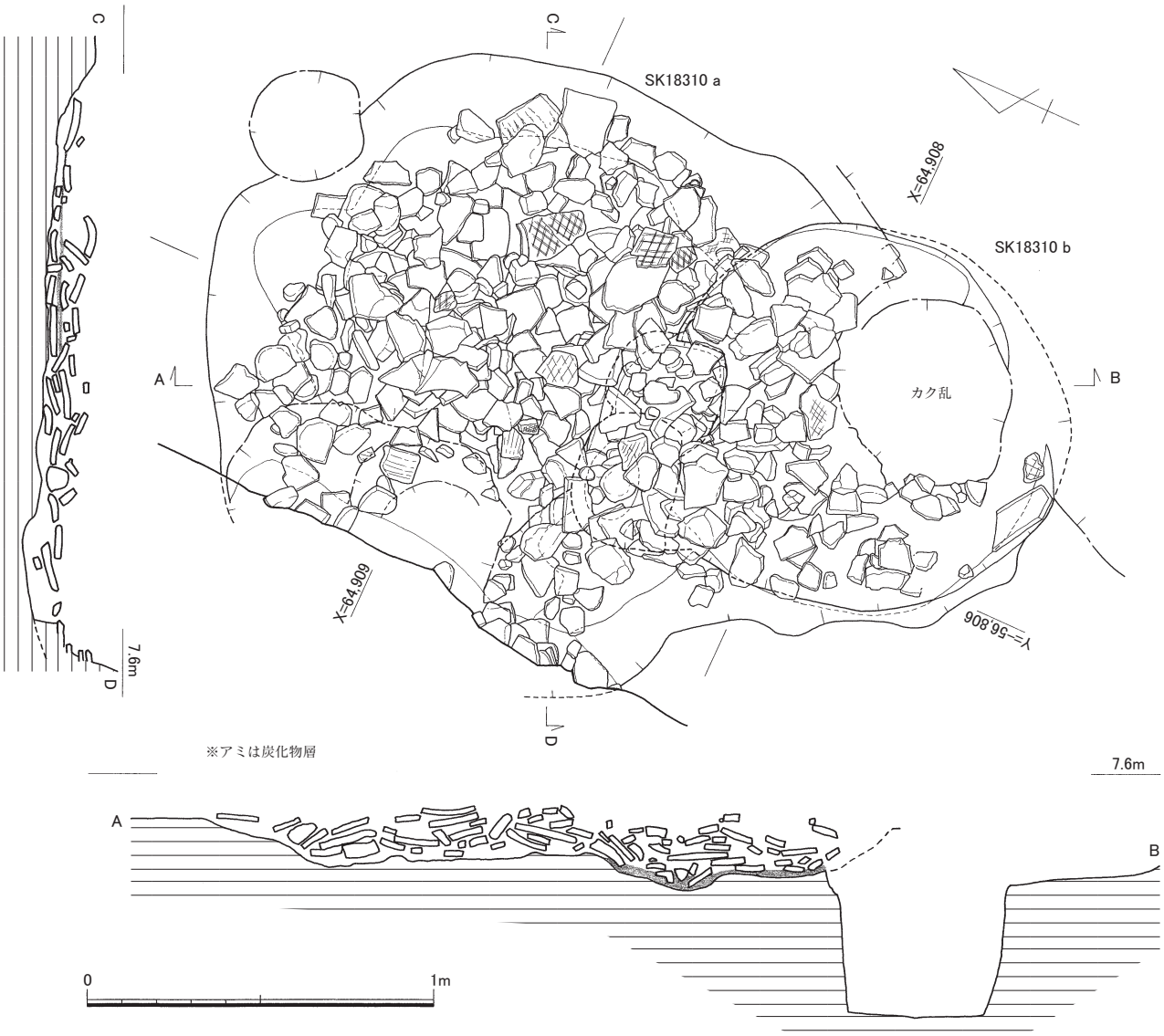


Fig.98　土坑 SK18310 実測図（1/20）

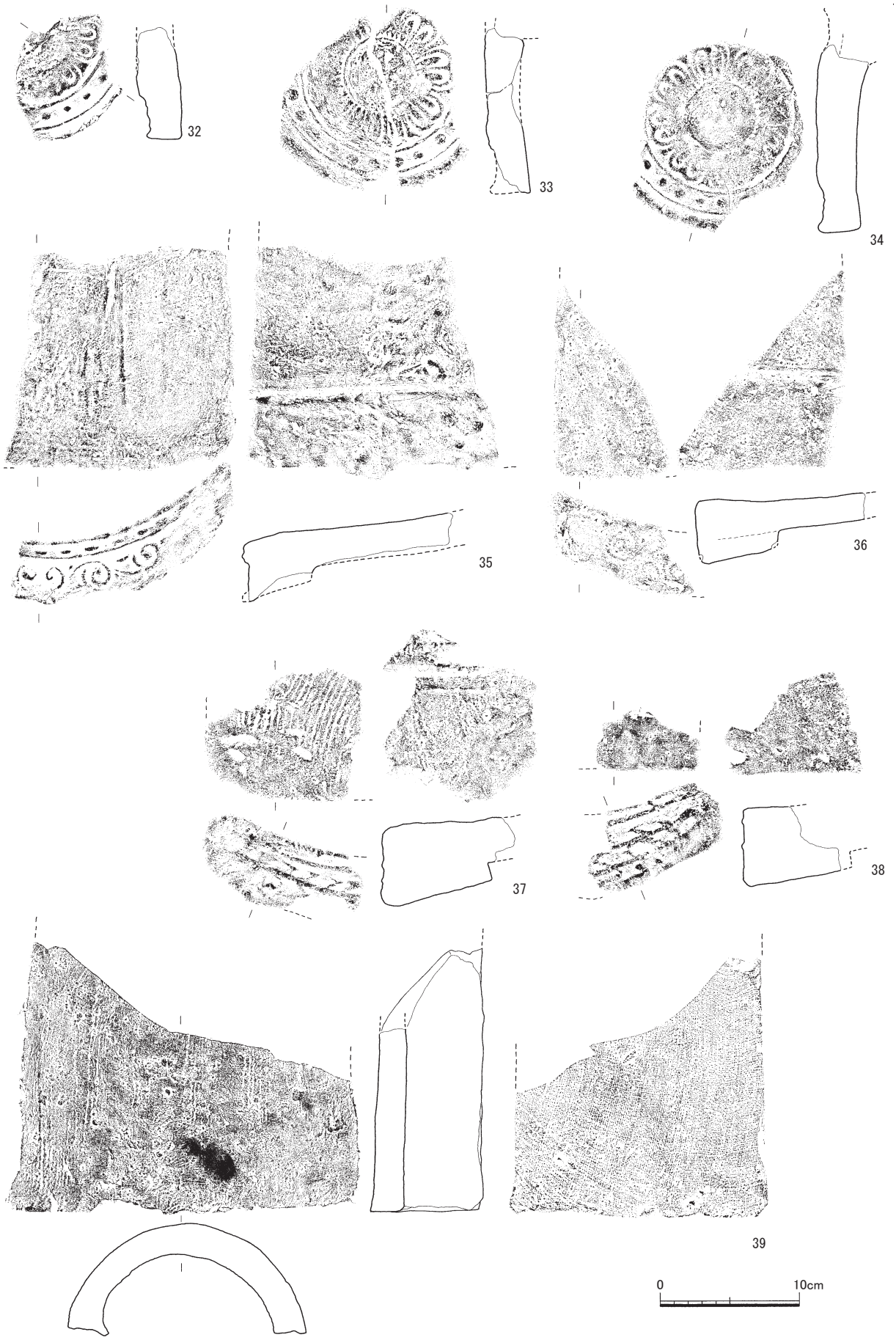


Fig.99　SK18310 出土遺物実測図１（1/4）

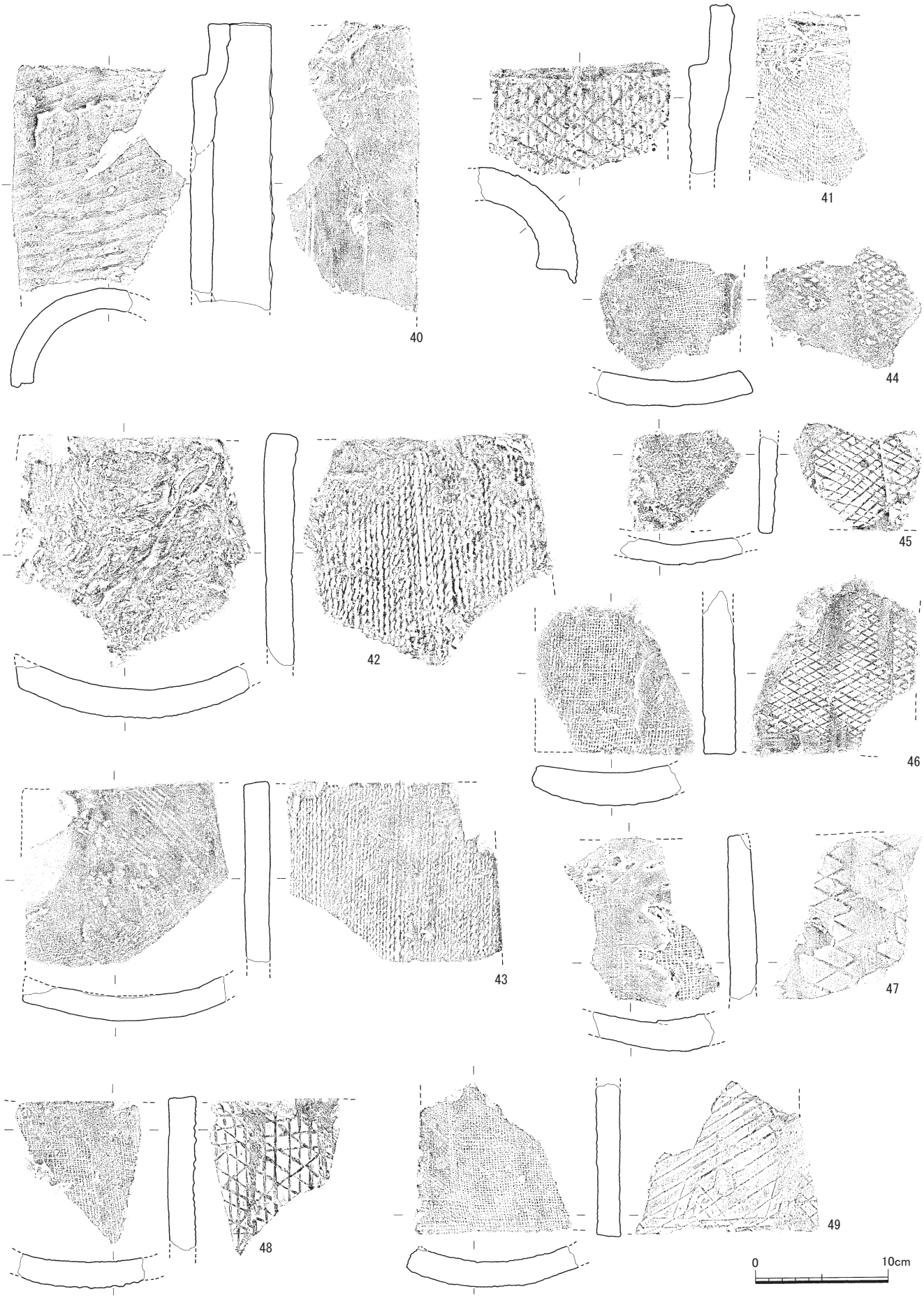


Fig.100　SK18310 出土遺物実測図２（1/4）

32 ～ 34 は鴻臚館式（223 型式）軒丸瓦でいずれも磨滅が著しい。丸瓦との接合部から剥がれるものが多い。**35 ～ 38** は軒平瓦で、**35** は鴻臚館式（635 型式）、**36** は 662 型式、**37・38** は大宰府分類にない型式で『鴻臚館跡 21』Fig.37-49 に示した綾杉状の幾何学文を施す軒瓦である。**39 ～ 41** は丸瓦、**42 ～ 49** は平瓦である。瓦凸面の敲打痕分類は **39・42・43** が縄目、他は斜格子目で **40** は 2C、**41** は 5A、**44** は 3Aa1-1、**45** は 3Aa2-1b、**46** は 3Aa1-2、**47** は 3Ab-2、**48** は 5B、**49** は 6C である。側面調整が残る平瓦では、縄目叩きの **42・43** はヘラ調整、他はいずれも載面と押し割りによる破面がある。

近世陶器が混入するが鴻臚館跡第Ⅳ～Ⅴ期（9 世紀後半～ 11 世紀前半）の遺構であろう。

土坑 SK18313・18385　Fig.101

SK18310 の南に約 2 m離れて検出した。調査区壁際に位置しており、西端は調査区外に伸びる。瓦が集中して出土した部分を瓦溜まりとして認識したが、掘り方は不明瞭である。調査区壁際に瓦が集中する部分を SK18313、これと間を置いて東側に少し集中する部分を SK18385 としたが、一連の遺構と捉えれば東西に長い溝状のプランをなすものと考えられ、東西長 3 m以上を測る。西側は調査区外に伸び、東半は削平が著しく掘り方は明確でない。南北幅は最大 1.4 m。西側を攪乱溝と近世ピットに切られる。覆土は暗褐色粘質土で、瓦は西側の調査区壁際に集中する傾向にある。

SK18313・18385 出土遺物　Fig.102

土師器（坏）、須恵器（坏）、中国産陶磁器（白磁・越州窯系青磁・景徳鎮窯白磁）、中世土器（口禿白磁・土師器・須恵器）、近世陶器（唐津）、鉄滓が少量、瓦がコンテナ 4 箱出土した。

Fig.101　土坑 SK18313・18385 実測図（1/20）

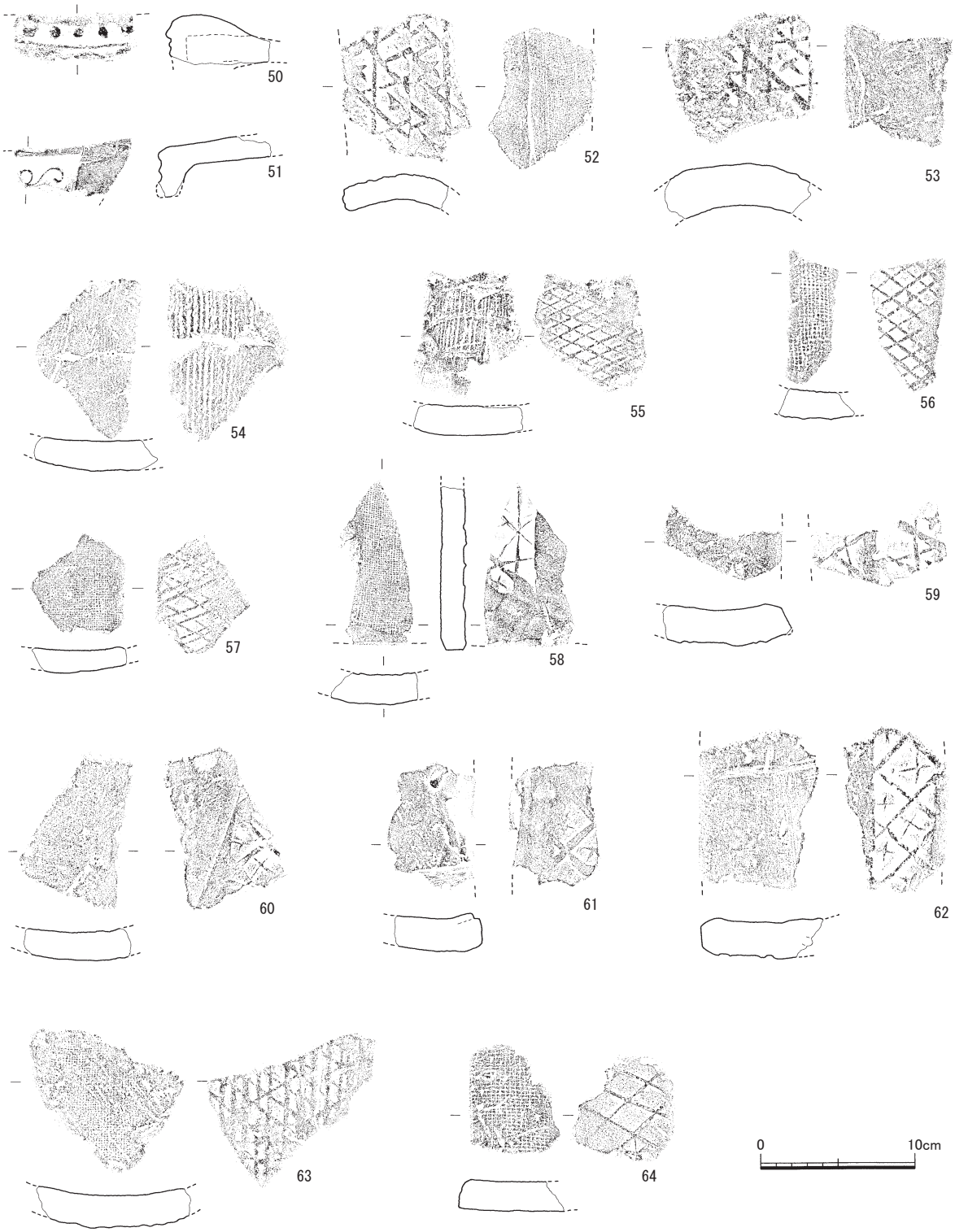


Fig.102　SK18313・18385 出土遺物実測図（1/4）

50・51 は軒平瓦の瓦当小片である。**50** は型式不明。**51** は福岡城の近世瓦で混入遺物であろう。

52・53 は丸瓦で凸面には斜格子目敲打痕 4A がある。**54 ～ 64** は平瓦である。凸面の敲打痕は **54** が縄目、他は斜格子目で **55** が 3Aa1-2、**56** が 3Aa2-1b、**57** は小片で不明瞭だが 3Ab-6b か、**58・59** は 4A、**60 ～ 62** は 4Bb、**63** は 5B、**64** は 3Ab-2 である。平瓦側面の調整痕が残るものでは **59・61・62** がヘラ調整、**64** は押し割りによる破面が認められる。第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）の遺構であろう。

土坑 SK18328　Fig.103

トレンチ２南端から北へ 11 ｍに位置する。近世～近代の遺構に破壊・削平されており遺構の残りが極めて悪いが、瓦の廃棄土坑とみられる。風化頁岩岩盤に掘り込む。平面プランは不明瞭で、南北長 0.7 ｍ以上、東西長 0.4 ｍ以上になると考えられる。深さ 5 ㎝前後で、底面は平坦で、瓦も水平に堆積する。

SK18328 出土遺物　Fig.104

瓦が少量出土し、ほぼ１個体に接合した。

65・66 は平瓦である。**65** は一部を欠失するが全体形がうかがえる資料で、長 34.2㎝、幅 25.7㎝、厚さ 1.7㎝を測る。片側面に瓦の厚みの約 1/4 に切れ込みを入れ、押し割った破面が認められる。凹面には布目圧痕が残り、凸面敲打痕の分類は単線斜格子目 3Aa2-1 である。**66** の敲打痕は 4Bb で、鴻臚館跡第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）の北館に多く出土するタイプである。

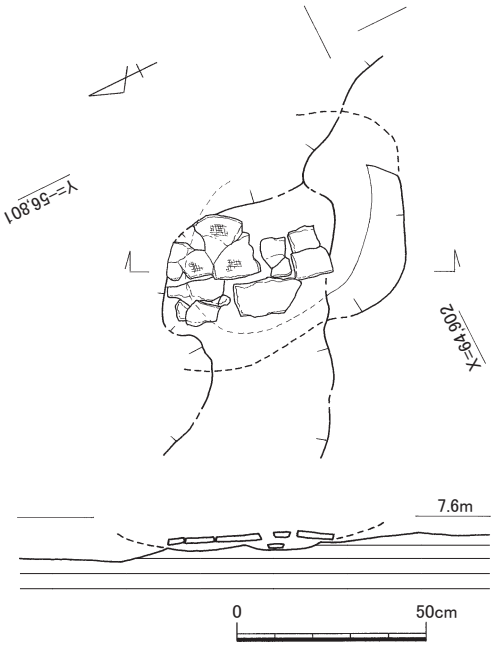


Fig.103　土坑 SK18328 実測図（1/20）

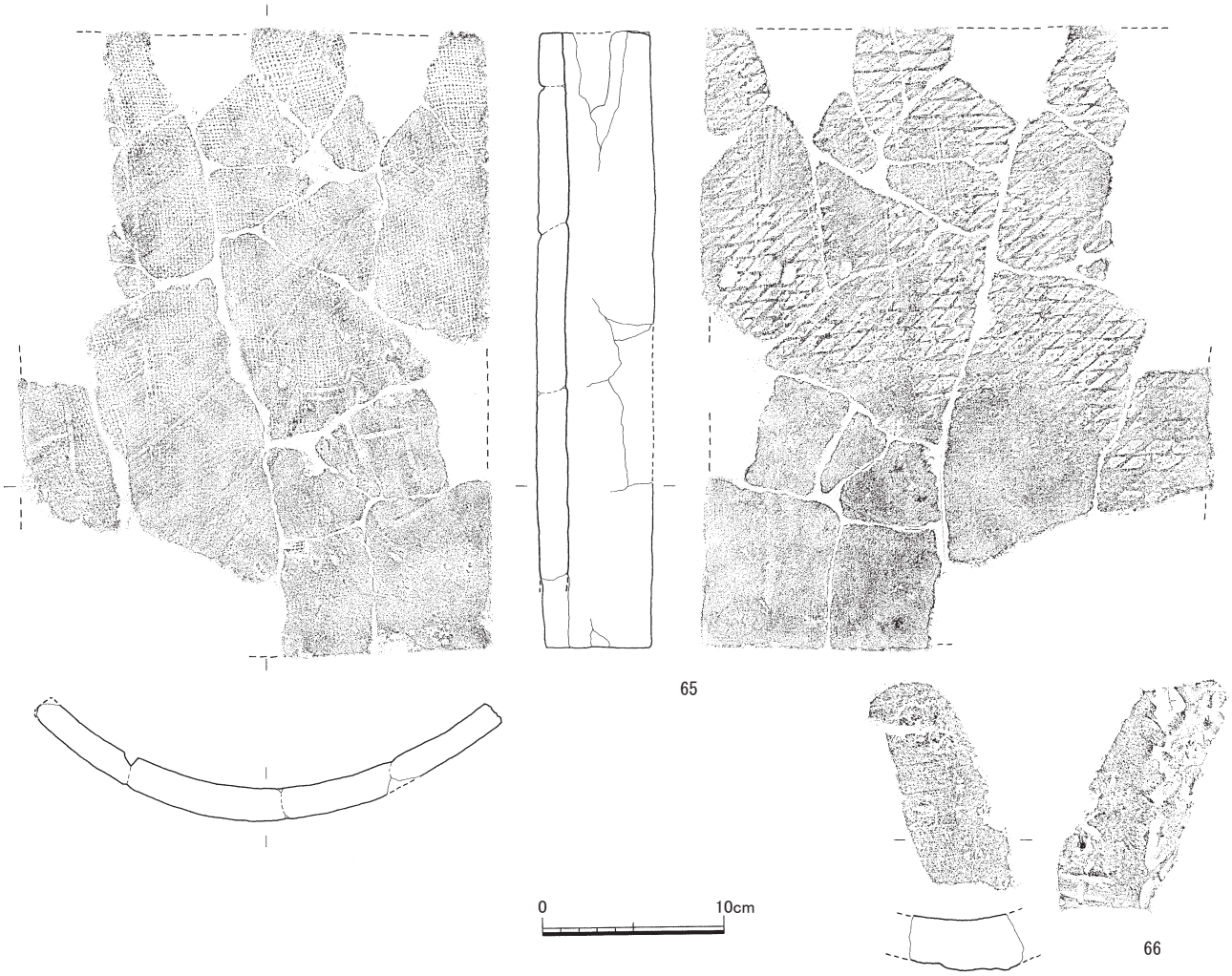


Fig.104　SK18328 出土遺物実測図（1/4）

土坑 SK18364　Fig.105

調査区南端から北に６ｍの東壁際に検出した。今回報告する遺構のうち最も南寄りに位置する土坑である。周縁を近世柱穴や近代攪乱に切られており平面プランが明瞭ではないが、不整な円形をなすものとみられ、現状で南北径 0.8 ｍ、東西径 0.7 ｍを測る。断面逆台形を呈し深さ 20㎝で、底面は狭い楕円形をなす。覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土で、瓦を多量に含む。

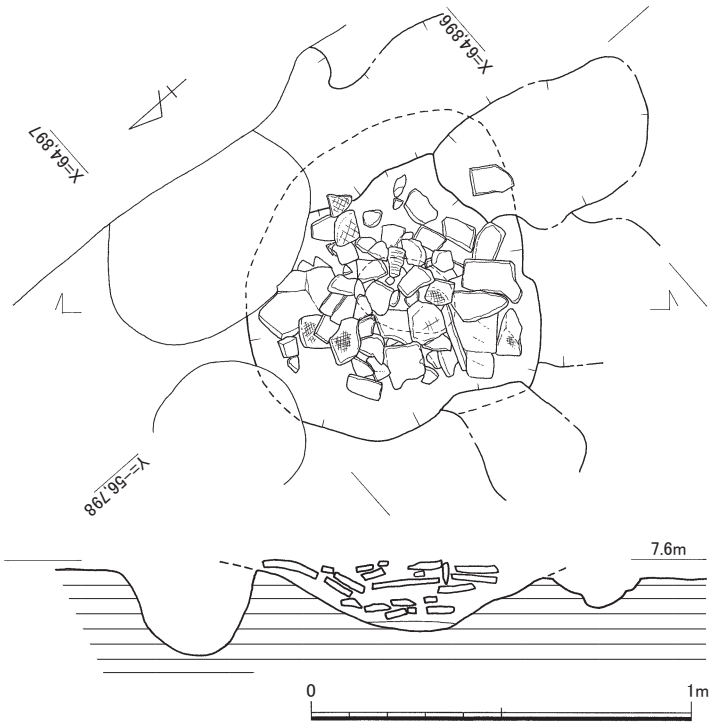


Fig.105　土坑 SK18364 実測図（1/20）

SK18364 出土遺物　Fig.106

土師器椀等の小片３点と、瓦小片がコンテナ１箱出土した。

67 は丸瓦片で、凸面の敲打痕は斜格子目 3Aa2-1b。**68 ～ 75** は平瓦で凹面に布目痕が残る。凸面の叩打痕は **68** が縄目で他は単線斜格子目である。敲打痕分類は **69** が 3Aa1-1、**70** は小片で不明瞭だが 6H か、**71** が 3Aa2-1b、**72・73** は不明瞭、**74** が 3Ba1、**75** が 6J である。平瓦の側面調整痕が観察できるものでは **68・74・75** はヘラ調整、**69・70・73** は押し割りによる破面を残す。

鴻臚館跡第Ⅳ～Ⅴ期の土坑とみられるが、詳細時期は不明。

土坑 SK18376　Fig.107

調査区南端から北へ９ｍ離れた東壁際に位置する。遺構検出時には SK18376・18377・18396 の範囲に瓦の堆積が広がっていたため一連の瓦溜まりと捉え SK18343 としたが、精査の結果４基の土坑が重複した遺構であることが判明した（SK18396 は更に２基が切り合う）。いずれの土坑も風化頁岩岩盤に掘り込まれている。SK18376 は SK18396 を切るが、SK18377 との先後関係は明確でない。SK18376 は南北に長い楕円形プランと考えられるが、東半を近代攪乱溝に破壊されており全体形は不明である。中央部や南北端にも攪乱が切り込んでいる。南北長３ｍ以上、東西長 1.1 ｍ以上を測る。深さは 10㎝以下で浅く、底面には浅い凹凸がある。遺構覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土で、削平が著しいためか瓦はさほど集中する印象は受けない。

SK18376 出土遺物　Fig.108

土師器（坏）、須恵器小片、中国産陶磁器（越州窯系青磁）が少量、瓦がコンテナ５箱出土した。

76 は越州窯系青磁壺類か。底部は円盤状をなす。体外面のみ施釉し、体外面下端から外底及び内面は露胎である。

77 は鴻臚館式（223 型式）軒丸瓦で、丸瓦との接合部から剥離する。**78** も軒丸瓦で、外区の珠文のみが残り、型式不明。**79** は軒平瓦の瓦当小片で、601A 型式。

Ⅳ～Ⅴ期の遺構とみられるが、詳細時期は不明。

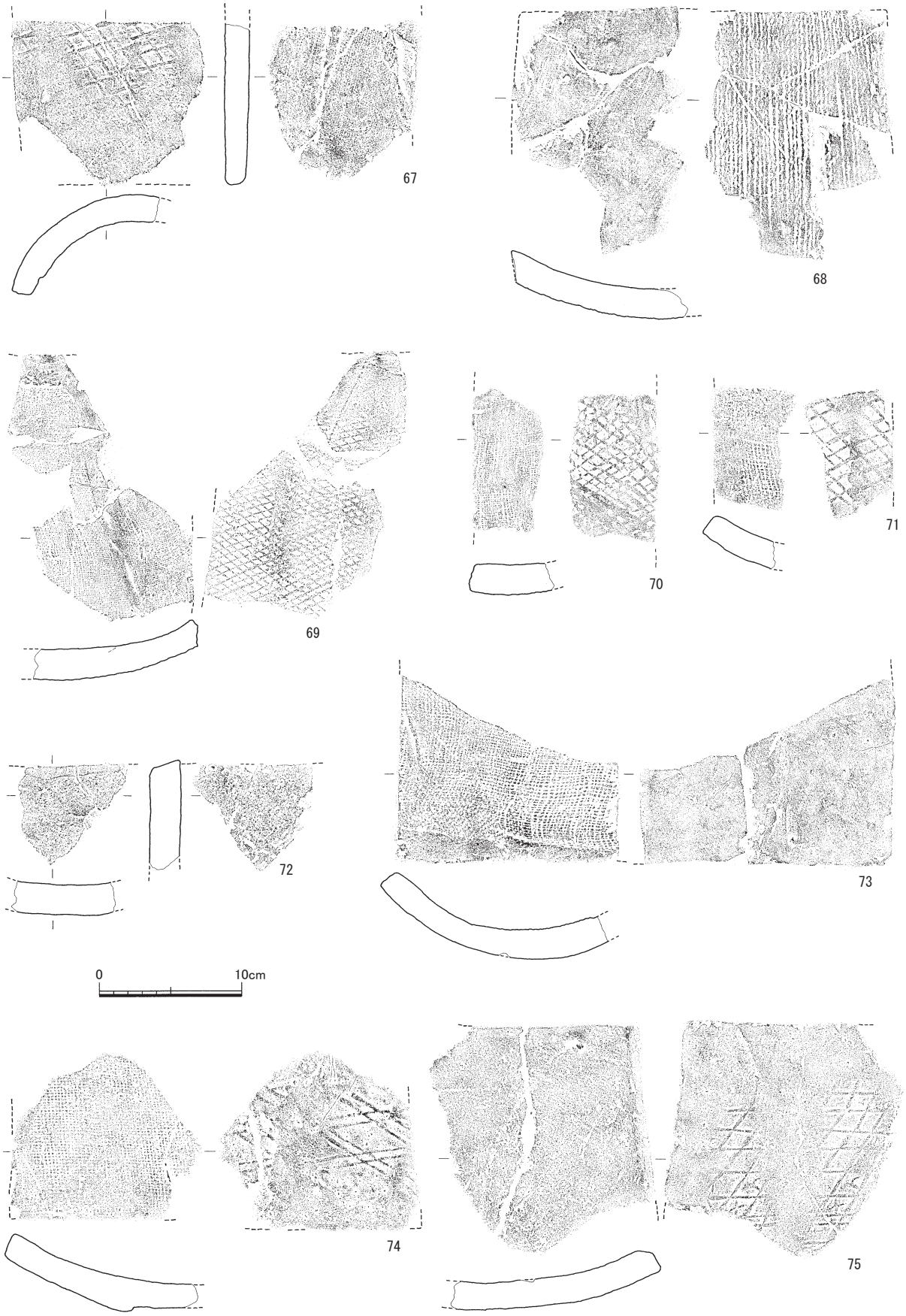


Fig.106　SK18364 出土遺物実測図（1/4）

Fig.107　土坑 SK18376 実測図（1/20）

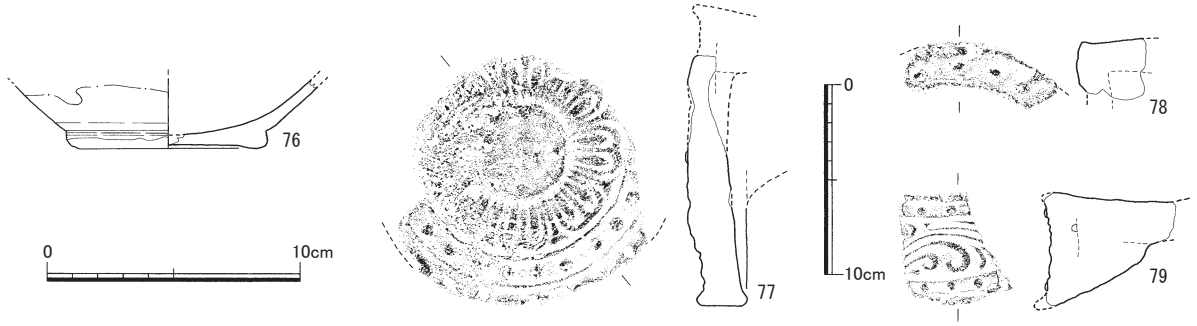


Fig.108　SK18376 出土遺物実測図（76 は 1/3、他は 1/4）

土坑 SK18377　Fig.109

SK18376 の西に接しており直接の切り合いはないが、SK18377 に含まれる瓦の一部が SK18376 の上部を覆うようにも見え、後出する遺構の可能性がある。上部は攪乱溝に削平されるが南北に長い楕円形プランと考えられ、南北 1.4 m、東西 1.0 m。断面皿状を呈し深さ 20㎝。底面は平坦である。風化頁岩岩盤に掘り込み、覆土は黒色粘質土で瓦小片を多く含む。

SK18377 出土遺物　Fig.110

土師器（坏）、中国産陶磁器（白磁・越州窯系青磁）が少量、瓦がコンテナ 4 箱出土した。土器類は図示できるものがない。

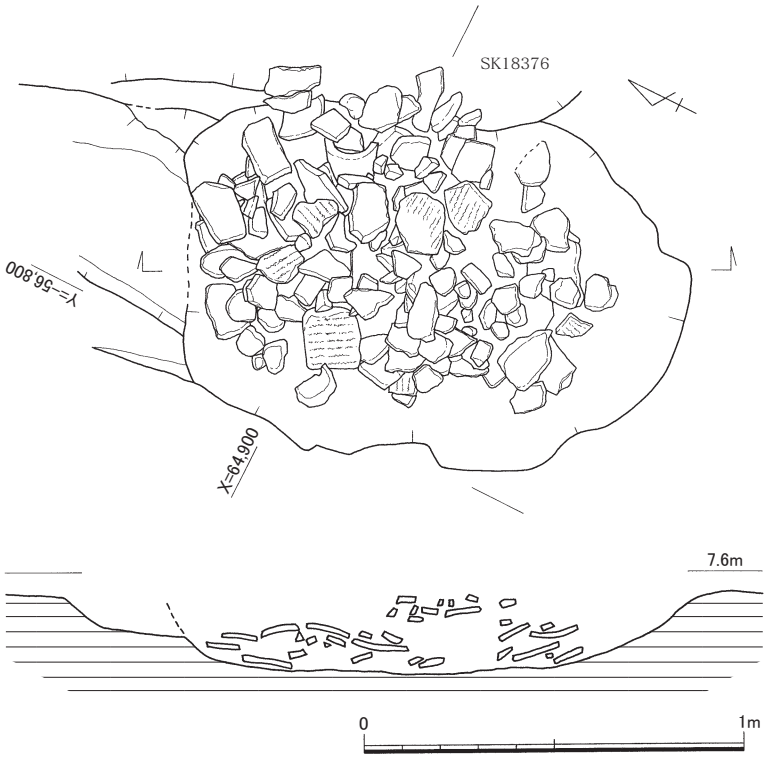


Fig.109　土坑 SK18377 実測図（1/20）

80 は軒平瓦小片で、磨滅するが 657b 型式であろうか。**81** は丸瓦で凸面に縄目叩きを施す。**82 ～ 87** は平瓦で、凸面の叩打痕は **82・83** が縄目、**84 ～ 86** が斜格子目で、敲打痕分類は **84** が 3Aa1-2、**85** が 3Aa1-3、**86** が 3Aa2-1a で、**87** は不明瞭だが 5B か。

土坑 SK18396　Fig.111

SK18376 の北東側に位置する廃棄土坑で、2 基の土坑が切り合っている。北側の土坑を SK18396a、南側の土坑を SK18396b とする。両者の境界部分には近代攪乱溝が切り込むが、SK18396b の瓦が間層を挟んで SK18396a の瓦の下へ潜り込んでいく状況が見て取れ、明らかに b が先行しよう。ともに調査区東壁際に位置しており、主体は調査区外に広がっていると考えられたため、遺構検出に留めて掘り下げは行わず、土嚢で補強したのち瓦ごと真砂土で埋め戻して保存した。

SK18396a は現状で楕円形プランを呈する。北端を近世の攪乱坑に、南端を近代の攪乱溝に破壊されている。南北長 2.0 m以上、東西長 0.8 m以上となろう。掘り下げていないため深さや断面形状は不明だが、攪乱溝の壁面の観察から深さは 30㎝を越えよう。覆土は鉄分を含む暗褐色粘質土で、瓦が多量に含まれている。

SK18396b は一部を確認したのみで平面形や深さは不明である。南北長 1.2 m以上、東西長 0.6 m以上になろう。覆土は灰褐色粘質土で、SK18396a との間に間層を挟む。瓦は土坑底面の傾斜に貼り付くような状況で出土しており、瓦を廃棄した後、埋めた可能性もある。

SK18396 出土遺物

遺構検出作業時に土師器（坏）、中国産陶磁器（白磁）が少量出土したが図示できるものはない。瓦は取り上げていない。

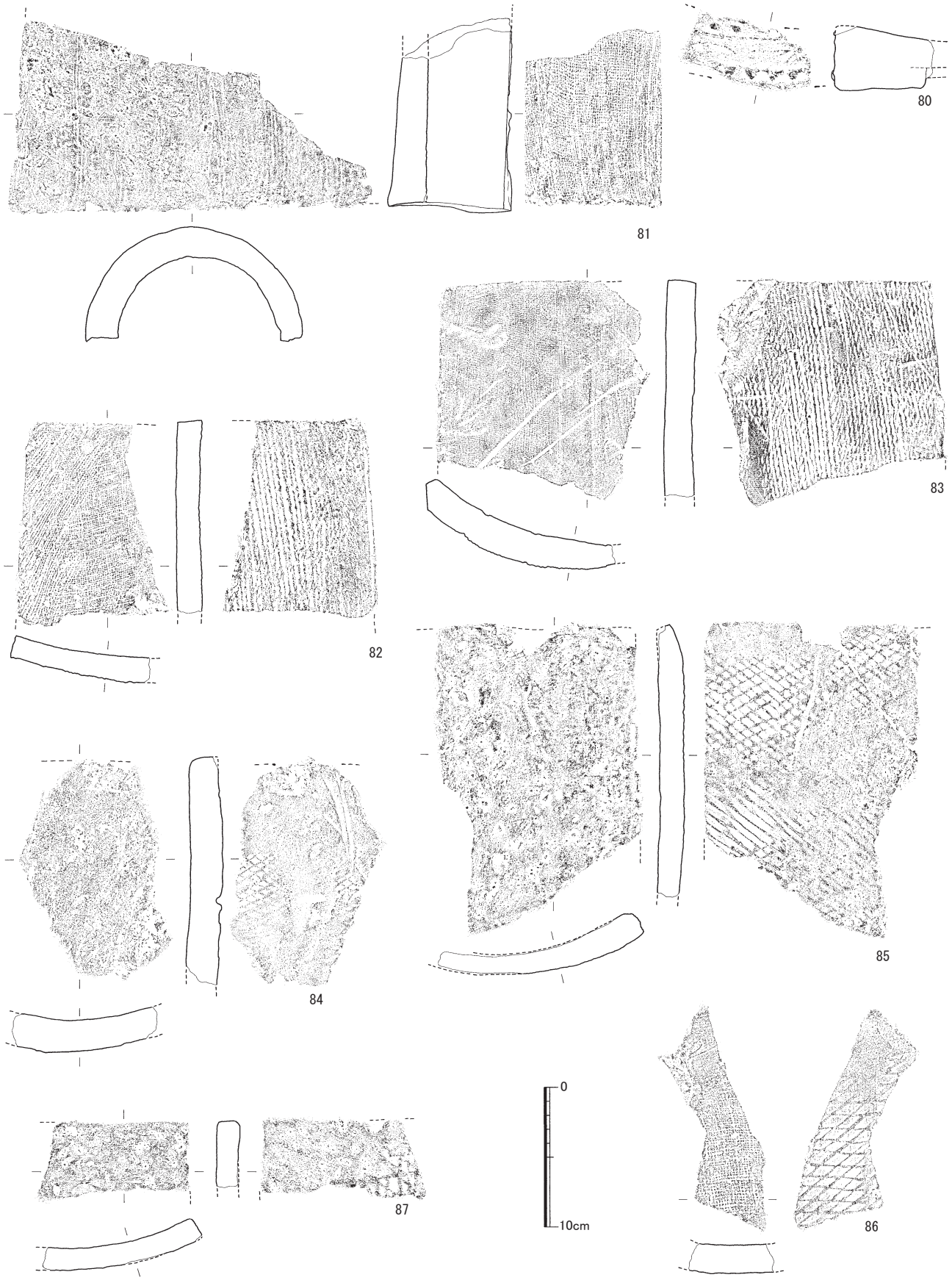


Fig.110　SK18377 出土遺物実測図（1/4）

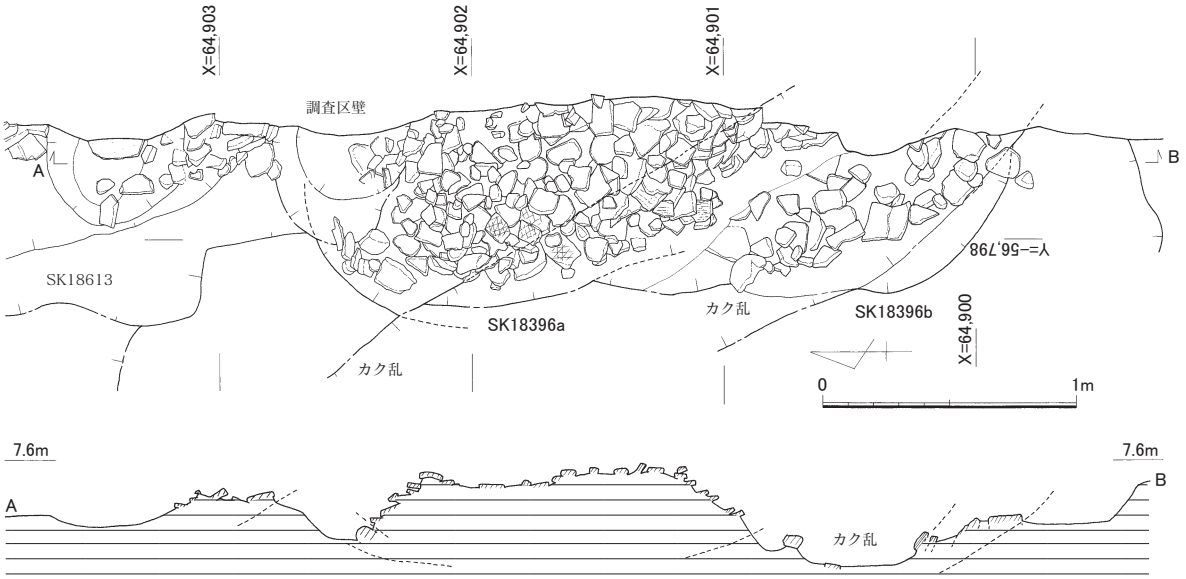


Fig.111　土坑 SK18396 実測図（1/30）

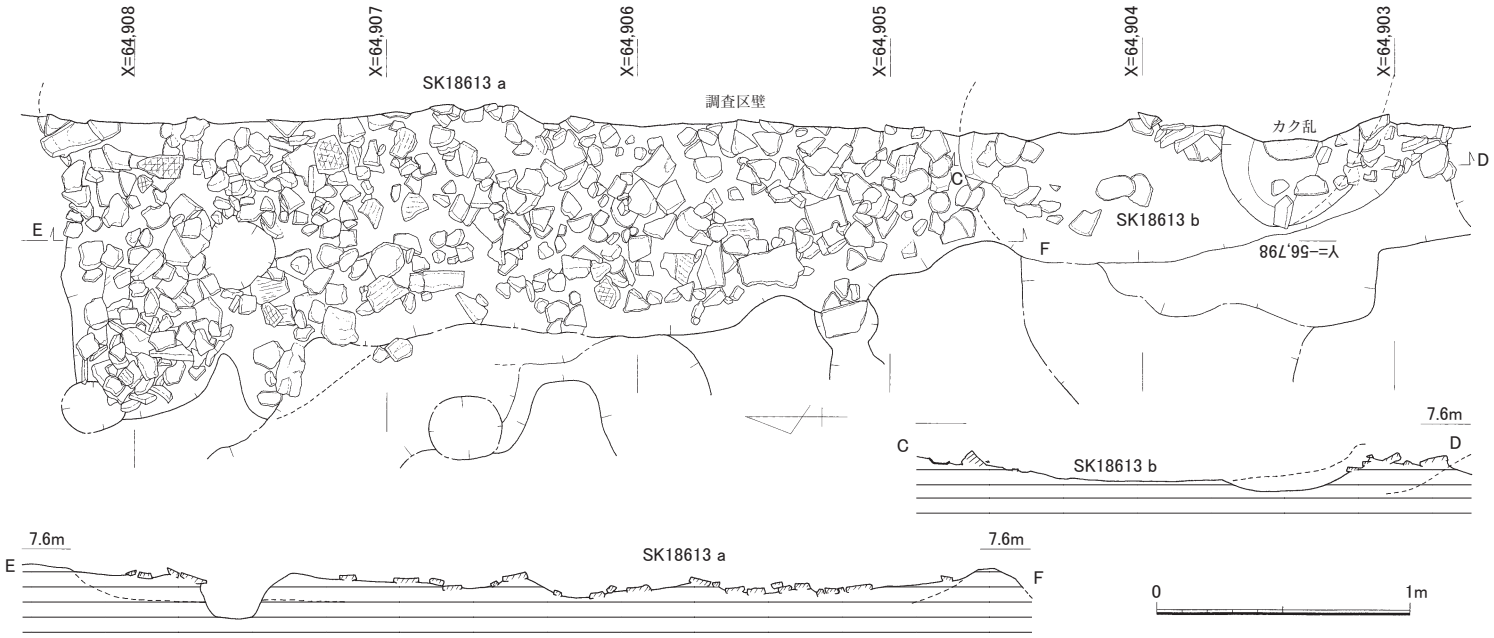


Fig.112　土坑 SK18613 実測図（1/30）

土坑 SK18613　Fig.112

SK18396 の北側に位置し、調査区壁沿いに南北に長く伸びる。検出時には一連の遺構に見えたが、精査の結果、複数に分かれた。北側の大土坑を **SK18613a**、南側の小土坑を**同 b** とする。瓦の堆積状況から b が a を切るとみられる。遺構主要部分が調査区外にあるため、精査・記録作成を行い、埋め戻し保存した。**SK18613a** は一部を攪乱に破壊されるが、隅丸方形プランの瓦廃棄土坑であろう。南北 3.7 m以上、東西 1.2 m以上。攪乱壁面の観察から深さ 15㎝前後か。**SK18613b** は南半を近世土坑に破壊される。南北約 1.7 m、東西 0.6 m以上の円形プランか。断面皿状で深さ 10㎝。瓦は散漫で通常の廃棄土坑と考えられる。

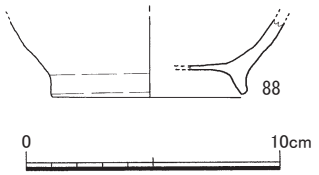


Fig.113　SK18613 出土遺物実測図（1/3）

SK18613 出土遺物　Fig.113

遺構検出時に土師器小片が少量、近世施釉陶器（唐津）が 1 点、鉄製品が 1 点、瓦がコンテナ 2 箱出土した。鉄製品は近世遺物であろう。**88** は土師器高台付き椀で著しく磨滅する。（吉武）

（7）第 25･26 次調査 (0706･0821)

概要　Fig.114

調査区（トレンチ 3）の中ほどで斜面となって台地が北へ落ち、海岸砂丘へと続く状況を確認した。台地上では鴻臚北館の第Ⅰ期柱列 SA19400、第Ⅱ期布掘り塀 SA15002 等の建物遺構を確認したが、瓦溜りなどの廃棄土坑は認められなかった。北側砂丘上では縄目瓦片を敷き詰めた SX19512 や、築地塀の可能性がある SX19610 を確認した。これらの建物関連遺構については『鴻臚館跡 22』で報告しており、本書では砂丘上で確認した小土坑 2 基を報告する。ともに砂丘上に設けたサブトレンチ 3 の掘り下げ途中に、瓦敷き遺構 SX19512（Fig.115 のアミの範囲）の下層で検出した。Fig.115 中央に示したサブトレンチ東壁の土層は、A：福岡城築城前の土坑、B・C：中世末の削平と溝の埋没層、D：瓦敷き遺構 SX19512、E：SX19512 構築に伴う整地層、F：SK19516、G：SK19516 以前の鴻臚館時代の整地層及び砂丘層である。

土坑 SK19514　Fig.115

南北に長い楕円形で、南北 0.8 m、東西 0.6 m。断面浅皿状で深さ 20㎝。古代整地層中から掘り込まれ、覆土は焼けて暗赤色に変色しており、炭化物を多量に含む。土師器、須恵器、炭化物が少量出土したが小片のため図示できない。

土坑 SK19516　Fig.115

調査区に一部がかかった土坑で、略円形プランで径約 0.7 m。深さ 40㎝。覆土には炭化物を多く含んでいる。出土遺物はない。（吉武）

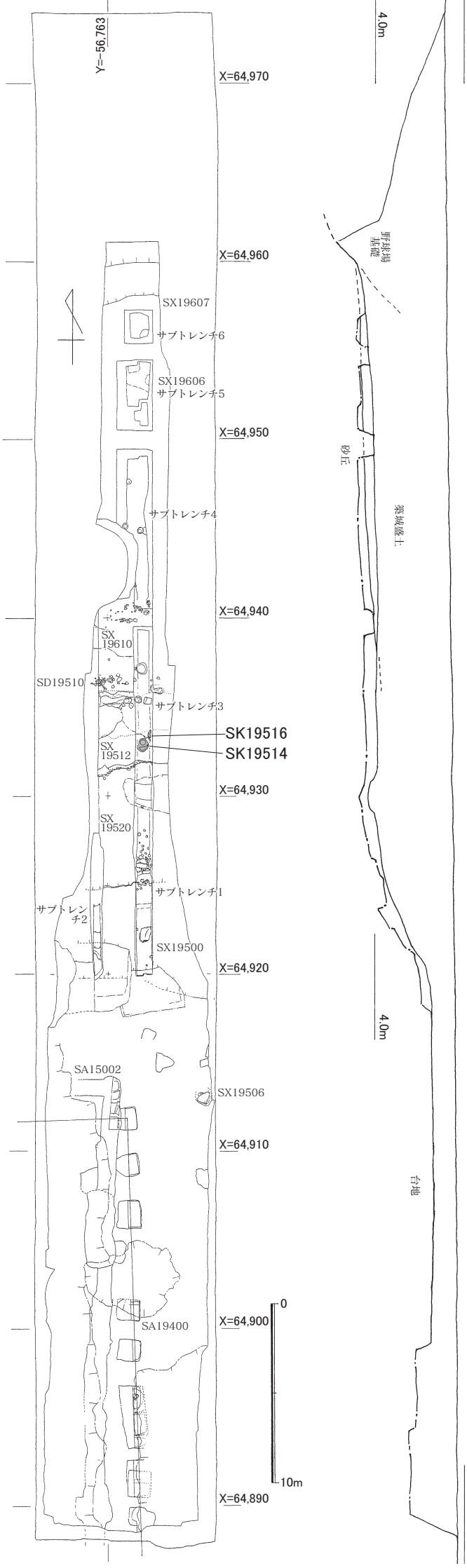


Fig.114　第 25・26 次調査　下層遺構配置図（1/300）

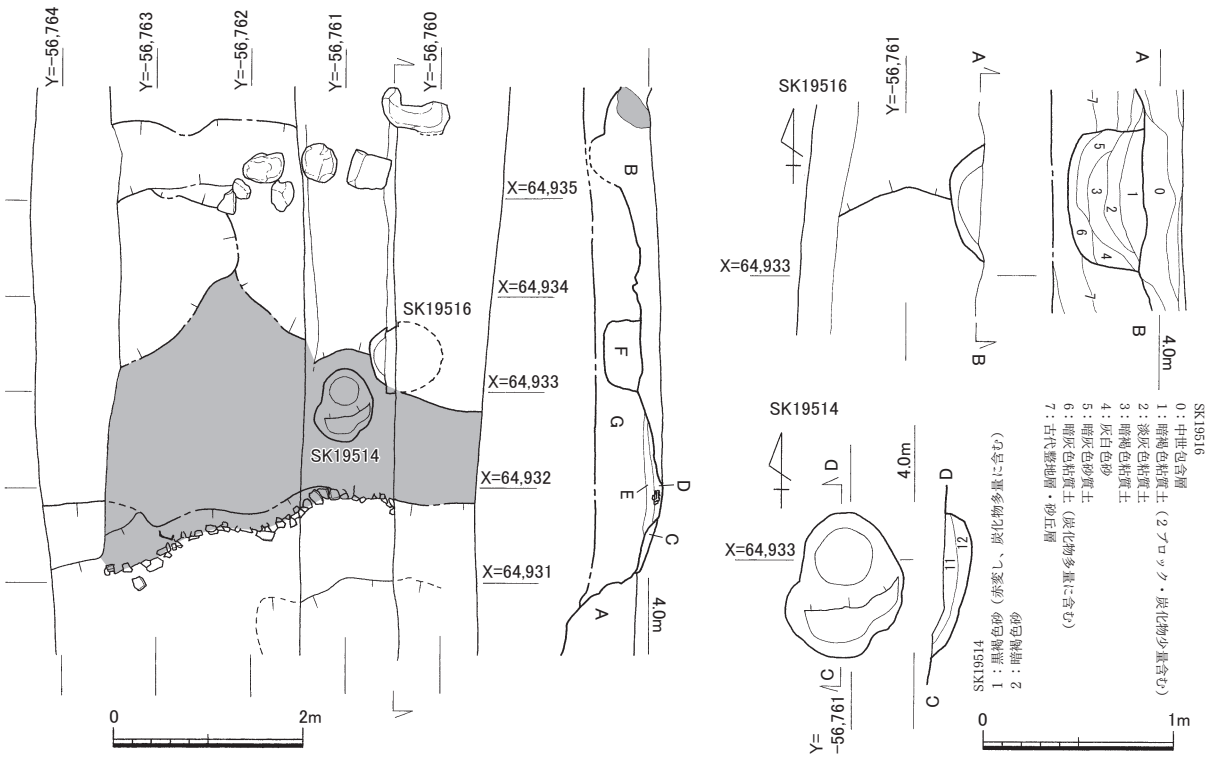


Fig.115　土坑 SK19514・SK19516 位置図及び遺構実測図（1/80、1/40）

（8）第 27・28 次調査（0906・1013）

概要　Fig.116

平成 21・22 年度に調査を行ったトレンチ 4 は、鴻臚館の北東角の確認、及び鴻臚北館の地形、東側へと落ちる景観等の解明等を調査目的とする。概要は『鴻臚館跡 22』を参照。

ほぼ調査区全体が福岡城築城盛土に覆われており、西隣のトレンチ 3 と接する調査区西端部分に風化頁岩岩盤が僅かに露呈する。この部分が鴻臚館の乗る台地の北東角に相当し、この東側は中世に削平を受けた比高差 1 m強の段落ちとなり、調査区中央あたりまで中世の削平を受けた平坦面が続き、東側は緩やかに落ちる斜面となる。斜面の基盤土は風化頁岩由来の粘土層で、斜面下位では岩盤に変わる。『鴻臚館跡 22』では溝等の建物関連遺構について報告した。本書では台地端に検出した土坑 SK21127、東側斜面で検出した土坑 SK21123・21125 について報告する。

土坑 SK21123　Fig.117

調査区東側斜面に検出した土坑である。中世溝及び古代小溝 SD21200 に削られており残りが悪い。平面楕円形をなすものとみられ、長径 1.0 m以上、短径 0.9 m前後か。断面逆台形で深さ 20㎝。

SK21123 出土遺物　Fig.118

土師器小片、中国産陶磁器（口禿白磁）、瓦が少量出土した。白磁は混入遺物であろう。

1 は土師器甕の口縁部小片で、内外面に刷毛目調整を行い横ナデする。2 は平瓦小片で、凹面に布目痕が付き、凸面の叩打痕は斜格子目 3Aa2-1a。

土坑 SK21125　Fig.119

調査区東側斜面に検出した。南北方向に長い隅丸長方形プランの土坑で、北側は調査区外へ進展す

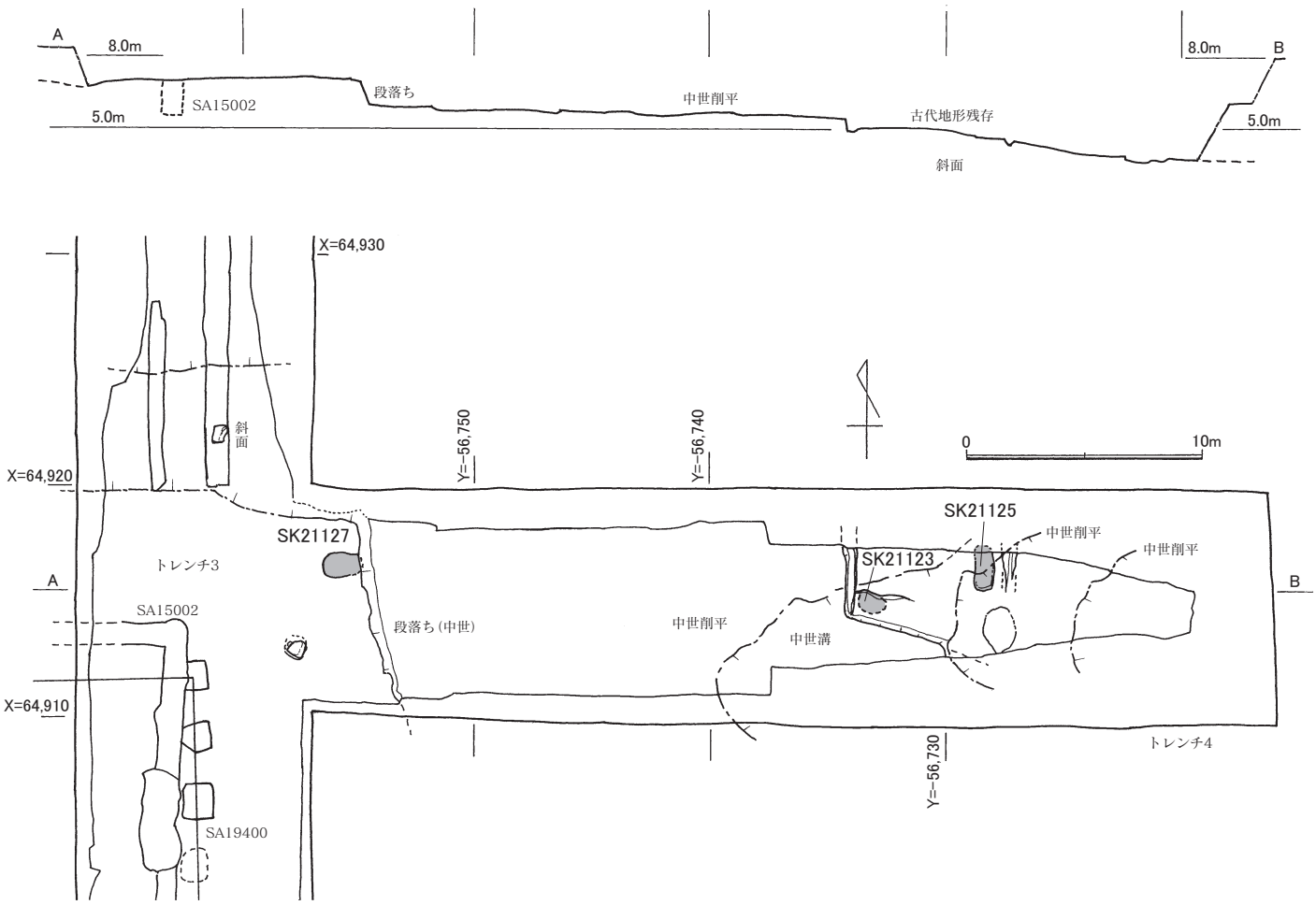


Fig.116　第 27・28 次調査　下層遺構配置図（1/300）

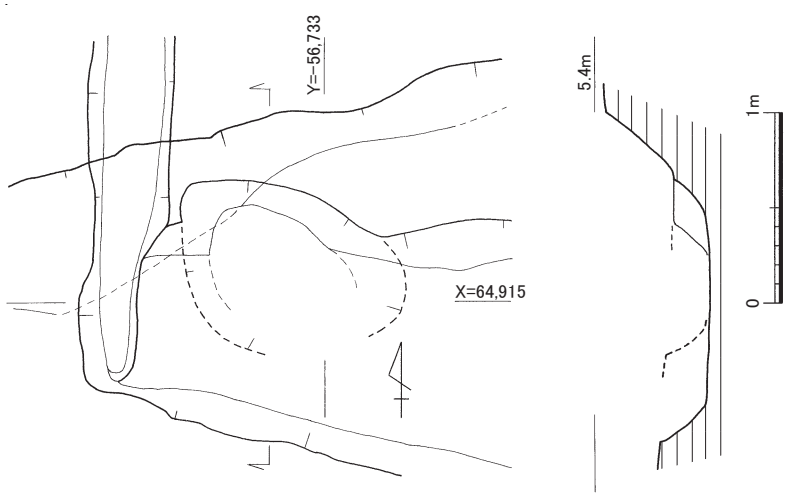


Fig.117　土坑 SK21123 実測図（1/40）

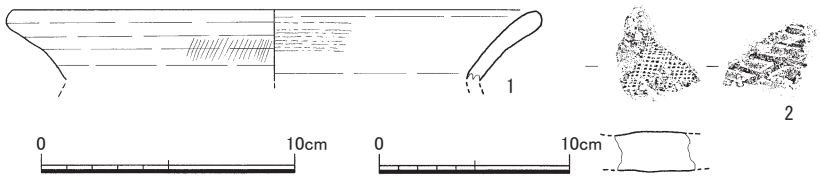


Fig.118　SK21123 出土遺物実測図（1 は 1/3、2 は 1/4）

る。中世ピット 3 つが遺構に切り込んでいる。深さと時期を確認するため遺構の東半分を掘り下げ、残る部分は保存した。南北長 1.6 m以上、東西幅 0.9 m。断面逆台形で深さ 30㎝。遺構覆土は黒色粘質土で下層に炭化物を多く含む。

SK21125 出土遺物　Fig.121

土師器（坏他）、須恵器小片、中国産陶磁器（陶器・白磁・越州窯系青磁）、朝鮮半島産陶器（高麗無釉陶器）が少量、瓦片が 8 点出土した。

3 は土師器高台付き椀で磨滅が著しい。**5** は黒色土器 A 類椀の小片。**6** は白磁鉢、**7**・**9**・**10** は白磁碗である。**9** は

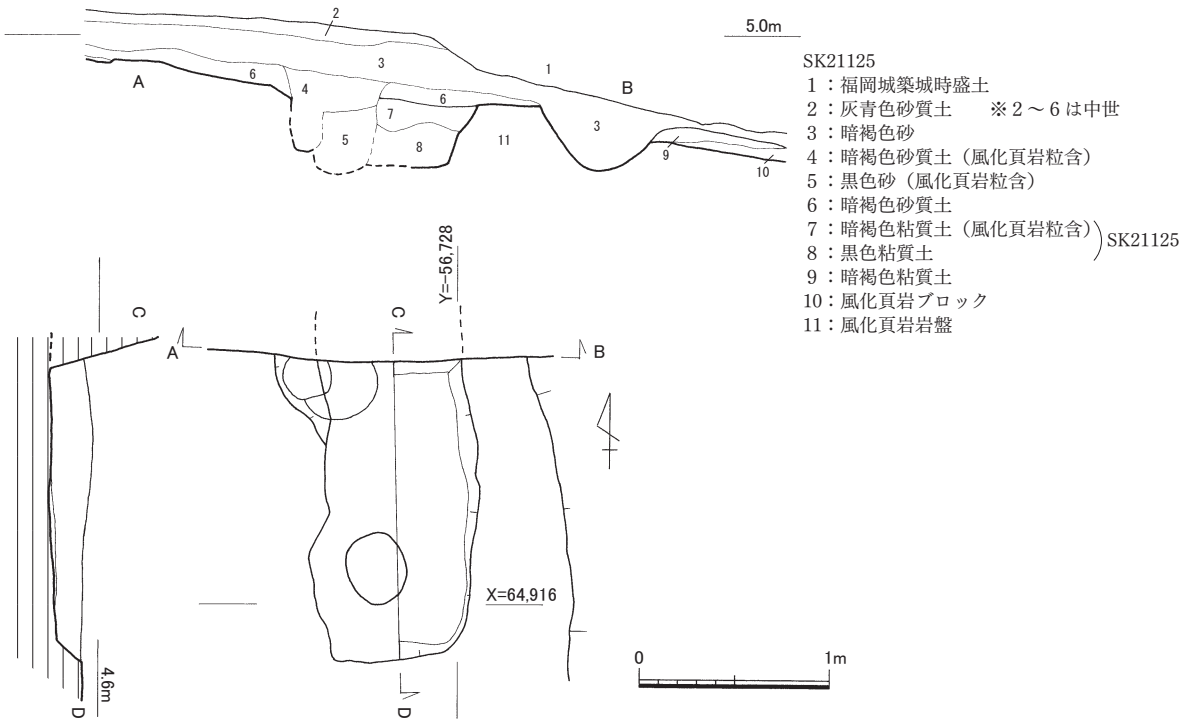


Fig.119　土坑 SK21125 実測図（1/40）

蛇の目高台の邢窯系白磁で、外底の釉は拭き取る。**10** は景徳鎮窯白磁で外底に円形の窯具痕がある。**11・12** は越州窯系青磁。**11** は輪花碗で内底に圏沈線が巡り、畳付は露胎、外底に細長い目跡が4つ付く。**12** は内面にヘラで施文した花文碗で全釉。

13・14・16～20 は平瓦小片で、凸面の敲打痕は **13** が縄目で他は斜格子目である。敲打痕分類は **14** が 3Aa1-1、**16・17** が 3Aa2-1、**18** が 3Ab-1、**19** が 3Aa2-1、**20** が 3Ba-1。側面調整痕が残るものでは **17** がヘラ調整、**16・19** は押し割りによる破面が観察できる。

第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）の土坑で、この土坑が残ることから中世の削平は著しいものではなく、古代の斜面地形をある程度残しているものと考えられよう。

土坑 SK21127　Fig.120

台地端に検出した土坑である。覆土の観察から古代の遺構とみられるが、遺構保存のため、掘り下げは行っていない。東西に長い楕円形プランをなし、東西 1.6 m以上、南北 1.1 mを測る。

SK21127 出土遺物　Fig.121

検出時に土師器、中国産白磁、瓦が少量出土した。

4 は土師器高台付き椀で磨滅が著しい。**8** は邢窯系白磁碗。**15** は丸瓦で凸面の敲打痕は不明。（吉武）

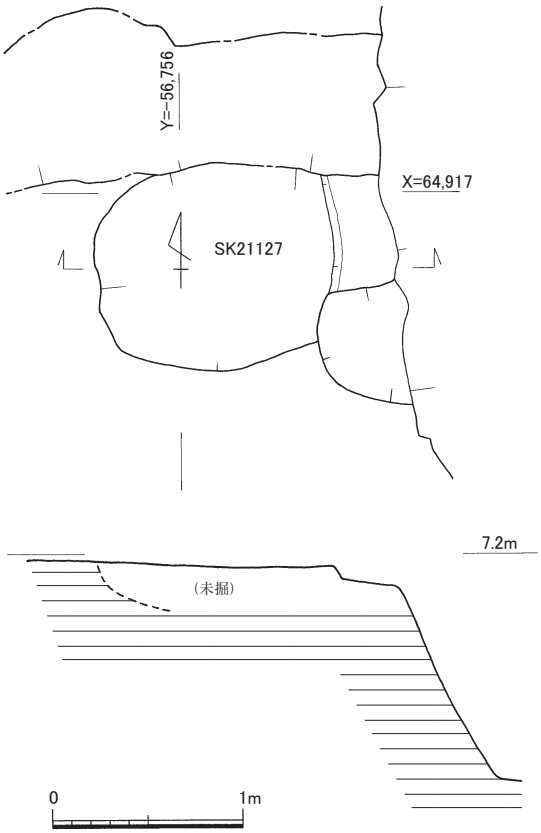


Fig.120　土坑 SK21127 実測図（1/40）

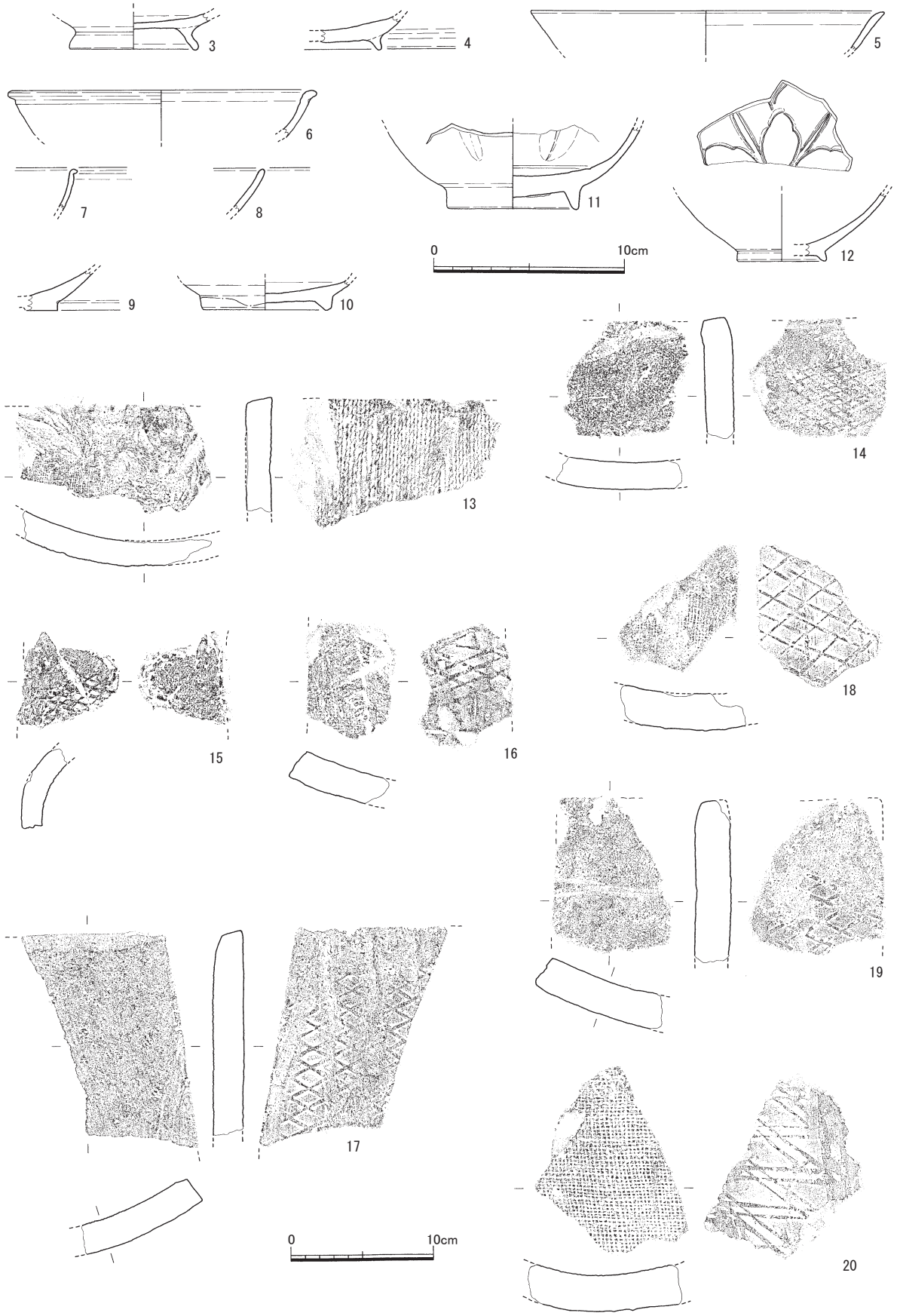


Fig.121　SK21125・SK21127 出土遺物実測図（3～12 は 1/3、他は 1/4）

（9）第 31 次調査（1314）Fig.122

第 31 次調査は第Ⅴ期調査区の北西隅トレンチ 1 と前述の中央のトレンチ 6 下層について、平成 25 年度に調査を行った。トレンチ 1 は調査面積 690㎡。遺構番号は 25001 ～ 25055。トレンチ 6 の調査面積は 170㎡となる。遺構面は風化頁岩岩盤及び整地層で、近代、特に平和台野球場スタンド基礎工事により、調査区北側の削平が著しい。このうち、布掘り塀、便所遺構、造成地業については『鴻臚館跡 22』の中で報告済みである。本書ではこれらを除くトレンチ 1 の土坑等について報告する（Fig.122）。なお、トレンチ 6 では古代の土坑等は検出されていない。

土坑 SK25044　Fi.123

第Ⅱ期の布掘り塀 SA25055 のコーナー外側付近にあり、想定される第Ⅲ期の回廊の内部に当たる位置に掘り込まれた不整形の土坑である。長軸 185cm、短軸 120cm 深さ 25cm を測る。土坑内は炭が多く含まれており、上層は炭混じりの暗灰色粘質土で多くの瓦を含む。下層は炭化物層である。遺物は土師器、邢窯系白磁、瓦類等が出土した。

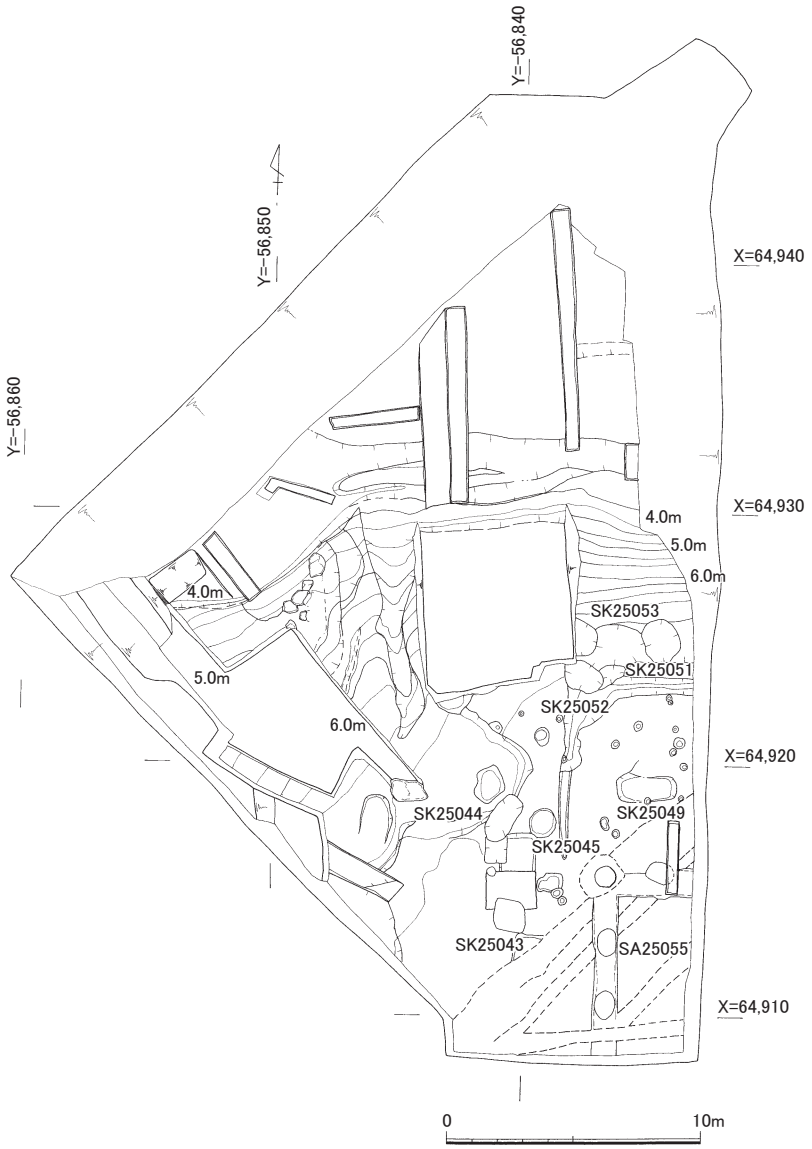


Fig.122　第 31 次調査　古代遺構配置図（1/300）

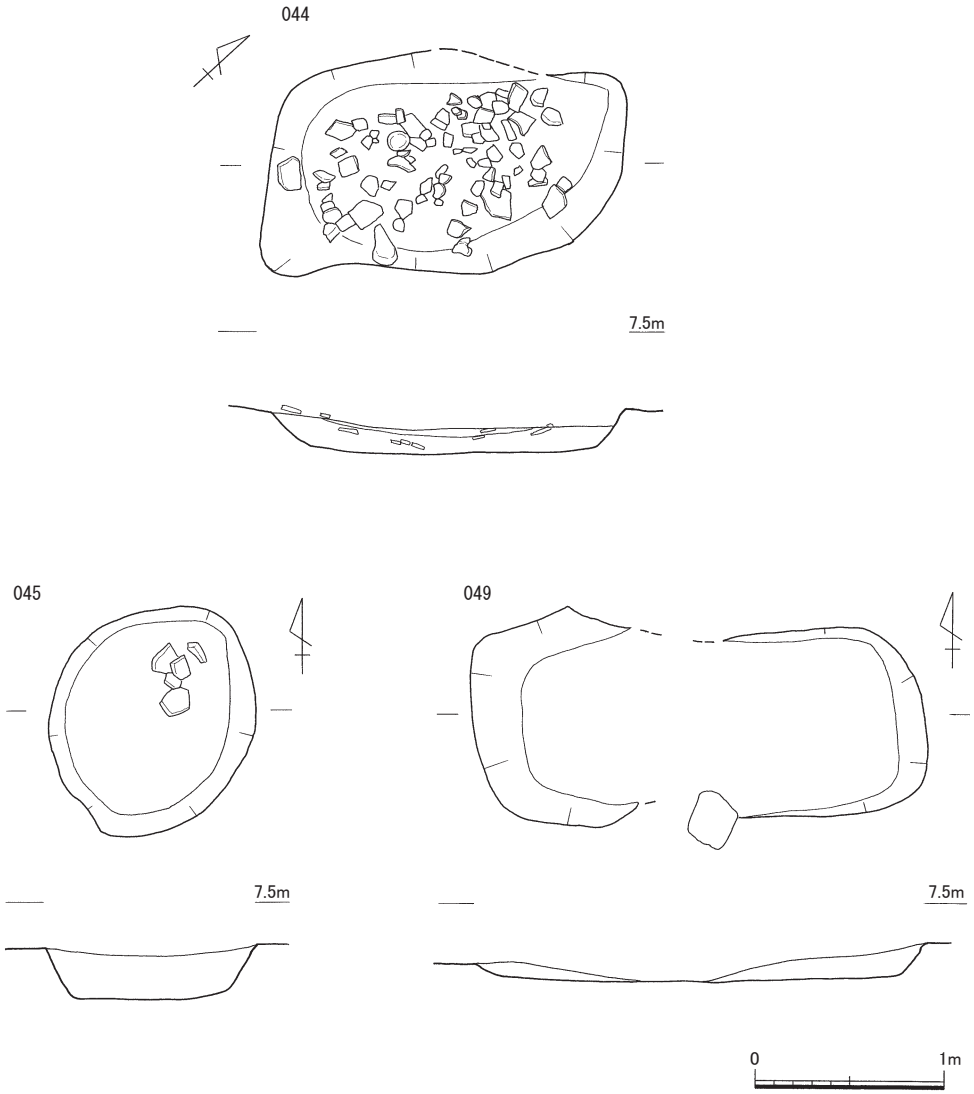


Fig.123　土坑 SK25044・25045・25049 実測図（1/40）

Ph.12　SK25051 ～ 25053（右は SK25051 の近影）

SK25044 出土遺物　Fig.124・125

1～11 は土師器で、**1～6** は皿、**7・8** は坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。**9～11** は碗で、底部に断面三角形の高台が付く。体部は内湾気味である。**12・13** は邢窯系白磁碗で、玉縁状の口縁を呈する。**14・15** は丸瓦で、**14** は 1A 類の方形格子叩き、**15** は 3Aa1-2 類の斜格子叩きである。**16～19** は平瓦で、**16** は 3Aa2-1a 類の斜格子叩き、**17** は 5 B 類の斜格子叩き、**18** は 3Aa1-2 類の斜格子叩き、**19** は縄目叩きである。

出土遺物から遺構の時期は、第Ⅴ期（10 世紀後半から 11 世紀前半）に位置付けられると考える。

土坑 SK25045　Fig.123

第Ⅱ期の布掘り塀 SA25055 のコーナー外側付近にあり、想定される第Ⅲ期の回廊の内部に当たる位置に掘り込まれた円形の土坑である。長軸 120cm、短軸 110cm、深さ 30cm を測る。埋土には炭を多く含む。遺物は土師器、越州窯系青磁、瓦類等が出土した。

SK25045 出土遺物　Fig.126

1～10 は土師器で、**1～3** が坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。**4～10** は碗で、底部にハの字に開く細い高台が付く。**10** は直線的に開く体部である。**11** は越州窯系青磁の碗で、蛇の目高台をもつ。オリーブ色の釉薬がかかる。

出土遺物から遺構の時期は第Ⅳ期（9 世紀後半～ 10 世紀前半）に位置付けられると考える。

土坑 SK25049　Fig.123

第Ⅱ期の布掘り塀 SA25055 の北側付近にあり、想定される第Ⅲ期の回廊の内部に当たる位置に掘り込まれた隅丸長方形の土坑である。長軸 235cm、短軸 100cm、深さ 20cm を測る。埋土には炭を多く含む。遺物は土師器、瓦類等が出土した。

SK25049 出土遺物　Fig.126

12 は土師器碗である。底部に断面三角形の高台が付く。**13** は平瓦で、5B 類の斜格子叩きである。

出土遺物から遺構の時期は第Ⅳ期（ 9 世紀後半～ 10 世紀前半）に位置付けられると考える。

土坑 SK25051　Ph. 1

北側の崖際に掘り込まれた不整円形の土坑である。25053 を切るような形で、SK25051、SK25052 が掘り込まれる。土坑内からは多量の完形復元できる土師器坏、碗の他、越州窯系青磁、瓦類等が出土した。長軸 150cm、短軸 140cm、深さ 40cm を測る。

SK25051 出土遺物　Fig.127・128

1～31 は土師器である。**1～15** は坏で、底部の切り離しはヘラ切である。**16～29** は碗で、**16～18** は断面三角形の高台が、**19～29** はハの字に開く細い高台が付く。体部はやや内湾気味に立ち上がる。**30、31** は甕で、色調、調整が類似しており同一個体の可能性がある。外面は細い平行叩き後、カキ目を施す。内面は凹凸があり、当て具の痕跡か。色調は暗褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。**32** は須恵質の鉢で、内面に沈線が巡る。**33～35** は越州窯系青磁碗で、**34** は内面にオリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡があり、中央がやや窪む円盤状高台である。**35** は灰オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡があり、輪状高台である。外面に縦方向の沈線があり、輪花になるものと考えられる。**36～39** は瓦である。**36** は鴻臚館式の軒丸瓦（223a 型式）で、瓦当は完形である。**37** は鴻臚館式の軒平瓦（635 型式）で、2 B類の平行叩きである。**38・39** は丸瓦で、「今行」

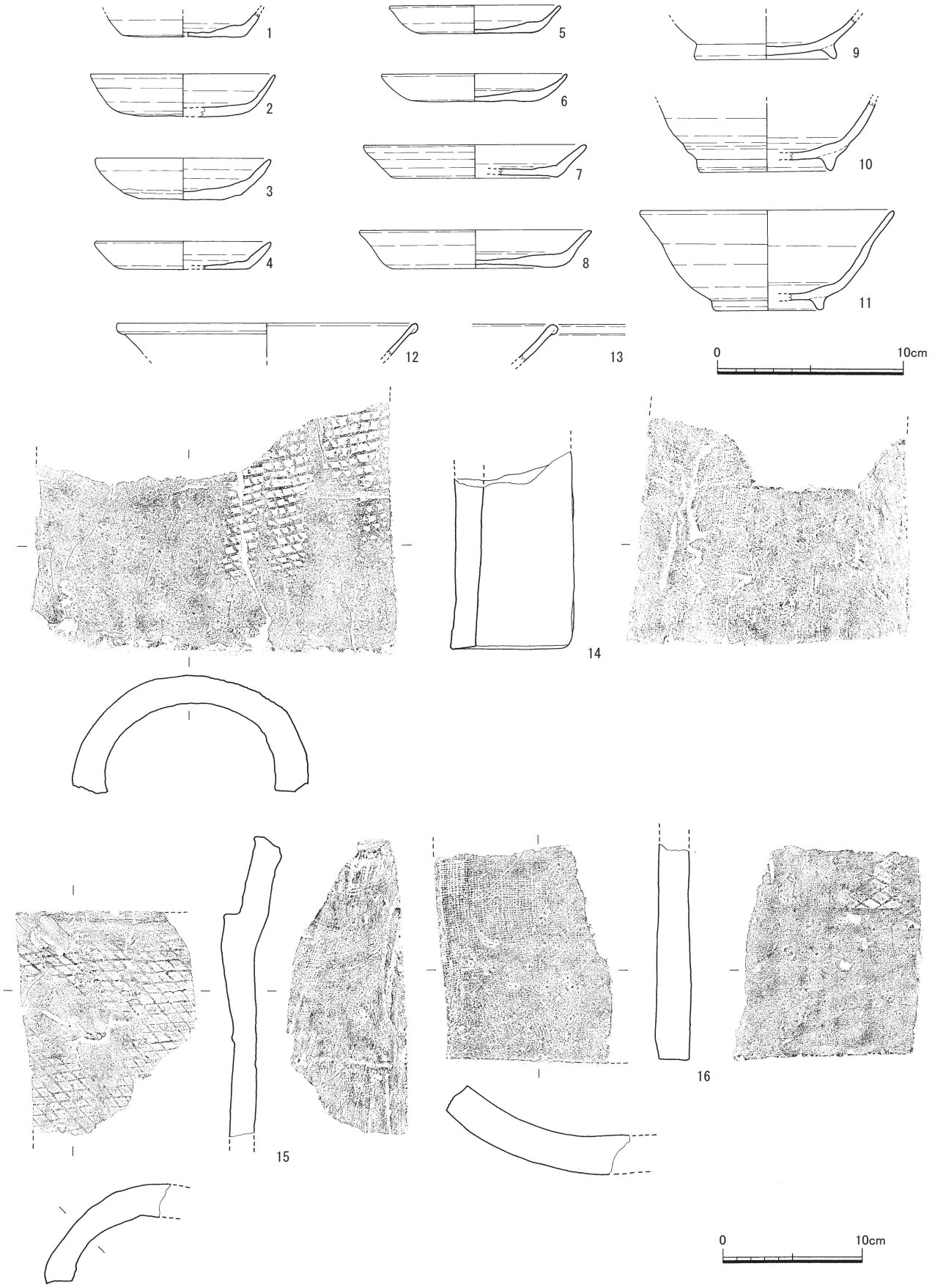


Fig.124　SK25044 出土遺物実測図１（1/3、1/4）

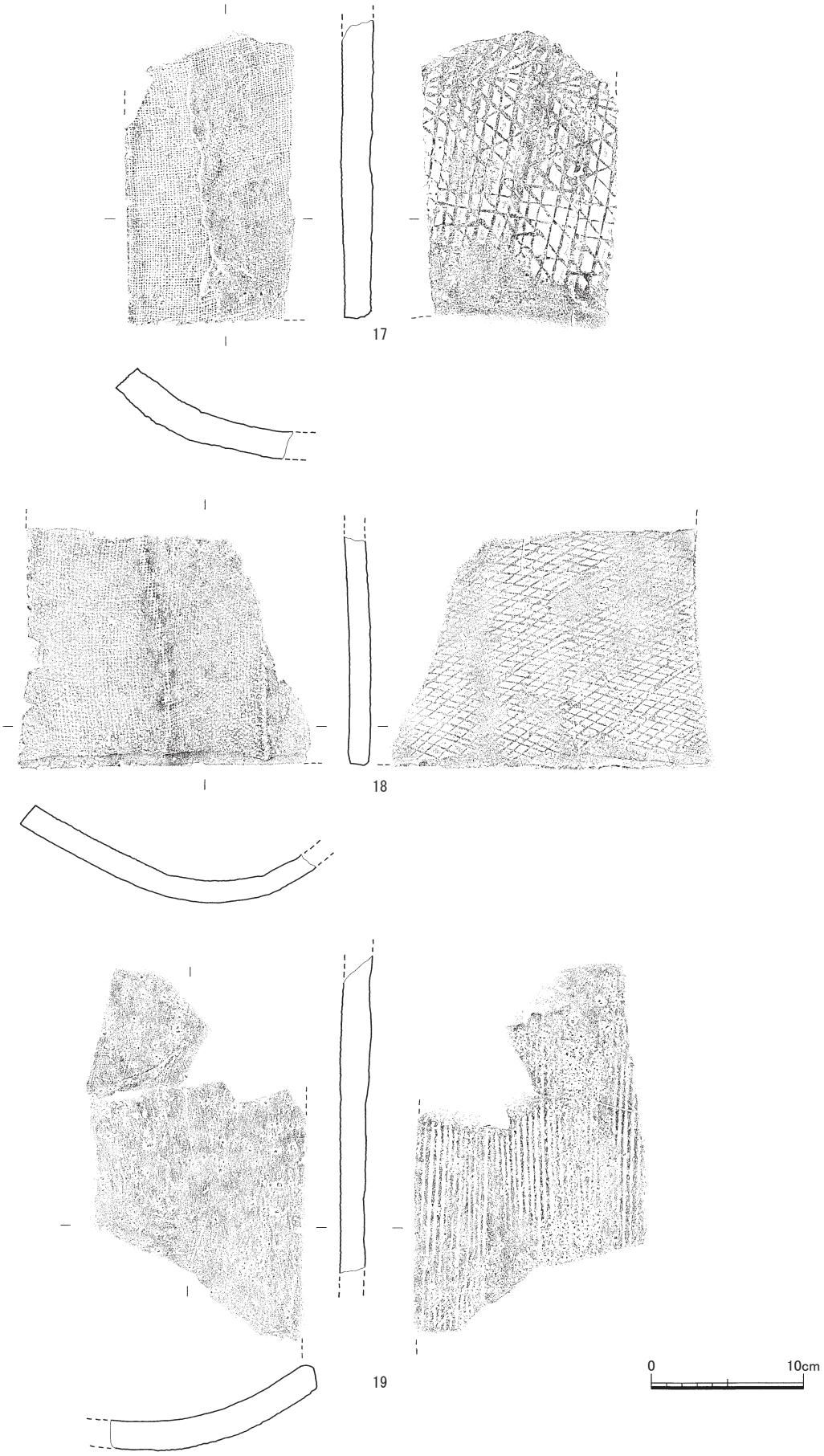


Fig.125　SK25044 出土遺物実測図２（1/4）

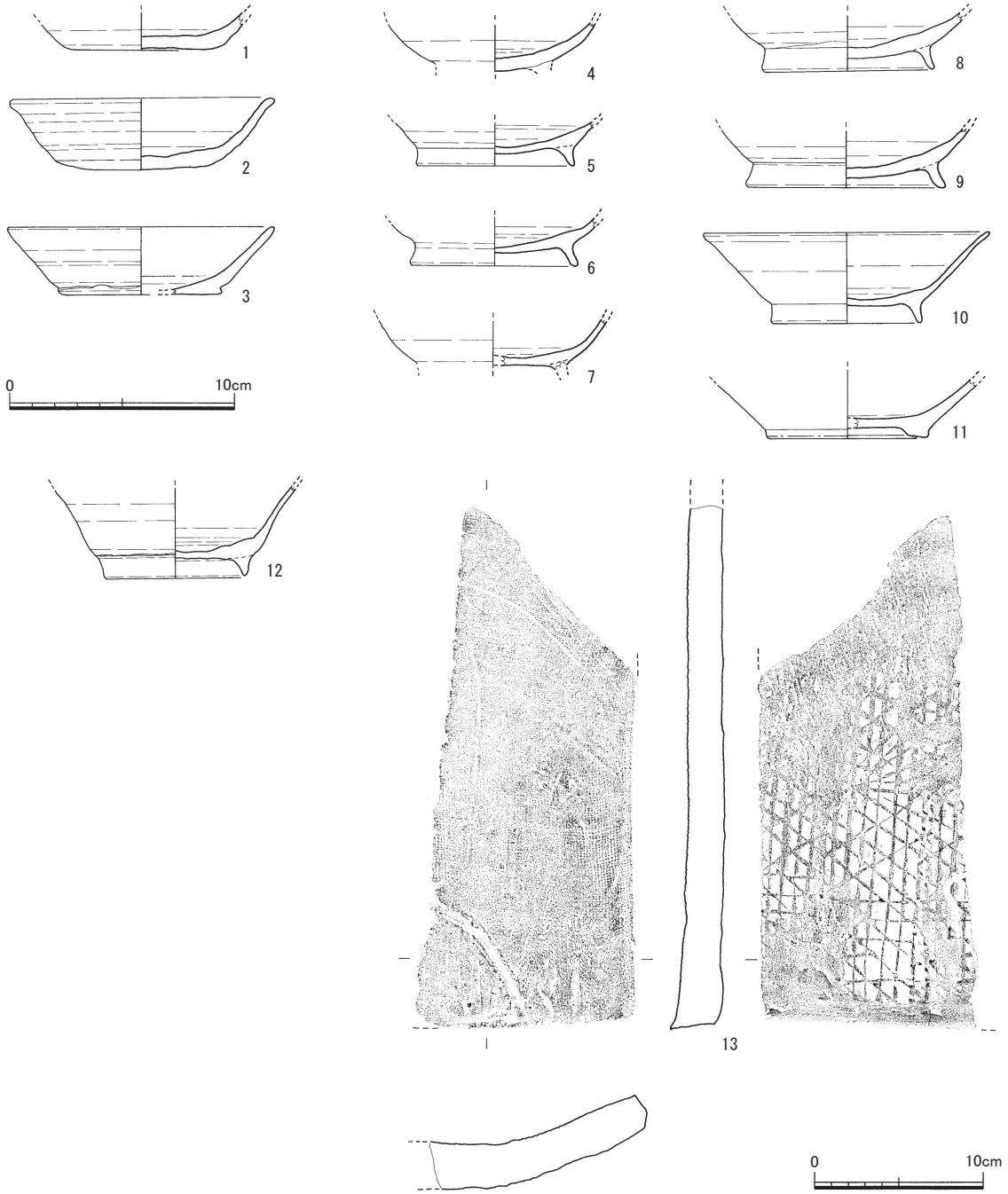


Fig.126　SK25045・25049 出土遺物実測図（1/3、1/4）

の文字が施される。**39** は玉縁式で現存長 37cm を測る。3Ab-1 類の斜格子叩きである。

出土遺物から遺構の時期は第Ⅳ期（ 9 世紀後半～ 10 世紀前半）に位置付けられると考える。

土坑 SK25052　Ph. 1

北側の崖際に掘り込まれた不整円形の土坑である。25053 を切るような形で、SK25051、SK25052 が掘り込まれる。土坑内からは多量の完形復元できる土師器坏、碗の他、越州窯系青磁、瓦類等が出土した。長軸 150cm、短軸 110cm、深さ 40cm を測る。

SK25052 出土遺物　Fig. 7

1 ～ 22 は土師器である。**1 ～ 10** は坏で、底部の切り離しはヘラ切である。**1** は丸底を呈する。**11 ～ 20** は碗で、ハの字に開く細い高台が付く。体部はやや内湾気味に立ち上がる。**21** は小型の鉢で、外面に煤が付着する。**22** は甕で、外面に煤が付着、内面はヘラ削り。**23 ～ 27** は越州窯系青磁碗で、**23** は茶味が強いオリーブ色の釉がかかる。**24** は黄味が強いオリーブ色の釉がかかる。**25** は茶味が強いオリーブ色の釉がかかる。**26・27** は中央が窪む円盤状高台で、底部下半は露胎となる。内面にはオリーブ色の釉がかかる。**28** は越州窯系青磁皿で、輪状高台が付く。全面に茶味が強いオリーブ色の釉がかかる。**29 ～ 31** は瓦である。**29** は玉縁式の丸瓦で、3Ab-6 類の斜格子叩きである。**30・31** は平瓦で、**30** は 3Aa2-1a 類の斜格子叩きで、**31** は 3Aa1-2 類の斜格子叩きである。

Tab.4　出土土師器観察表

挿図(Fig.)	番号	遺構	器形	法量(器高 / 口径 / 底径 (cm))
124	1	25044	坏	－ / － /6.5
124	2	25044	坏	2.3/10.0/5.6
124	3	25044	坏	2.2/9.6/4.5
124	4	25044	坏	1.5/9.6/7.0
124	5	25044	坏	1.5/9.2/6.4
124	6	25044	坏	1.5/10.0/7.0
124	7	25044	坏	1.7/12.0/9.0
124	8	25044	坏	2.0/12.5/9.0
124	9	25044	碗	－ / － /7.6
124	10	25044	碗	－ / － /7.0
124	11	25044	碗	5.5/13.6/6.0
126	1	25046	坏	－ / － /6.0
126	2	25046	坏	3.2/11.8/7.0
126	3	25046	坏	3.0/12.0/7.4
126	4	25046	碗	－ / － / －
126	5	25046	碗	－ / － /7.0
126	6	25046	碗	－ / － /7.6
126	7	25046	碗	－ / － / －
126	8	25046	碗	－ / － /7.6
126	9	25046	碗	－ / － /9.0
126	10	25046	碗	4.0/12.8/6.8
126	12	25049	碗	－ / － /6.4
127	1	25051	坏	2.3/9.5/6.6
127	2	25051	坏	1.7/9.9/6.4
127	3	25051	坏	2.5/9.8/6.0
127	4	25051	坏	2.6/9.6/6.6
127	5	25051	坏	2.3/9.8/7.0
127	6	25051	坏	2.0/10.0/6.6
127	7	25051	坏	2.5/10.1/6.4
127	8	25051	坏	2.1/10.5/7.2
127	9	25051	坏	2.3/10.8/6.6
127	10	25051	坏	2.3/10.6/7.2
127	11	25051	坏	2.6/10.8/6.4
127	12	25051	坏	3.1/11.1/7.2
127	13	25051	坏	2.8/11.2/7.0
127	14	25051	坏	2.7/10.8/7.2
127	15	25051	坏	2.5/10.8/8.6
127	16	25051	碗	3.9/11.0/7.5
127	17	25051	碗	3.5/11.0/7.4
127	18	25051	碗	3.7/12.3/ －
127	19	25051	碗	4.7/12.2/7.6
127	20	25051	碗	4.4/12.3/6.6
127	21	25051	碗	－ / － /7.2
127	22	25051	碗	－ / － /7.5
127	23	25051	碗	3.8/11.1/7.0
127	24	25051	碗	3.9/12.5/7.0
127	25	25051	碗	4.2/12.5/7.0
127	26	25051	碗	5.2/12.6/8.0
127	27	25051	碗	－ / － /8.2
127	28	25051	碗	6.0/15.9/9.0
127	29	25051	碗	5.8/15.9/8.6
129	1	25052	坏	2.5/9.0/ －
129	2	25052	坏	2.6/9.5/6.2
129	3	25052	坏	2.0/11.0/ －
129	4	25052	坏	3.2/11.1/6.6
129	5	25052	坏	2.8/11.4/6.8
129	6	25052	坏	3.0/12.5/6.8
129	7	25052	坏	3.2/12.1/6.4
129	8	25052	坏	－ /12.0/ －
129	9	25052	坏	3.0/12.2/7.2
129	10	25052	坏	3.5/12.4/6.0
129	11	25052	碗	4.9/11.5/6.6
129	12	25052	碗	4.5/13.5/7.6
129	13	25052	碗	－ / － /8.2
129	14	25052	碗	－ / － /7.6
129	15	25052	碗	－ / － /7.4
129	16	25052	碗	－ / － /7.0
129	17	25052	碗	－ / － / －
129	18	25052	碗	－ / － /8.6
129	19	25052	碗	－ / － / －
129	20	25052	碗	－ /12.6/ －

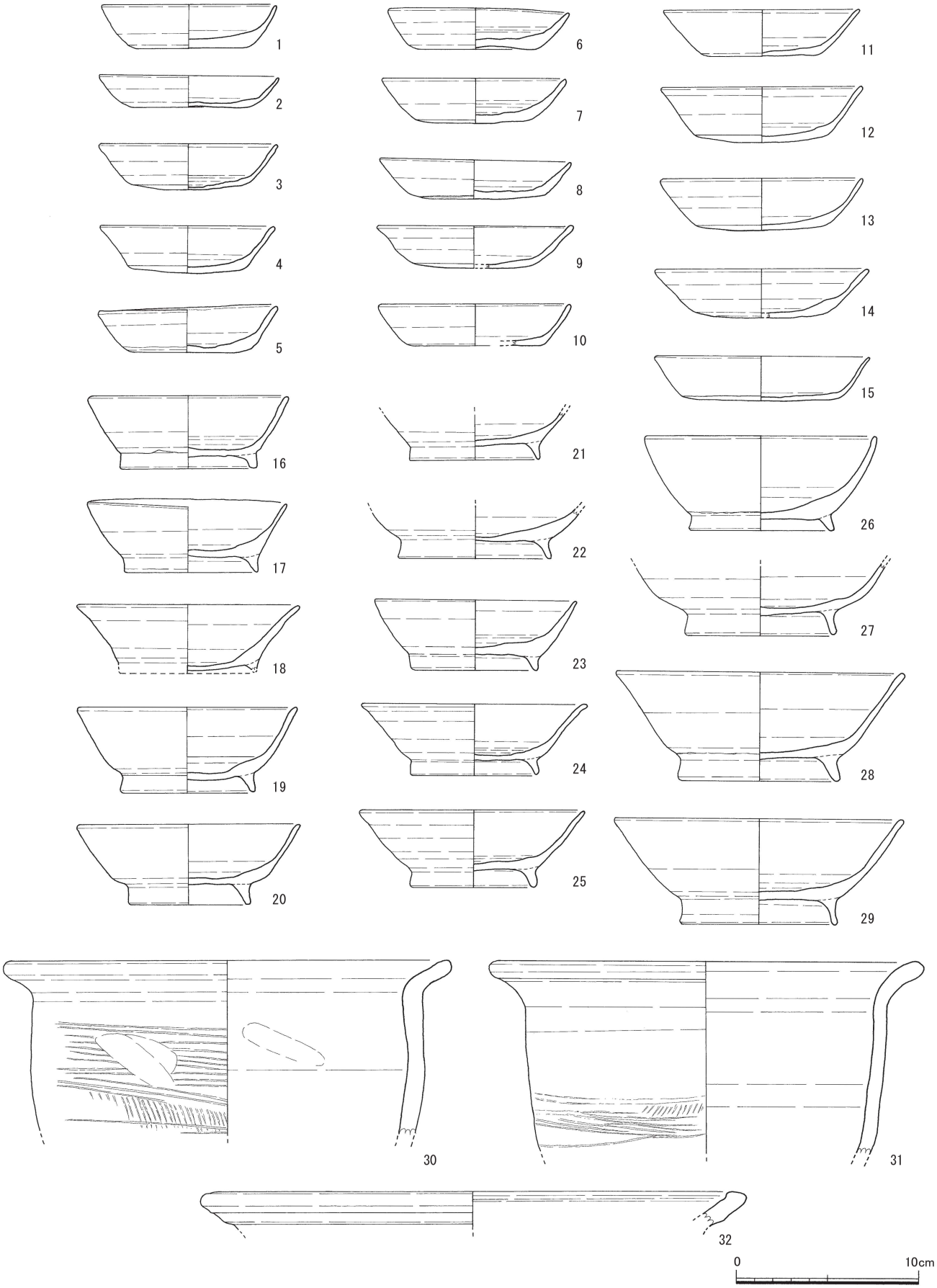


Fig.127　SK25051 出土遺物実測図 1 （1/3）

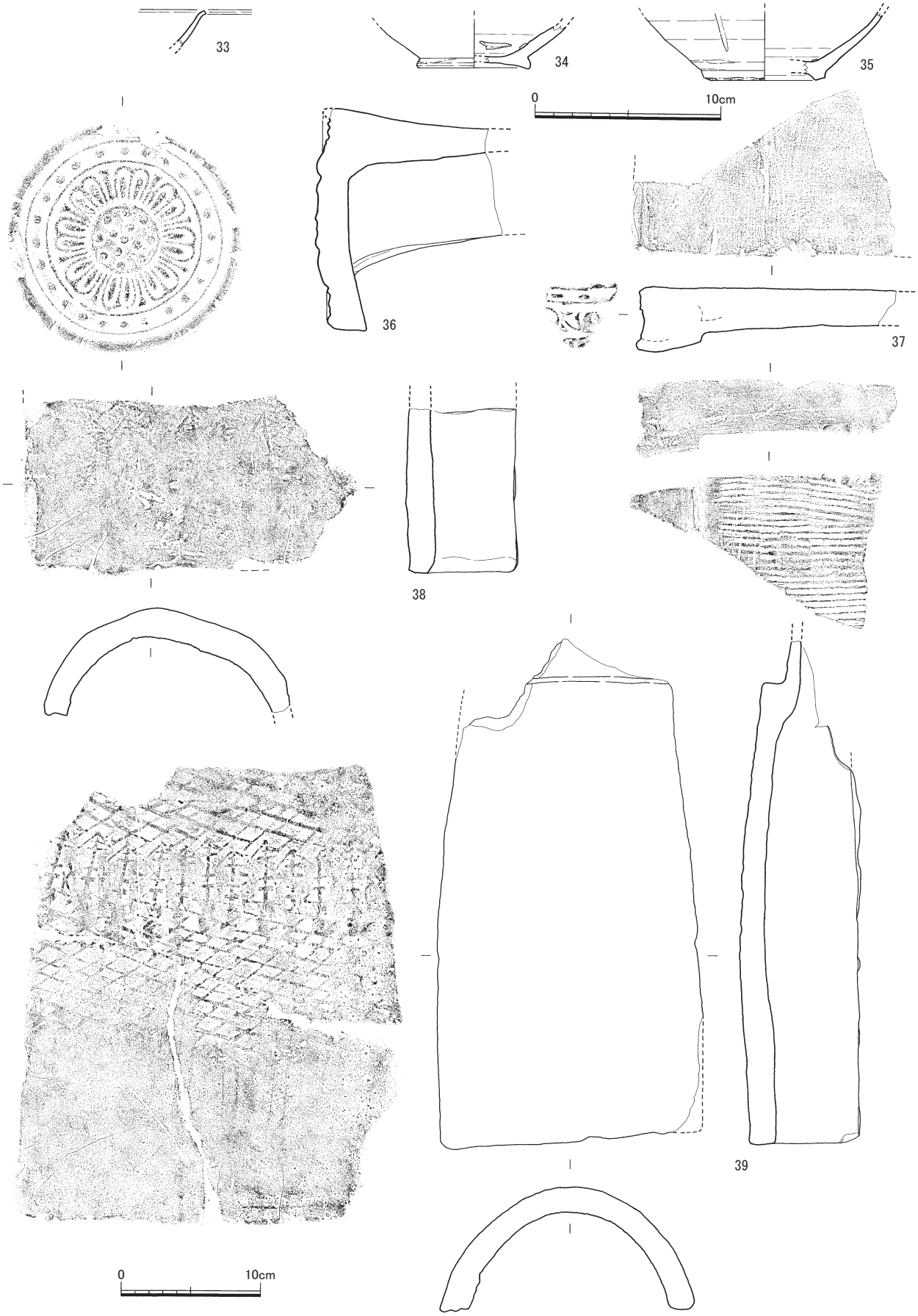


Fig.128　SK25051 出土遺物実測図２（1/3・1/4）

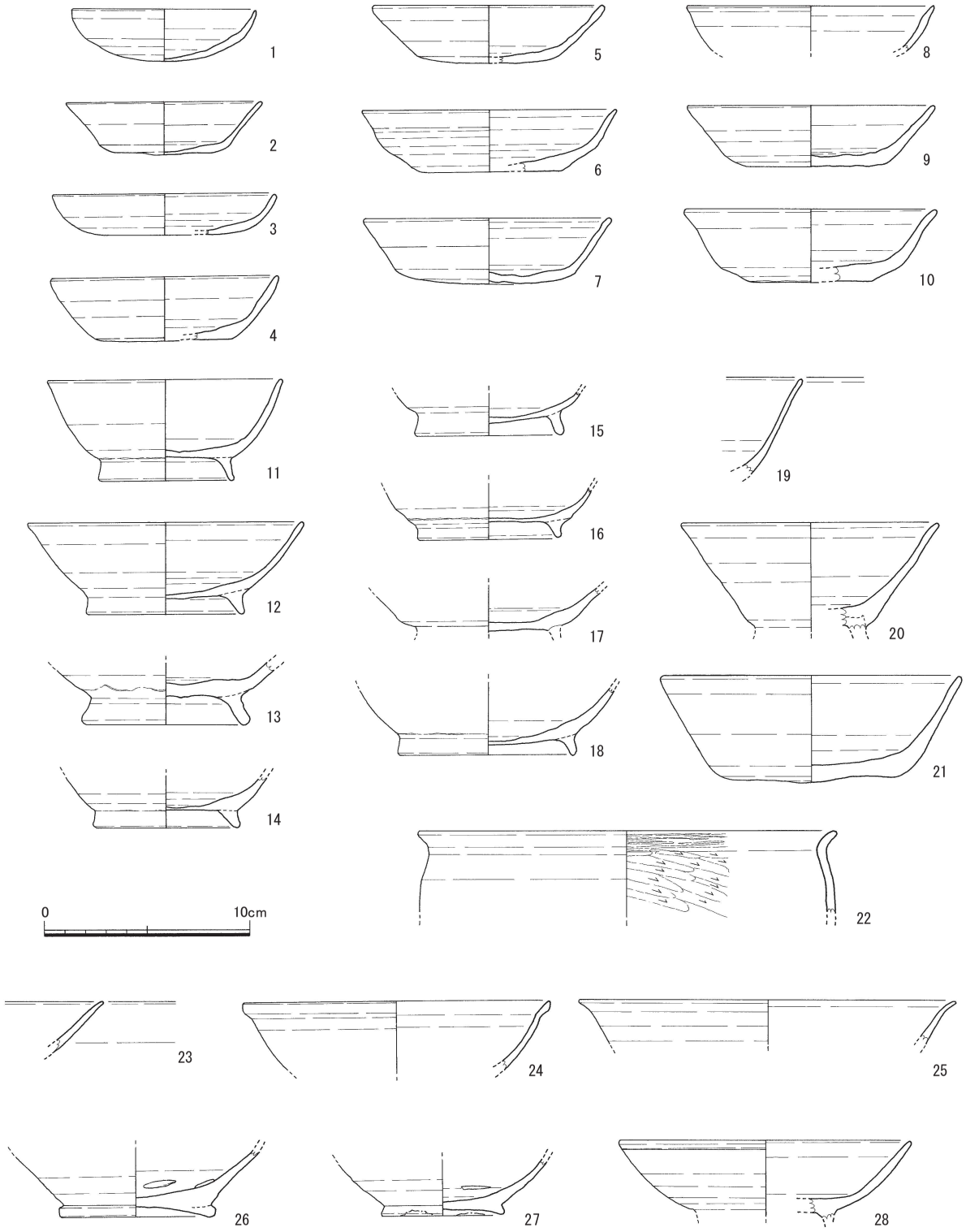


Fig.129　SK25052 出土遺物実測図 1 （1/3）

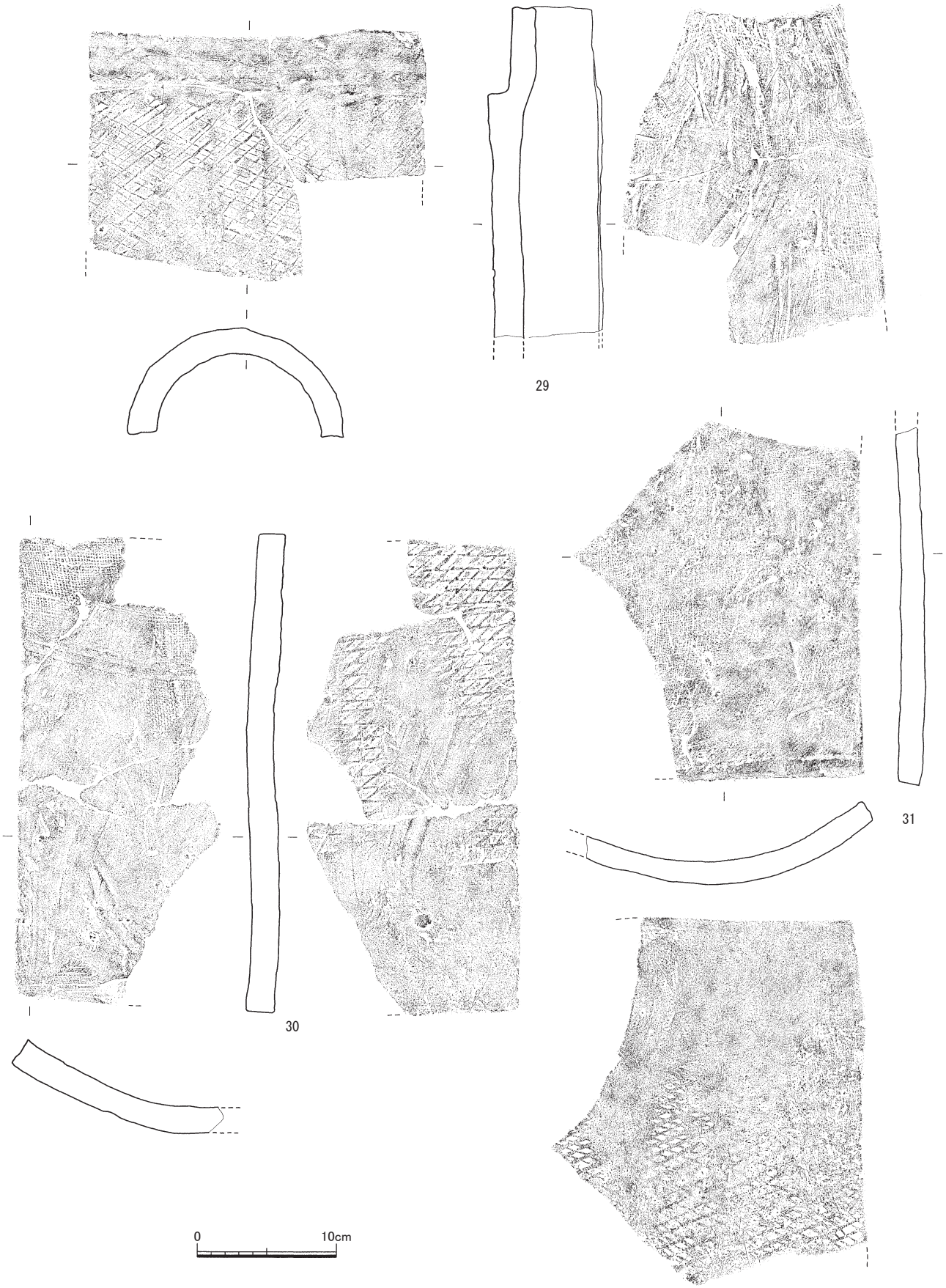


Fig.130　SK25052 出土遺物実測図２（1/4）

トレンチ１整地層　Fig.131

鴻臚館廃絶後の北側の斜面については、14 世紀～ 16 世紀にかけて幾度かの造成で埋められており、斜面に沿って約 50 ～ 100cm の厚さがある。造成土の中には多量の瓦を含んでいる。整地層の下層では中世の遺物を含まない層があり、第Ⅳ期の土坑等を覆っていることから、それ以降、鴻臚館の終末期（もしくは火災後）にかけて行われた整地を考えられる。斜面下は厚さ約 30cm 前後の造成土を確認したが、北側にいくにつれて薄くなる。これらを除去すると、鴻臚館の終末期の平坦な整地面となる。

整地層出土遺物　Fig.132 ～ 141

鴻臚館終末期～中世後半にかけて行われた整地層の中から出土した古代の遺物を中心について報告する。なお、整地層出土の 500 箱余りの瓦は整理途上であり、改めて報告する。

Fig.132 ～ 134 は中世後半期の整地層から出土した遺物で、**1 ～ 9** が 1 層、**10・11** が 2 層、**12 ～ 36** が 3 層から出土した。**1 ～ 3** は瓦質土器で、**1** は羽釜、**2** は足鍋の脚部、**3** は擂鉢である。これらがこの層の時期を示すものと考えられる。**4** は 049 型式の軒丸瓦である。**5 ～ 8** は 605 型式の軒平瓦である。**5** は 4Bb 類の斜格子叩きで、斜格子の中に「十」の文字が入る。**9** は鬼瓦の右上コーナー部分である。**10** は越州窯系青磁碗で、輪状高台で畳付きが露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。**11** は瓦質土器の鍋で、外面には煤が付着する。**12** は須恵器坏蓋で、扁平な宝珠撮みがつく。**13 ～**

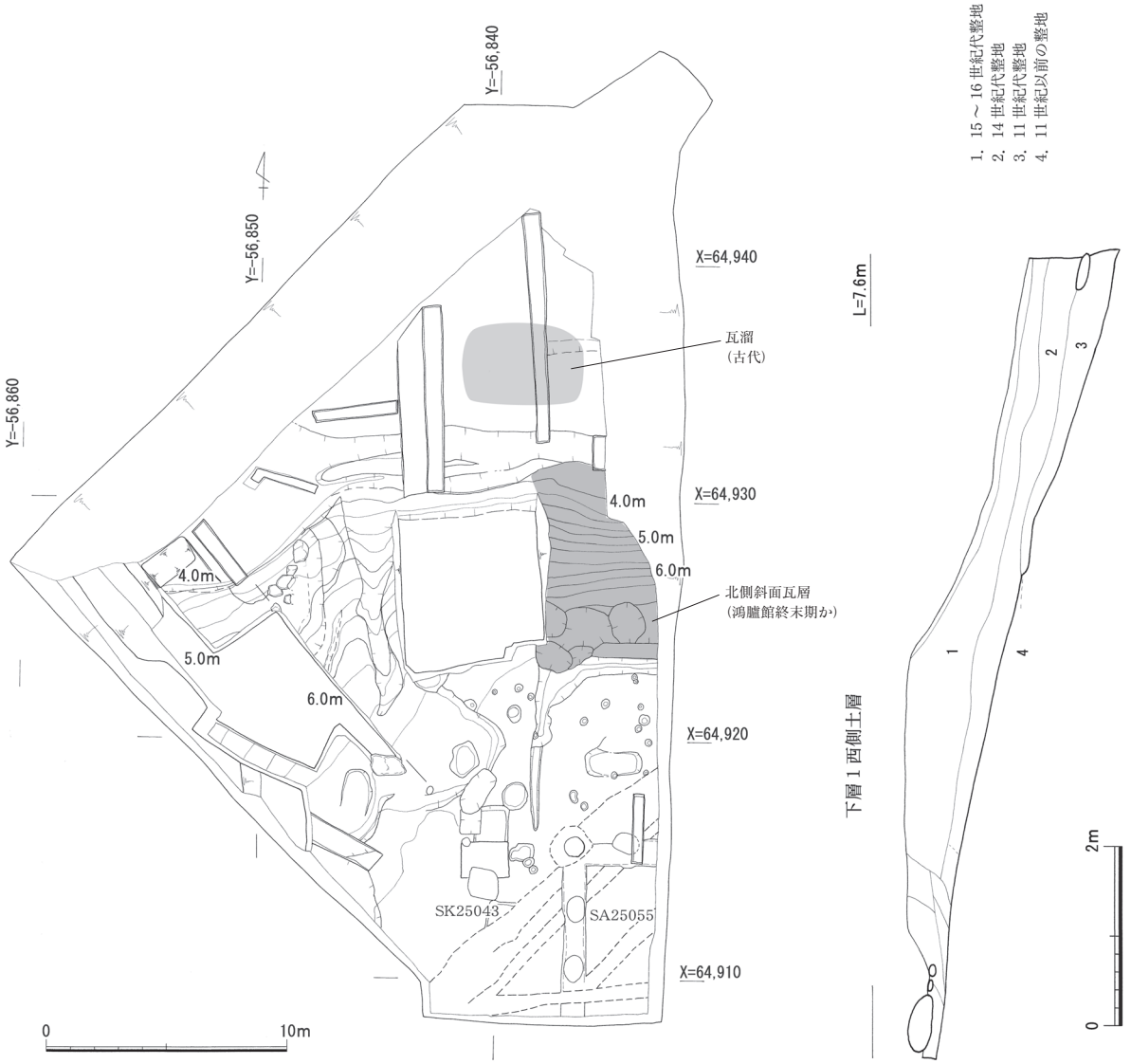


Fig.131　整地層及び土層実測図（1/300、1/80）

15 は土師器で、**13** は碗で、ハの字に開く細い高台がつく。**14** は高台が剥離しているが、碗である。**15** は高坏の脚部でしぼり痕が残る。**16 ～ 18** は新羅土器である。**16・17** は壺で、**16** は口縁下に突帯が巡る。**18** は甕の体部で１条の突帯が巡る。外面には細い格子叩きが、内面には斜格子状の当て具痕。**19** は定窯系白磁碗である。**20 ～ 22** は越州窯系青磁碗で、**20** は輪花碗で、濃いオリーブ色の釉がかかる。**21** は輪状高台で、畳付きは露胎となる。明るいオリーブ色の釉がかかる。**22** は中央が窪む円盤状高台で、底部下半は露胎となる。見込みには目跡があり、内面には茶緑色の釉がかかる。二次焼成をうけている。**23** は長沙窯系の摺目鉢か。見込みに細かな摺目が施される。底部下半は露胎となる。色調は小豆色を呈する。**24 ～ 26** は陶器で、**24・25** は鉢、**26** は甕である。**27 ～ 29・36** は瓦で、**27・29** は軒丸瓦で、**29** は 223a 型式の瓦当である。**28** は 6576 型式の軒平瓦である。**36** は平瓦で、3Aa2-1b 類の斜格子叩きである。**30 ～ 32** は須恵器壺で、同一個体と考えられる。外面は平行叩き後カキ目を施す。胴部の上下の位置に２条の沈線を巡らせる。内面はヨコナデを施す。**33** は紡錘形を呈する土錘である。**34** は鉄製ヤリガンナか。**35** は同安窯系青磁碗の底部を円形に打ち欠いた製品。

Fig.135・136 は鴻臚館廃絶後建物周辺に堆積していた瓦が中世の造成の際に北側の斜面に押し出されたと考えられる瓦層の出土遺物である。**1・2** は瓦質土器で、**1** は鍋、**2** は足鍋の脚部である。**3・4** は須恵質土器で、**3** は擂鉢で、内面が磨滅している。**4** は擂鉢で、摺り目が一部残る。**5** は瓦質土器の把手付き湯釜である。**6** は常滑焼の甕である。口縁は上下に拡張する。造成の時期を示すものと考えられる。**7** は緑釉陶器の碗で、胎土は淡い黄褐色で、萌木色の釉が全体にかかる。**8** は邢窯系白磁碗で削り出しの蛇の目高台である。**9** は白磁の水注である。**10** は越州窯系青磁の水注で、注口部分の破片である。**11** は蛇の目高台の碗で、オリーブ色の釉がかかる。瀬戸産の陶器か。**12 ～ 16** は越州窯系青磁碗である。**12・13** は輪状高台で、畳付きは露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。**14** はやや中央が窪む円盤状高台で、底部下半は露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。見込みには目跡が残る。**15** は蛇の目高台で、畳付き部分は釉を掻き取る。オリーブ色の釉がかかる。**16** は見込みに花文をヘラ書きした碗で、ハの字に開く高台が付く。前面にオリーブ色の釉がかかる。**17 ～ 31** は瓦である。**17 ～ 20** は 049 型式の軒丸瓦である。**21** は 082 A型式の軒丸瓦、**22・23** は鴻臚館式（223 型式）の軒丸瓦である。**24** は 515 型式の軒平瓦、**25 ～ 27** は鴻臚館式（635 型式）の軒平瓦である。**28・29** は「門司」銘の斜格子叩きの平瓦である。**30** は道具瓦、**31** は面戸瓦である。**32** は鬼瓦の眉間部分か。**33** は黒曜石の縦長剥片で、側縁に加工痕がある。

Fig.137 は中世整地層下層の鴻臚館終末期に行われた整地層の出土の遺物である。**1 ～ 4** は土師器である。**1** は平底の甕である。内外ナデで、色調は淡黄褐色、内面は黒褐色を呈する。異系統のものか。**2** は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。**3** はハの字に開く細い高台がつく坏である。**4** は碗で、やや内湾気味の体部である。**5・6** は黒色土器Ａ類で、内湾気味の体部である。**7** は須恵質の坏で、底部に回転糸切りの痕跡がある。色調は灰白色を呈する。**8・9** は緑釉陶器の碗である。**8** の胎土は茶味を帯びた灰色で、緑褐色の釉がかかる。**9** の胎土は灰色で、濃緑色の釉がかかる。**10 ～ 15** は越州窯系青磁碗である。**10** は輪花口縁、蛇の目高台の畳付きは露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**11** の蛇の目高台で底部下半は露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**12・13** は輪状高台で、畳付きは露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**14** は輪状高台で、高台内側が露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。**15** は蛇の目高台で畳付きは露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。**16** は須恵質の鉢で、口縁は玉縁状を呈する。色調は灰白色を呈する。**17 ～ 20** は瓦で、**17・18** は 049 型式の軒丸瓦である。**19・20** は 605 型式の軒平瓦である。**21** は石球で、長軸長 3.3㎝、短軸長 3.1㎝、厚さ 2.7㎝を測る。

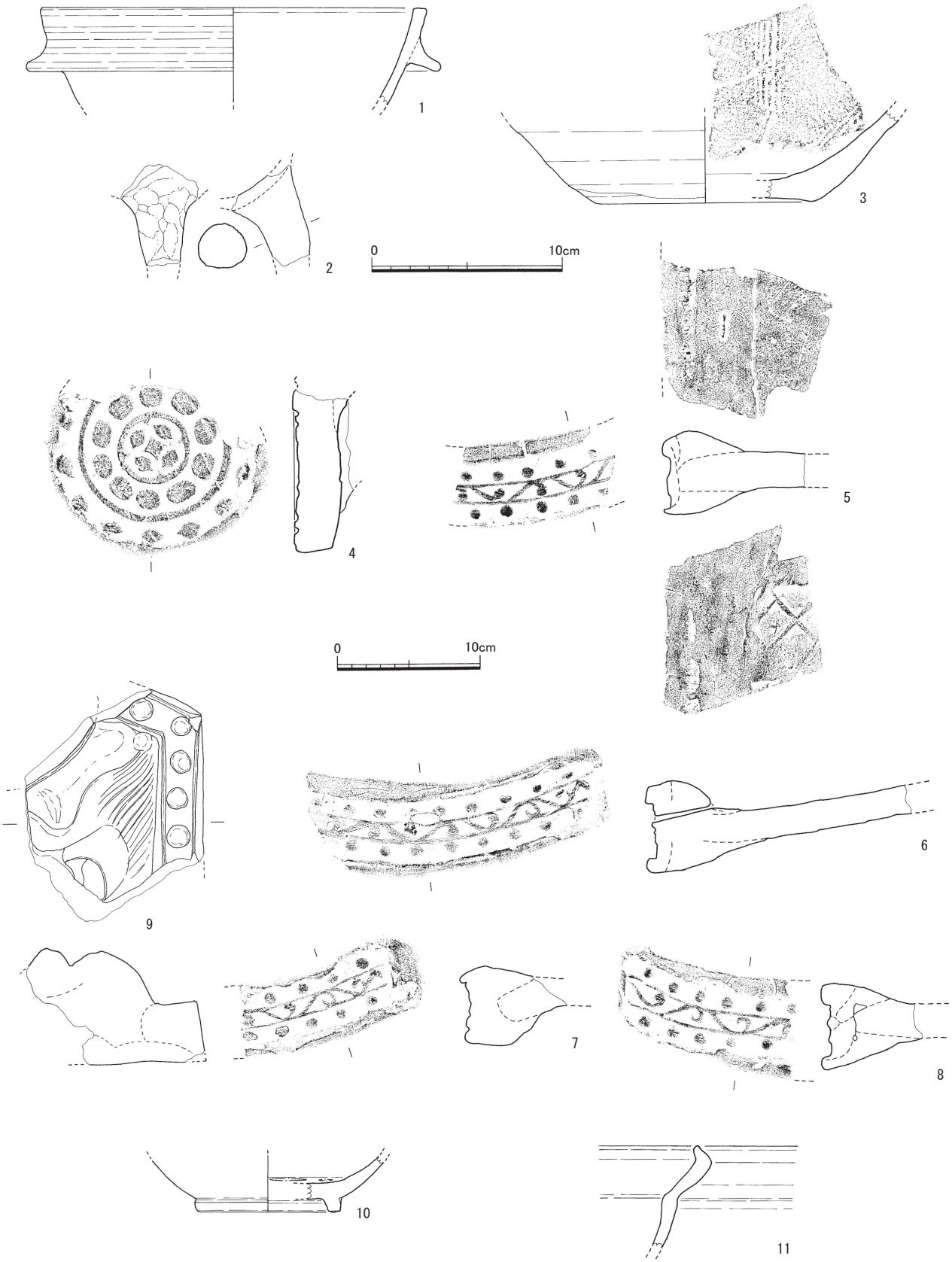


Fig.132　中世整地層出土遺物実測図１（1/3、1/4）

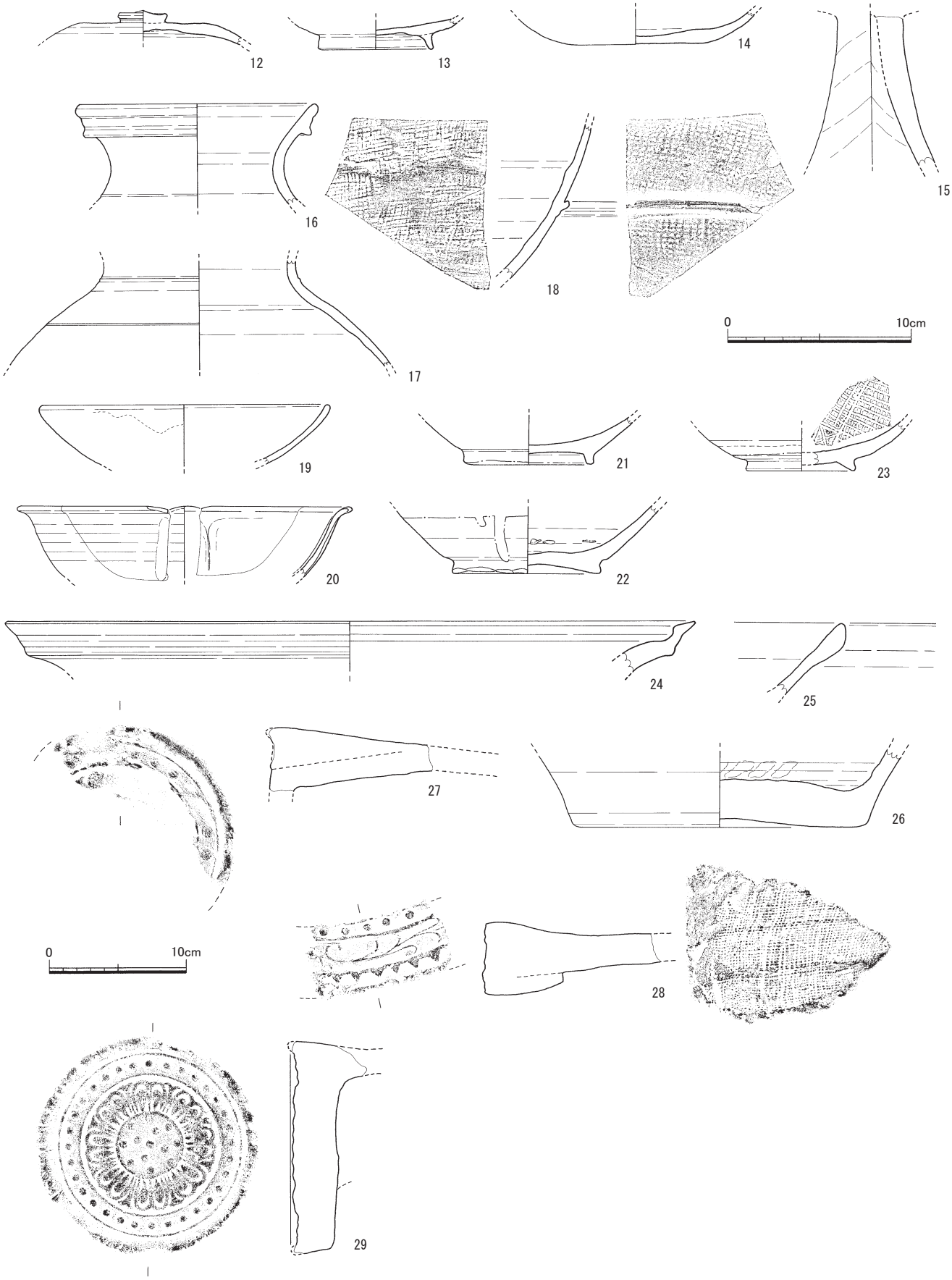


Fig.133　中世整地層出土遺物実測図２（1/3、1/4）

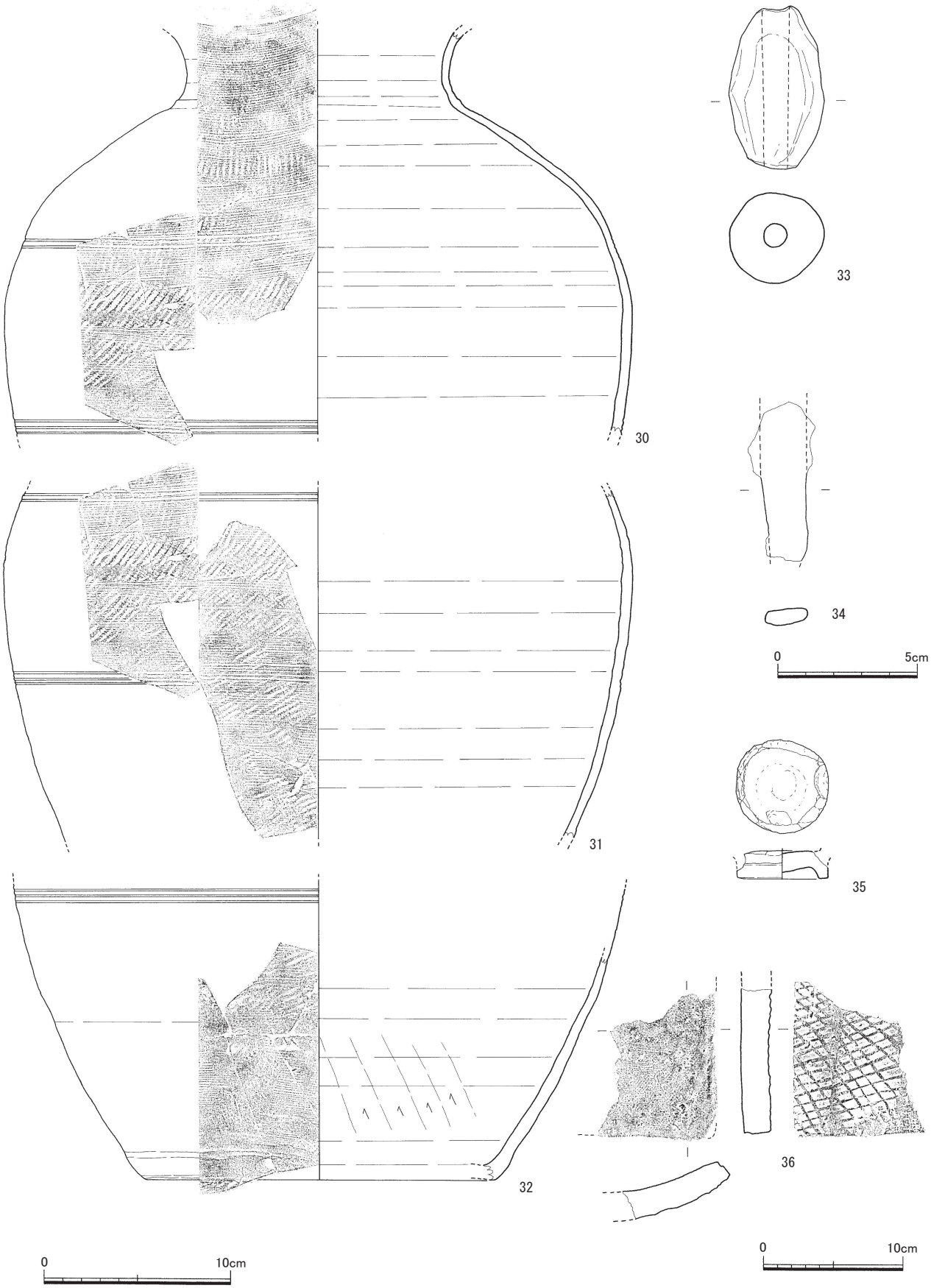


Fig.134　中世整地層出土遺物実測図３（1/2、1/3、1/4）

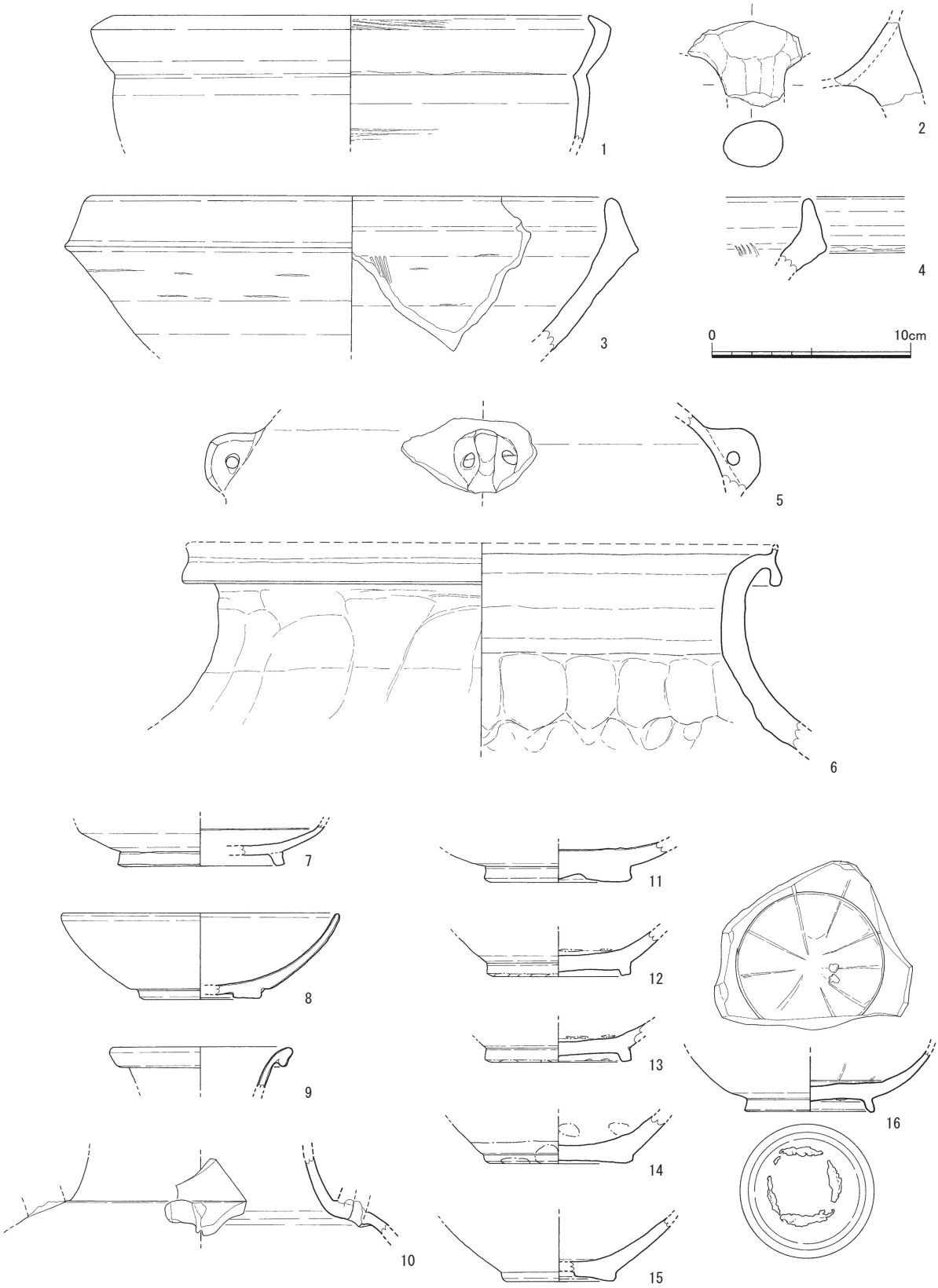


Fig.135　中世整地崩落瓦層出土遺物実測図１（1/3）

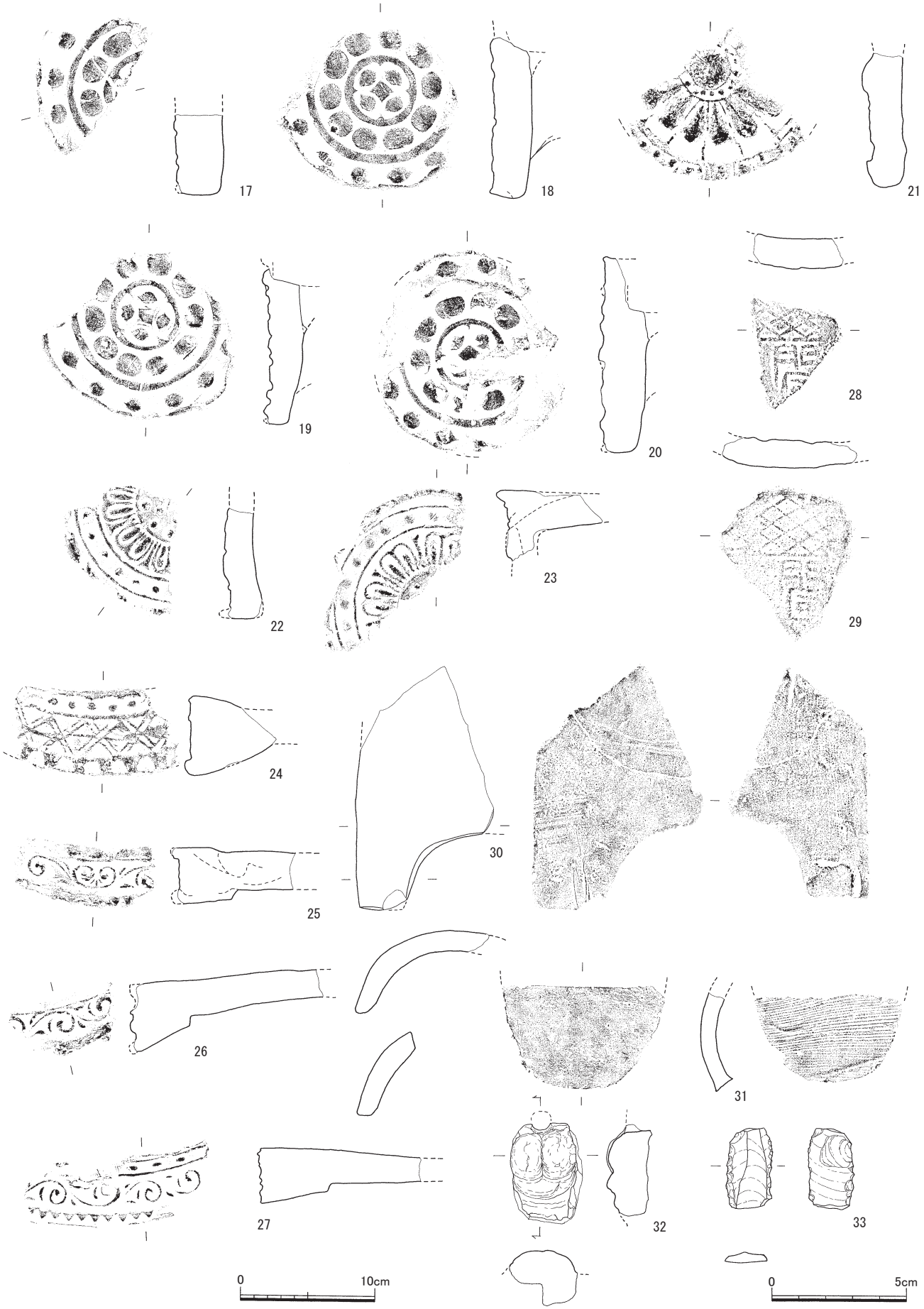


Fig.136　中世整地崩落瓦層出土遺物実測図２（1/2、1/4）

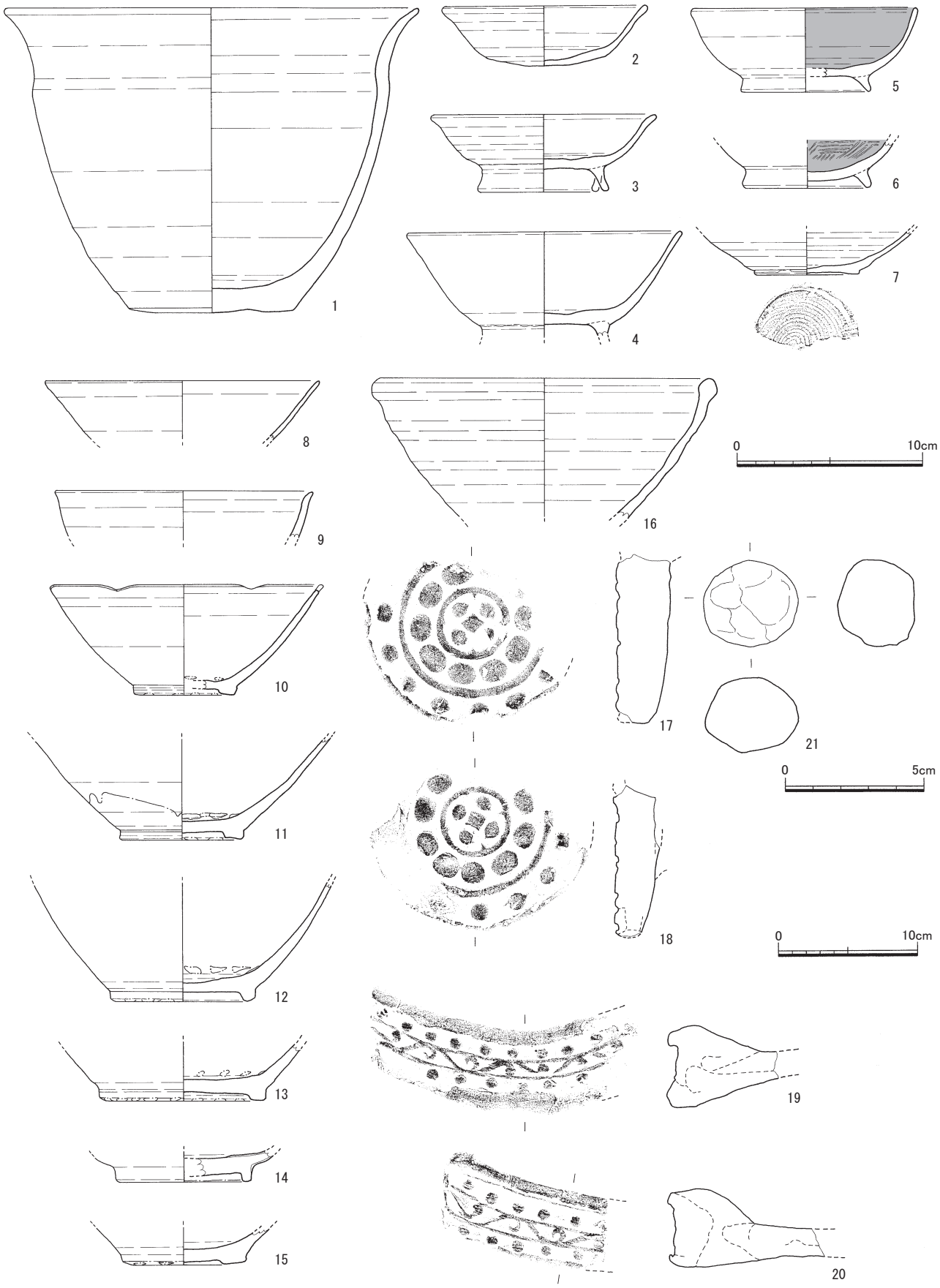


Fig.137　中世整地面下層出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

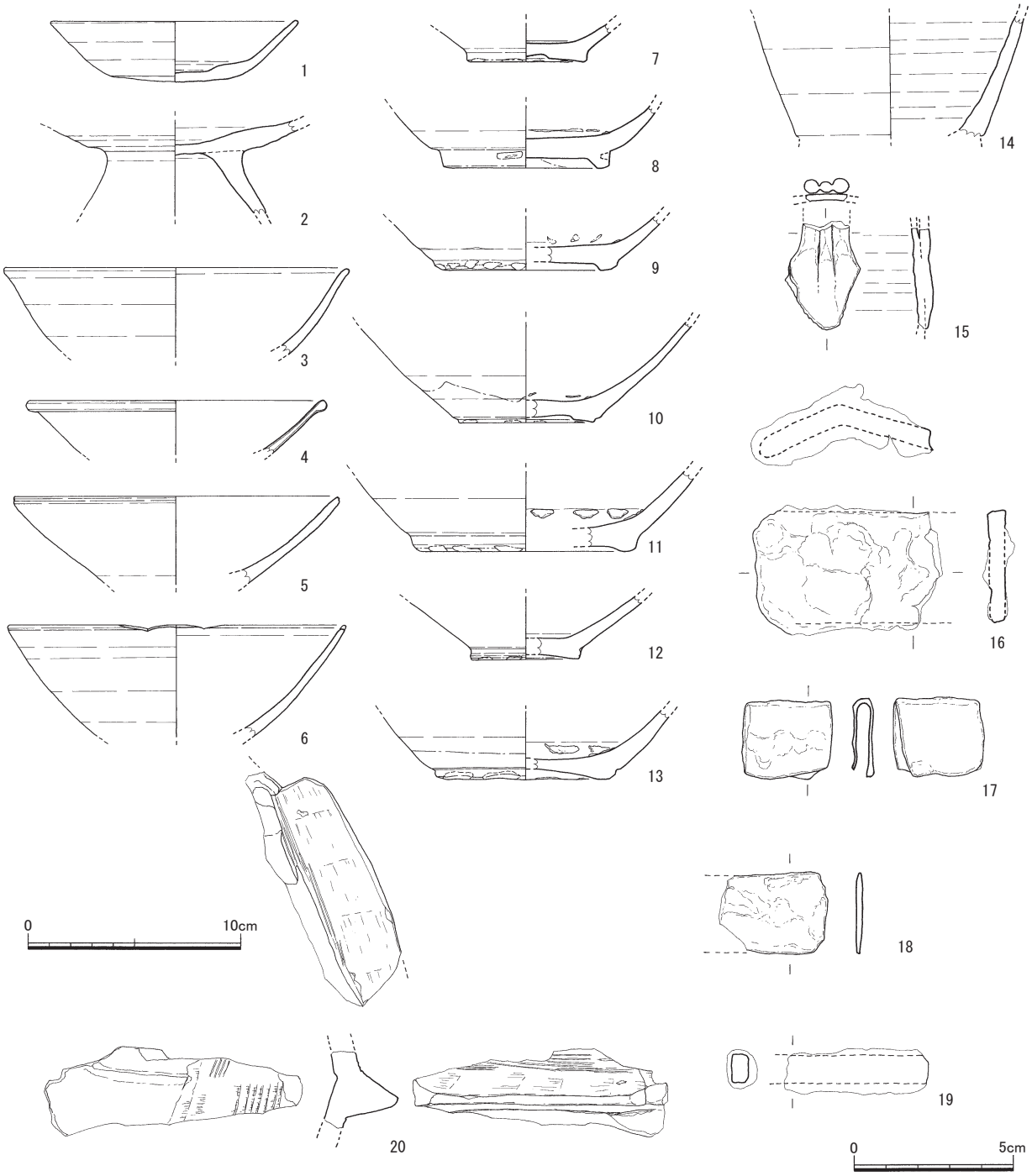


Fig.138　中世整地面下層北側斜面出土遺物実測図１（1/2、1/3）

Fig.138・139 は斜面で検出した鴻臚館の終末期に行われた整地層の出土の遺物である。**1** は土師器丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。**2** は台付きの坏である。**3** は緑釉陶器碗で、胎土は灰色で、明緑色の釉がかかる。**4** は邢窯系白磁碗で、色調は白色を呈する。**5**～**13** は越州窯系青磁碗である。**6** は輪花口縁で、オリーブ色の釉がかかる。**7** は蛇の目高台、畳付きは露胎で、オリーブ色の釉がかかる。**8**・**9** は輪状高台、畳付きは露胎で、オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**10** は蛇の目高台、底部下半は露胎で、オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**11** は蛇の目高台、畳付きは露胎で、オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**12** は中央が窪む円盤状高台、畳付きは露胎で、オリーブ色の釉がかかる。**13** は中央が窪む円盤状高台、底部下半は露胎で、オリーブ色の釉がかかる。**14** は壺で、内外面にオリーブ色の釉がかかる。**15** は水注の把手である。**16**～

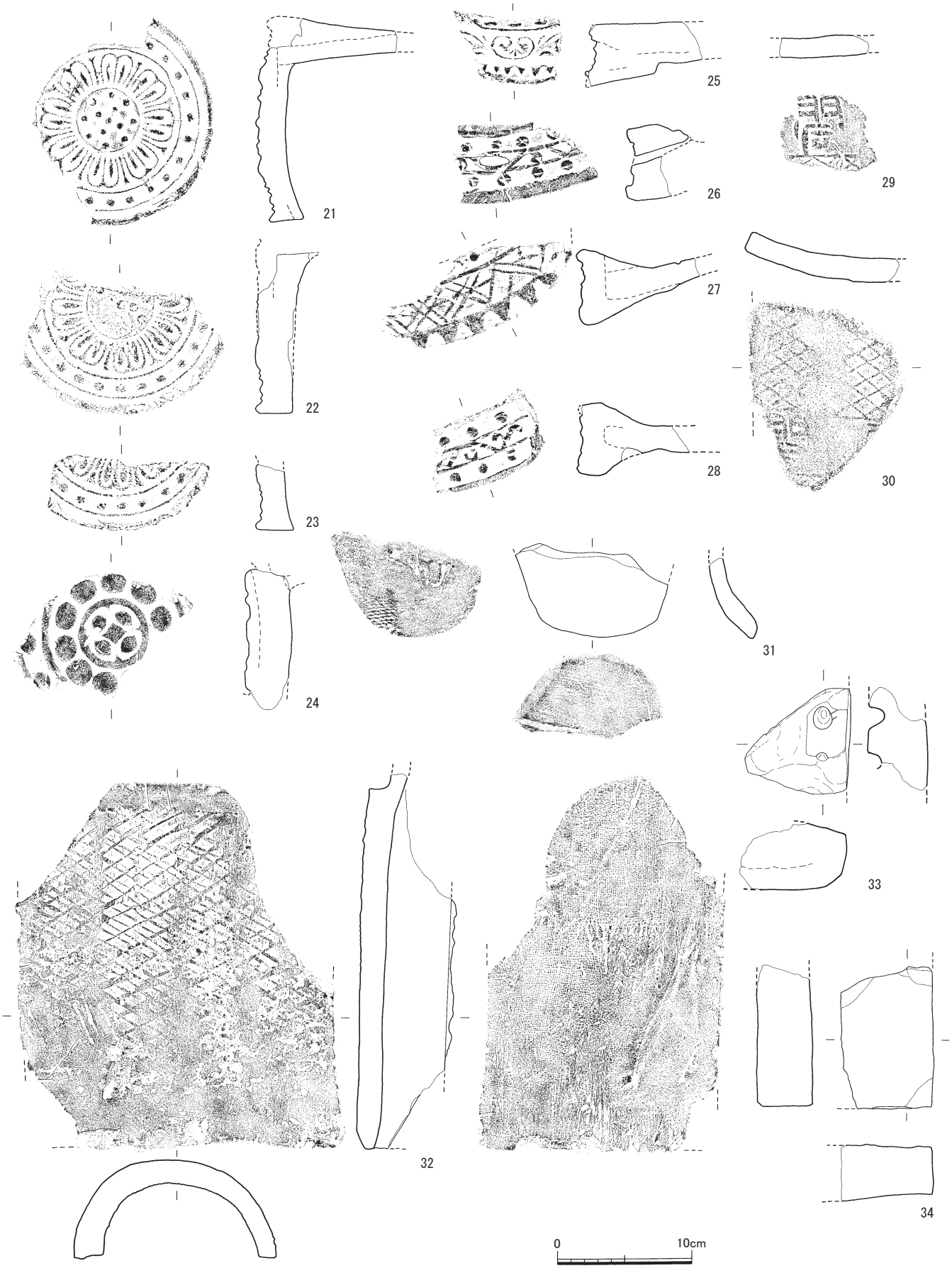


Fig.139　中世整地面下層北側斜面出土遺物実測図２（1/4）

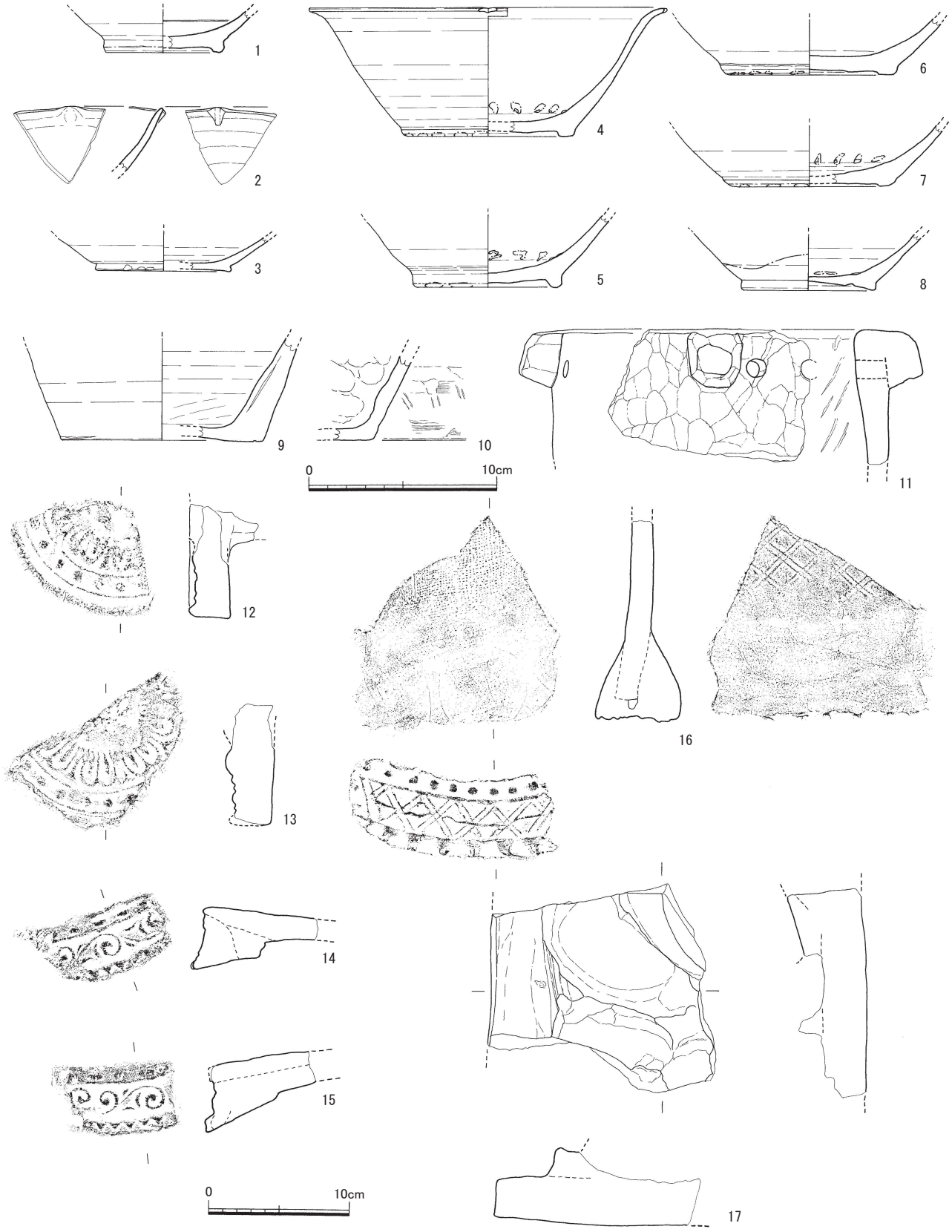


Fig.140　崖下平坦面出土遺物実測図１（1/3、1/4）

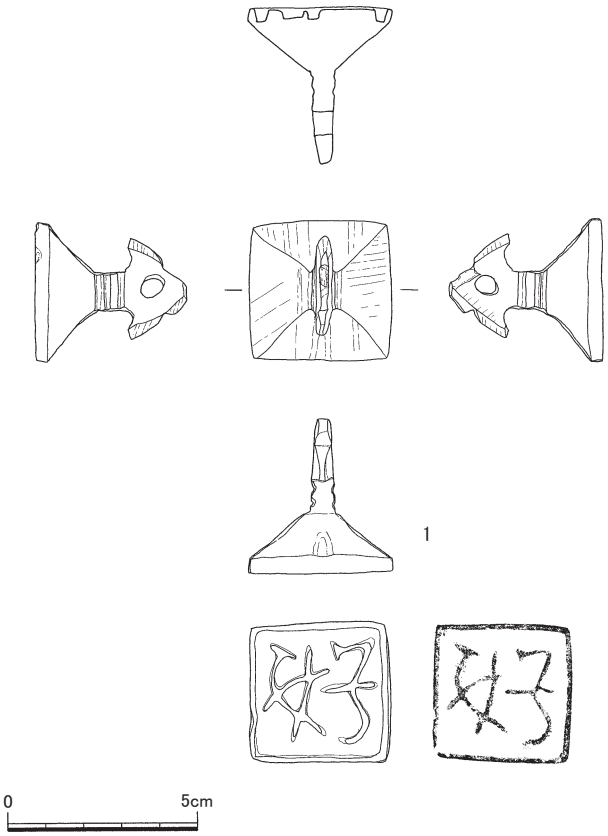


Fig.141　北側斜面出土銅印実測図（1/2）

Ph.13　「好」銘銅印

Ph.14　押印イメージ

19 は鉄製品で、**16** は折れ曲がった板状の鉄製品。**17** は縁金具、**18** は薄い板状鉄製品である。**19** は釘か。**20** は石鍋で、鍔の把手が巡る。**21 ～ 33** は瓦である。**21 ～ 23** は鴻臚館式（223 型式）の軒丸瓦、**24** は 049 型式の軒丸瓦である。**25** は鴻臚館式（635 型式）の軒平瓦、**26・28** は 605 型式の軒平瓦、**27** は 515D 型式の軒平瓦である。**29・30** は「門司」銘の斜格子叩きの平瓦である。**31** は面戸瓦、**32** は 3Ab-6b 類の斜格子叩きの丸瓦である。**33** は鬼瓦か。**34** は塼である。

Fig.140 は斜面下の平坦面の瓦溜まりから出土した遺物である。**1・2** は緑釉陶器碗で、**2** は輪花口縁、胎土は明橙色、灰色で、薄緑色の釉がかかる。**3** は須恵質の坏で、底部に回転糸切りの痕跡がある。**4～8** は越州窯系青磁碗である。**4** は輪花口縁で、輪状高台がつく。畳付きは露胎で、オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**5～7** は輪状高台で、畳付きは露胎で、オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**8** は蛇の目高台で、底部下半は露胎となる。オリーブ色の釉がかかる。見込みに目跡がある。**9・10** は中国産の陶器壺である。色調は灰色を呈する。**11** は突起状の把手をもつ石鍋である。口縁上部に円形の孔が 2 カ所あけられている。外面には削り痕が残る。**12 ～ 16** は瓦である。**12・13** は鴻臚館式（223 型式）の軒丸瓦、**14・15** は鴻臚館式（635 型式）の軒平瓦、**16** は 515D 型式の軒平瓦である。**17** は鬼瓦で、左側の目付近の破片である。

Fig.141　**1** は斜面で検出した鴻臚館の終末期にかけて行われた整地層で出土した青銅製の印である。方形の印面に「好」の銘が正字で鋳出される。押印すると逆字となる。一文字であり、人名か。紐の形態は菩形を呈し、途中に 2 条の沈線が施される。印の外面には上下が判別できるように浅い窪みが施される。外面には研磨の痕跡が残る。印面の外側の法量は 3.7 × 3.7㎝、紐を含んだ高さは 4.1 ㎝を測る。（菅波）

2．小結

（1）鴻臚館跡北館の時期変遷について

これまでの調査で確認した鴻臚館関連遺構は第Ⅰ期～Ⅴ期の５期に区分している。その年代観は南館の報告（鴻臚館跡 19）の際に示されたが、北館の整理が途上であり暫定的なものであった。北館の整理を進めた結果、５期の時期区分の大枠に変わりはないものの、年代観の修正や時期毎の南館と北館の在り方について再検討の必要があることが分かった。ここでは、まず年代観の修正を含めた北館の変遷について整理していく。

第Ⅰ期は「ロ」字形に囲む柱列とその南～南東側に並行する石垣遺構、東辺では門に付属すると考えられる柱穴、柱列の内部に南北棟１棟がある。

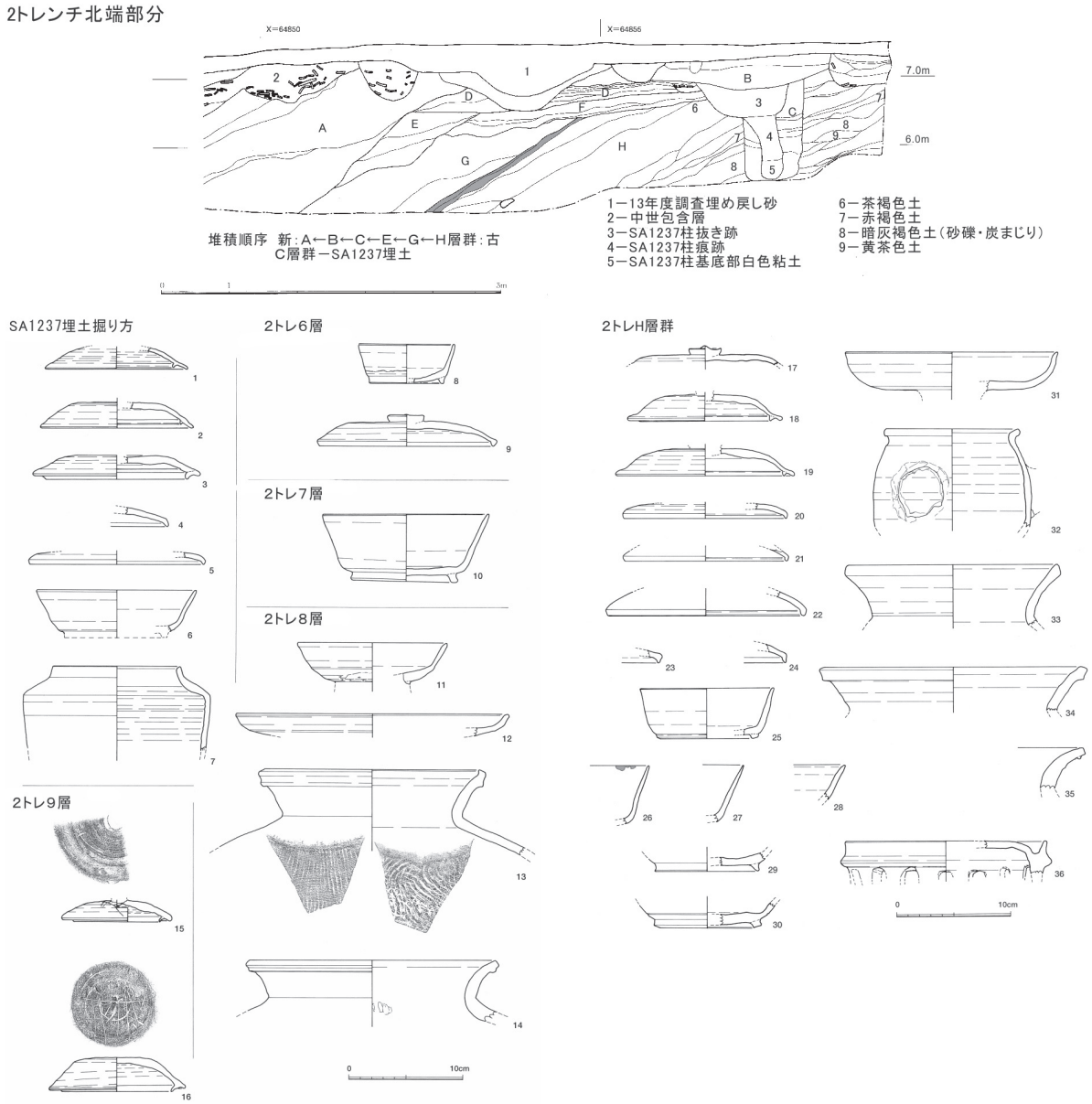


Fig.142　第 21 次調査トレンチ 03-2 トレンチ土層及び出土遺物実測図（1/100、1/6）

第Ⅰ期の造成にあたっては、西から東方向に伸びる丘陵の尾根を削って谷の一部を埋め、敷地を確保しており、この盛土斜面上に石垣が築かれている。最も谷に張り出した南東角で石垣は最も高く、北へは急激に、西へは徐々に高さを減じていく。柱列はこの石垣に並行して造営されており、石垣は施設の境界の土止めとして築かれたものであろう。

第Ⅰ期の南館では長舎風の掘立柱建物により構成されているが、出土遺物がなく、詳細な時期は判断できない。北館では掘立柱建物と柱列から少量ではあるが、7世紀後半の須恵器が出土した。また、石垣東角の調査では石垣背後の盛土整地層であるk層から7世紀中頃を下限とする須恵器が出土した。少ない資料からではあるが、第Ⅰ期は7世紀中頃を大きくはくだらない時期に造成が始まり、7世紀後半の内には柱列によって区画された掘立柱建物による北館の施設が完成したものと考えられる。

第Ⅱ期はまず谷を埋め立てて幅を狭め、谷の北側斜面に高さ4.2mの石垣が築く。また、谷の最奥部を陸橋により切り離して池とし、陸橋北側にも池を設ける。北館の北側も盛土造成で第Ⅰ期より北側に約10 m平坦面を広げて崖面を形成し、崖下には砂丘面に瓦を敷いて、幅約10 mの盛土造成を行っている。拡張した平坦面には布掘り塀が設けられる。柱芯間で東西約74m、南北約56mの東西に長方形区画の塀で東側に八脚門が付く。南館と同一主軸、同一規模の相似形をなす。区画内に建物の柱穴は確認できず、礎石が削平で失われたと推測される。この時期は鴻臚館式軒瓦を葺いた建物であったと考えられる。区画の外側では南西隅に2基の便所遺構と北西隅に同様の形状の土坑1基がある。

ところで、従前第Ⅱ期としてきた石垣であるが、石垣の推定ラインが布掘り塀と交差することと、布掘り塀が掘り込まれる盛土との関係により、第Ⅰ期石垣の次の段階で、布掘り塀造営前に位置づけられることになった。石垣の築造年代は、少量ではあるが第21次調査の03－2トレンチで確認した盛土造成から出土した資料により想定される。前回の報告でも紹介したものであるが、出土資料の実測図が漏れていたので、ここで改めて掲載し、石垣の築造年代と布掘り塀の関係を整理する。

03－2トレンチで検出したH層群・6層は石垣崩落後の斜面の盛土、その下層で7層以下の斜堆積土層群が石垣築造に関わる盛土と考えられる。新しい層位から順に出土遺物を見ると、H層群・6層出土須恵器は、8世紀中～後半の特徴を示す。7層出土須恵器は、8世紀前半であろう。8層は7世紀後半～8世紀前半の幅を持つ。9層出土遺物は7世紀前半～中頃の特徴を持つ。石垣にかかわる盛土の年代を7・8層が示す8世紀前半とし、石垣は8世紀前半の築造と考えられる。石垣に後出する布掘り塀は、石垣を覆うH層群にも後出するものであり、8世紀中頃～後半以降に位置づけられる。布掘り塀の柱の掘り方の出土土器の様相からも8世紀中頃～後半からそれほど遅れない時期に布掘り塀は造営されたと考えられる。このことから、北側で布掘り塀が掘り込まれる盛土造成もこの時期と考えられる。南館の布掘り塀と便所遺構の造営時期は8世紀前半～中頃に比定されており、時期差を生じることになるが、第Ⅰ期の長舎建物から変わる形で、南館が先行して布掘り塀とそれに伴う施設を造営したと考えたい。その後四半期ほど遅れて、北館の布掘り塀が南館の施設の方位、規模を踏襲する形で造営され、その際に中央谷の石垣の埋め立てと北側の拡張が行われたと考えたい。そうすると、崖下の造成下面の縄目叩きの瓦を使用した瓦敷も理解できる。また、8世紀後半とされる便所遺構とも時期的な整合がとれる。出土遺物においても、定量化はしていないが、新羅土器の出土量が北館に比べ、南館の方が多く出土しており、施設の存続時期の差を示しているものと推測する。第Ⅱ期の変遷、年代観は以上のように整理したい。

第Ⅲ期にはⅡ期の布掘り塀の南辺に重なるように2×14間（42 m）の東西棟の礎石建物がある。建物方位や中軸線を踏襲すると想定されており、削平のため遺構の残りが悪いが、南館同様に回廊状の建物となる。ただし、南館より南北の長さが一回り小さい復元案が示されている（鴻臚館跡19）。

第Ⅲ期の年代は布掘り塀との関係と南館での建物に掘り込まれた廃棄土坑との年代から想定されたものである。しかし、第Ⅱ期の年代の修正により、開始時期は北館の布掘り塀や便所遺構との関係から８世紀後半より下るものであり、従来の年代観よりやや下る９世紀前半までの間と捉えたい。廃絶の時期は従来通りの９世紀後半に位置付ける。

第Ⅳ期以後の建物遺構は確認できないが、瓦類は多量に出土しており、特に 10 ～ 11 世紀代の特徴を示す瓦も多く含まれることから、瓦葺き建物は存在したと考えられる。第Ⅳ期（９世紀後半～ 10 世紀前半）と第Ⅴ期（10 世紀後半～ 11 世紀前半）は廃棄土坑の出土遺物から時期区分している。

この時期の遺構は、廃棄土坑以外ほとんどないが、第 25・26 次調査トレンチ３下層調査で検出した SX19610 は塀の積土もしくは積土が崩壊堆積したものであると推測されている。ここから出土した遺物には越州窯系青磁五輪花大碗のほか、単線斜格子叩きの瓦や女原瓦窯跡（９世紀中頃～ 10 世紀前半の操業）で「M 型」に分類された独特の叩き文様（鴻臚館跡 5B 類）をもつ瓦があり、第Ⅳ期（9 世紀後半～ 10 世紀前半）以降に位置づけられるものと考えられる。この遺構は西側のトレンチ６、トレンチ１で確認されておらず、全容は不明であるが、北側の外郭を示すもので、第Ⅴ期まで継続したと想定される。なお、第Ⅱ期、Ⅲ期の外郭を示す遺構については確認されていない。第Ⅳ期以降の鴻臚館の役割は外交施設から中国商人との取引の場と変わり、合わせて新羅海賊などへの防備も強化されることから、ここで想定された外郭施設も外交施設としての外観より、防備を重視したものの可能性も考えられる。

以上、遺構と年代観を整理すると、修正点は①第Ⅱ期は８世紀前半～中頃に、南館の布掘り塀とそれに伴う施設が造営され、８世紀中頃～後半に北館側の大規模な盛土造成と布掘り塀やそれに伴う施設の造営が行われる（中央谷の石垣は南館の造営の時期にやや先行もしくは同時に行われたものか）。これらは９世紀前半までには第Ⅲ期礎石建物に建て替わる。②第Ⅱ期の時期が下ったことにより、第

Tab.5　鴻臚館跡検出遺構の時期区分（修正案）

時期	区画	主な遺構	年代観	時期比定の根拠・問題点 （太字は修正及び追加点）
Ⅰ	南	掘立柱建物５	不明	主軸方位から最も古く位置づけた。
	北	土留め石垣１	７世紀後半～	石垣内から７c 半ば頃の須恵器が出土することから、直後の７c 後半造営と推定。
		掘立柱建物１、柱列１	不明	主軸方位が石垣と同じため第Ⅰ期に比定。第Ⅰ期遺構に先行する遺構がある。
Ⅰ期後	中央	大規模な整地、土留め石積み１	Ⅰ期との前後は不明。	遅くとも８c 初頭までに複数回の整地を行って、敷地を拡大。盛土には瓦を含む。
Ⅱ	南	布掘り塀＋東門１、掘り込み地業１、トイレ３	８世紀前半～中頃	遺構方位から一連の遺構と推定し、トイレ遺構出土遺物から時期比定。布掘りと地業から鴻臚館式軒丸瓦出土。
		布掘り状遺構		遺構の形状・方位・出土遺物から第Ⅱ期に比定。
	中央	池２、陸橋、堀＋石垣、土橋（瓦暗渠）	８世紀前半～後半の早い段階	石垣を覆う埋土の出土遺物より、**８c 中頃～後半**の段階に石垣を埋めたと推定した。土橋は第Ⅲ期より古い。
	北	布掘り塀＋東門１、トイレ２	８世紀後半	布掘りに切られる整地層から**８c 中頃～後半**の須恵器出土。布掘り柱抜き穴から白磁（８c 半ば以降）、便所から**８c 後半**の土器が出土し、南より遅れて造営した可能性がある。
		盛土整地層、瓦敷遺構	**８世紀中頃～後半**	**崖下の盛土整地層下面には縄目叩きの瓦敷。鴻臚館式軒瓦に伴う時期の瓦か。**
Ⅲ	南	礎石建物３、梵鐘鋳造遺構	８世紀後半～９世紀前半	雨落ち溝等から８c 代の遺物が出土し、９c 後半の土坑が建物に重複する。礎石抜き穴から陶磁器出土。（礎石建物 SB-32 下に礎石据え付け穴や瓦排水溝があり、建て替えている。）
		推定南門	９世紀？	調査範囲が狭く明確さを欠く。
	中央	池１、陸橋、堀、木橋		木橋は土橋を切る。
	北	礎石建物１	８世紀後半～９世紀前半	布掘りとの重複から早くて**８c 後半以降**の造営。９c 後半には建物に重複して土坑を掘る。
Ⅳ	南	土坑のみ	９世紀後半～ 10 世紀前半	土坑から瓦が出土しており、建物の存続を示す。
	中央	陸橋、堀、溝		
	北	土坑のみ		
		崖下盛土遺構（築地か）	**９世紀後半～ 10 世紀前半**	**盛土層から越州窯系青磁や９世紀後半～ 10 世紀前半の瓦類（単斜格子文や鳥脚文叩き）が出土している。**
Ⅴ	南	北東隅を区画する溝２、土坑	10 世紀後半～ 11 世紀半ば以前	
	中央	陸橋、堀、木樋		堀の北斜面に 11c 代の瓦が多い→終末期には建物が北に収斂か。
	北	土坑		
		北斜面整地層	**10 世紀後半～ 11 世紀半ば以前**	**瓦や炭化物を多量に含む整地層→火災後の整地か**
不詳	南	中央部の基壇状高まりと通路（SF-272）、柵列（SA-273・316）、基壇的役割を持つ斜面（SX-1037）		
	北	第Ⅱ期東門の東外に掘立柱建物２（主軸方位からみてⅡ～Ⅲ期に伴う）		

Ⅲ期の開始期は 9 世紀前半まで下る可能性があり、 9 世紀後半には廃絶する。Tab. 5 に年代観の修正を含めた、鴻臚館跡の遺構変遷を整理したものを示す。

（2）北館と南館の相違点について

鴻臚館の存続年代は 7 世紀後半から 11 世紀前半までの約 370 年間と想定されるが、その間通じて踏襲された点は、谷を隔てた南北の施設配置、南と北の標高には約 1.5 mの段差があったこと、周囲とは 4 m以上の段差があったことである。また、建物構造や変遷など類似する点も多く見られる。一方で、北館と南館とはいくつか相違点も認められる。ここではそれらについて簡単に触れていきたい。

第Ⅰ期については前回の報告でも触れたが、長舎建物で構成される南館と塀で区画される北館とで性格が異なり、前者が儀式・饗宴施設、後者が宿泊施設と推定した。大宰府政庁が整備される 8 世紀前半までの間、外交使節の安置、供給、饗宴の役割を担った施設であると想定した。第Ⅰ期の南館と北館の相違は外国使節の対応に関わる機能分化したものとして捉えられる。

第Ⅱ期については南北に施設に時期差があることが分かった。 8 世紀前半～中頃に造営される南館は第Ⅰ期の北館と同様、塀による区画施設をもつもので、宿泊施設として整備されたと考えられる。この時期、大宰府政庁の整備や外交使節に対する客館の整備も行われており、それらに連動するものと考えられる。ただし、新羅使の来朝はあるものの、筑紫館での饗宴の記事は見られないことから、饗宴については大宰府で行われ、筑紫館は安置、供給が主たる役割になったと考えられる。 8 世紀中頃～後半にかけて北館の造営が行われる。大規模な盛土造成や統一された規格・構造の施設の造営が行われ、施設の増設には国の外交施策が背景にあるものと考えられる。

第Ⅲ期は第Ⅱ期の規格を踏襲し、南北の規格に若干の違いはあるものの、規模が拡大する。施設の名称を中国風に呼び変える時期であり、それに連動することも考慮する必要があるが、新羅の外交使節が途絶え、鴻臚館の主な役割が商人との取引に変わることもあり、規模拡大の背景については検討すべき課題である。

第Ⅳ期以降、建物遺構は不明確である。主たる遺構である廃棄土坑からこの時期の特徴を見ていく。南館では越州窯系青磁等の貿易陶磁器類を多量に廃棄した土坑が多く検出されたが、北館においてはそのような廃棄土壙はほとんど見られなかった。一方で、完形の土師器坏や碗を多量に廃棄した土坑は北館で多く見られた。次に、瓦類を見てみると、定量化はできていないが、鴻臚館跡で出土する軒瓦の鴻臚館式（丸瓦 223 型式、平瓦 635 型式）が大半で、それに軒丸瓦 082A 型式、082B 型式、軒平瓦 662 型式、663 型式が加わり、主たる構成となる。それ以外に少量であるが、老司系の軒丸瓦 291 型式、軒平瓦 560 型式、女原瓦窯の軒丸瓦 065 型式、軒平瓦 515 型式などが含まれる。その内、10 世紀～ 11 世紀に位置づけられる軒丸瓦 049 型式と軒平瓦 605 型式は主に北館で見られるもので、南館ではほとんど出土しない。廃棄土坑の様相や瓦の出土状況が南北の機能の違いに関係しているのであれば、南館には貿易陶磁器類の管理や取引、北館には宴会や飲食、宿坊といった役割が想定されるのかもしれない。

以上、北館の調査成果の取りまとめと南館との相違等について記してきた。前回と今回の報告で北館部分についての概要は示したことになるが、報告できなかった多量の瓦類や南館と合わせた総合的な分析等、残された課題は多い。今後それらを含めた総括的な報告書の作成を行う予定である。

最後に、今回の取りまとめに際して、九州大学　坂上康俊先生には第Ⅱ期の遺構の在り方や外交関係に関して貴重なご意見を頂いた、記して感謝したい。（菅波）

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせき　こうろかんあと
書　　名	史跡　鴻臚館跡
副　書　名	－　北館部分の調査（２）－
巻　　次	鴻臚館跡 23
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1326 集
編 著 者 名	池崎　譲二／大庭　康時／吉武　学／菅波　正人
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒 810-8621 福岡市中央区天神１丁目８－１　電話番号 092-711-4784
発行年月日	2017 年 3 月 27 日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきこうろかんあと 史跡鴻臚館跡・ しせきふくおかじょうあと 史跡福岡城跡	ふくおかしちゅうおうく 福岡市中央区 じょうない１－１ 城内１－１	40134	0192	33° 35′ 12″	130° 23′ 11″	000425 ～ 010316 010521 ～ 020329 020513 ～ 030331 050404 ～ 060331 060401 ～ 070331 070401 ～ 080331 080701 ～ 090331 090401 ～ 000331 100602 ～ 110331 110601 ～ 111222 120417 ～ 130329 130701 ～ 140328	1,750 2,000 1,200 2,110 820 504 860 900 970 500 1,180 860 （計 13,654）	範囲確認

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡鴻臚館跡・ 史跡福岡城跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	掘立柱建物 石垣 布掘り塀 礎石建物 便所状遺構 溝 土坑 柱穴 整地層 包含層	須恵器 土師器 中国陶磁器 朝鮮陶磁器 瓦 石製品 鉄製品 銅製品	古代の客館である 鴻臚館（筑紫館）跡の北館部分の遺構

史跡　鴻臚館跡

鴻臚館跡 23

－　北館部分の調査（2）－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1326 集

2017 年（平成 29 年）3 月 27 日

発　　行　　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８－１

印　　刷　　株式会社ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈１丁目２番 11 号